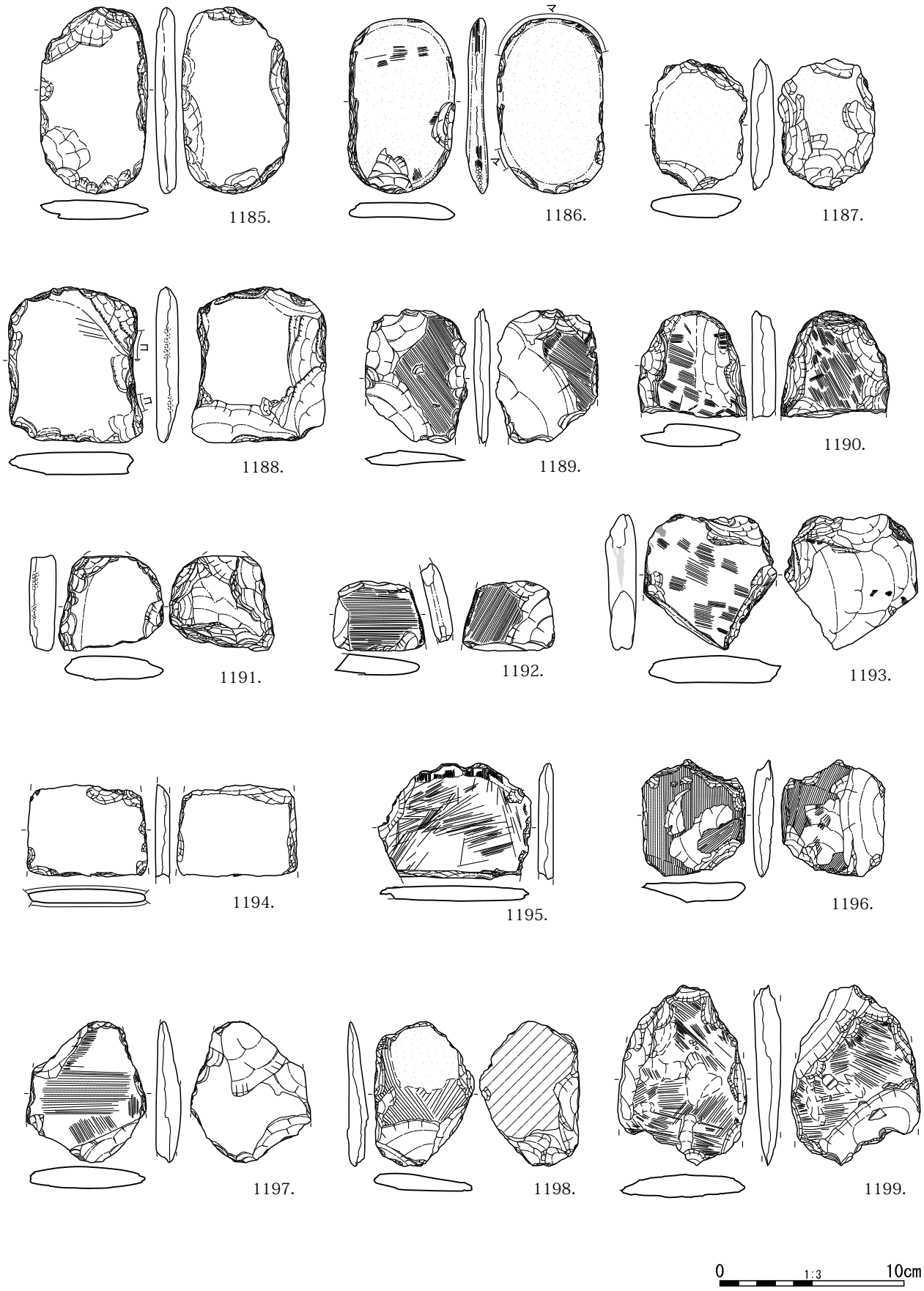
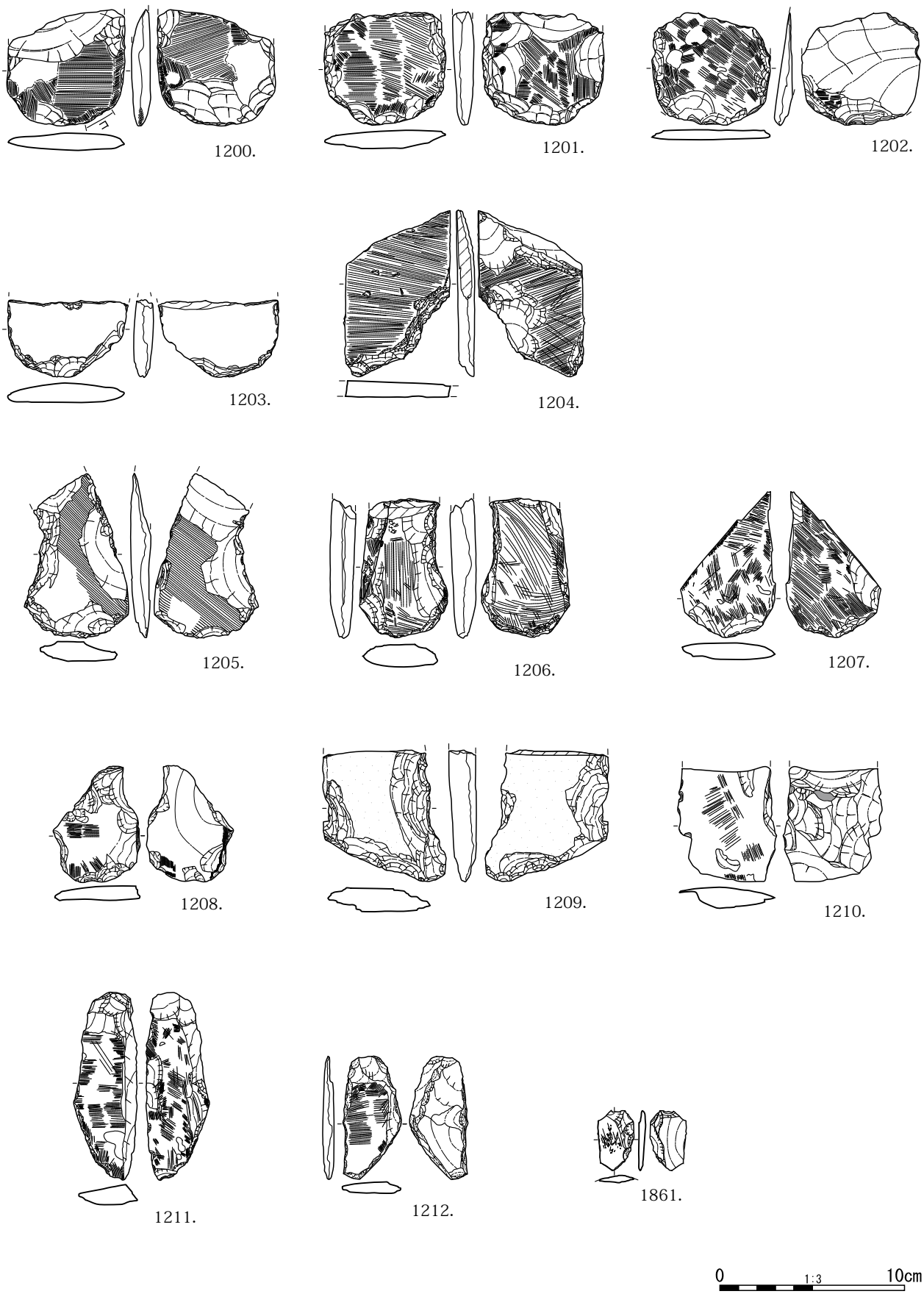
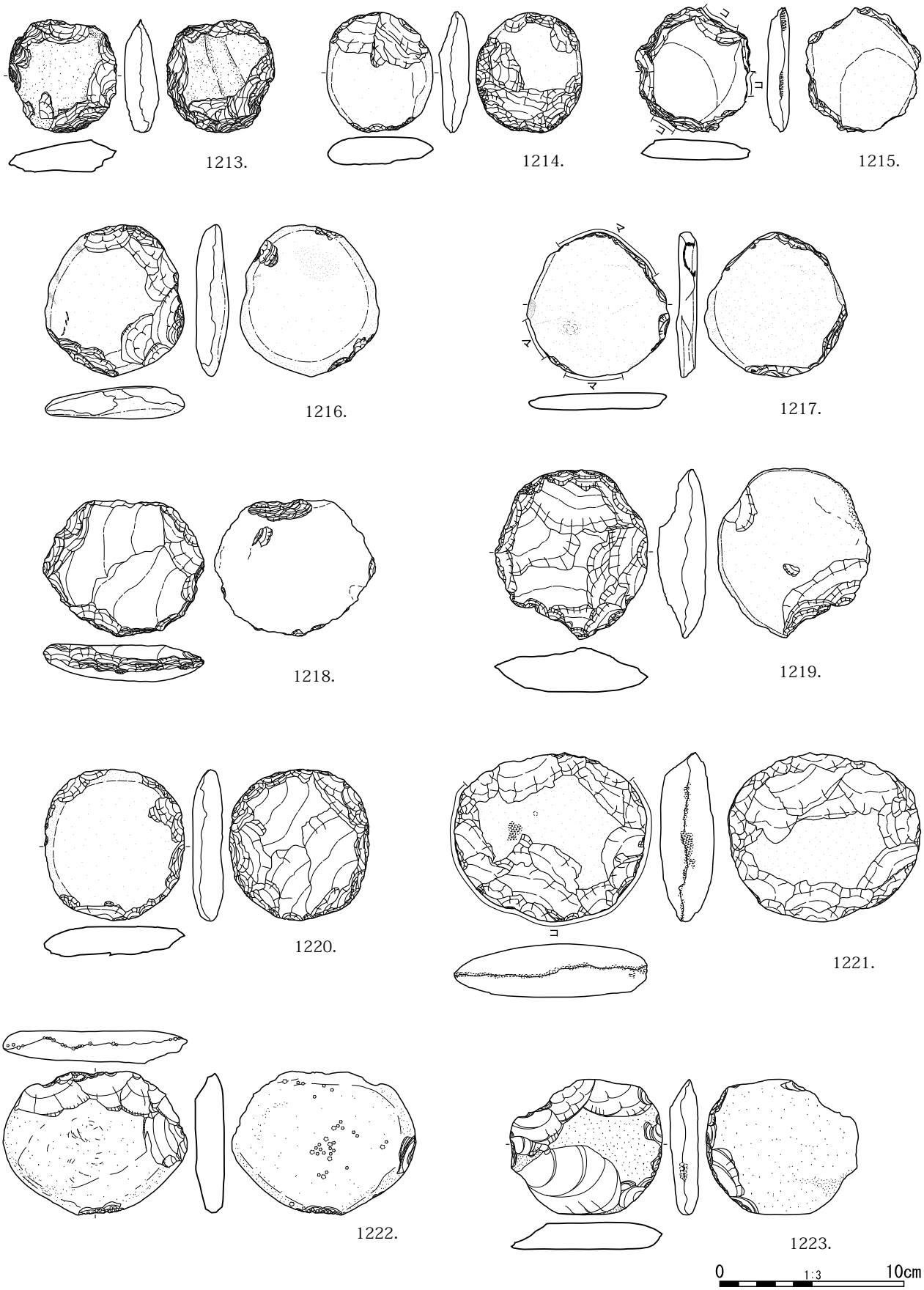


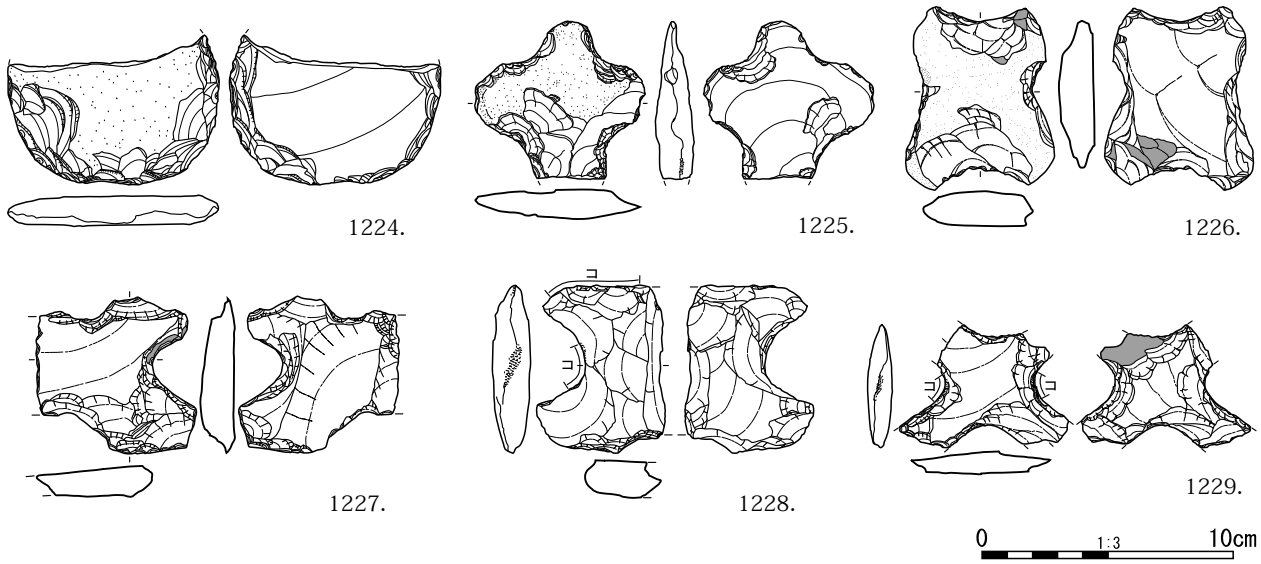
第 149 図　磨製石製品（2）　S＝1／3



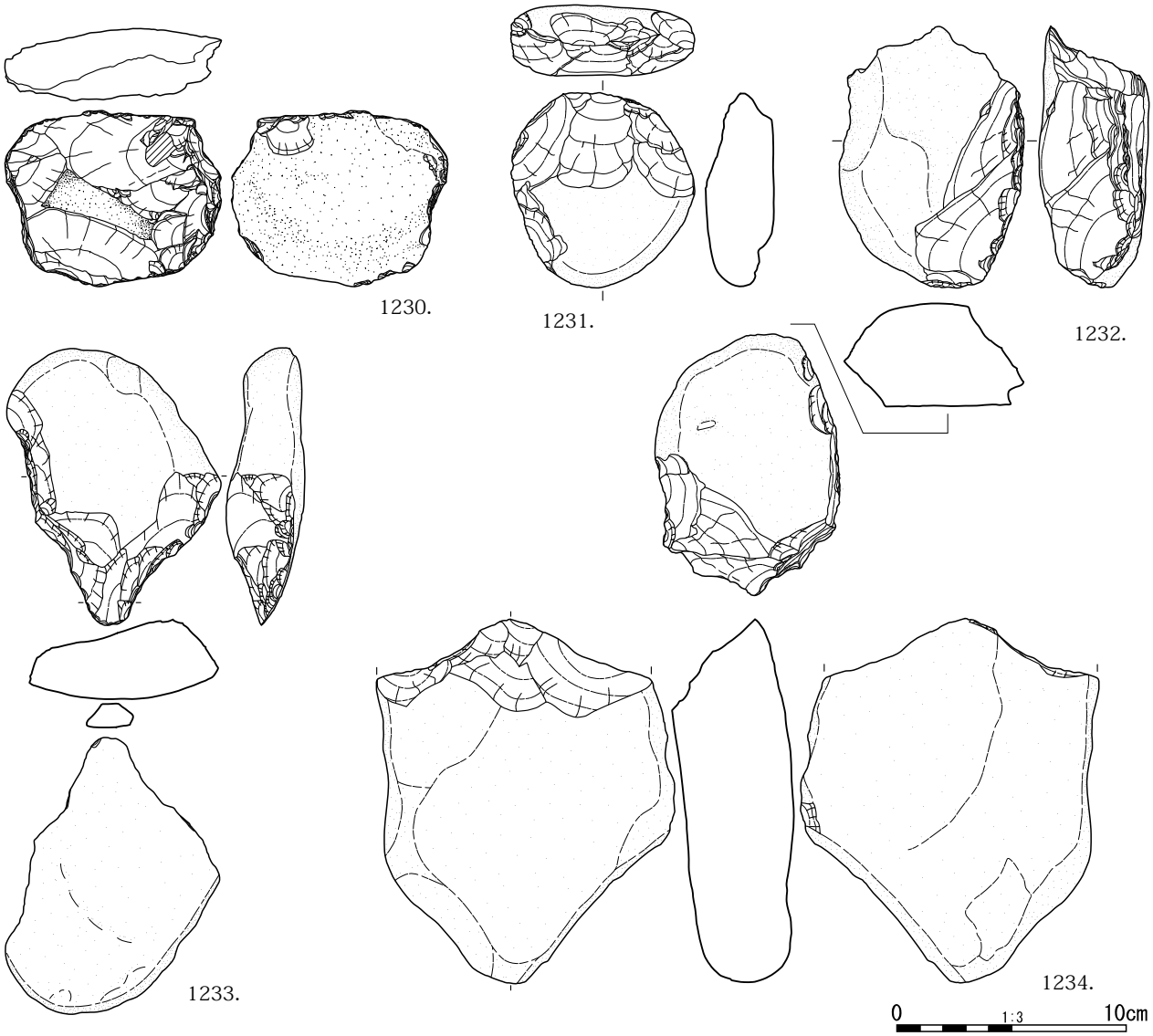
第 150 図　磨製石製品（3）　S＝1／3



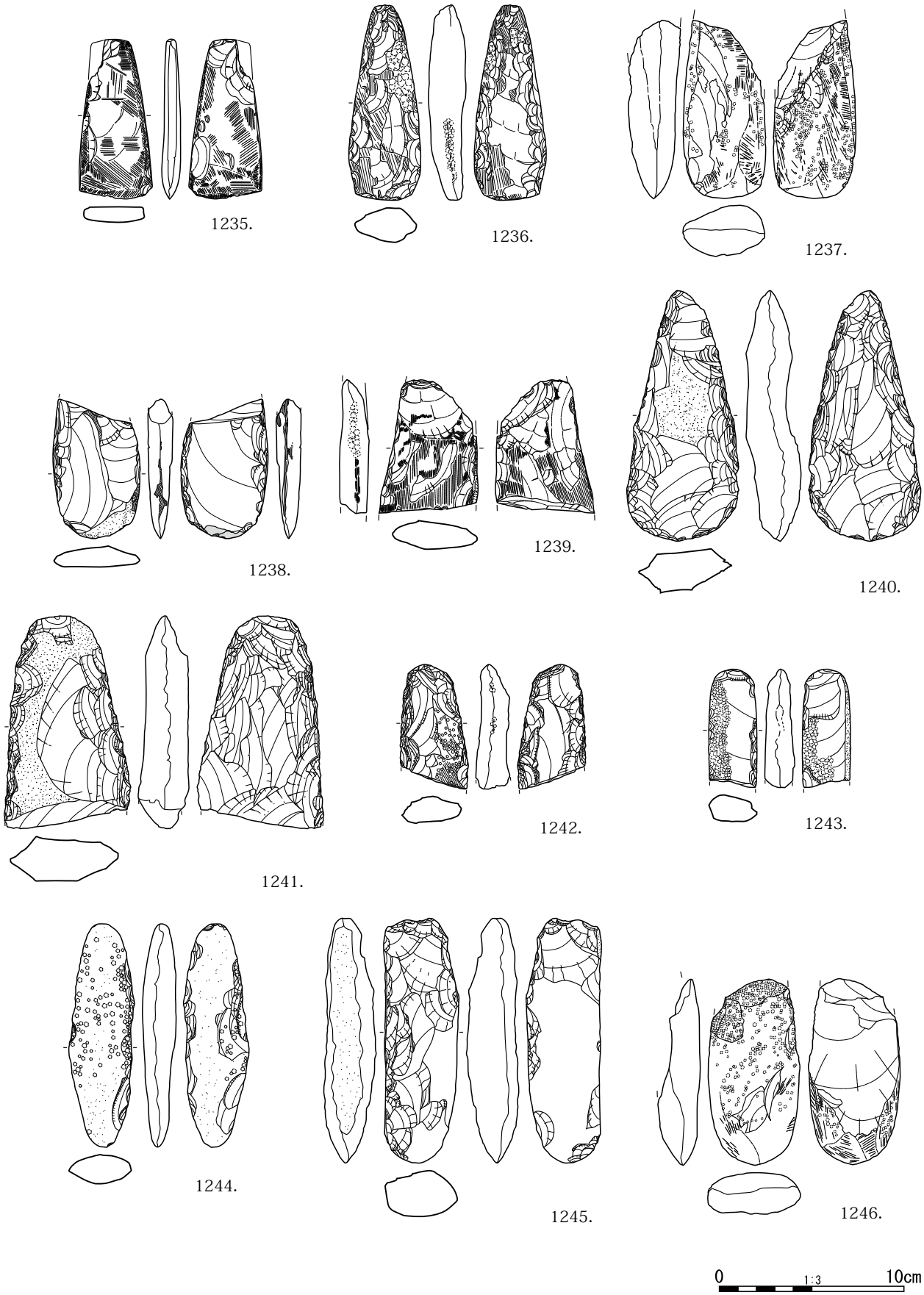
第 151 図　円盤形石器（1）　S＝1／3



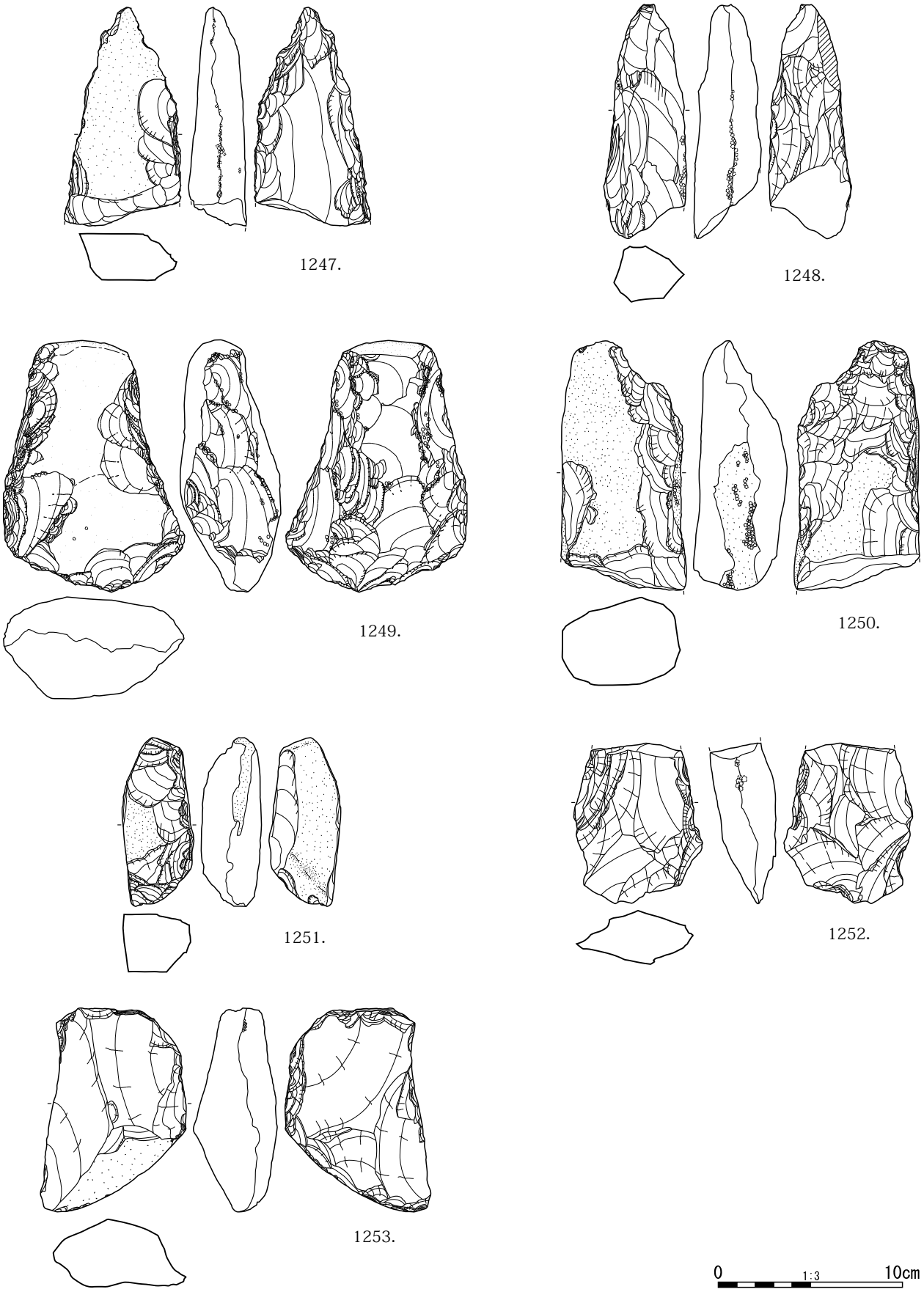
第 152 図　円盤形石器（2），十字・X 字形石器　S＝1／3



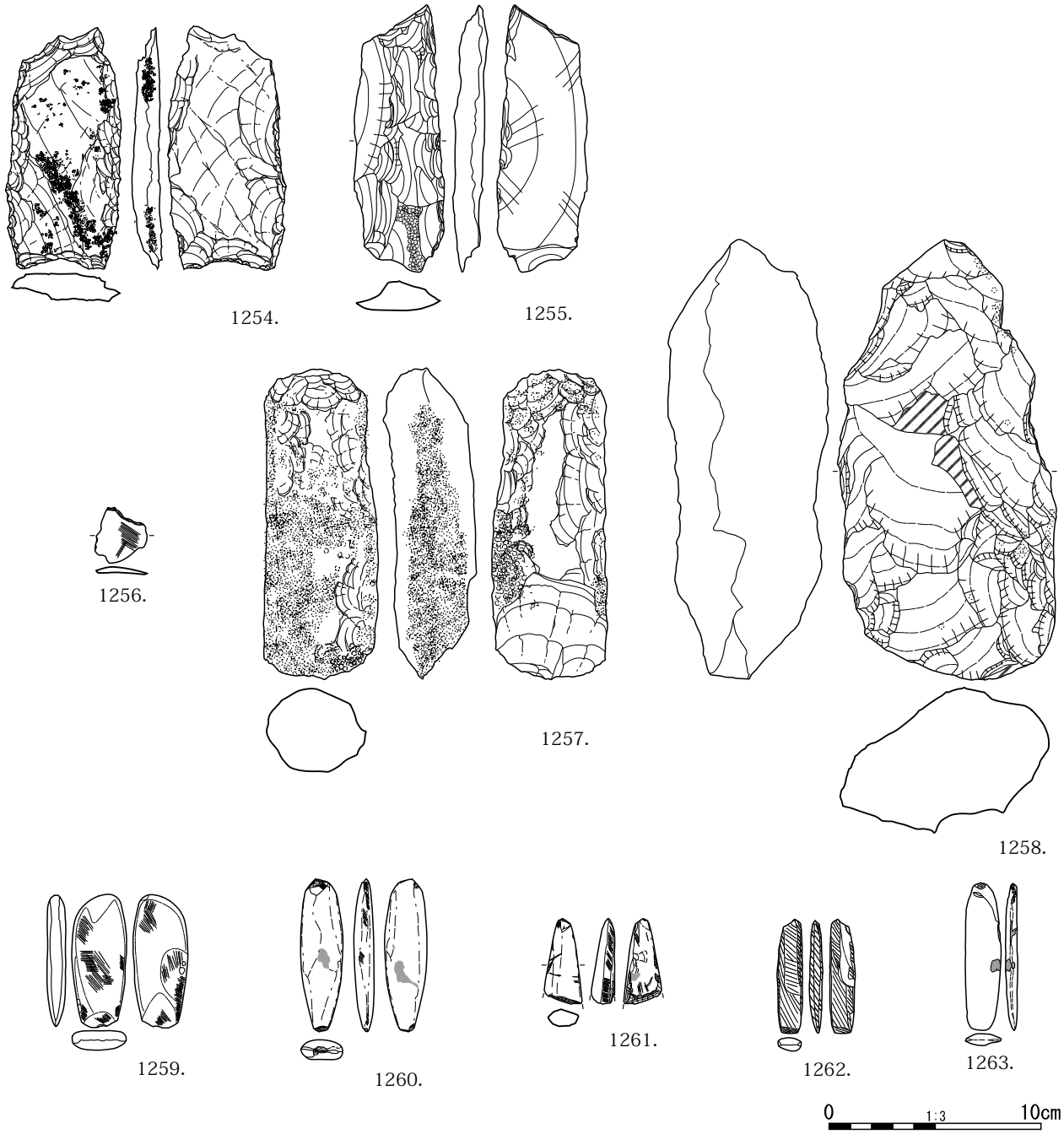
第 153 図　礫器　S＝1／3



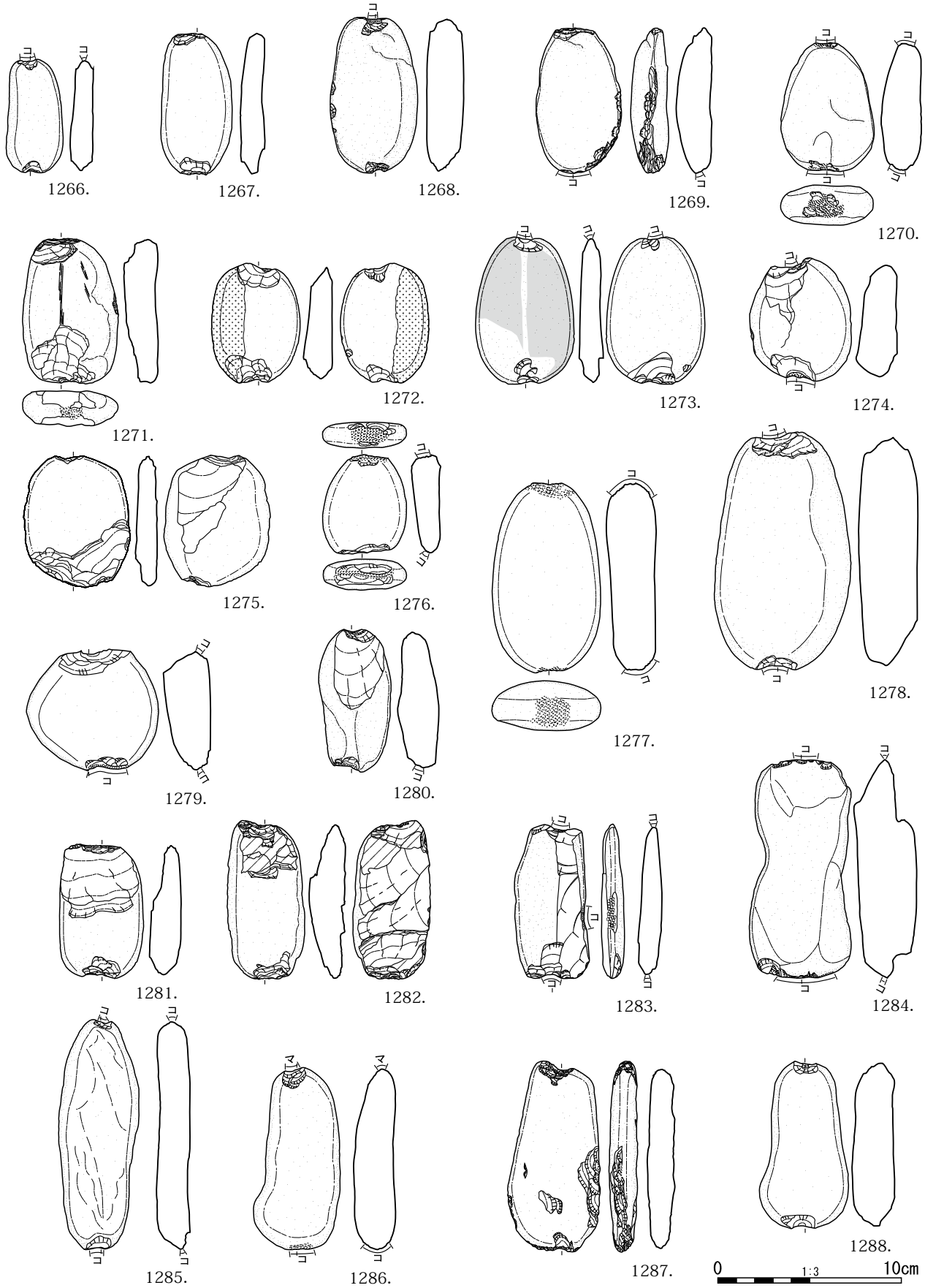
第 154 図　磨製石斧（1）　S＝1／3



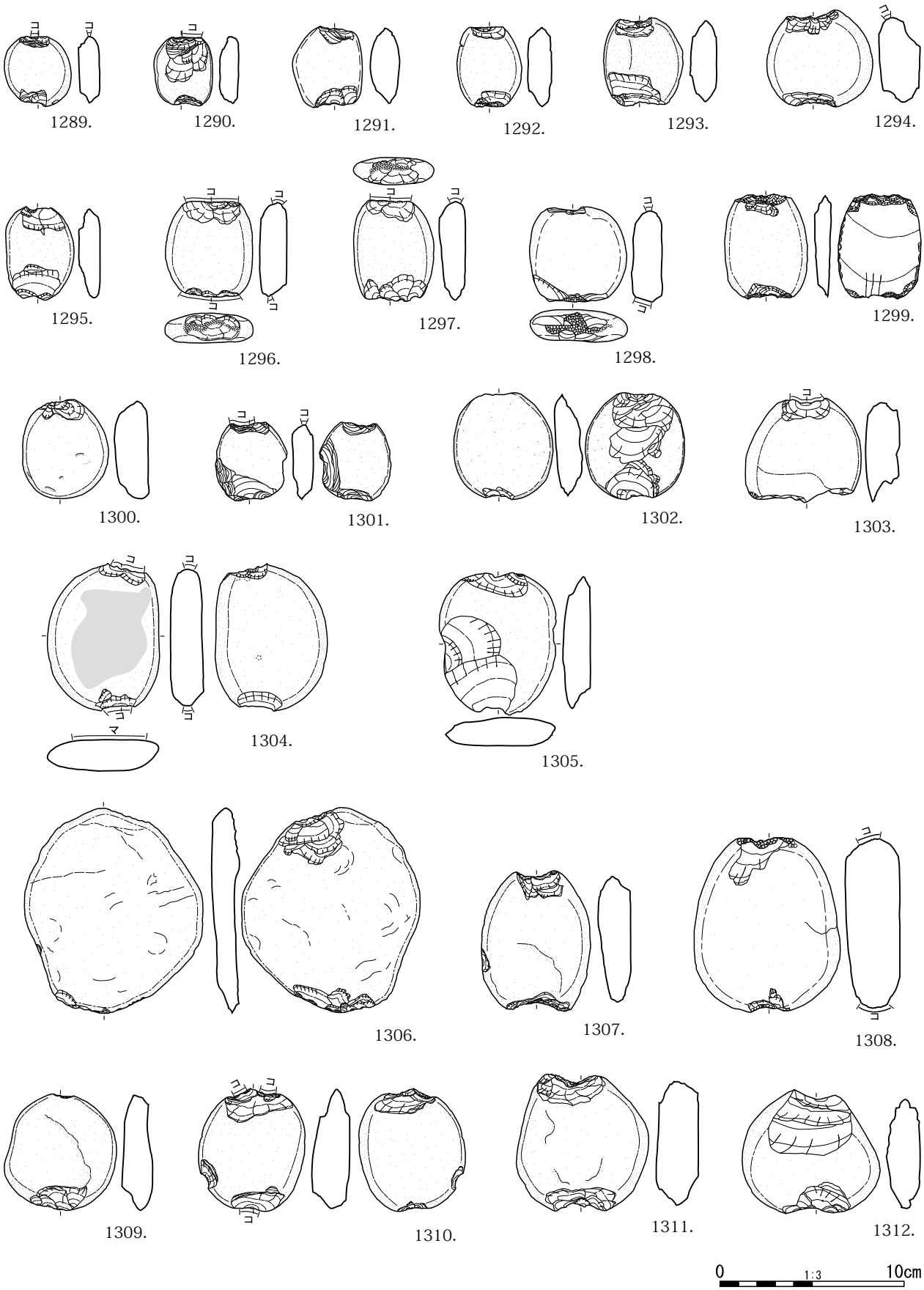
第 155 図　磨製石斧（2）　S＝1／3



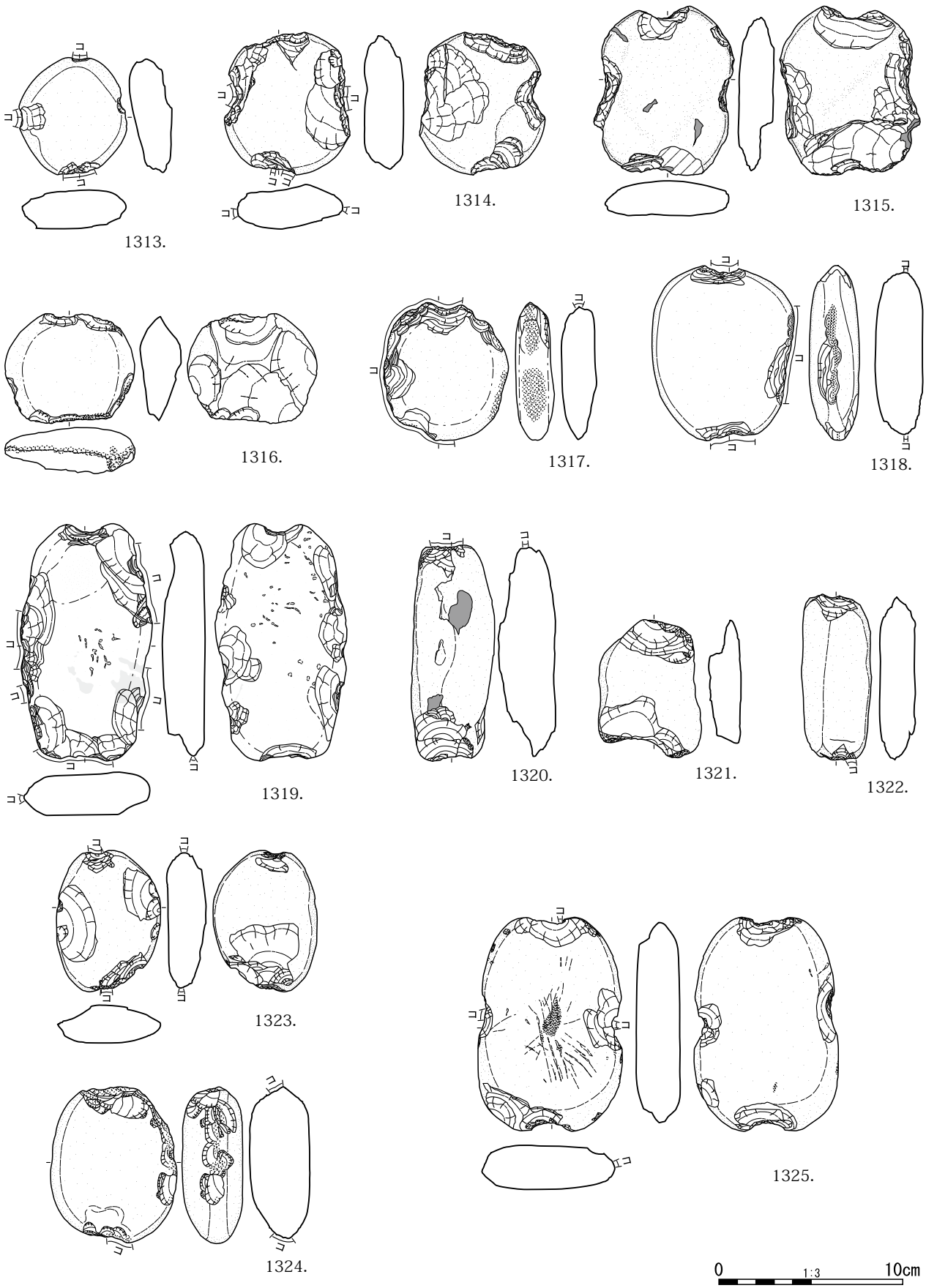
第 156 図　磨製石斧（3）　S＝1／3



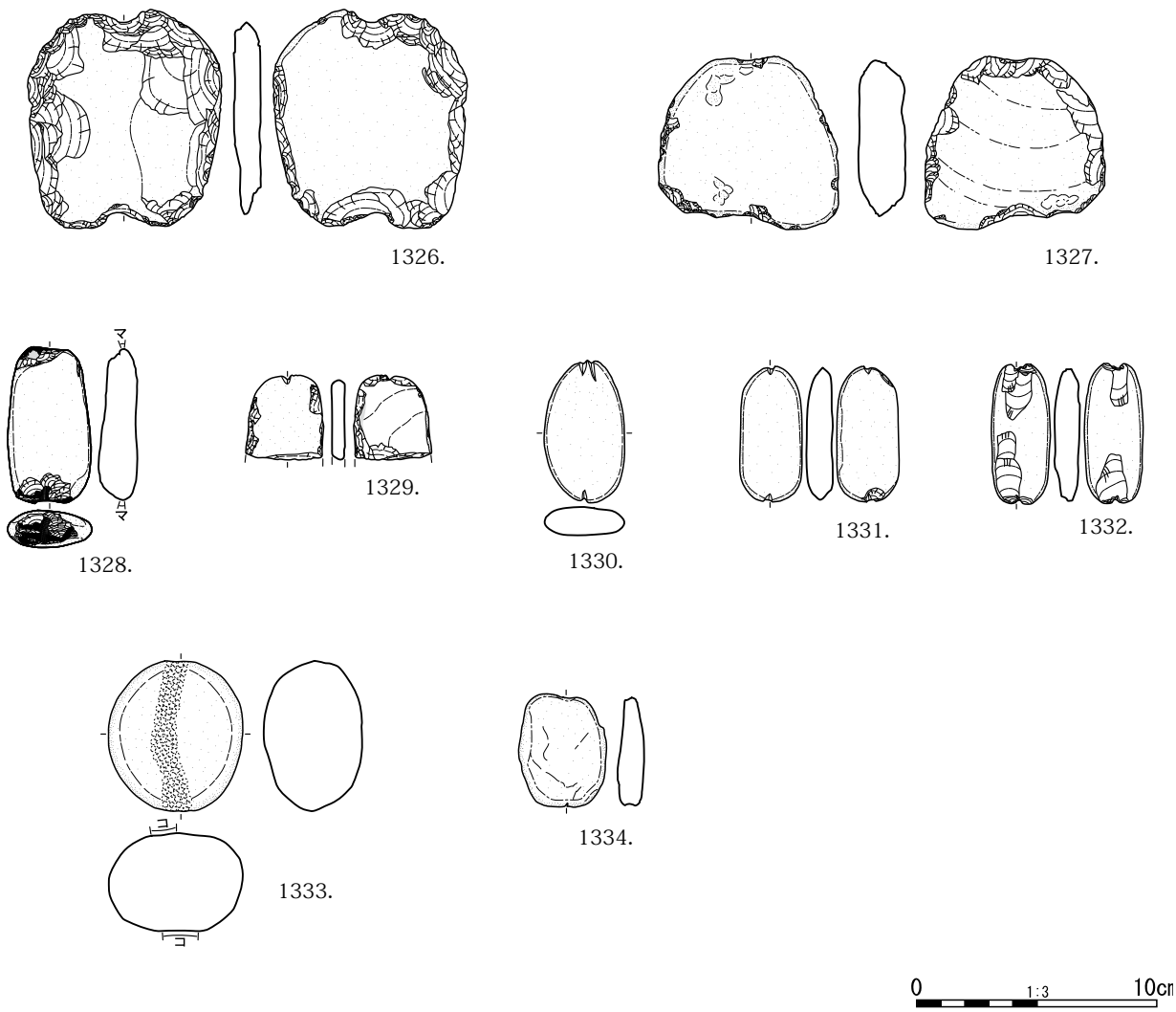
第158図　打欠石錘（1）　Ⅰ類：長軸打欠（1）　S＝1／3



第159図　打欠石錘（2）　Ⅰ類（2），Ⅱ類：短軸打欠　S＝1／3



第 160 図　打欠石錘（3）　Ⅲ類：双軸打欠（1）　S＝1／3



第 161 図　打欠石錘（4）Ⅲ類（2），切目石錘，有溝石錘，自然礫石錘　S= 1／3

□凹石（第 166 ～ 168 図）

概要　本書では、主に円礫を素材とし、その比較的平坦な面の一部に主に敲打による凹部が形成された石器を凹石と規定した。これにしたがって資料を抽出した結果、数十点を認めることができた。うち 22 点を図示した。

ほとんどの資料が円礫を素材とすること、専ら砂岩を選択すること、などが共通点として挙げられるが、様態は変異に富む。また、敲打による窪みだけでなく、磨石や敲石、礫器、台石、石皿といった他器種が担う行為の痕跡も残される。1369・1374 などは敲石として、1371 ～ 1373 は磨石としても使用されている。1380 は台石ないし、石皿の役割を果たしたものであろう。

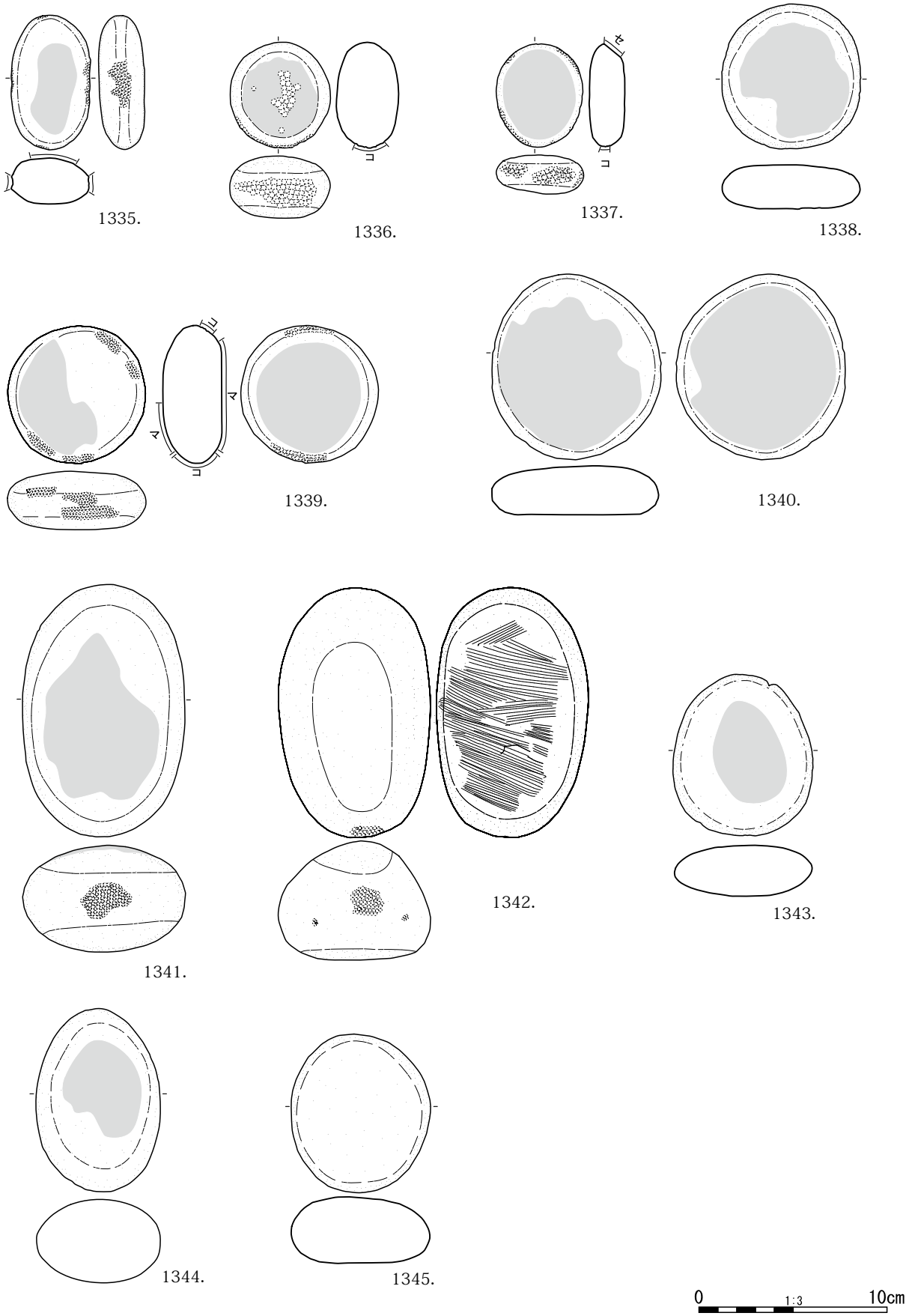
したがってここで凹石と呼ばれるカテゴリーは、他器種とも共有される諸行為の交叉点的な意味合いを持つものであって、石鏃や打欠石錘などよりも独立性の低い器種名と言える。

敲打痕には円形のものと、線状に走るものとが認められる。

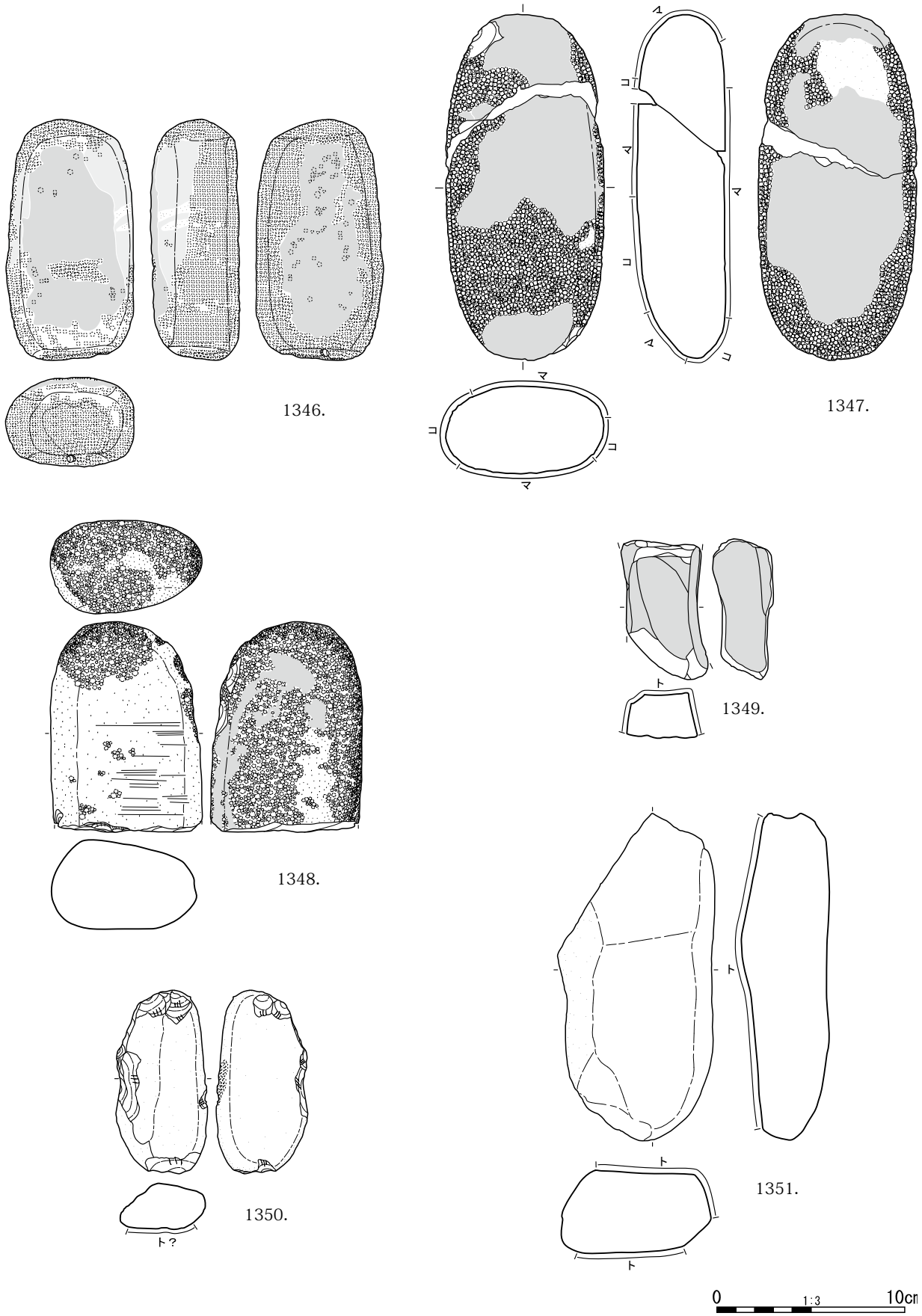
□敲石（第 169 ～ 172 図）

概要　本遺跡からは 200 点以上の敲石が出土している。うち、38 点を図示した。

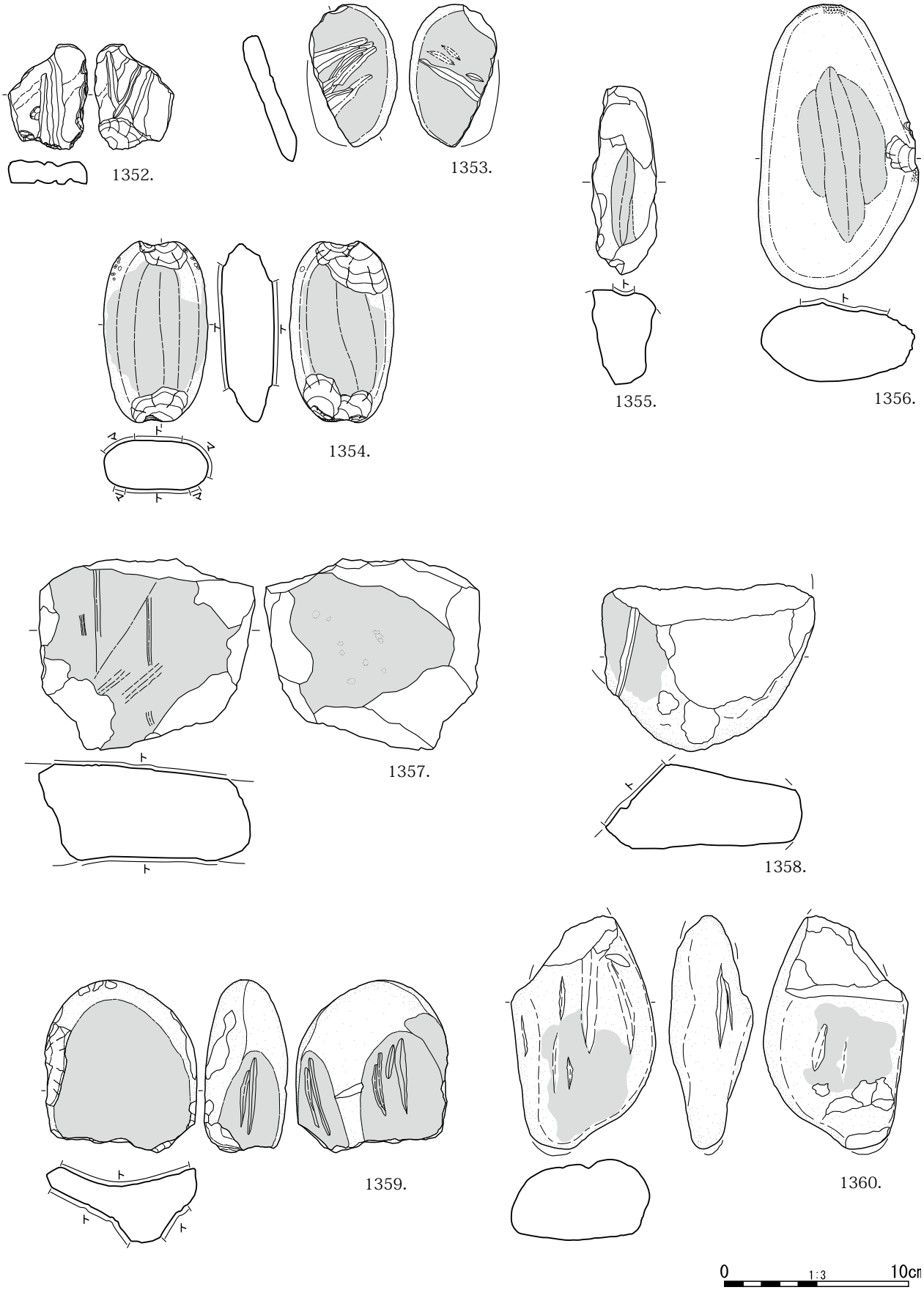
当該器種も変異に富むが、大きくは二つのグループに分けられる。一つは砂岩の棒状礫を素材とするもので、長軸の端部に敲打痕が残される資料が多い（第 169 ～ 171 図）。いま一つは尾鈴山産溶結凝灰岩の扁平円礫を素材としたもので、先に磨石の記載に述べたライフサイクルが推定される一群である（第 172 図）。この他には球形礫



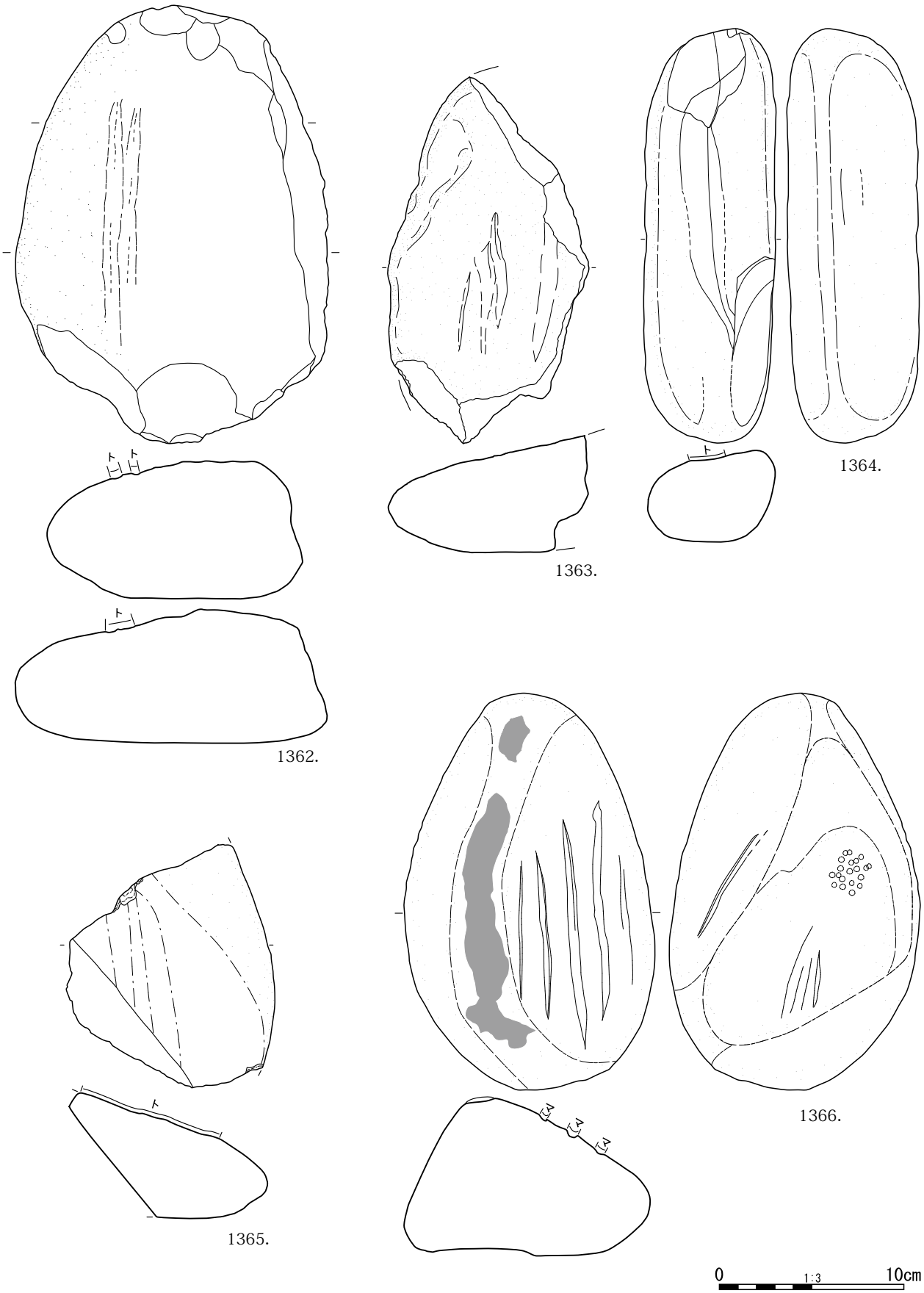
第 162 図　磨石（1）　S= 1／3



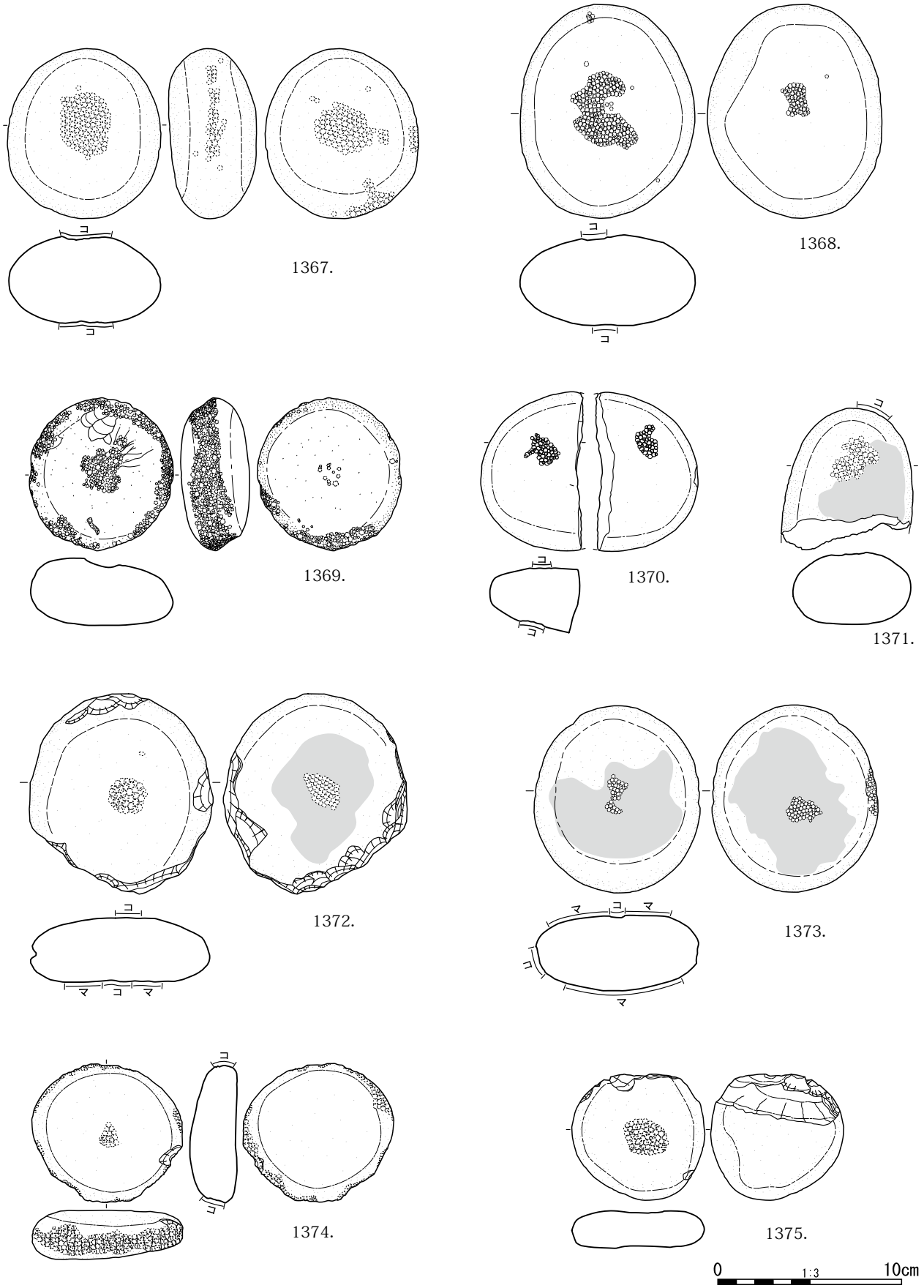
第 163 図　磨石（2）・砥石　S= 1／3



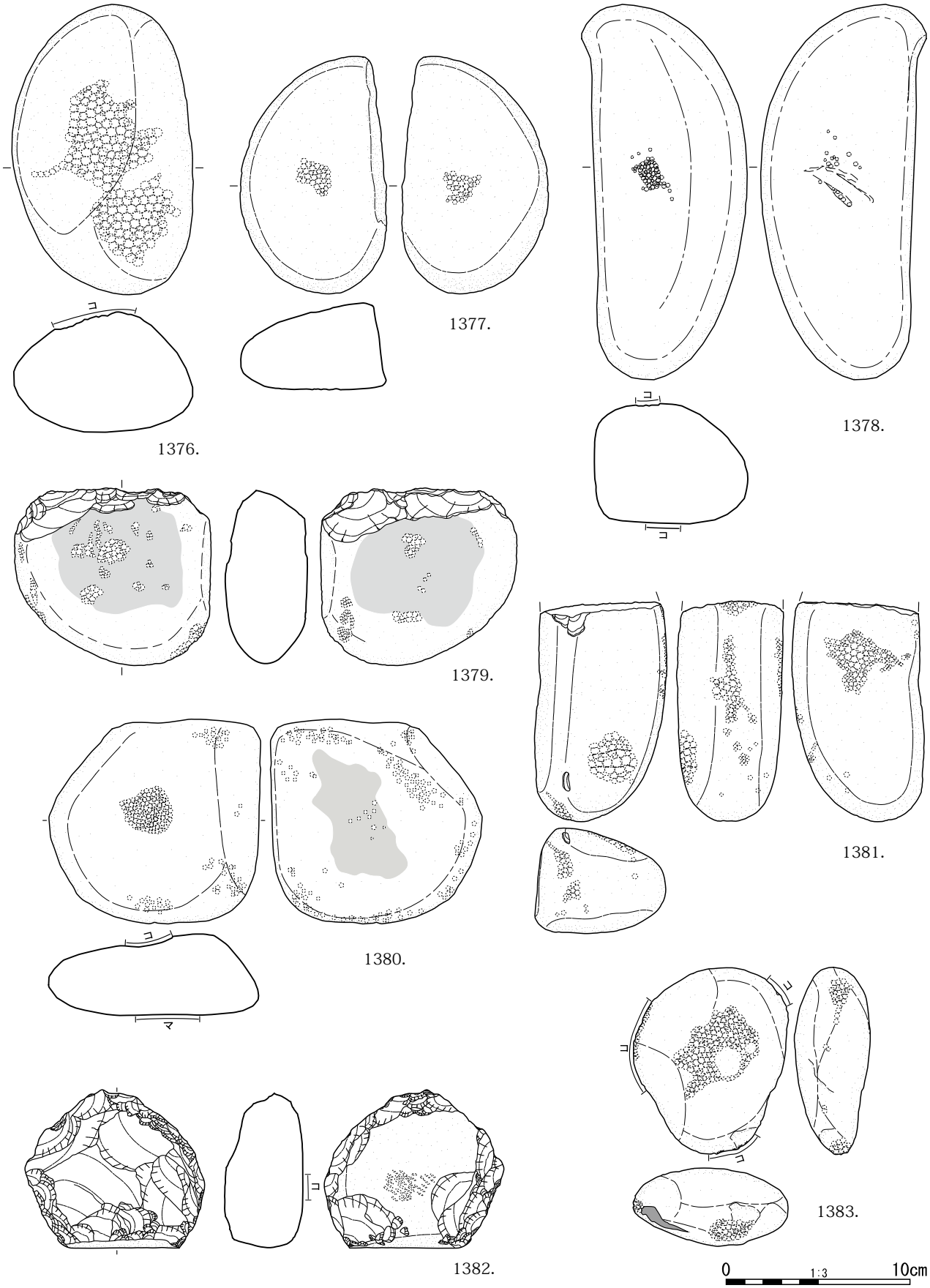
第 164 図　砥石，筋砥石（1）　S= 1／3



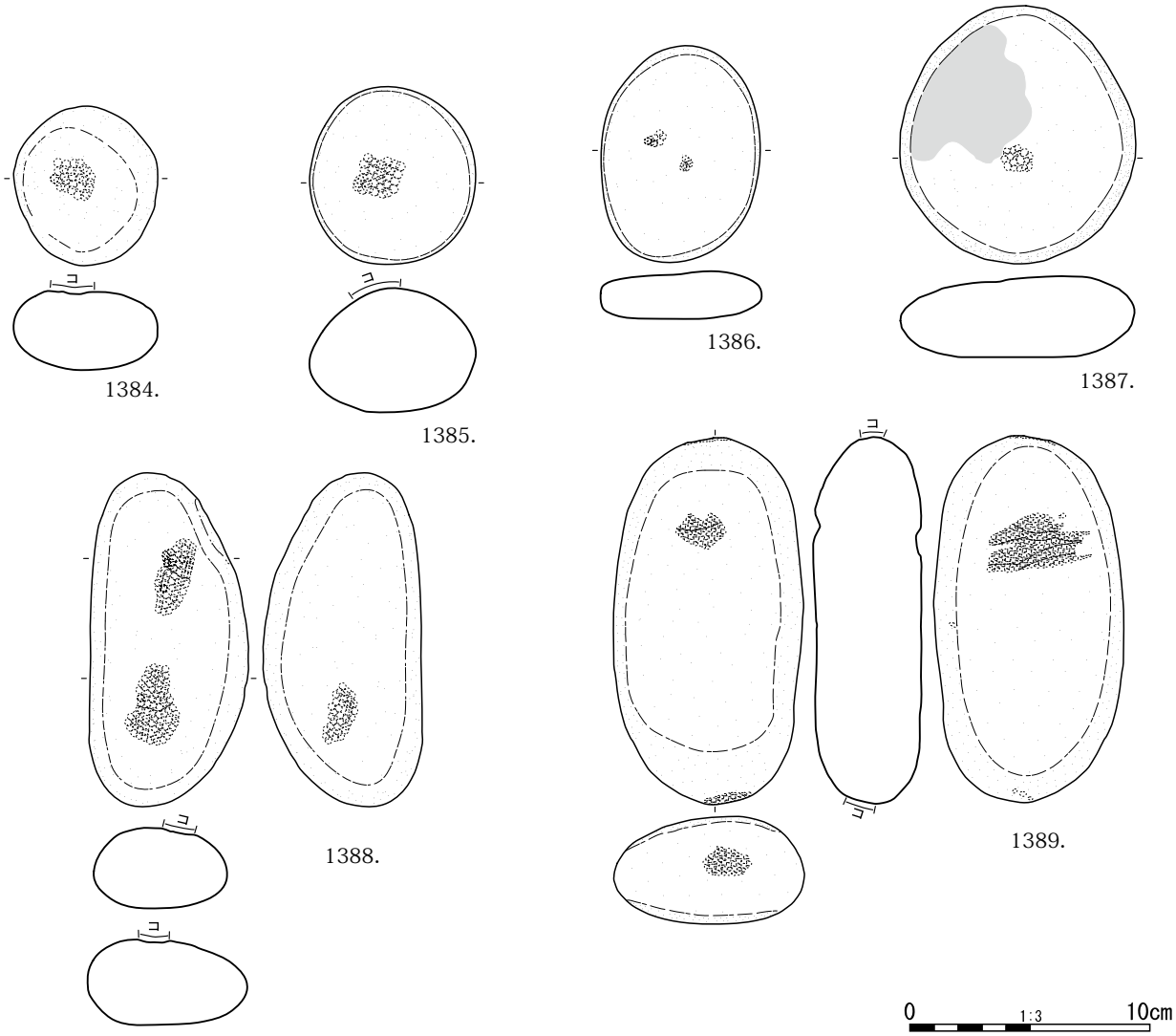
第 165 図　筋砥石（2）　S= 1／3



第 166 図　包含層出土の凹石（1）　S＝1／3



第 167 図　包含層出土の凹石（2）　S＝1／3



第 168 図　包含層出土の凹石（3）・敲石（1）　S= 1／3

を素材として、敲打面が多面体状に消耗するもの（1396・1398 など）、ストーンリタッチャー的な用途が想定される小形品（1412 ～ 1414）、棒礫を素材とし長軸に沿う側縁に連続した敲打・剥離痕が観察される資料（1406）などが注目される。

□石皿・台石（第 173・174 図）

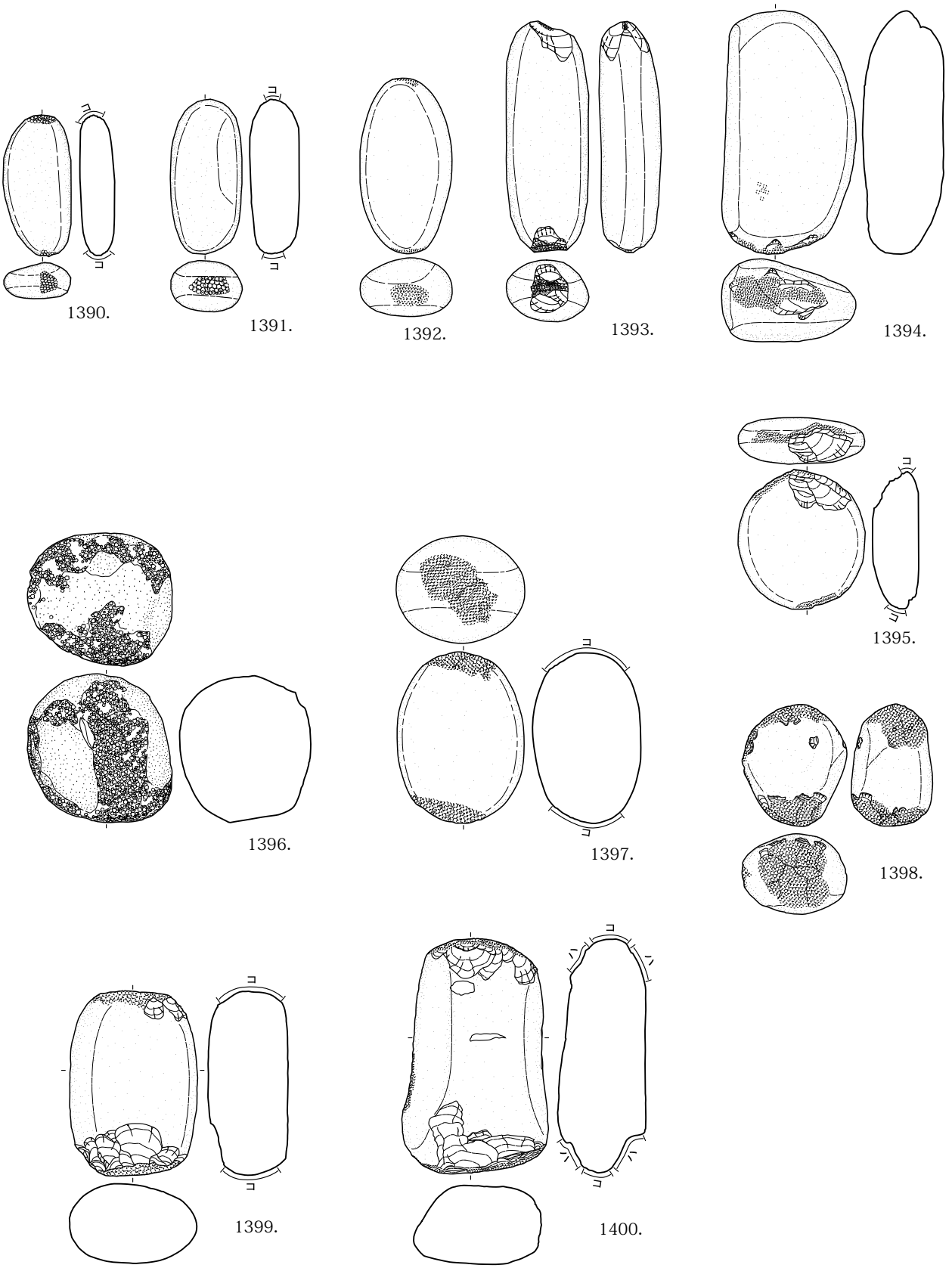
概要　包含層中からも多くの当該器種関連資料が出土したが、大多数が破損している。使用石材は砂岩が量的に多く、次いで尾鈴山産溶結凝灰岩が多用される。ほとんどが自然礫の形状をよく残しており，有縁と呼べる資料は存在しない。以下、個別資料に即して、変異を概観する。

観察所見　1428 は　尾鈴山産溶結凝灰岩製で、一方の平坦面に疎らな敲打痕を残す。大きく破損する資料であるが、周縁を大降りな剥離で整形している点は注目される。

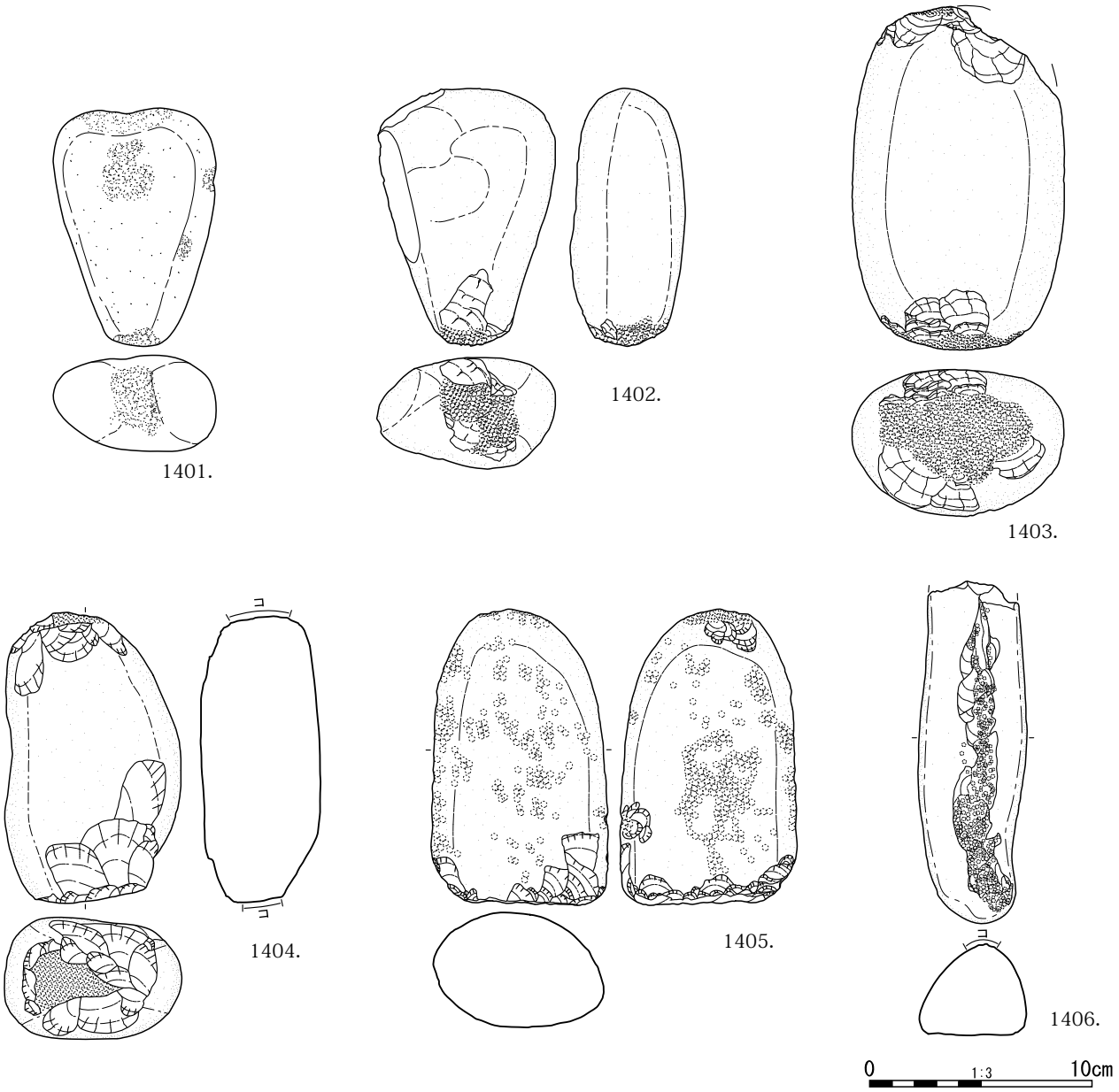
1429 は砂岩製の小形品であるが、表裏の平坦面に顕著な線状痕が残される。

1431 は尾鈴山産溶結凝灰岩製で、大きく破損しているが、大形の石皿である。注目すべきは、表裏いずれの面もが、激しく磨耗して凹みを生じている点である。管見の限りではあるが、これほどまでに使い込まれた事例は周辺地域における類例に乏しい。

1432・1433 は大形で太めの棒状礫を素材とするもので、いずれも表裏ないし三方の平坦面に疎らな敲打痕と磨滅痕を残す。注目されるのは、長軸の一方の端部に敲打・剥離痕を残す点である。重量から判断して、片手で軽々と扱える敲石とは考えにくく、両手で持つ敲石を想定するにしても、



第169図　敲石（2）　S= 1／3

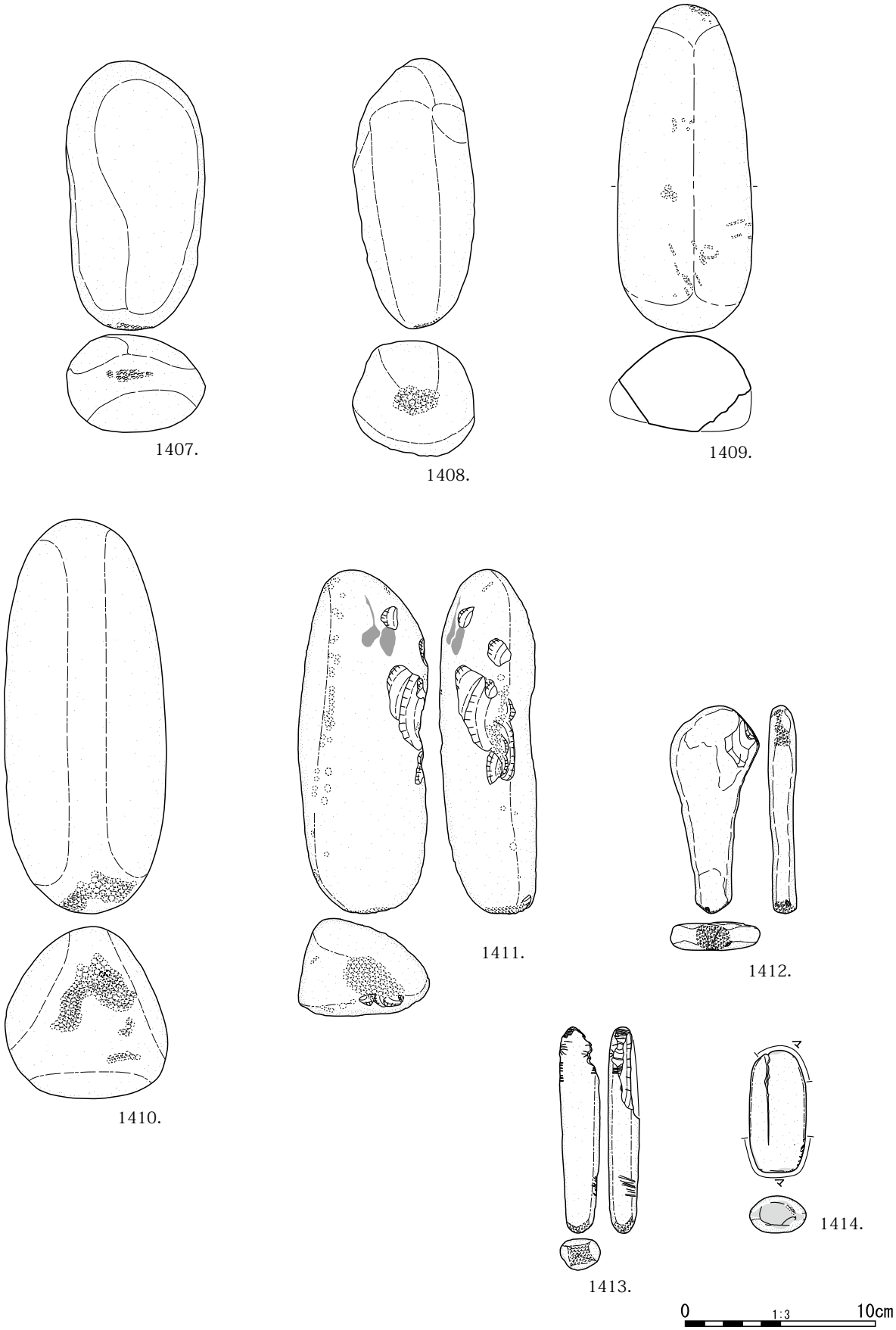


第 170 図　敲石（3）　S= 1／3

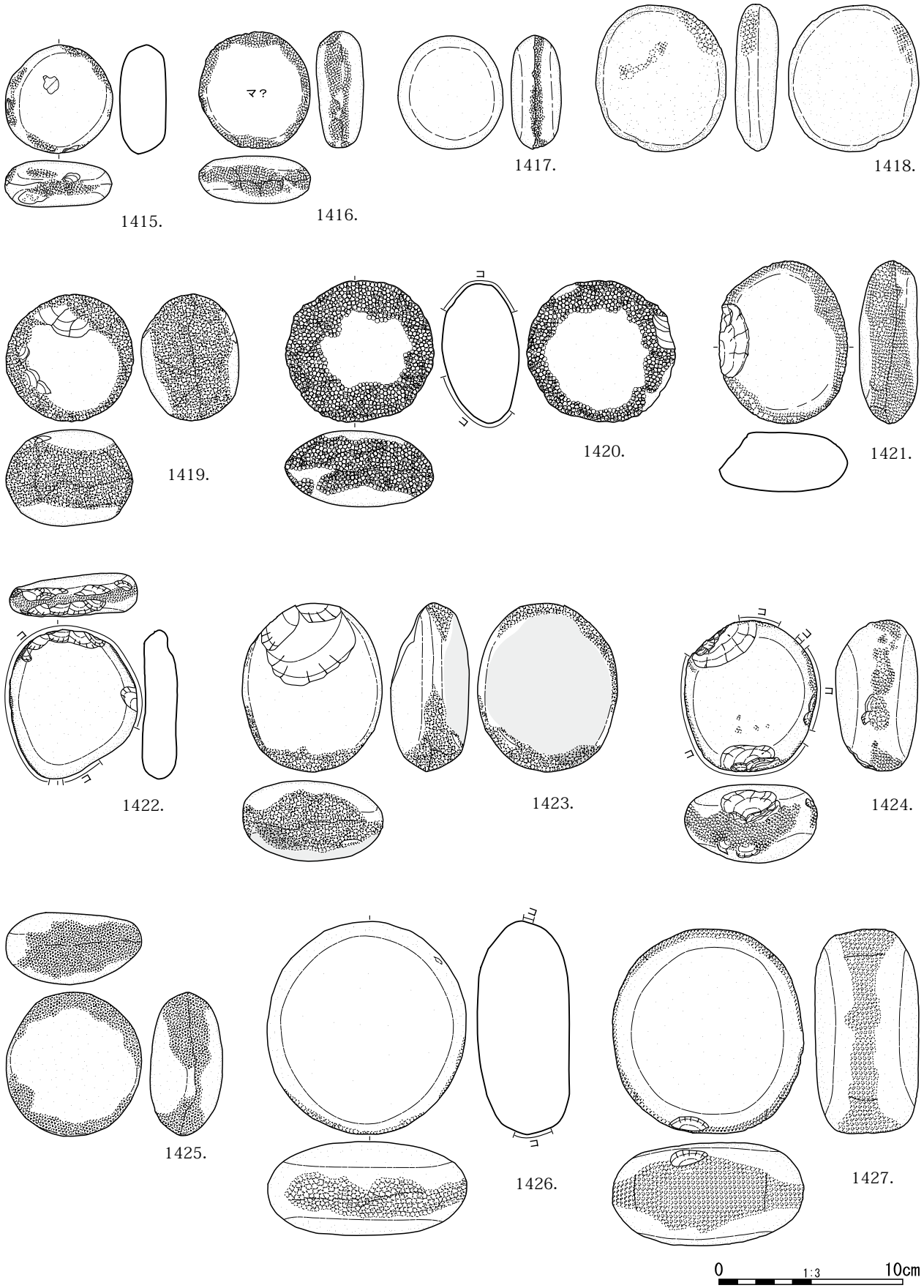
対象物や具体的な行為を推定することは難しい。

1435・1436 は完形に近い状態の大形品である。1435 は砂岩製で、図左側に配置した面は図下側に向かって傾斜するように、磨滅範囲が形成されている。この裏面は自然面ではなく、剥離された、あるいは剥落した面を平滑に仕上げようとしたようにみえる。

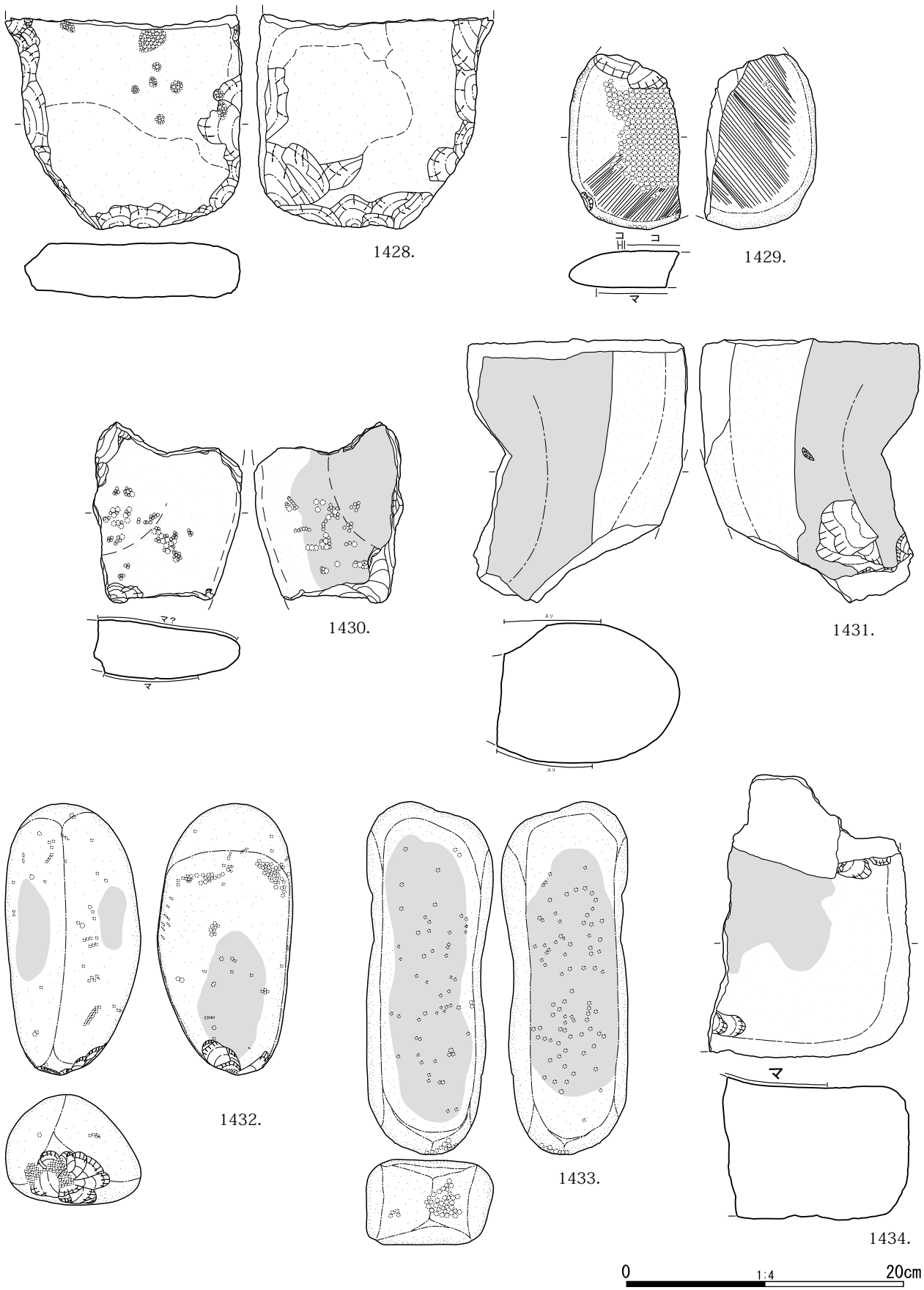
1436 はＡ区における第２号溝状遺構の埋土中から出土した資料である。表裏両面ともに、中央付近に若干の窪みが形成されている。より消耗の少ない一方の面だけに敲打痕が残される点は興味深い。



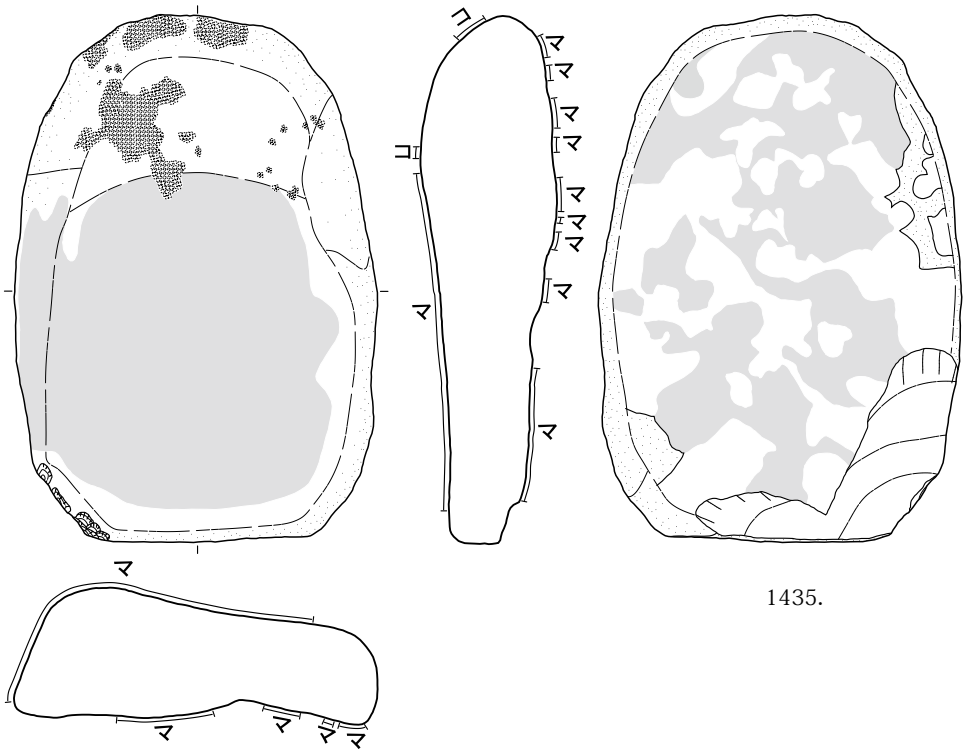
第171図　敲石（4）　S= 1／3



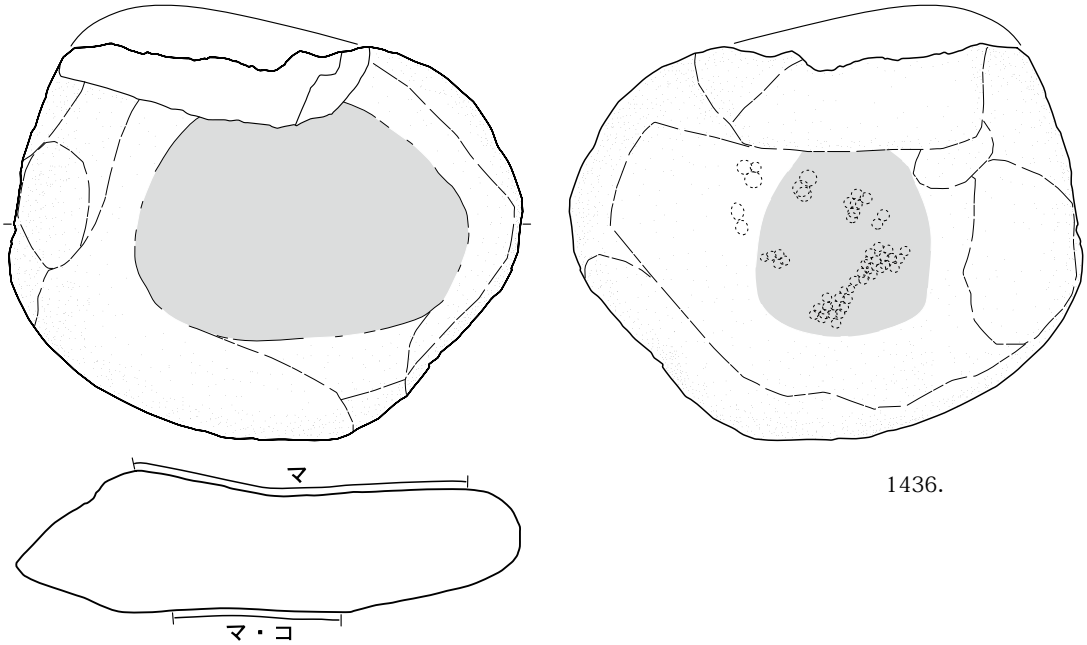
第172図　敲石（5）　S＝1／3



第173図　台石・石皿（1）　S= 1／4



1435.



1436.

0 1:4 20cm

第 174 図　台石・石皿（2）　S＝1／4

第３節　弥生時代

（１）概要

当該期の遺物は、第Ⅰ層および表土中から縄文時代後・晩期の遺物に混在する状況で出土しており、この時期の所産と考えられる遺構は確認されなかった。弥生時代後期の土器片がわずかに認められ、弥生時代に帰属する可能性が高い石器として磨製石鏃・打製石庖丁がある。その他、断定は困難であるが、当該期の打製石斧、磨製石斧およびその未成品と考えられる資料がある。総体的に評価して、前後の時代に比較して人類活動の痕跡に乏しい。

（２）包含層中の遺物

■土器

□壷（第 175 図 1437・1438）

２点図示した。いずれも壷の口縁部付近である。

■石器

□磨製石鏃（第 175 図 1439 ～ 1441）

計６点確認し、うち３点を図示した。A･B（D）区の包含層および他の時代・時期遺構からの出土である。

使用石材は５点が淡緑色の赤色頁岩製、１点が暗灰褐色の頁岩製である。いずれも全面磨製で、器体中央に浅い凹部を有するものが多い。

頁岩製の 1439 は当該期に帰属すると判断したが、縄文時代早期または草創期の所産である可能性も排除できない。平面形は聖三角形に近い。

1440・1441 は平面形が二等辺三角形で、基部は浅い凹基である。

□打製石庖丁（第 175 図 1442・1443）

計３点確認し、うち２点を図示した。いずれもやや変成した頁岩製で、層状に剥離する傾向を持つ石質である。３点ともに長軸両端に抉りを入れる。

1442 は短軸両縁がいずれも先鋭で刃部として機能しうるが、一方の側縁が研磨により丁寧に刃付けされている。

1443 の刃部は破損しているが、研磨整形はなされていないようである。

図示していないもう１点は、片面に礫面を残す剥片を素材とし、短軸の一端に刃部を設ける。研磨整形はなされない。

なお、東和幸氏によれば九州地方の一部（福岡県や宮崎県）では、古墳時代に至るまで石庖丁が使用され続ける可能性が指摘できるという（文献 37）。本遺跡でも、本章第５節に後述する SA02 の床面から出土した石庖丁（第 189 図 1470）を考慮すると、包含層出土資料３点も古墳時代の所産である可能性も排除できない。特に 1442 は SA02 出土資料と技術・形態的に共通する点が多い。また、これらが出土した A 区では弥生土器の分布は確認されなかった。

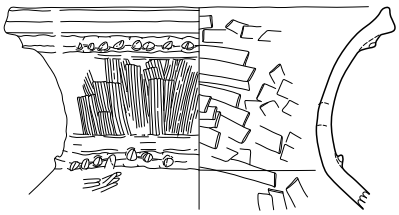
□打製石斧（第 176 図）

遺構や共伴遺物を根拠に、弥生時代の打製石斧と明確に認定できるものはないが、他遺跡の事例を参考に形態上、可能性を指摘しうる資料を抽出した。抽出の対象となったのは有抉群・有柄群である。1444・1449 のように基部側に近い箇所に抉りを入れたものや、1445 のように尖刃の有抉群（有抉群Ⅵｂ類）、同様に尖刃を持つ 1446・1447 などの有柄群に着目した。このように多分に恣意的な基準で抽出した資料群であるため、あくまでも可能性の提示にとどめておきたい。

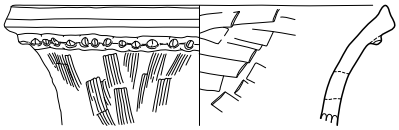
□磨製石斧（第 177 図）

確実に弥生時代の所産と言える資料はないが、可能性を持つ資料を一応提示しておく。

1451 は磨製石斧の基部側を転用した敲打具である。本遺跡の縄文時代後・晩期の磨製石斧類に比べて厚みがあり、弥生時代所産である可能性が指摘できる。1452 ～ 1454 は磨製石斧の未成品である可能性が指摘できる資料である。1454 は砂岩の大形棒状礫に敲打による整形痕が面的に観察される。

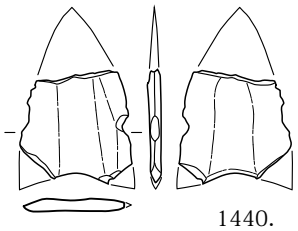


1437.

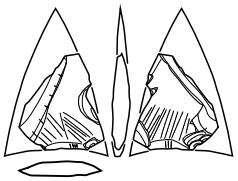


1438.

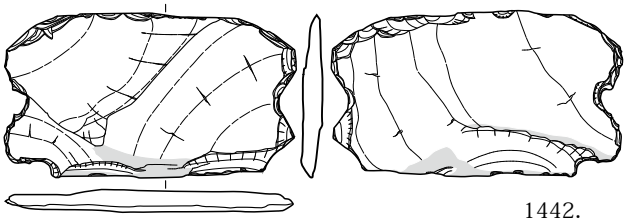
1439.



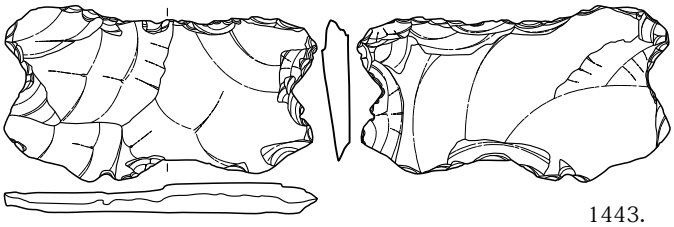
1440.



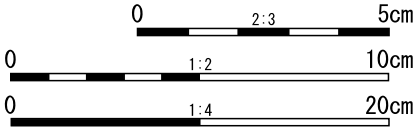
1441.



1442.

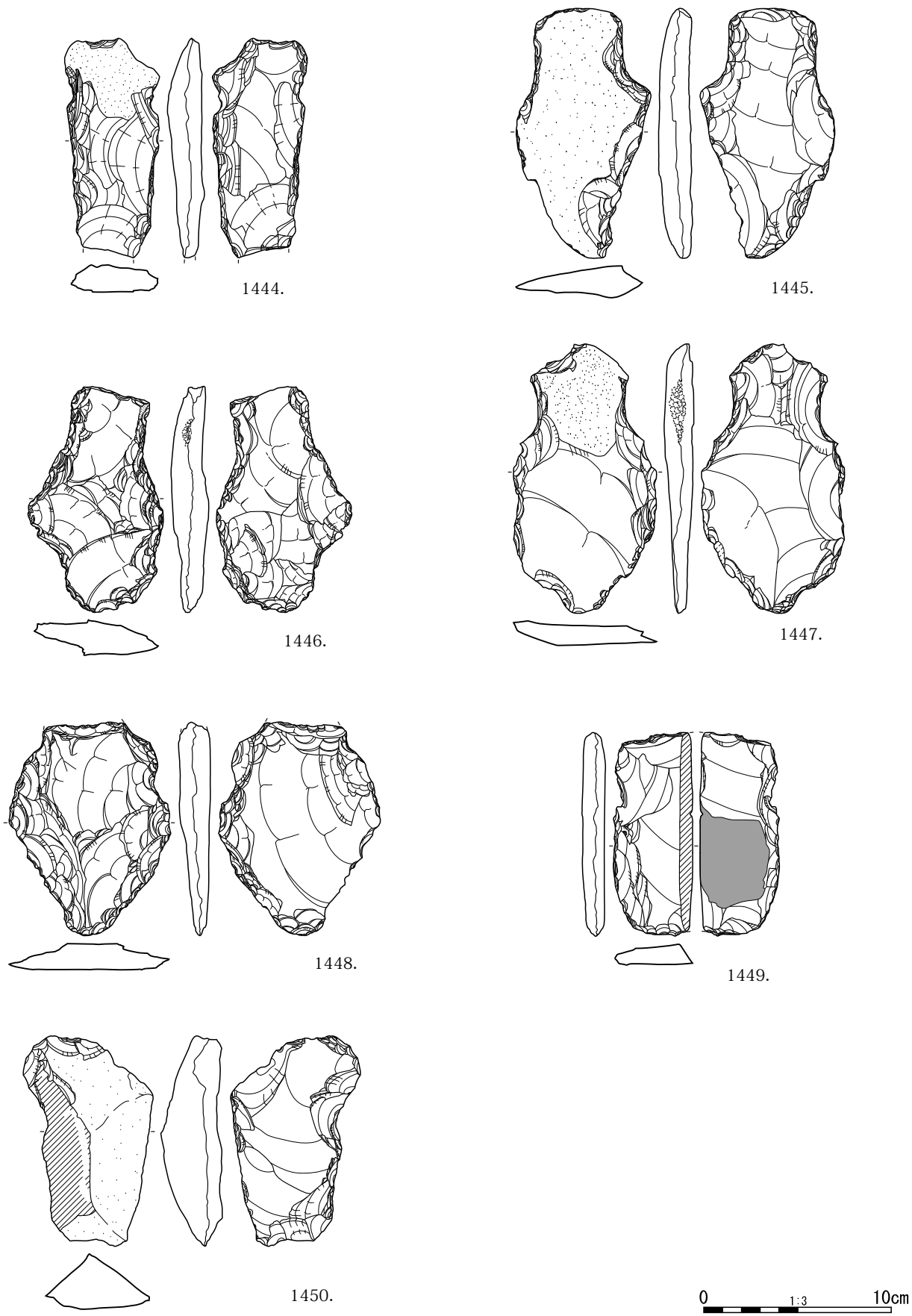


1443.

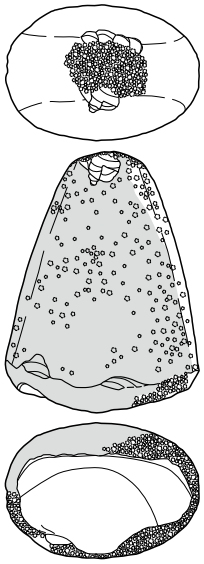


第 175 図　弥生時代の土器・石器（1）

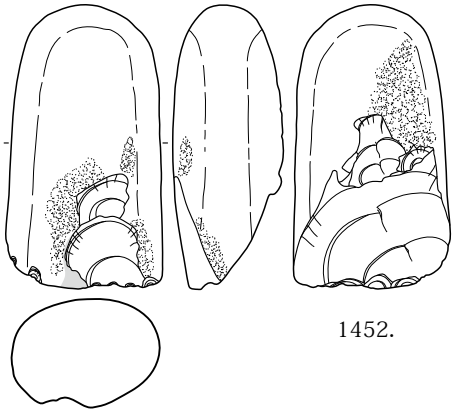
1437・1438：S＝1／4，1439～1441：S＝2／3，1442・1443：S＝1／2



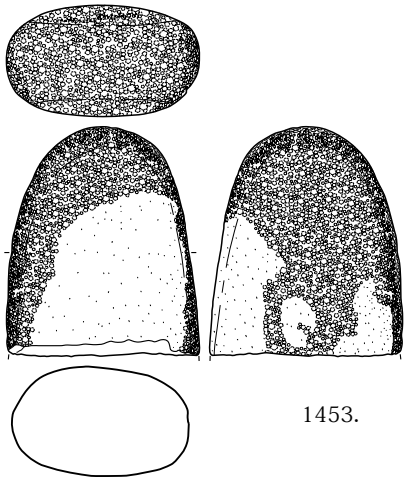
第 176 図　弥生時代の石器（2）　打製石斧：S ＝ 1 ／ 3



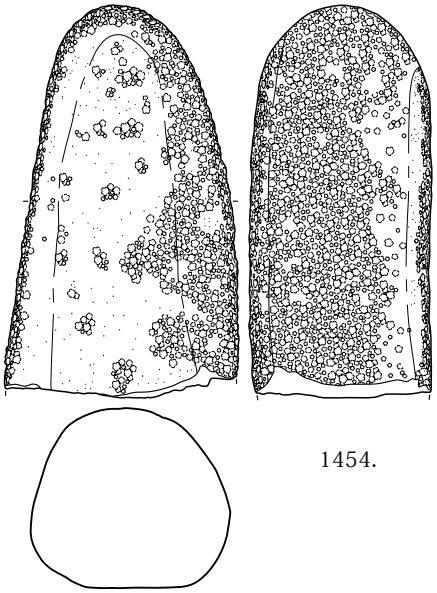
1451.



1452.



1453.



1454.

0 1:3 10cm

第 177 図　弥生時代の石器（3）　磨製石斧：S＝1／3

第４節　古墳時代以降の土器の器種分類および類型化

（１）土師器

本項では古墳時代・古代の土師器について器種分類および類型化の詳細を記す。

完形資料に恵まれたとは言い難いが、器形の全体像をある程度把握する事が出来たため、まず器形の分類を行なった。次に、各器形の文様帯を設定し、その文様パターンの組み合わせで各器形の細分を試みた。この資料操作により、最終的には野首弟２遺跡における各器種の消長とセット関係、それに伴う文様を把握する事に努めた。

ａ　器種

甕・壷・高坏・鉢・浅鉢・埦がある。これらの器種は、次の器形に細分される。

ｂ　器形

■甕

口縁部・底部の形状を細分し、その組み合わせで器形分類を行った。各部位の分類は以下の通りである。

□口縁部　口縁部から頸部にかけての形状により分類する。

Ａ類　「く」の字状。頸部の稜線が明瞭。

Ｂ類　Ａ類よりも、立ち上がり角度が大きく、直立気味に緩やかに広がる。頸部の稜線が不明瞭。

Ｃ類　Ｂ類よりも立ち上がり角度が大きい。直立気味で頸部の稜線が不明瞭。

第 178 図　甕口縁部の類型分類

□底部　底部の断面形状により分類する。

ａ類　わずかに平坦面がある丸底

ｂ類　丸底

ｃ類　凸レンズ状

第 179 図　甕底部の類型分類

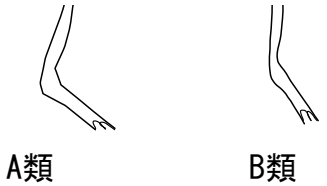
■壷

口縁部・底部の形状を細分し、その組み合わせで器形分類を行なった。各部位の分類は以下の通りである。

□口縁部　口縁部から頸部にかけての形状により分類する。

Ａ類　直口、わずかに内湾する

Ｂ類　やや外反する

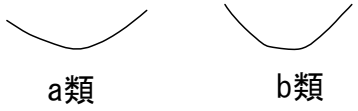


第 180 図　甕口縁部の類型分類

□底部　底部の断面形状により分類する。

ａ類　わずかに平坦面がある丸底

ｂ類　凸レンズ状



第 181 図　壷底部の類型分類

■高坏

坏部の形状と脚部の形状を基準に分類した。

□坏部

1　明瞭に屈曲し、外反しながら広がる。

2　明瞭に屈曲し、口縁部で外反する。

3　屈曲が無く、やや外反する。

□脚部

A　エンタシス状。

□器形　坏部と脚部の組み合わせのヴァリェーションとしては以下の三通りがある。

1類　坏部1と脚部Aの組み合わせ。

2類　坏部2と脚部Aの組み合わせ。

3類　坏部3と脚部Aの組み合わせ。

第182図　高坏器形の類型分類

■埦

口径と胴部最大径の比率で分類した。器形のヴァリェーションとしては以下のとおり。

Ⅰ　口径>胴部最大径

Ⅱ　口径<胴部最大径

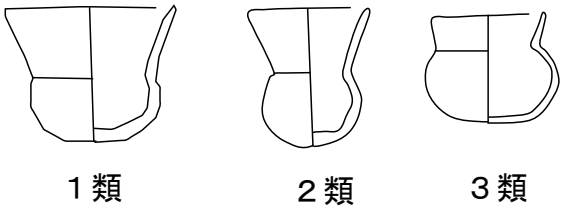
■小型丸底壷

器形のヴァリェーションとしては以下のとおり。

1類　体部は鉢状で、口縁部が長い。

2類　体部は球状で、口縁部が長い。

3類　体部は球状で、口縁部が短い。

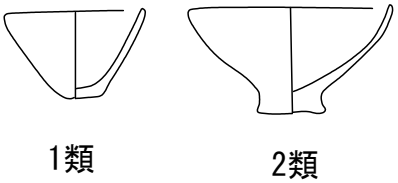


第183図　小型丸底壷器形の類型分類

■鉢　器形のヴァリェーションは以下のとおり。

1類　底部から、やや広がり気味に口縁部が開く。

2類　開き気味の口縁部に、高台付の底部



第184図　鉢器形の類型分類

■皿　器形のヴァリェーションは以下のとおり。

1類　体部が広く

2類　体部が内湾

第５節　古墳時代

（１）概要

総計 34 軒の竪穴住居跡、これらに付随する土坑が検出された。遺物として土師器・須恵器・玉類などが出土した。

（２）遺構および遺構出土の遺物

a　竪穴住居跡

竪穴住居跡の平面形は全て方形ないし長方形に近いものであり、小形（一辺２～３ｍ）と大形（一辺５～６ｍ）に大別される。なお、本書に掲載する第一次調査では、Ａ区の南西端において、切り合う２軒の竪穴住居跡を認識し、これを第８・10 号竪穴住居跡と称したが、遺構の大部分は南側の調査区外に残されたため、軒数および切り合いの真偽については確証が得られなかった。この検証は、平成 19 年に開始された第二次調査の成果に委ね、本書では遺構分布図におけるプランと第一次調査から得られた一部の遺物の提示に留めたい。

■第１号竪穴住居跡（SA01　第 186 図）

概要　Ａ区北西端に位置し、SA02・03 に近接する。遺構の平面形は東西にやや長い方形で、プランの北西端は縄文時代早期の第８号集石遺構を破壊しているが、礫を完全に除去するまでにはいたっていない。また、床面中央部付近にも後期旧石器時代（AT 上位）の礫群の一部が露出しているこのためもあってか、古墳時代当時の生活痕跡に乏しい。

規模は長軸３ｍ、短軸 2.5 ｍを測り、Ａ区における古墳時代竪穴住居跡の中で最も規模が小さい。壁の残存高は 30㎝程度で南側はほぼ垂直に、北側はゆるやかに立ち上がる。

覆土を構成する層は第１～３層である。各層とも黒褐色ブロック土を含んでいる。主にその径粒・堅さを基準として分層した。

床面は概して平坦で、硬化面・焼土等は確認されていない。また柱穴は検出されなかった。

竪穴部から出土した遺物は少なく、特に土器は土師器の細片があるのみであった。

出土遺物

■石器（第 187 図）　縄文時代の所産を含め、コンテナ１箱分ほどの石器を確認した。本来的にこの竪穴住居に伴う可能性が高い資料として、砥石１点、台石・石皿類３点があるが、他は石鏃やホルンフェルス・砂岩・尾鈴山産溶結凝灰岩などの剥片・石核が中心であり縄文・弥生時代遺物の混入と推定される。あるいは古墳時代における竪穴住居跡への廃棄行為に関わるかもしれない。以下、代表的な遺物について記す。

□砥石（第 187 図 1455）

淡黄白色の凝灰岩を用いる。本来は中央部が括れる平面糸巻き状の形態をなすものと思われるが、破損している。４面がいずれも平滑で研ぎ面として利用されたことを示す。

□石皿（第 187 図 1466）

およそ人頭大の扁平な砂岩円礫を用い、一方の面が平滑で、もう一方の面は自然面を残す。自然面を上にした状態で出土した。

■第２号竪穴住居跡（SA02　第 188 図）

概要　Ａ区北西部に位置し、SA01・03・04 に近接する。遺構の平面形は東西に長い長方形で、規模は長軸約５ｍ、短軸約４ｍ、床面積約 20㎡を測る。これはＡ区の古墳時代竪穴住居跡においては平均的な規模である。壁の残存高は 30㎝程度でほぼ垂直に立ち上がる。北～西部において壁溝がわずかに検出されている。

出土遺物

■土師器（第 189 図）

甕・小型丸底壷・ミニチュア土器でセットを構成する。甕は、ほとんどが細片での出土であり、器形の全体像が分かる程度まで接合できなかった。

1457 ～ 1460 が甕である。うち 1457 がＢ類の口縁部、1458 がＣ類の底部に該当する。

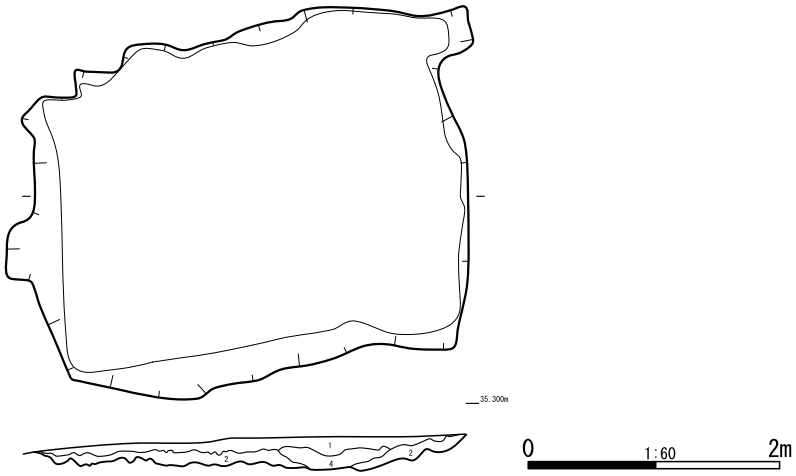
1464・1465 は小型丸底壷である。1466・1467 はミニチュア土器であり、いずれも手捏ねにより整形されている。

遺構の廃絶時期であるが、時期を推測できる遺物の出土に乏しく、判断できない。

■石器（第 189 図）

床面からは棒状礫６点、打製石庖丁１点、他にホルンフェルス・砂岩製の剥片などが出土し、覆

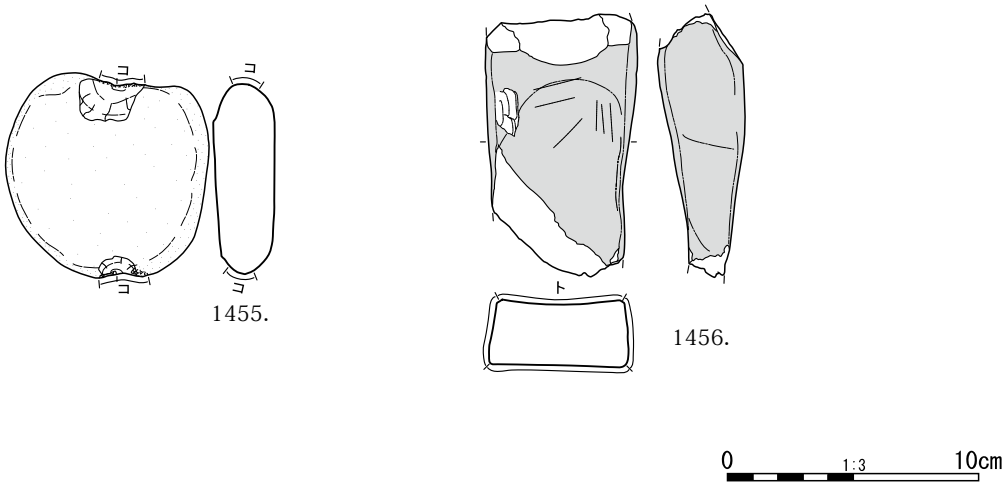
第 185 図　古墳時代の竪穴住居跡分布模式図



SA01 土層注記

1：黒色（10YR2/1.5）粘質土。粘性・しまりともに普通。第Ⅲ層起源のブロックを疎らに含む。
2：黒褐色（10YR）粘質土。粘性やや強く，しまりは普通。第Ⅲ層起源のブロックをまばらに含む。
4：暗褐色（10YR3/4）粘質土。しまりが強い。

第 186 図　第 1 号竪穴住居跡（SA01）　S＝1／6 0



第 187 図　第 1 号竪穴住居跡出土の石器　S＝1／3

土中からは台石、凹石、敲石、筋砥石、石鏃、打欠石錘などのトゥールやホルンフェルス・砂岩・尾鈴山産溶結凝灰岩製の剥片・石核類など、縄文時代の所産と考えられる資料も含んで、およそコンテナ１箱分の石器が認められた。

以下、床面から出土した資料および覆土中の遺物のうち古墳時代に帰属する可能性のあるものについて、その一部の観察所見を記す。

□打製石庖丁（第 189 図 1470）

非常に風化した頁岩Ⅰ群を用いた小形・粗製の資料である。長軸両端に抉りが観察される。第３節に報告した第 175 図 1442 と共通し、短軸の一方の側縁が研磨により刃付けされている。弥生時代の所産である可能性を残すが、床面からの出土である点､東和幸氏の言及（文献 37）も考慮し、ここではこの竪穴住居跡に本来的に伴うものとして理解したい。

□筋砥石（第 189 図 1472）

大形品と小形品の２点が認められた。1472 はおよそ人頭大の不整形で厚みのある砂岩亜円礫を素材とし、その片面を中心に筋状研ぎ面が形成され、一部はもう一方の面にも及ぶ。研ぎ面が多く残される面には敲打痕が集中する部分も観察される。床面からの出土である。

図示していない小形品のもう１点はおよそ鶏卵大の扁平不整形の砂岩亜円礫を素材とし、その両面に筋状研ぎ面を残す。携帯用砥石であろうか。

覆土中からの出土であるが、床面出土の 1472 を考慮し、本来的に SA02 に伴う可能性を推したい。

□凹石（第 189 図 1471）

およそ掌大の扁平不整形のホルンフェルス亜円礫を素材とし、片面に敲打による凹部が形成される。床面からの出土である。図示していないが、覆土中からもう１点、幼児頭大の扁平砂岩円礫製の両面に凹部を持つ凹石１点が出土している。

□棒状礫

図示は割愛したが、床面から棒状礫が６点出土した。うち１点は、尾鈴山酸性岩類の一種（木城花崗閃緑岩か）と思われる棒状円礫を素材とし、片面に研磨面が認められる。他の５点のサイズは様々で、使用石材も砂岩・頁岩・ホルンフェルスなど多様である。わずかな敲打痕が観察される資料も含む。

■第３号竪穴住居跡（SA03　第 190 図）

概要　Ａ区北西部に位置し、SA01・02・07・09 に隣接する。遺構の平面形は方形で、規模は長軸（南北方向）約４ｍ、短軸（東西方向）約 3.7 ｍ、床面積約 14.8㎥である。壁の残存高は 40㎝程度でほぼ垂直に立ち上がる。

柱穴は確認されず、床面は概して平坦である。

出土遺物

■土師器（第 191 図）

ほとんどが細片であり、図示できる遺物は少ない。甕・壷・埦・高坏でセットを構成しているが、甕は図化できる範囲まで接合できなかった。埦の出土量の多さが目を引く。

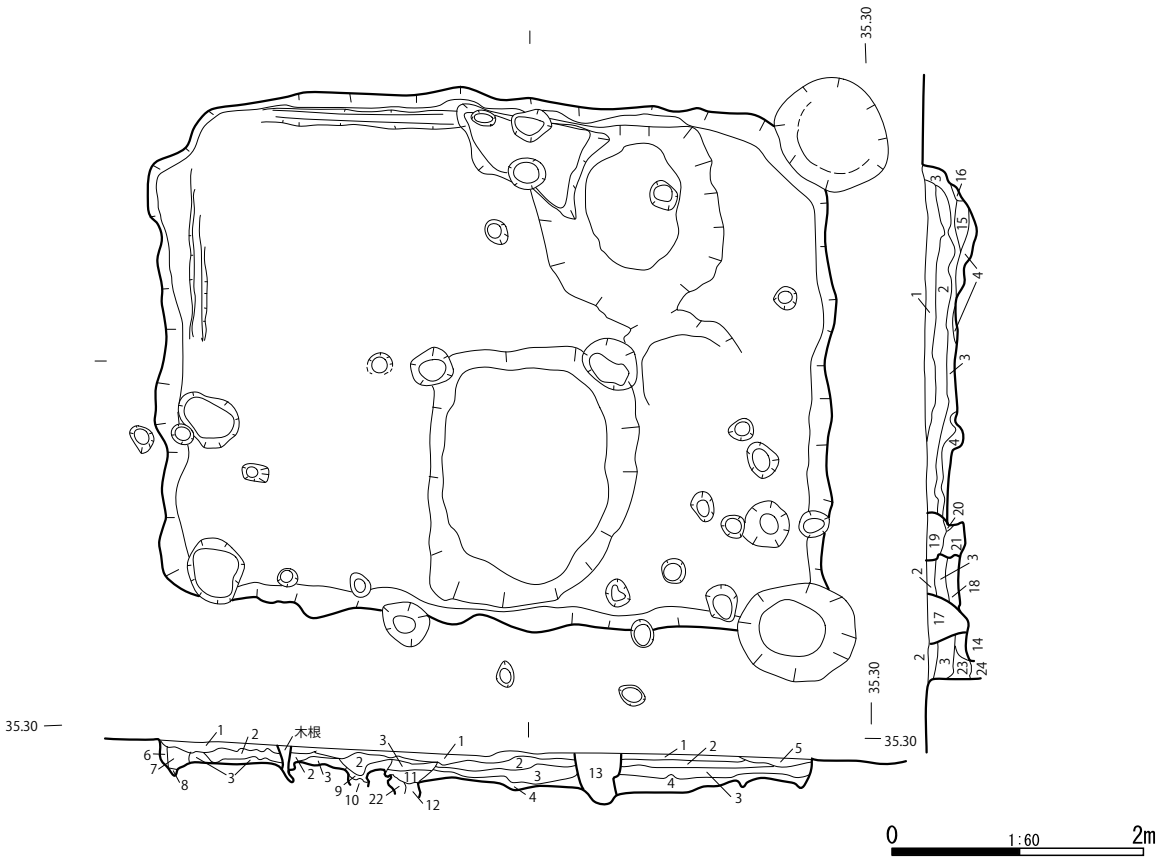
1473 はＡ類の壷、1474 は高坏であるが、破片であり分類できない。1475 ～ 1477 は埦である。法量や調整具に微妙な差異があるが、基本的には同じ作りである。

遺構の廃絶年代としては、壷及び埦類の形態から５世紀後半が推定される。

■石器　床面からは棒状礫７点、石皿・台石類３点、凹石１点、覆土からも棒状礫４点、敲石２点、打欠石錘４点、磨製石斧未成品１点などのトゥール、剥片・石核類など縄文時代の所産と考えられる資料も含むおよそコンテナ２箱分の石器が出土した。以下、床面から出土した資料および覆土中の遺物のうち古墳時代に帰属する可能性のあるものについて、その一部の観察所見を記す。なお、図示を割愛した資料であるため、参考までの注記名を用いて記載を行なう。

□石皿・台石類（SA03- ユカ F75）

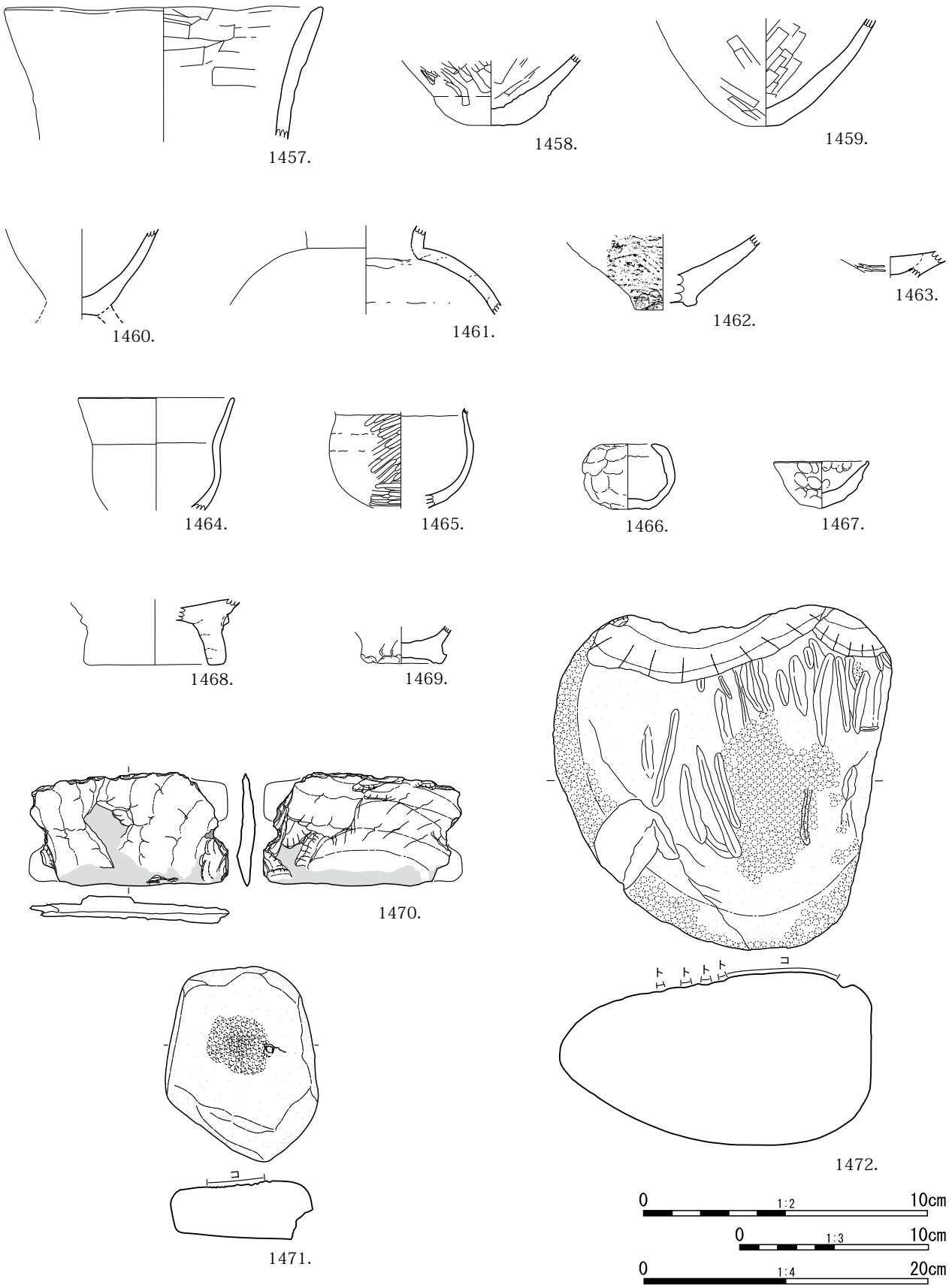
床面から出土した石皿で、不整円形の尾鈴山産溶結凝灰岩円礫を素材とする完形品である。両面ともに浅く磨耗しており、中央部には敲打による浅い凹部が形成される。図示していない他の２点は不整形の砂岩亜円礫の片面に平滑な磨耗面を残す石皿（SA3- ユカ F38）と不整形の尾鈴山産溶結凝灰岩亜円礫の片面に敲打による広い凹部を形成する台石（SA3- ユカ F20）である。



SA02 土層注記

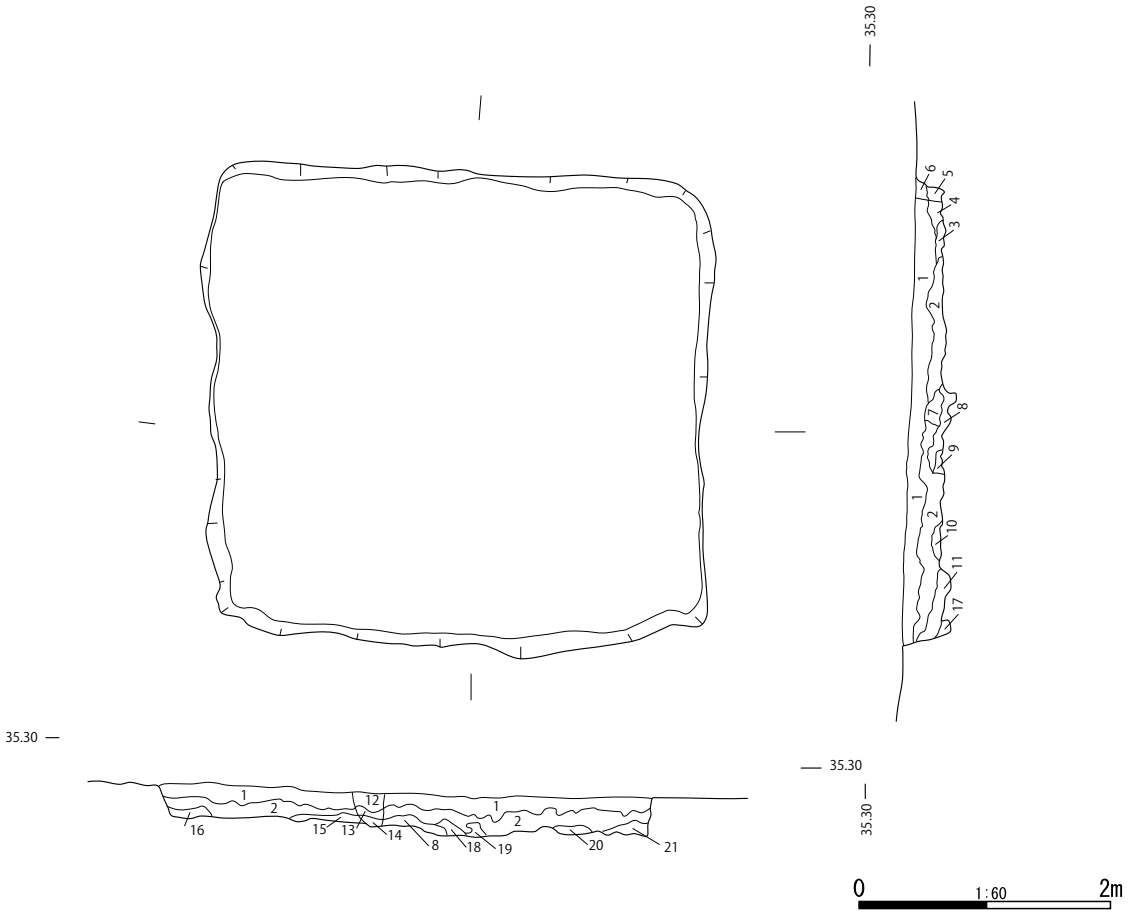
1：黒褐色（10 Y R 2.5/2.5）極細砂質土。軟質で粘性やや強い。
2：暗褐色（10 Y R 3/3）極細砂質土。軟質で若干粘性有り。Ⅲ～Ⅳ層ブロック（径３～５㎜）をわずかに含む。
3：暗褐色（10 Y R 3/3）極細砂質土。軟質で若干粘性有り。
4：暗褐色（10 Y R 3/3.5）極細砂質土。軟質で若干粘性有り。Ⅳ層をマトリックスに３層がまばらに混じる。
5：黒褐色（10 Y R 2/1.5）極細砂質土。硬質で若干粘性有り。
6：暗褐色（10 Y R 2.5/3）極細砂質土。軟質で若干粘性有り。
7：褐色（10 Y R 3.5/4）極細砂質土。軟質（６層より硬質）で若干粘性有り。焼土粒（径１～３㎜）を多く含む。
8：暗褐色（10 Y R 3/3）極細砂質土。やや硬質で粘性あり。焼土粒（径１～３㎜）をごくわずかに含む。
9：黒褐色（10 Y R 2/2）極細砂質土。軟質（７層と同程度）で粘性あり。Ⅳ層ブロック（径１～７㎜）をわずかに含む。
10：暗褐色（10 Y R 2/3.5）極細砂質土。軟質（７層と同程度）で粘性に富む。Ⅳ～Ⅴ層ブロックを一部マーブル状にわずかに含む
11：黒褐色（10 Y R 2/2）極細砂質土。やや硬質で若干粘性に富む。Ⅳ層ブロック（径１～５㎜）をごくわずかに含む。
12：黒褐色（10 Y R 2/1.5）極細砂質土。やや軟質で若干粘性に富む。炭化物粒（径１～10㎜）をごくわずかに含む。
13：黒褐色（10 Y R 2.5/1.5）極細砂質土。やや硬質で若干粘性あり。Ⅲ層ブロック（径１～７㎜）をまばらに含む。
14：黒褐色（10 Y R 2.5/2.5）極細砂～シルト質土。やや硬質で粘性に富む。Ⅳ～Ⅴ層ブロック（径１～10㎜）を一部マーブル状に多く含む
15：黒褐色（10 Y R 2/2）極細砂～シルト質土。軟質で粘性に富む。
16：黒褐色（10 Y R 2/1.5）極細砂～シルト質土。軟質で粘性に富む。
17：黒褐色（10 Y R 2/1.5）極細砂質土。軟質で若干粘性あり。
18：欠番
19：黒褐色（10 Y R 2/2）極細砂質土。軟質で若干粘性あり。Ⅲ～Ⅳ層ブロック（径１～３㎜）をわずかに含む。
20：黒褐色（10 Y R 2.5/2）極細砂～シルト質土。やや硬質で若干粘性あり。Ⅳ層ブロック（径１～10㎜）を一部マーブル状に多く含む。
21：暗褐色（10 Y R 2.5/2.5）極細砂～シルト質土。軟質で粘性に富む。Ⅳ～Ⅴ層ブロック（径１～10㎜）を一部マーブル状に多く含む 。
22：黒褐色（10 Y R 2.5/2.5）極細砂～シルト質土。やや軟質で（12 層と同程度）粘性に若干富む。Ⅳ～Ⅴ層ブロックを一部マーブル状に多く含む。
23：黒褐色（10 Y R）極細砂～シルト質土。やや硬質で粘性に若干富む。Ⅲ～Ⅳ層ブロック（径１～10㎜）を一部マーブル状にわずかに含む。
24：黒褐色（10 Y R 2/2）極細砂～シルト質土。軟質で粘性に若干富む。Ⅳ層ブロック（径１～３㎜）をわずかに含む。

第 188 図　第２号竪穴住居跡（SA02）　S＝１／６０



第 189 図　第２号竪穴住居跡出土の土器・石器

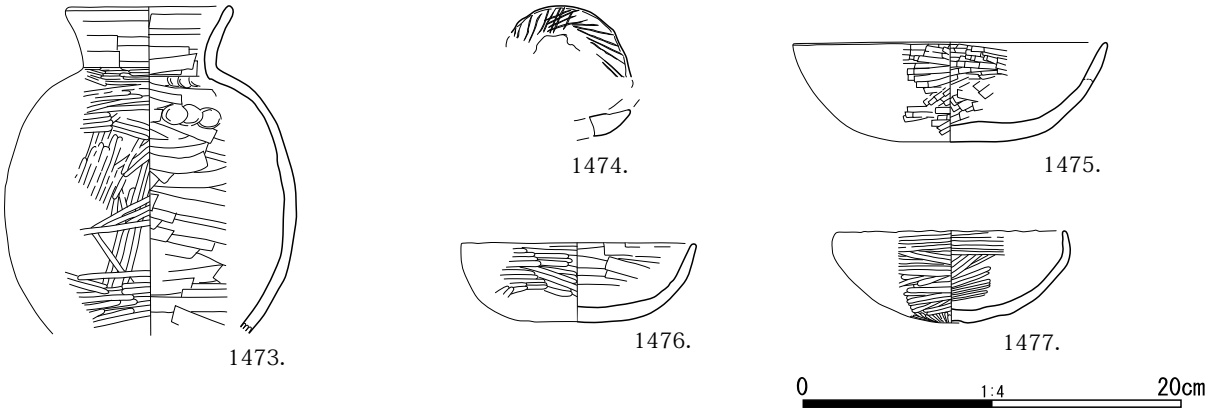
1470：Ｓ＝１／２，1471：Ｓ＝１／３，1457 ～ 1469・1472：Ｓ＝１／４



SA03 土層注記

1：黒色（10 Y R 2／1.5）極細砂質土。軟質で粘性ややあり。Ⅲ層ブロック（径１～２㎜）をまばらに含む。
2：黒褐色（10 Y R 2.5／2）極細砂質土。軟質で粘性あり。Ⅲ層ブロック（径１～５，10～40㎜）をまばらに含む。
3：黒褐色（10 Y R 2／2.5）極細砂質土。やや硬質で粘性あり。Ⅲ層ブロック（径１～10㎜）をわずかに含む。
4：黒褐色（10 Y R 2／2）極細砂質土。やや硬質（３層より硬質）で粘性あり。Ⅲ～Ⅳ層ブロック（径１～３，７～10㎜）をまばらに含む。炭化物（径１～３㎜）、焼土粒をわずかに含む。
5：黒褐色（10 Y R 2／2）極細砂質土。やや軟質で粘性あり。Ⅲ～Ⅳ層粒（径１～２㎜）をまばらに含む。
6：黒褐色（10 Y R 2／2.5）極細砂質土。軟質（１層より軟質）で粘性あり。Ⅲ層粒（径１～５㎜）をごくわずかに含む。
7：黒褐色（10 Y R 2／2）極細砂質土。軟質（１層より硬質）で粘性あり。Ⅲ～Ⅳ層ブロック（径１～10㎜）をまばらに含む。焼土粒（径１～３㎜）、炭化物（径１～３㎜）をごくわずかに含む。
8：黒褐色（10 Y R 2／2.5）極細砂質土。やや硬質で粘性あり。Ⅲ～Ⅴ層ブロック（径１～15㎜）をまばらに含む。焼土粒、炭化物（径１～３㎜）をわずかに含む。
9：褐色（10 Y R 3.5／4）シルト～粘土質土。硬質で粘性強い。軟質な黒褐粘土（10 Y R 2／3）がまばらに入る。
10：黒褐色（10 Y R 2／2）極細砂質土。やや硬質で粘性あり。Ⅲ～Ⅳ層粒（径１～３㎜）をわずかに含む。
11：黒褐色（10 Y R 2／1.5）極細砂質土。軟質で粘性あり。Ⅲ～Ⅳ層ブロック（径１～１５㎜）をわずかに含む。
12：黒褐色（10 Y R 2／3）極細砂質土。軟質で粘性あり。Ⅲ層粒（径１～２㎜）をごくわずかに含む。
13：黒褐色（10 Y R 2／2）極細砂質土。軟質（12 層より軟質）で粘性あり。
14：黒褐色（10 Y R 2／2.5）極細砂質土。やや軟質で粘性あり。Ⅳ～Ⅴ層粒（径１～３㎜）がまばらに入る。
15：黒褐色（10 Y R 2／2.5）極細砂質土。軟質で粘性あり。Ⅲ～Ⅴ層ブロック（径１～２０㎜）を含む。
16：黒褐色（10 Y R 2／1.5）極細砂質土。やや硬質で粘性あり。Ⅳ～Ⅴ層粒（径１～３㎜）をまばらに含む。
17：暗褐色（10 Y R 2.5／3）極細砂質土。軟質で粘性あり。Ⅳ～Ⅴ層ブロック（径１～１０㎜）をマーブル状に含む。
18：黒褐色（10 Y R 2／2）極細砂質土。軟質で粘性やや強い。Ⅲ～Ⅴ層粒（径１～３㎜）をわずかに含む。焼土粒、炭化物粒をわずかに含む。
19：暗褐色（10 Y R 2.5／2.5）極細砂～シルト質土。軟質で粘性あり。
20：黒褐色（10 Y R 1.85／1.5）極細砂質土。軟質で粘性あり。Ⅳ～Ⅴ層粒（径１～３㎜）をわずかに含む。
21：黒色（10 Y R 1.85／1）極細砂質土。やや硬質で粘性あり。Ⅳ～Ⅴ層粒（径１㎜）をごくわずかに含む。炭化物粒（１㎜）をごくわずかに含む。

第 190 図　第３号竪穴住居跡（SA03）　S＝１／６０



第 191 図　第３号竪穴住居跡出土の土器　S= １／４

□凹石（SA03- ユカ F １）

幼児頭大の砂岩円礫を用いた大形の凹石である。両面に敲打による浅い凹部を形成する。台石として使用されたものか。

□棒状礫（敲石）（SA03- ユカ F195）

床面出土の７点のうち、敲石として使われた可能性が指摘できる資料である。砂岩製で長軸の一端に顕著な敲打痕と剥離痕が観察され、敲石と認定される。もう一方の長軸端部にもわずかながら敲打痕が認められる。他の６点もホルンフェルス製の１点をのぞき、全て砂岩を使用している。また、覆土中の４点も全て砂岩を用いる。

■第４号竪穴住居跡（SA04　第 192 図）

概要　Ａ区北側に位置し、SA02 に隣接する方形プランである。規模は長軸（東西方向）約５m、短軸（南北方向）約４m、床面積約 20㎡である。

壁の残存高は 30㎝程度でほぼ垂直に立ち上がる。床面は概して平坦で、主柱穴は検出されなかった。プランの北辺に張り出す部分があり、当初は竈の存在も予想したが、そうした構造は認められなかった。ただし、その付近の床面（第 192 図トーン部分）には顕著な焼土の拡がりが確認されたことから、この部分が火処として利用されたことは疑いない。

出土遺物

■土師器　甕・高坏・小型丸底壷でセットを構成している。

1478 ～ 1485 は甕である。このうち 1478 がＢ類の口縁部とａ類の底部の組み合わせである。胴部の長胴化が見て取れる 1480 も同じくＢ類の頸部である。1482・1483 がｂ類の底部である。1485 が１類の小型丸底壷であり、1486 は同じく２類の小型丸底壷である。1484 は高坏の脚部である。

遺構の廃絶年代であるが、甕の口縁部の屈曲が緩やかであり、まだ直立気味に至っていない事から５世紀中頃と推定される。小型丸底壷の口縁部が体部より短い事も、この点と矛盾しない。

■石器　床面から棒状礫４点、敲石１点などが出土し、覆土中からは打欠石錘１点、打製石斧破片などが確認された。遺物は図示していない。

■第５号竪穴住居跡（SA05　第 194 図）

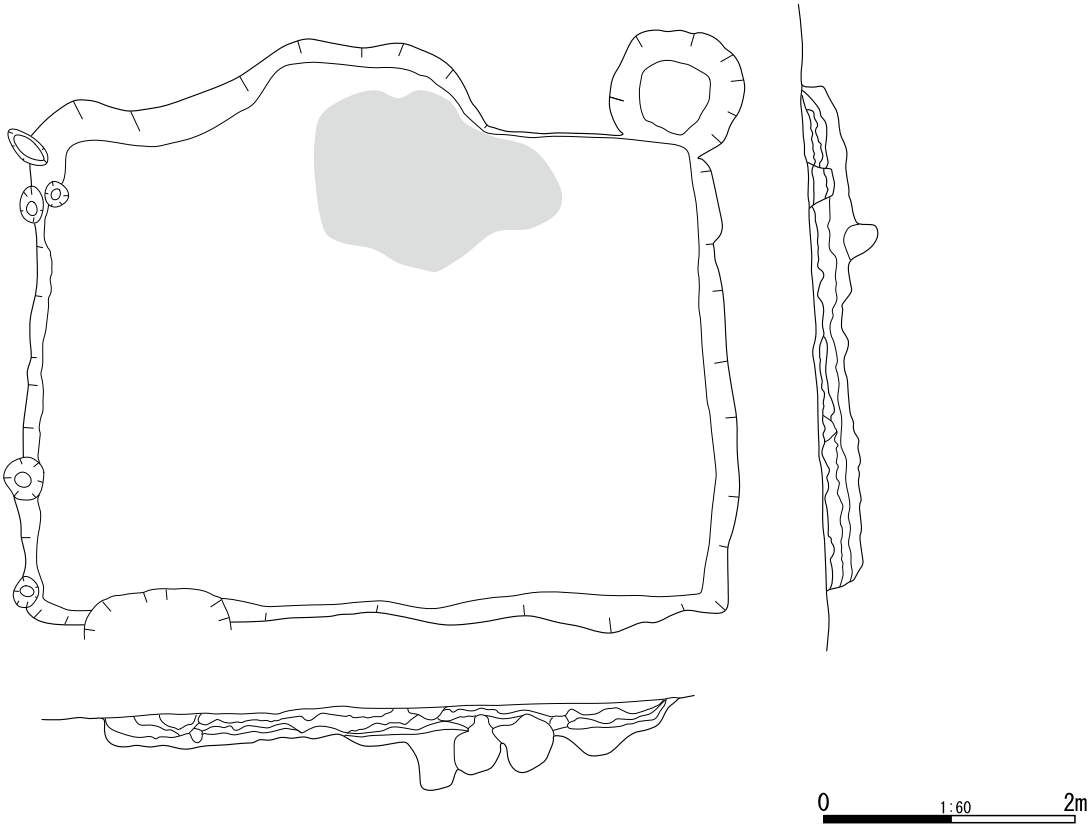
概要　Ａ区南側で検出され、SA06 に隣接する。

遺構の平面形は東西にやや長い方形で、規模は長軸約５m、短軸約 4.5 m、床面積約 22.5㎡である。壁の残存高は 40㎝程度でほぼ垂直に立ち上がる。床面は概して平坦であり、主柱穴は検出されなかった。

出土遺物

■土師器（第 195 ～ 199 図）　Ａ区の竪穴住居跡の中で最大の遺物出土量を誇る。甕・壷・高坏・小型丸底壷でセットを構成する。このうち最も出土量が多い器種は甕である。甕は形態的、製作技術的に斉一性が非常に高い。

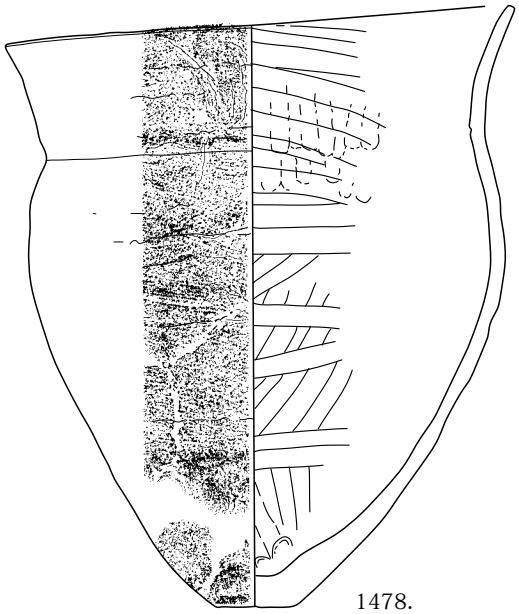
1488 ～ 1521 が甕である。うち 1488 ～ 1508 がＡ類、1509 がＢ類に相当する。Ａ類に関しては、外面にタタキ調整を施し、内面はハケにより調整を行っているものが多い。口唇部は丸みを帯びるものが多いが、大半はユビでつまみあげて整形している。外面に輪積みの痕跡を残す資料が多

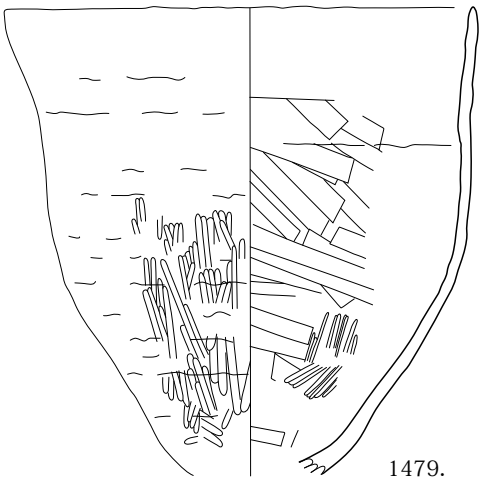


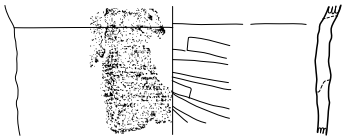
SA04 土層注記

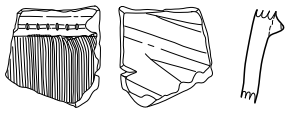
1：黒色（10 Y R 1.85 ／ 1 ）極細粒砂質土。軟質で粘性はほとんどない。Ⅲ層ブロック（径３～５㎜）をまばらに含む。
2：黒褐色（10 Y R 2 ／ 1.5）極細粒砂質土。軟質で粘性は 1 層よりあり。Ⅲ層ブロック（径 10 ～ 30㎜）をまばらに含む 。炭化物（径３～５㎜）をまばらに含む。
3：黒褐色（10 Y R 2 ／ 1.75）極細粒砂質土。硬質で粘性あり。Ⅲ層ブロック（径 10 ～ 15㎜）をまばらに含む 。炭化物（２～３㎜）をまばらに含む。
4：暗褐色　シルト～粘土質土。軟質で粘性は若干あり。Ⅲ～Ⅳ層ブロック（径 10 ～ 20㎜）をまばらに含む。
5：黒褐色（10 Y R 2 ／ 3 ）シルト～粘土質土。硬質で粘性は 1 層同様ほとんどない。Ⅲ～Ⅳ層ブロック（径５～ 10㎜）をまばらに含む。
6：黒褐色（10 Y R 2 ／ 2 ）極細粒砂質土。軟質で粘性は 1 層同様ほとんどない。植物痕を含む。
7：黒褐色（10 Y R 2 ／ 2.5）極細粒砂質土。軟質で粘性は 1 層よりは若干ある。植物痕を含む。
8：暗褐色（10 Y R 3 ／ 3 ）細粒砂質土。軟質で粘性はほとんどない。植物痕を含む。
9：黒褐色（10 Y R 2 ／ 3 ）細粒砂質～シルト質土。軟質で粘性は若干あり。植物痕を含む。
10：黒褐色（10 Y R 2 ／ 3.5）シルト～粘土質土。軟質で粘性あり。植物痕を含む。
11：黒色（10 Y R 1.7 ／ 1.5）極細粒砂質土。軟質で粘性は若干あり。Ⅲ層粒（径２～３㎜）をマーブル状に含む。
12：黒色（10 Y R 1.7 ／ 1 ）細粒砂質土。軟質で、やや粘性あり。植物痕を含む。
13：黒色（10 Y R 2 ／ 1.5） シルト～粘土質土。軟質で粘性あり。Ⅲ層粒（径２～３㎜）をまんべんなく含む 。炭化物（径２～３㎜）を含む。
14：黒褐色（10 Y R 2 ／ 2 ）極細粒砂質～シルト質土。軟質で粘性は若干あり。Ⅲ層ブロック（径３～５㎜）をまばらに含む。植物痕を含む。
15：黒褐色（10 Y R 2 ／ 2.25）極細粒砂質～シルト質土。硬質で粘性は 14 層よりある。Ⅲ層粒（径２～３㎜）をまばらに含む。
16：黒褐色（10 Y R 2 ／ 2.5）極細粒砂質～シルト質土。軟質で粘性は 14 層と同様。
17：暗褐色（10 Y R 3 ／ 3.5）シルト質土。軟質で粘性は 14 層同様若干あり。Ⅲ層粒（径２～３㎜）をまばらに含む。
18：にぶい黄褐色（10 Y R 4 ／ 3.5）焼土。シルト質～粘土質土。軟質で粘性あり。ところどころに黒色（10 Y R 2 ／ 1 ）の極細粒砂質土を含む。
19：黒色（10 Y R 2 ／ 1 ）極細粒砂質土。軟質で粘性がある。ところどころに、にぶい黄褐色（10 Y R 4 ／ 3.5）の焼土や炭化物 （径２～３㎜）をまばらに含む。
20：にぶい黄褐色（10 Y R 4 ／ 3.5）焼土。シルト～粘土質土。軟質で粘性があり。Ⅲ～Ⅳ層ブロック（径 20 ～ 30㎜）や炭化物（径２～３㎜）をまばらに含む。
21：黒褐色（10 Y R 2 ／ 1.5）細粒砂質土。軟質で粘性があり。植物痕を含む。
22：黒褐色（10 Y R 2 ／ 2 ）極細粒砂質～シルト質土。軟質で、やや粘性あり。植物痕を含む。
23：黒色（10 Y R 2 ／ 1.5）極細粒砂質土。軟質で 22 層と同程度の粘性あり。Ⅲ層粒（径２～３㎜）をまばらに含む。
24：黒褐色（10 Y R 2 ／ 3 ）極細粒砂質～シルト質土。23 より硬質で、粘性も 23 層よりある。Ⅲ層ブロック（径３～５㎜）をまばらに含む。
25：暗褐色（10 Y R 3 ／ 3 ）極細粒砂質～シルト質土。軟質で粘性あり。植物痕を含む。
26：暗褐色（10 Y R 3 ／ 4.25）極細粒砂質～シルト質土。非常に硬質で、粘性あり。焼土粒（径２～３㎜）をまばらに含む。
27：黒色（10 Y R 2 ／ 1.25）シルト～粘土質土。やや硬質で粘性あり。Ⅲ層ブロック（径３～５㎜）や炭化物（径２～３㎜）を含む。

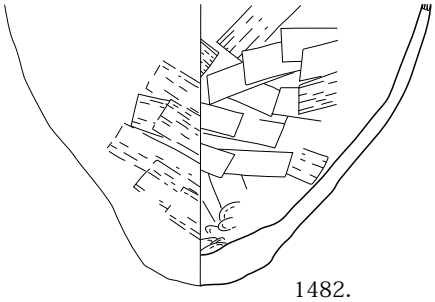
第 192 図　第４号竪穴住居跡（SA04）　Ｓ＝１／６０

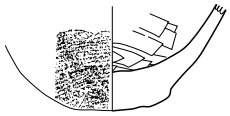


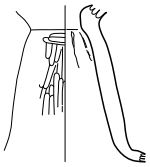


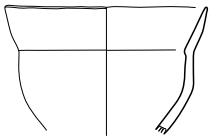


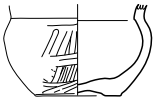


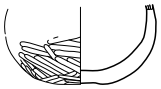


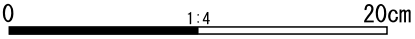




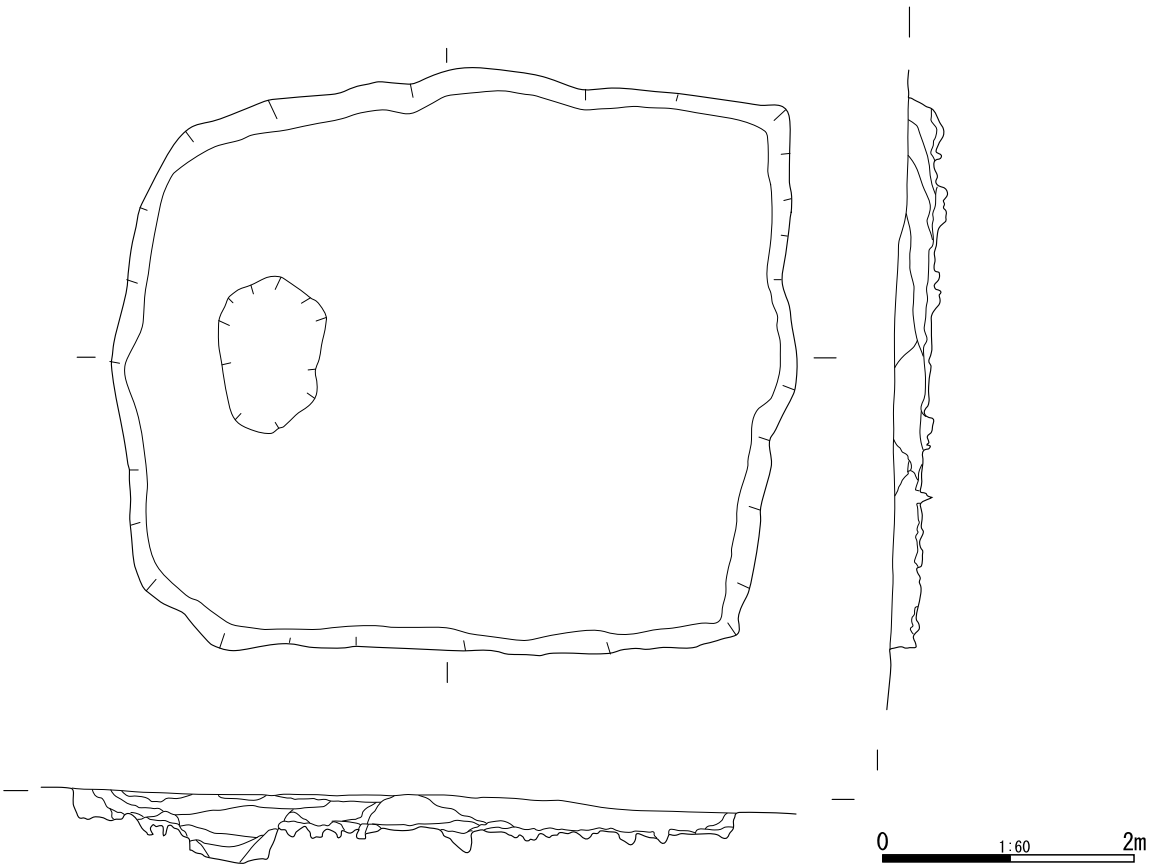








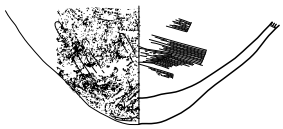
第 193 図　第４号竪穴住居跡出土の土器　Ｓ＝１／４



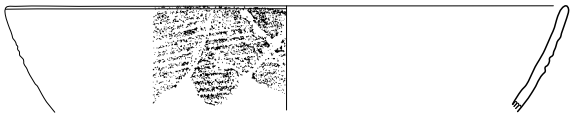
SA05 土層注記

1：黒褐色（10YR2/2.5）極細砂質土。硬質で、やや粘性強い。さらに細分される可能性もある。第Ⅲ層起源のブロック（径１～３㎜）を疎らに，土師器片を多く含む。
2：黒褐色（10YR2.5/2)。極細砂～シルト質土。貼床土。やや硬質～硬質。粘性普通。部分的に，意図的に突き固めたような印象を受ける硬化面あり。
3：黒褐色（10YR ２／２）極細砂質土。硬質で粘性ややあり。
4：黒色土（10YR1.85 ／１）極細砂質土。硬質で粘性あり。
5：黒褐色（10YR2.5 ／ 2.5）極細砂質土。やや硬質～硬質で粘質あり。色調以外は２層に類似。
6：黒色（10YR ２／１）ピット。極細砂質土。やや硬質（２層、５層より軟質）で粘性あり。
7：黒色（10YR1.7 ／１）木根撹乱。極細砂質土。硬質で 粘性あり。
8：黒褐色（10YR ２／ 1.5）極細砂質土。硬質で 粘性が若干あり。
9：黒褐色（10YR2.5 ／ 2.5）極細砂質土。硬質で粘性が若干あり。Ⅳ層ブロック（径１～ 10㎜）をわずかに含み、一部マーブル状に堆積している。 焼土粒（径１～２㎜）をまばらに含む炭化物（径１～２㎜）をわずかに含む。
10： ２に類同
11： 木根撹乱
12：黒褐色（10 Ｙ Ｒ ２／２）極細砂質土。軟質で粘性ややあり。
13：黒褐色（10 Ｙ Ｒ ２／ 1.5）極細砂質土。軟質で粘性ややあり。Ⅲ層ブロック（径１～３㎜）をごくわずかに含む。
14：黒色（10 Ｙ Ｒ 1.85 ／ 1.5）極細砂質土。軟質で、13 層より粘性あり。
15：黒色（10 Ｙ Ｒ 1.85 ／１）極細砂質土。軟質で粘性あり。
16：黒褐色（10 Ｙ Ｒ 1.85 ／２）極細砂質土。軟質で粘性あり。炭化物（径１～３㎜）をごくわずかに含む。
17：黒褐色（10 Ｙ Ｒ 2.5 ／２）極細砂質土。軟質で粘性あり。Ⅲ層ブロック（径１～２㎜）をごくわずかに含む。
18：黒褐色（10 Ｙ Ｒ ２／２）極細砂質土。軟質で粘性あり。Ⅲ層ブロック（径１～５㎜）を一部マーブル状にまばらに含む。
19：黒褐色（10 Ｙ Ｒ ２／ 1.5）極細砂質土。軟質で粘性あり。９層→１層の漸移層か。焼土粒（径１～２㎜）と炭化物をわずかに含む。
20：黒色（10 Ｙ Ｒ 1.7 ／１）ＳＡ５－ＳＣ１埋土。極細砂質土。軟質で粘性やや 高い、炭化物（径１～２㎜）をごくわずかに含む。
21：黒色（10 Ｙ Ｒ ２／１）ＳＡ５－ＳＣ１埋土。極細砂質土。軟質で粘性あり。Ⅲ層ブロック（径１～１５㎜）をまばらに含む。炭化物（径１～３㎜）をわずかに含む。
22：黒褐色（10 Ｙ Ｒ ２／ 2.5）ＳＡ５－ＳＣ１埋土。極細砂～シルト質土。軟質で粘性あり。Ⅳ層ブロック（径１～ 20㎜）をマトリックスとするマーブル状に堆積している。
23：黒褐色（10 Ｙ Ｒ ２／２）ＳＡ５－ＳＣ１埋土。極細砂質土。 軟質で粘性強い。Ⅲ、Ⅳ層ブロック（径１～ 15㎜）を一部マーブル状に多く含む。
24：黒色（10 Ｙ Ｒ 1.7 ／２）ＳＡ５－ＳＣ１埋土。極細砂質土。軟質で粘性に富む。Ⅲ層、Ⅳ層ブロック（径１～ 10㎜）を一部マーブル状に多く含む。完形土器多数を包含する。
25：黒褐色（10 Ｙ Ｒ ２／２）極細砂質土。軟質で粘性ややあり。
26：黒褐色（10 Ｙ Ｒ ２／ 1.5）極細砂質土。軟質で粘性あり。Ⅲ層粒（径１～３㎜）をごくわずかに含む。
27：黒褐色（10 Ｙ Ｒ 1.85 ／１）極細砂質土。軟質で粘性あり。Ⅲ層ブロック（径１～５㎜）をわずかに含む。
28：黒褐色（10 Ｙ Ｒ ２／２）極細砂質土。しまり軟質で粘性あり。
29：黒褐色（10 Ｙ Ｒ 1.85 ／２）極細砂質土。軟質で粘性あり。

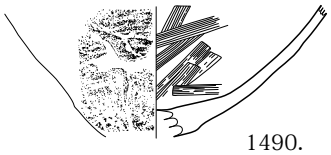
第 194 図　第５号竪穴住居跡（SA05）　Ｓ＝１／６０



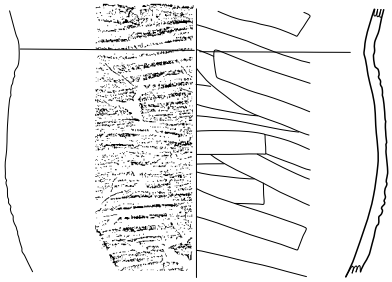
1488.



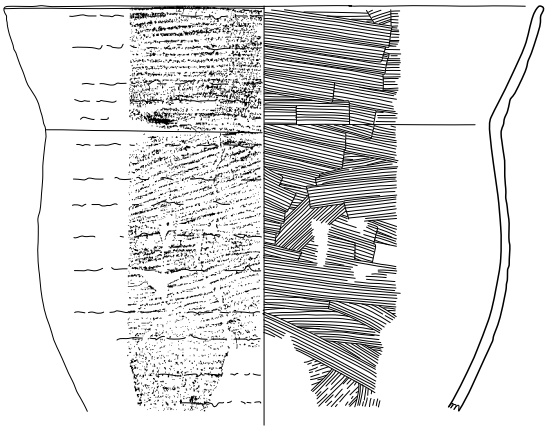
1489.



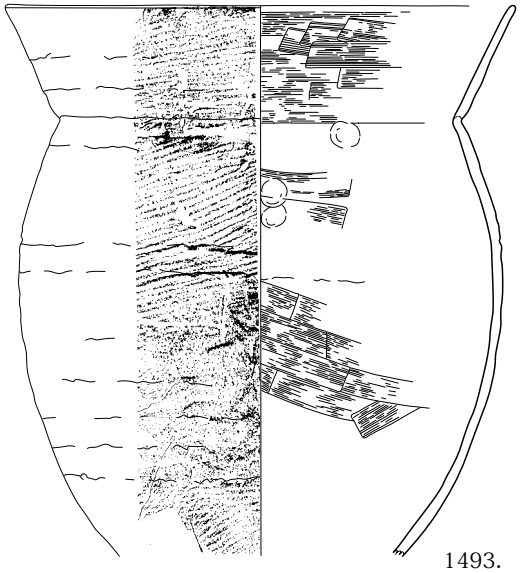
1490.



1491.



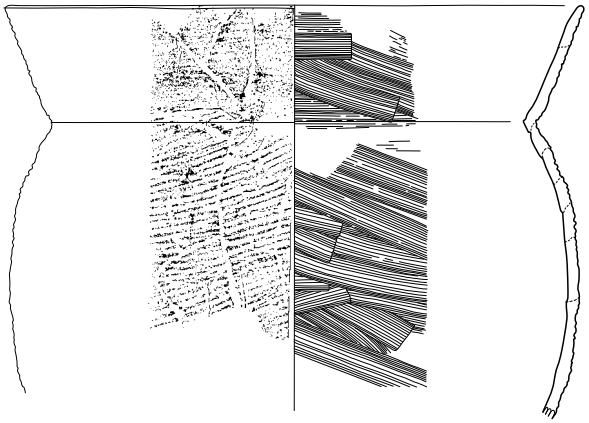
1492.



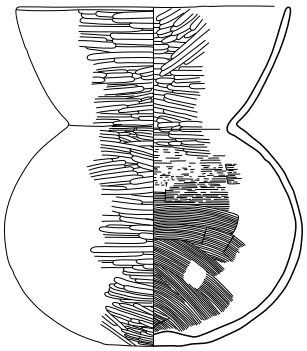
1493.

0 1:4 20cm

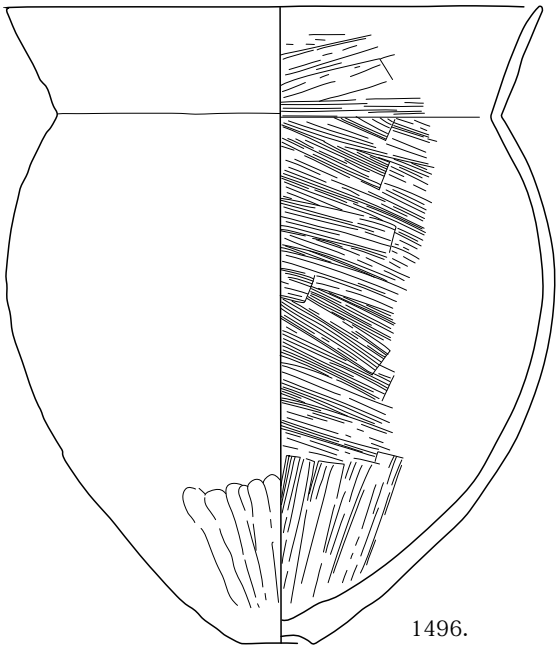
第 195 図　第 5 号竪穴住居跡出土の土器（1）　S＝1／4



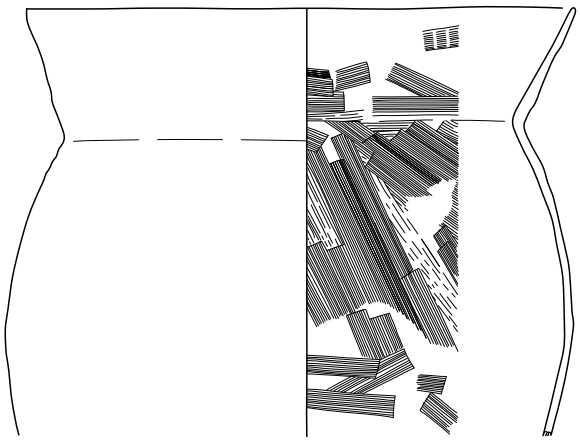
1494.



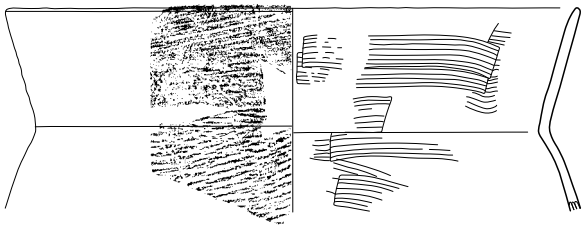
1495.



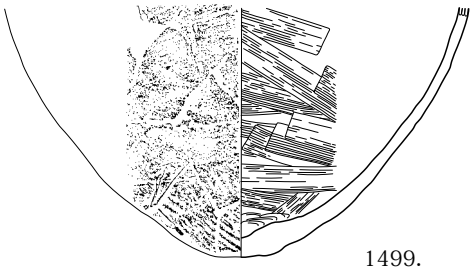
1496.



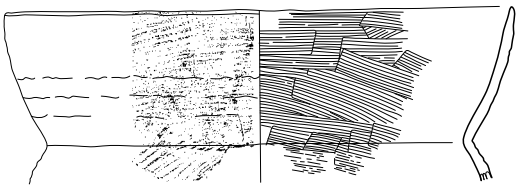
1497.



1498.



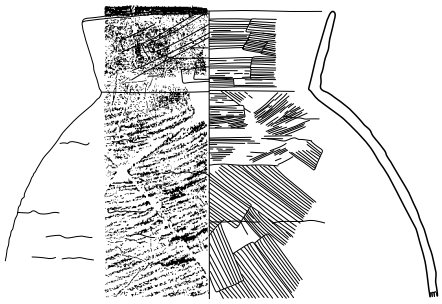
1499.



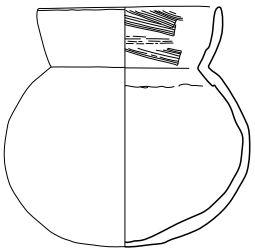
1500.

0 1:4 20cm

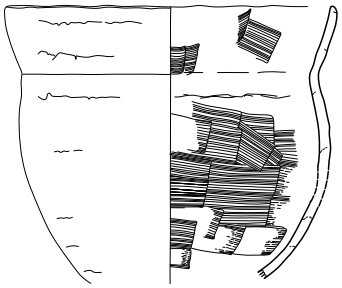
第 196 図　第 5 号竪穴住居跡出土の土器（2）　S＝1／4



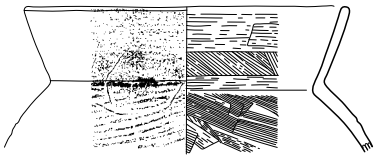
1501.



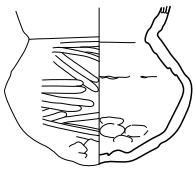
1502.



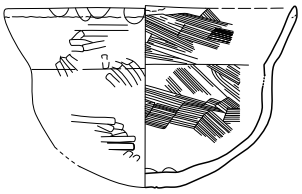
1503.



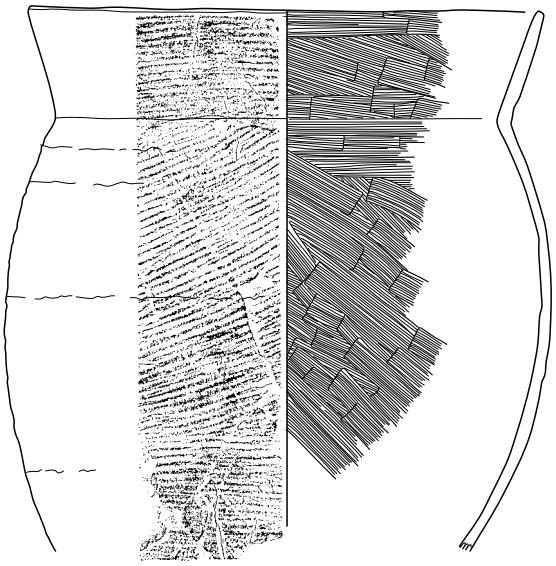
1504.



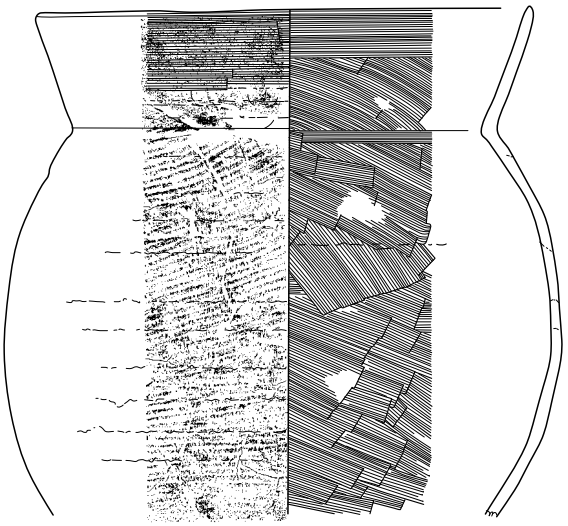
1505.



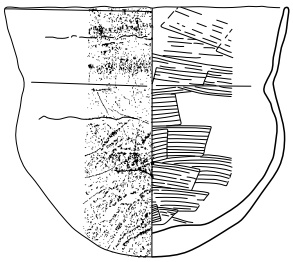
1506.



1507.

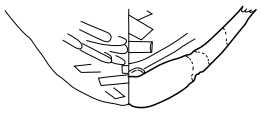


1508.



1509.

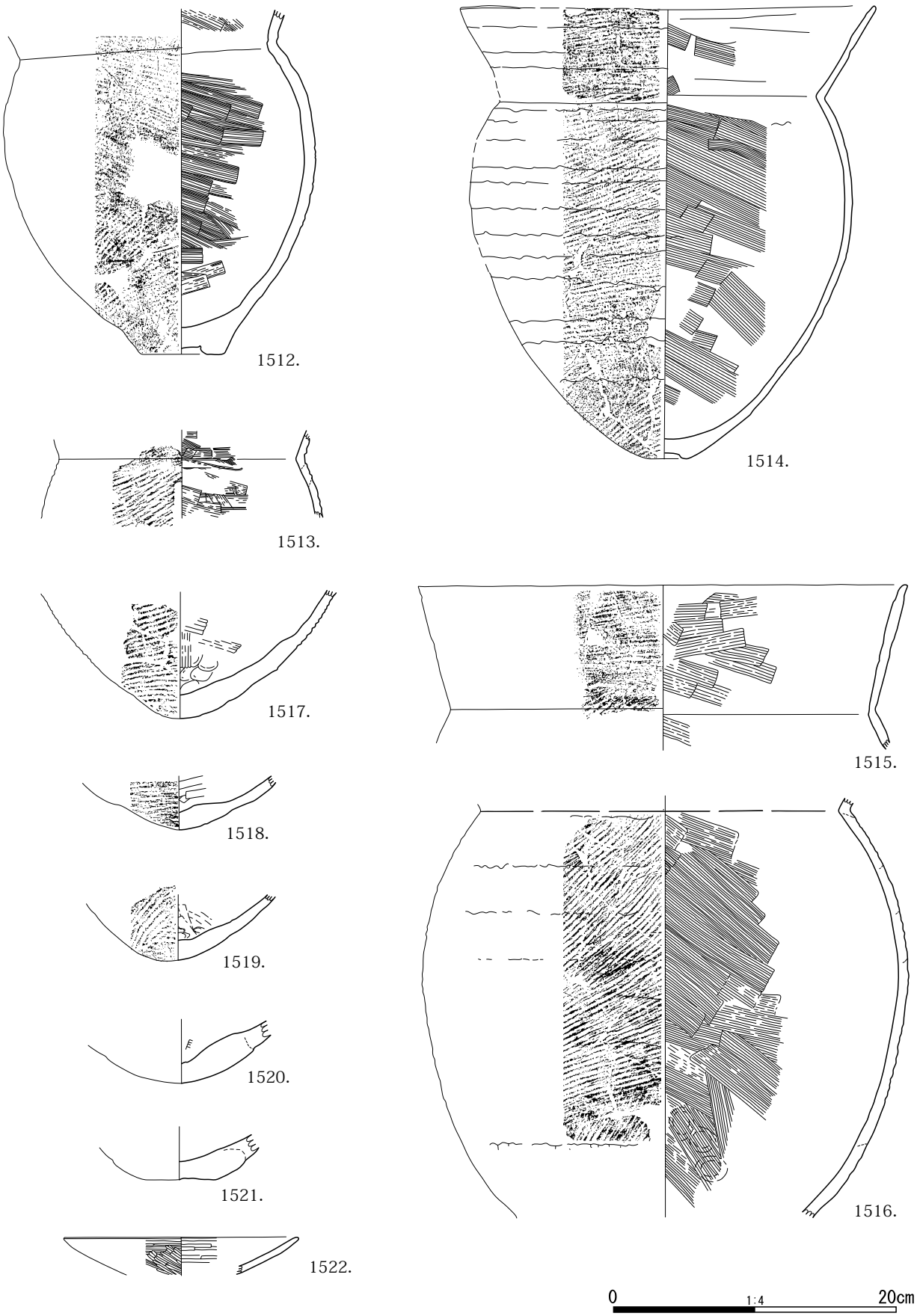
1510.



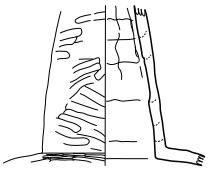
1511.

0 1:4 20cm

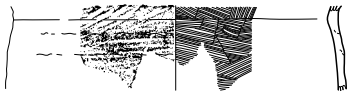
第 197 図　第 5 号竪穴住居跡出土の土器（3）　S＝1／4



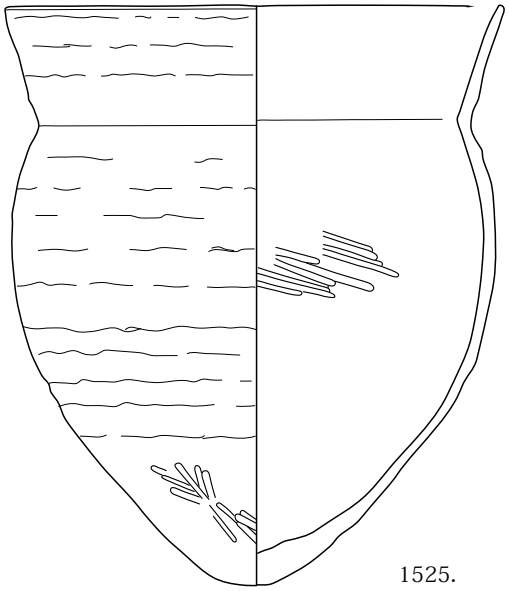
第 198 図　第 5 号竪穴住居跡出土の土器（4）　S＝1／4



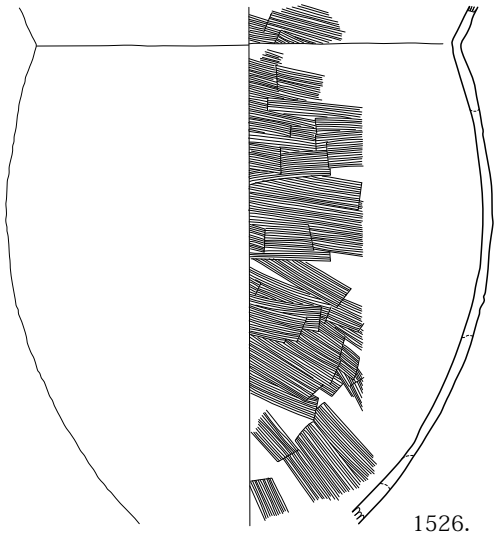
1523.



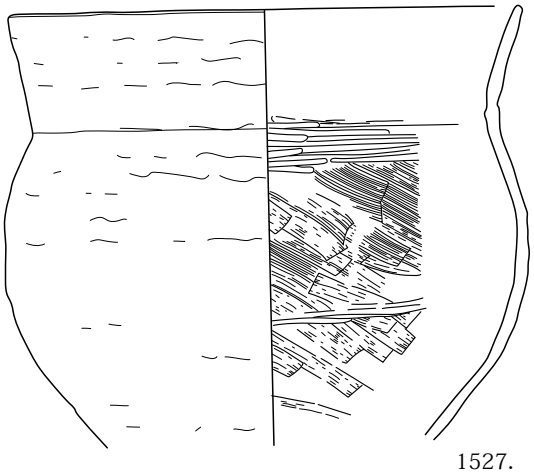
1524.



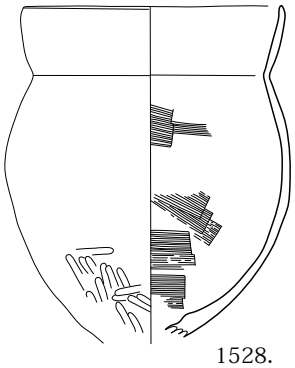
1525.



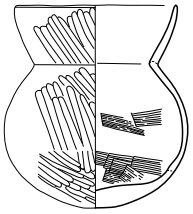
1526.



1527.



1528.



1529.

0 1:4 20cm

第 199 図　第 5 号竪穴住居跡出土の土器（5）　S= 1 ／ 4

い点も特徴の一つであろう。

1522はA類の壷である。1522・1523は高坏、1495・1502・1505・1506・1529は小型丸底壷で、３類に相当する。

遺構の廃絶年代であるが、甕の口縁部が明確に屈曲する事から、野首第２遺跡の集落の中では比較的古手の４世紀後半から５世紀初頭の範囲が推測される。しかし、これらの土器が１家族で使用されたとは考え難く、近隣の住居を廃絶した時に、SA05に土器の廃棄を集中させた可能性が高い。ただし遺物の（特に甕の）形態差に乏しいため、比較的短時間に廃棄が集中したものと考えられる。

■石器

床面から磨石２点､打欠石錘１点などが出土し、覆土中から円盤形石器１点、敲石１点、打欠石錘３点、磨製石製品１点などが確認された。棒状礫は認められない。遺物は図示しなかった。

■第６・11号竪穴住居跡（SA06・11 第200図）

概要　SA05に隣接して検出された。東側の壁面に沿って、床面より一段高いテラス状の構造が確認された。このため、２軒の住居が切り合う可能性も考慮して、当初は第６号と第11号に分けて掘り進めたが、検討の結果、１軒の竪穴住居跡と判断するにいたった。一辺約５ｍ×５ｍの大形竪穴住居跡である。床面からは多くの土師器が出土した。

出土遺物

■土師器（第201図）

甕、高坏、ミニチュア土器でセットを構成している。遺物の形態的な斉一性は高い。

1530・1531はA類の甕である。1532も甕であるが、前者よりも法量が小さい。

1534～1536は高坏である。1573はミニチュア土器で手捏ねにより整形される。

遺構の廃絶年代は土師器の様相から判断して、概ねSA05と近い年代が推定される。

■第７号竪穴住居跡（第202図）

概要　A区西端で検出された。プランの西側は調査区外のため未調査である。

未調査部分があるため、規模を窺い知る事は適わないが、方形プランであることは疑いなかろう。　検出面からの壁面の残存高は約70cmと深めで、垂直に立ち上がる。床面は平坦である。明確な主柱穴は確認できないが、検出された複数のピットがその候補となろう。

出土遺物

■土師器（第203図）

器種ごとの形態差が大きく、一括性に欠ける。甕、埦、鉢でセットを構成するが、甕は図示に耐えられない。

1541はB類の壷である。1544は１類、1543は２類の埦である。1542は鉢である。

遺構の廃絶時期であるが、壷の口縁部が緩やかに外反する事や、銘々器である埦の出土と、その形態から５世紀後～末と推定しておきたい。

■須恵器（第203図）

1545は坏の蓋である。須恵器はこの１点のみが出土した。

■石器

特筆すべき石製遺物としては玉がある。別項に後述するので、参照されたい。

■第８号竪穴住居跡（SA08）

概要　A区南側において検出された。第一次調査では検出時の遺構の輪郭から２軒の切合い関係を考慮し、切るプランをSA08、切られるプランをSA10として記録した。SA10と仮想した竪穴住居跡については、その大半が調査区外に残されたため、本書ではSA08の出土遺物の一部を提示することにしたい。なお、第二次調査の結果では、１軒の竪穴住居跡である可能性が強まっている。

プランの詳細は第二次調査に譲る。第一次調査時の検出面からの壁の残存高は約70㎝である。

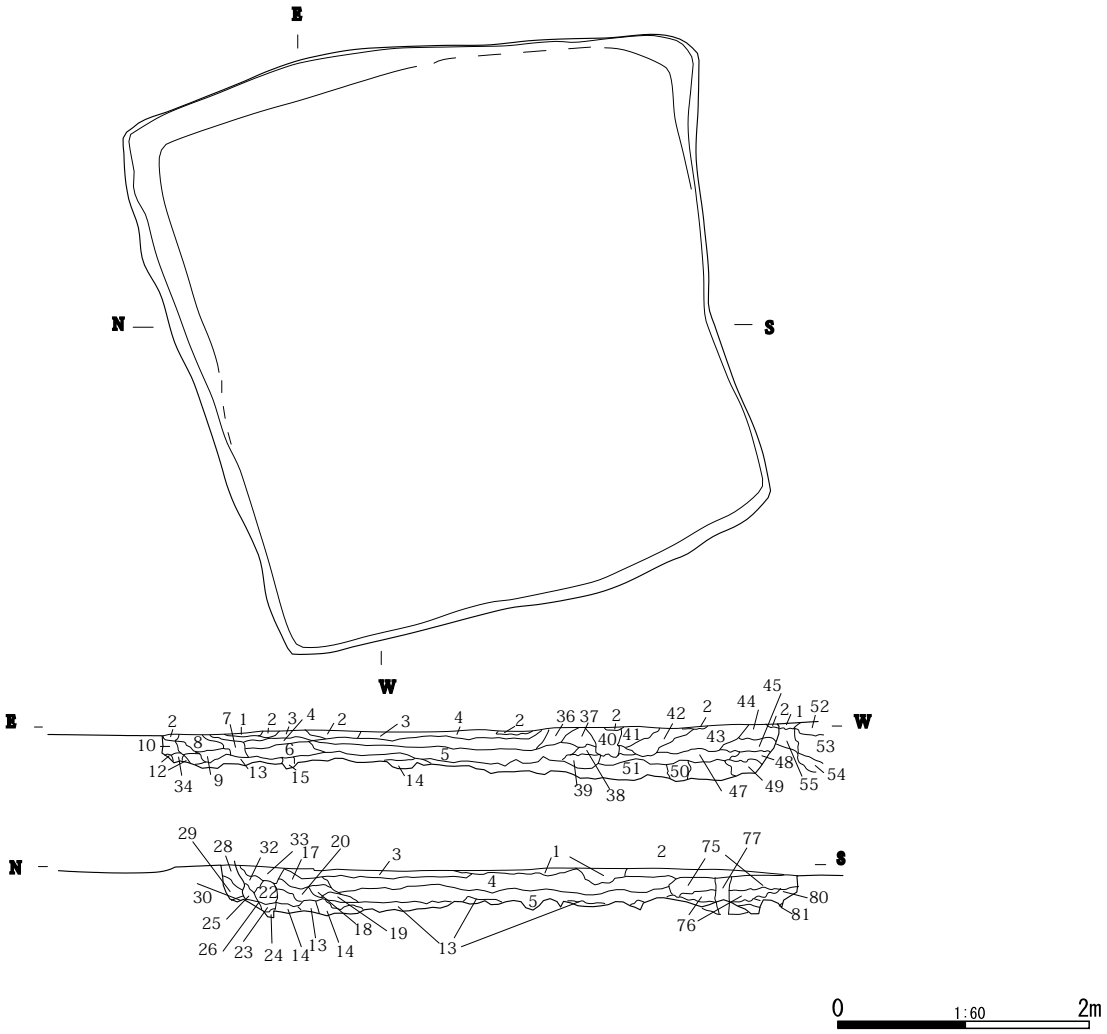
壁溝は壁面北側から東側沿いに巡っている。幅約20㎝、深さ約10㎝で掘られている。

出土遺物

■土師器（第204図）

甕・高坏でセットを構成している。甕には二つの形態が見られるが、これは切り合い関係にあると考えられたSA10の遺物が混入した可能性も考慮しておきたい。

1546～1552は甕である。うち1546がA類、



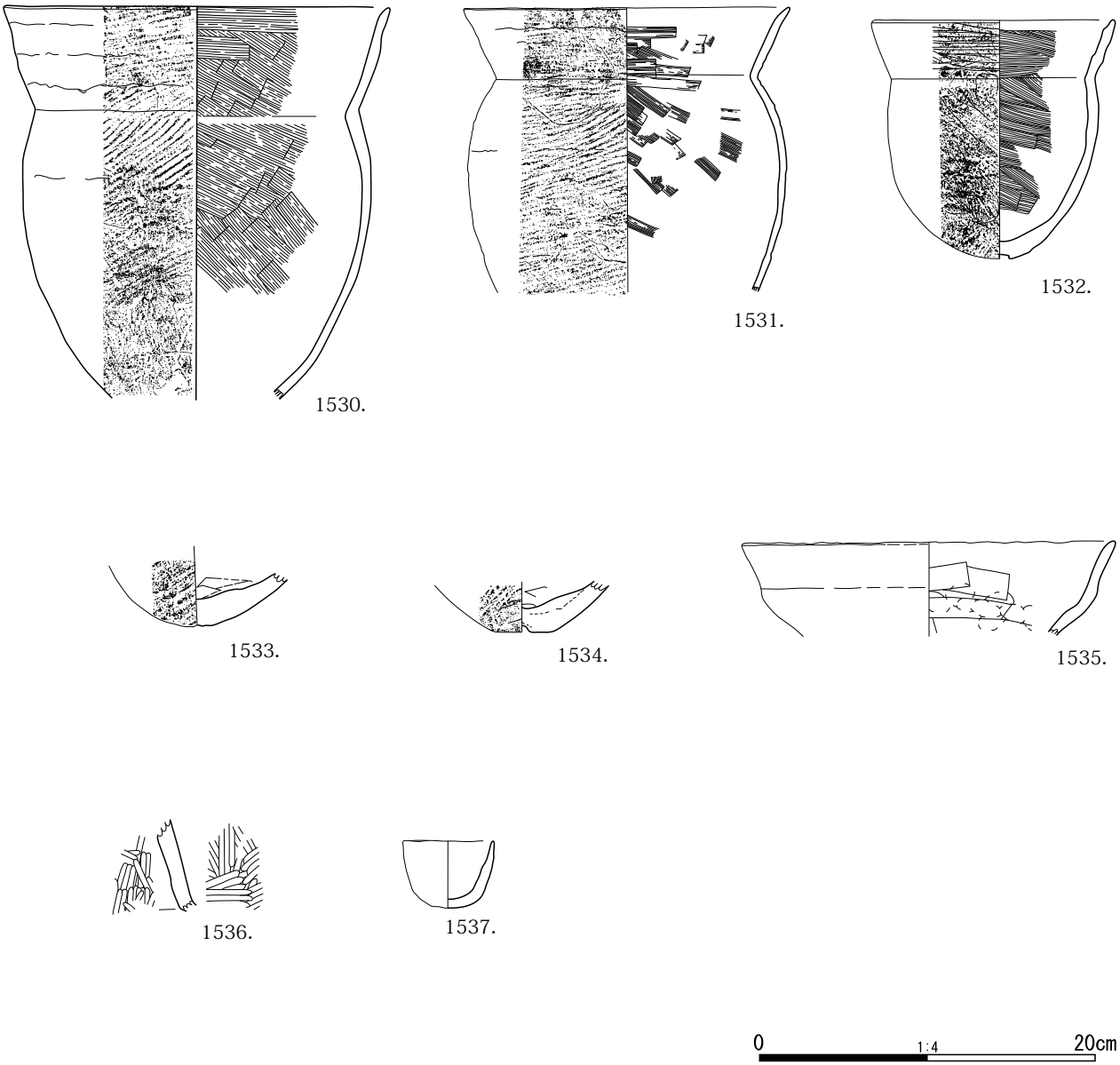
SA06 土層注記

１：黒色（10 Ｙ Ｒ 1.85 ／ 1 ）極細砂質土。軟質で粘性あり。
２：黒褐色（10 Ｙ Ｒ 2 ／ 1.5）細砂質土。やや軟質で、若干粘性あり。
３：黒色（10 Ｙ Ｒ 2 ／ 1 ）極細砂質土。やや軟質（２層より硬質）で、粘性あり。Ⅲ層 由来ブロック（径１～３㎜）をごくわずかに含む。
４：黒色（10 Ｙ Ｒ 1.7 ／ 1 ）極細砂質土。やや軟質（３層と同硬度）で粘性あり。Ⅲ層 由来ブロック（径１～３㎜）をごくわずかに含む。
５：黒色（10 Ｙ Ｒ 1.7 ／ 1 ）極細砂～粘質土で４層よりも黒味が強い。やや軟質（３層と同硬度）で粘性あり。Ⅲ層由来ブロック（径１～３㎜）、炭化物（径１㎜）をごくわずかに含む。
６：黒色（10 Ｙ Ｒ 1.85 ／ 1 ）極細砂質土。やや軟質（３層と同硬度）でやや粘性あり。Ⅲ層由来ブロック（径１㎜）をごくわずかに含む。
７：黒色（10 Ｙ Ｒ 1.7 ／ 1 ）極細砂質土。軟質で粘性あり。Ⅲ層由来ブロック（径５～ 20㎜）、焼土粒もしくは、土器細片粒（径１㎜）をごくわずかに含む 。
８：黒色（10 Ｙ Ｒ 2 ／ 1 ）極細砂質土。粘性あり、しまり軟質、Ⅲ層由来ブロック（径１ ㎜以下）をごくわずかに含む。
９：黒色（10 Ｙ Ｒ 1.85 ／ 1 ）極細砂質土。粘性あり、しまりやや硬質、Ⅲ層由来ブロック（径１～３㎜）をわずかに含む。
10：黒色（10 Ｙ Ｒ 1.85 ／ 1 ）極細砂質土。硬質。
11：黒色（10 Ｙ Ｒ 2 ／ 1）極細砂質土。10 層より硬質で粘性あり。Ⅲ層由来ブロック（径１～４㎜）をまばらに含む。
12：黒褐色（10 Ｙ Ｒ 1.85 ／ 1.5）極細砂～粘土。 Ｓ Ａ 10 貼床の可能性あり。硬質でⅢ層をマトリックスとする漸移層と考えられる。粘性あり。
13：黒褐色（10 Ｙ Ｒ 1.85 ／ 2.5）極細砂質土。貼り床土。硬質で粘性あり。Ⅲ層由来のブロック（径３～ 15㎜）を多く含む。
14：黒褐色 （10 Ｙ Ｒ 2 ／ 2.5）貼り床土。極細砂質土。軟質で粘性ややあり。Ⅲ層由来のブロック（径１～ 20㎜）を多く含む。
15：黒色（10 Ｙ Ｒ 1.7 ／ 1 ）ピットか？極細砂～粘土質土。軟質で粘性あり。Ⅲ層由来のブロック（径１～５㎜）をわずかに含む。
16：黒色 (10 Ｙ Ｒ 1.7 ／ 1 ）極細砂質土。硬質（10 層より軟質）で粘性あり。Ⅲ層由来のブロック（径１㎜）をごくわずかに含む。
17：黒褐色（10 Ｙ Ｒ 2 ／ 2 ）極細砂質土。軟質で粘性あり。Ⅲ層ブロック（径１～３㎜）をまばらに含む。
18：黒褐色（10 Ｙ Ｒ 2 ／ 1.5）極細砂質土。やや硬質で粘性あり。Ⅲ層ブロック（径１～５㎜）をまばらに含む。
19：黒褐色（10 Ｙ Ｒ 2 ／ 2 ）極細砂質土。やや軟質で粘性あり。Ⅲ層ブロック （径１～ 15㎜）を多く含む。
20：黒褐色（10 Ｙ Ｒ 2 ／ 2.5）極細砂質土。軟質で粘性あり。Ⅲ層ブロック（径１㎜）をわずかに含む。

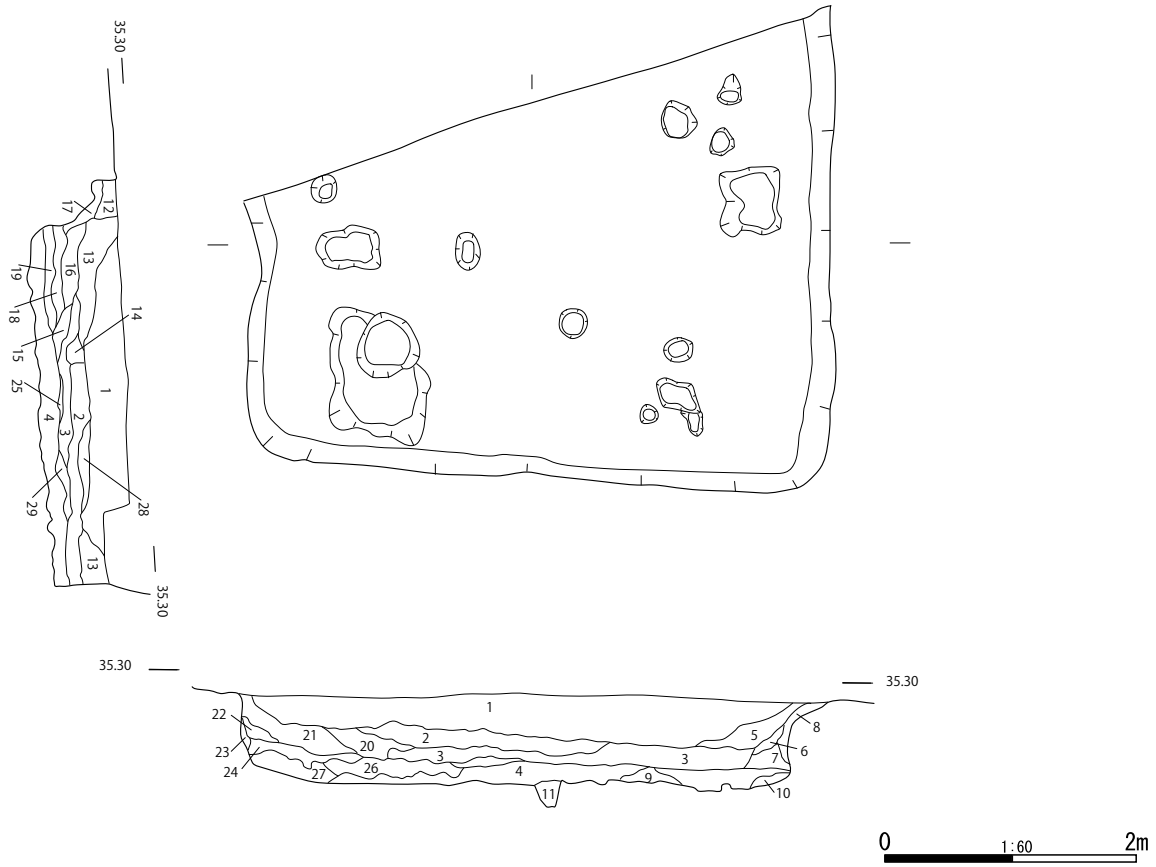
第 200 図　第６号竪穴住居跡（SA06） S= １／６０

SA06 土層注記続き

21：黒褐色（10ＹＲ ２／２）極細砂質土。やや硬質で粘性あり。Ⅲ～Ⅳ層由来のブロック（径１～３㎜）をまばらに含む。
22：黒褐色（10ＹＲ２／1.5）極細砂～粘土質土。軟質で粘性あり。
23：黒褐色（10ＹＲ２／2.5）極細砂～粘土質土。軟質で粘性に富む。Ⅲ～Ⅳ層由来のブロック（径１～20㎜）を多く含む。
24：暗褐色（10ＹＲ 2.5／３）極細砂～粘土質土。軟質で粘性に富む。Ⅲ～Ⅳ層由来のブロック（径５～25㎜）を２３層よりも多く含む。
25：黒褐色（10ＹＲ２／1.5）極細砂質土。軟質で粘性あり。Ⅲ層由来のブロッ　ク（径１～５㎜）をわずかに含む。
26：暗褐色（10ＹＲ 2.5／2.5）極細砂～粘土質土。軟質（25 層より軟質）で粘性あり。Ⅲ～Ⅳ層ブロック（径１～５㎜）をまばらに含む。
27：暗褐色（10ＹＲ 2.5／3.5）住居構築時に変質したピット埋土か？極細砂質土。軟質で若干粘性あり。Ⅲ層由来のブロック（径５～25㎜）を多く含む。
28：黒褐色（10ＹＲ２／1.5）極細砂質土。軟質で粘性あり。Ｉ層に類似だが明確に分層できる。
29：黒色（10ＹＲ 1.7／１）極細砂質土。やや軟質で粘性あり。
30：黒褐色（10ＹＲ２／1.5）極細砂質土。軟質で粘性あり。Ⅲ層ブロック（径１～５㎜）を多く含む。
31：黒褐色（10ＹＲ２／2.5）ピット（古墳時代以前）埋土。極細砂質土。軟質で粘性あり。Ⅲ～Ⅳ層由来のブロック（５～25㎜）をわずかに含む。
32：黒褐色（10ＹＲ２／1.5）極細砂質土。軟質で粘性あり。
33：黒色（10ＹＲ 1.85／1.5）極細砂質土。やや硬質で粘性あり。Ⅲ層由来のブロック（径２～10㎜）をわずかに含む。炭化物粒をごくわずかに含む。
34：黒褐色（10ＹＲ２／1.5）ＳＡ１０壁帯溝埋土。極細砂～粘土質土。やや硬質で粘性あり。Ⅲ層由来のブロック（径５～20㎜）を多く含む。
35：黒色（10ＹＲ 1.85／１）ピット（縄文～晩期）極細砂質土。軟質で粘性あり。
36：黒褐色（10ＹＲ２／1.5）極細砂質土。軟質で粘性あり。Ⅲ層ブロック（径１～３㎜）をわずかに含む。
37：黒褐色（10ＹＲ２／１）極細砂質土。軟質で粘性あり。Ⅲ層ブロック（径１～２㎜）をごくわずかに含む。
38：黒褐色（10ＹＲ２／２）極細砂質土。やや硬質。Ⅲ層ブロック（径１～３㎜）をごくわずかに含む。
39：黒褐色（10ＹＲ 1.85／1.5）極細砂質土。やや硬質（38 層より硬質）で粘性有り。Ⅲ層ブロック（径１～15㎜）をわずかに含む。
40：黒色（10ＹＲ 1.7／1.5）極細砂質土。やや軟質で粘性あり。
41：黒褐色（10ＹＲ２／2.5）極細砂質土。やや軟質（40 層より軟質）で粘性あり。、
42：黒褐色（10ＹＲ２／２）極細砂質土。軟質で粘性有り。
43：黒褐色（10ＹＲ２／２）極細砂質土。やや硬質で粘性あり。Ⅲ層ブロック（径１～25㎜）をわずかに含む。炭化物粒（径１～３㎜）をごくわずかに含む。
44：黒褐色（10ＹＲ２／1.5）極細砂質土。やや硬質（43 層より軟質）で粘性あり。
45：黒褐色（10ＹＲ２／１）極細砂質土。やや硬質（44 層と同程度）で粘性あり。
46：暗褐色（10ＹＲ３／３）極細砂質土。やや軟質（40 層より軟質）で粘性あり。
47：黒褐色（10ＹＲ 2.5／１）極細砂質土。やや硬質（39 層と同程度）で粘性あり。
48：黒褐色（10ＹＲ２／1.5）極細砂質土。やや硬質（47 層より硬質）で粘性あり。Ⅳ層ｂ層（小林軽石）ブロック（径１～15㎜）をわずかに含む。
49：黒褐色（10ＹＲ２／1.5）極細砂質土。やや硬質（39 層と同程度）で粘性あり。Ⅲ～Ⅴ層ブロック（径１～30㎜）を多く含む。
50：黒褐色（10ＹＲ２／2.5）極細砂～シルト質土。やや硬質（39 層と同程度）で、やや粘性に富む。Ⅳ～Ⅴ層ブロック（径１～30㎜）を多く含む。
51：暗褐色（10ＹＲ 2.5／2.5）シルト質土。やや硬質で、若干粘性に富む。Ⅲ～Ⅴ層ブロック（径１～35㎜）を 50 層より多く含む。
52：黒褐色（10ＹＲ２／２）極細砂質土。やや軟質で、若干粘性に富む。
53：黒色（10ＹＲ 1.7／２）極細砂質土。やや硬質で粘性あり。
54：黒褐色（10ＹＲ ２／２）極細砂～シルト質土。軟質で、やや粘性に富む。一部Ⅳ～Ⅴ層ブロック（径１～30㎜）をマーブル状にまばらに含む。
55：黒色（10ＹＲ ２／１）極細砂質土。やや軟質で粘性やや弱い。Ⅳ層ブロック（径１～20㎜）をごくわずかに含む。
56：黒褐色（10ＹＲ２／1.5）極細砂質土。軟質で粘性有り。
57：黒褐色（10ＹＲ２／2.5）極細砂質土。軟質で粘性有り。Ⅲ層ブロック（径３～７㎜）を多く含む。
58：暗褐色（10ＹＲ 3.5／３）極細砂～シルト質土。やや硬質で、若干粘性に富む。Ⅲ～Ⅳ層ブロック（径３～30㎜）を多く含む。
59：黒色（10ＹＲ２／1.5）極細砂質土。軟質で粘性あり。
60：黒色（10ＹＲ２／１）極細砂質土。やや硬質で粘性あり。
61：黒色（10ＹＲ 1.85／1.5）極細砂質土。やや硬質で粘性有り。Ⅲ～Ⅳ層ブロック（径１～７㎜）をわずかに含む。
62：黒色（10ＹＲ２／１）極細砂質土。やや硬質（61 層より軟質）で粘性有り。しまりⅢ～Ⅳ層ブロック（径１～30㎜）をわずかに含む。
63：黒色（10ＹＲ２／２）極細砂～シルト質土。軟質で粘性あり。Ⅲ～Ⅳ層ブロック（径１～35㎜）を一部マーブル状に多く含む。
64：黒色（10ＹＲ２／1.5）極細砂質土。軟質で粘性あり。Ⅲ層ブロック（径１～20㎜）をまばら、炭化物（径１～10㎜）をごくわずかに含む。
65：黒色（10ＹＲ 1.85／１）極細砂質土。軟質で粘性有り。Ⅲ～Ⅳ層ブロック（径１～２㎜）をごくわずかに含む。
66：黒色（10ＹＲ２／１）極細砂質土。軟質で粘性あり。Ⅲ～Ⅳ層ブロック（径 20～30㎜）をわずかに含む。
67：黒褐色（10ＹＲ 2.5／１）極細砂質土。やや軟質で若干粘性あり。
68：黒褐色（10ＹＲ 2.5／1.5）極細砂質土。軟質で粘性ややあり。Ⅲ層ブロック（径 20㎜）をわずかに含む。
69：黒褐色（10ＹＲ２／1.5）極細砂質土。粘性あり。
70：黒褐色（10ＹＲ２／２）極細砂質土。粘性あり。Ⅲ～Ⅳ層ブロック（径１～15㎜）一部マーブル状にまばらに含む。
71：黒褐色（10ＹＲ２／１）極細砂。粘性あり。Ⅲ～Ⅳ層ブロック（径１～２㎜）をごくわずかに含む。
72：黒褐色（10ＹＲ 2.5／１）極細砂質土。粘性あり。
73：黒褐色（10ＹＲ 2.5／２）極細砂質土。粘性有り。Ⅲ層ブロック（径１～25㎜）をまばらに含む。
74：黒色土（10ＹＲ２／１）シルト質土。軟質で粘性強い。
75：黒褐色土（10ＹＲ２／1.5）極細砂質土。軟質（４層と接する部分では４層より硬質）で粘性あり。Ⅲ層ブロック（径１～３㎜）をまばらに含む。
76：黒色土（10ＹＲ 1.85／１）極細砂質土。軟質（75 層より軟質）で粘性あり。
77：黒色土（10ＹＲ 1.7／１）極細砂～シルト質土。軟質で、やや粘性に富む。
78：黒色土（10ＹＲ 1.7／１）ＳＣ埋土。極細砂質土。やや硬質で、若干粘性に富む。
79：黒褐色土（10ＹＲ 2.5／1.5）ＳＣ埋土。極細砂質土。軟質で、やや粘性に富む。Ⅲ～Ⅳ層ブロック（径５～30㎜）をまばらに含む。
80：黒褐色土（10ＹＲ２／1.5）ＳＣ埋土。極細砂質土。やや硬質で粘性有り。
81：黒褐色土（10ＹＲ 2.5／１）ＳＣ埋土。極細砂質土。やや軟質で粘性有り。Ⅲ層ブロック（径１～３㎜）をわずかに含む。
82：黒色土（10ＹＲ２／1.5）ＳＣ埋土。極細砂質土。やや硬質で粘性有り。Ⅲ～Ⅳ層ブロック（径１～10㎜）を多く含む。



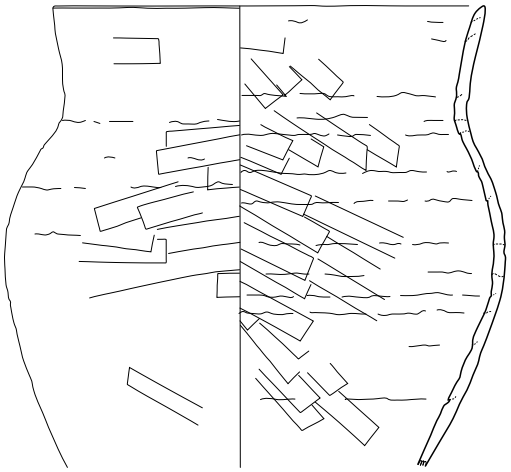
第 201 図　第６号竪穴住居跡出土の土器　S= １／４



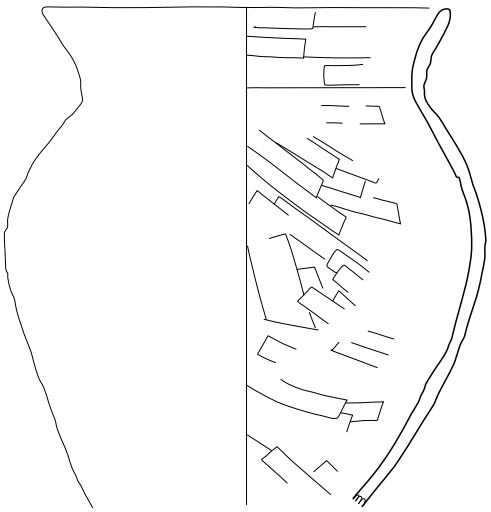
SA07 土層注記

1：黒褐色（10 Y R 3 ／ 2.5）極細砂質土。軟質で粘性やや有り。Ⅲ層ブロック（径 1 ㎜）をわずかに含む。
2：黒褐色（10 Y R 2 ／ 2）極細砂質土。軟質で粘性やや有り。焼土粒（径 1 ～ 3 ㎜）をごくわずかに含む。
3：黒褐色（10 Y R 2 ／ 2.5）極細砂質土。軟質で粘性やや有り。Ⅲ層ブロック（径 1 ～ 10㎜）をわずかに（1 層より多く）含む。
4：暗褐色（10 Y R 2.5 ／ 3）貼床。極細砂質土。やや硬質で粘性有り。Ⅲ～Ⅳ層ブロック（径 3 ～ 30㎜）をまばらに含む。
5：暗褐色（10 Y R 3 ／ 2.5）極細砂質土。軟質で粘性やや有り。Ⅲ層ブロック（径 1 ～ 30㎜）をわずかに含む。
6：暗褐色（10 Y R 3 ／ 3.5）極細砂質土。軟質で粘性有り。Ⅲ層ブロック（径 10 ～ 60㎜）を多く含む。
7：暗褐色（10 Y R 2.5 ／ 2.5）極細砂質土。軟質で粘性やや有り。Ⅲ～Ⅳ層ブロック（径 1 ～ 2 ㎜）をわずかに、焼土粒をごくわずかに含む。
8：暗褐色（10 Y R 3 ／ 3）極細砂質土。軟質で粘性やや有り。Ⅲ層ブロック（径 10 ～ 30㎜）を多く含む。
9：暗褐色（10 Y R 2.5 ／ 3）極細砂質土。やや硬質で粘性有り。Ⅲ～Ⅳ層 、Ⅵ層ブロック（径 20 ～ 40㎜）を多く含む。
10：暗褐色（10 Y R 3 ／ 3）極細砂質土。軟質で粘性有り。Ⅲ層ブロック（径 40㎜）まばらに含む。
11：黒褐色（10 Y R 2 ／ 2.5）極細砂～シルト質土。やや軟質で、若干粘性に富む。Ⅴ層ブロック（径 1 ～ 30㎜）をまばらに含む。
12：黒褐色（10 Y R 2 ／ 2）極細砂質土。軟質でやや粘性有り。
13：黒褐色（10 Y R 2 ／ 2）（黒味＞ 1 1）極細砂質土。軟質で粘性有り。Ⅲ層ブロック（径 1 ～ 3 ㎜）をごくわずかに含む。
14：黒褐色（10 Y R 2 ／ 2）極細砂質土。軟質で若干粘性に富む。Ⅲ～Ⅳ、Ⅵ層ブロック（径 3 ～ 10㎜）をまばらに含む。13 層より薄い色調。
15：黒褐色（10 Y R 1.85 ／ 1.5）極細砂～シルト質土。軟質で、若干粘性に富む。
16：黒褐色（10 Y R 2.5 ／ 1.5）極細砂質土。やや軟質で粘性有り。Ⅲ～Ⅳ層ブロック（径 1 ～ 3 ㎜）をまばらに含む。
17：暗褐色（10 Y R 2.5 ／ 2.5）極細砂質土。軟質で粘性有り。Ⅲ層ブロック（径 10 ～ 15㎜）を多く含む。
18：黒褐色（10 Y R 2 ／ 2）極細砂質土。軟質で粘性に富む。Ⅲ～Ⅳ層ブロック（径 1 ㎜）をまばらに含む。
19：黒褐色（10 Y R 2.5 ／ 2）極細砂質土。軟質で粘性に富む。Ⅲ～Ⅳ層ブロック（径 1 ～ 5 ㎜）をわずかに含む。
20：黒褐色（10 Y R 2 ／ 2）極細砂質土。軟質で粘性やや有り。Ⅵ層ブロック（径 1 ～ 5 ㎜）をごくわずか（一部マーブル状）に含む
21：黒褐色（10 Y R 2 ／ 2）極細砂質土で黒味は 20 層よりある。軟質で粘性有り。Ⅵ層ブロック（径 1 ～ 15㎜）、炭化物（径 1 ～ 2 ㎜）をごくわずかに含む。
22：黒褐色（10 Y R 2 ／ 2.5）極細砂質土。軟質で、21 層より粘性有り。炭化物（径 1 ～ 2 ㎜）をごくわずかに含む。
23：暗褐色（10 Y R 2.5 ／ 3）極細砂～シルト質土。やや硬質で粘性やや強い。Ⅲ～Ⅴ層ブロック（径 1 ～ 20㎜）を一部マーブル状に多く含む。
24：黒褐色（10 Y R 2.5 ／ 2.5）極細砂質土。軟質～やや硬質で若干粘性有り。炭化物（径 1 ～ 3 ㎜）、Ⅵ層ブロック（径 1 ～ 25㎜）をごくわずかに含む。
25：黒褐色（10 Y R 2 ／ 3）極細砂質土。硬質で粘性やや有り。Ⅵ層ブロック（径 1 ～ 30㎜）を一部マーブル状にまばらに含む。
26：黒褐色（黒味＜ 2 4）（10 Y R 2.5 ／ 2.5）極細砂質土。硬質で（25 層より軟質）粘性やや有り。Ⅵ層ブロック（径 1 ～ 20㎜）を一部マーブル状に、まばらに含む。
27：暗褐色（10 Y R 3 ／ 3.5）極細砂質土。軟質で粘性有り。Ⅵ層をマトリックスとし、 Ⅴ層と 26 層のブロック（径 1 ～ 3 0 ㎜）を一部マーブル状にまばらに含む。
28：暗褐色（ 10 Y R 2.5 ／ 3）極細砂質土。軟質で粘性有り。Ⅵ層ブロック（径 1 ～ 5 ㎜）をわずかに含む 。炭化物（径 1 ～ 3 ㎜）をわずかに含む。
29：黒褐色（10 Y R 2.5 ／ 2）極細砂質土。硬質で粘性ややあり。Ⅵ層ブロック（径 1 ～ 25㎜）をわずかに含む。炭化物（径 1 ～ 3 ㎜）をわずかに含む。

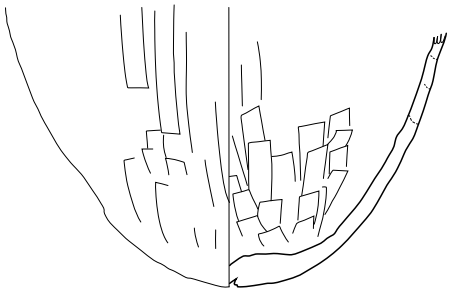
第 202 図　第 7 号竪穴住居跡（SA07）　S ＝ 1 ／ 6 0



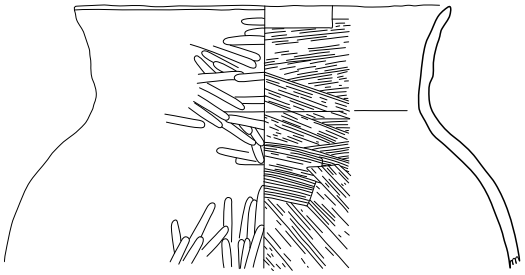
1538.



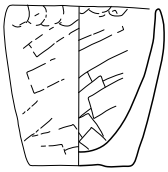
1539.



1540.

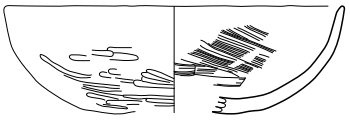


1541.

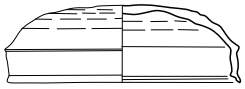


1542.

1543.



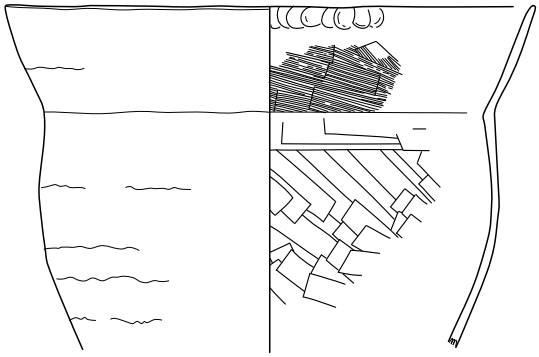
1544.



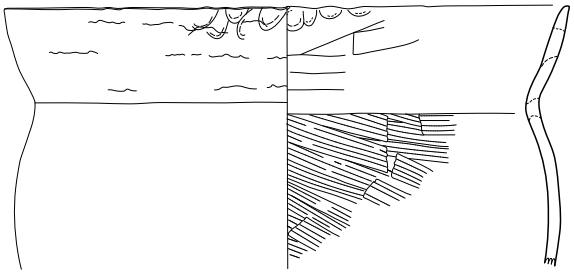
1545.

0 1:4 20cm

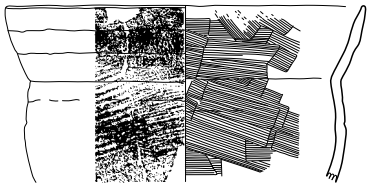
第 203 図　第７号竪穴住居跡出土の土器　Ｓ＝１／４



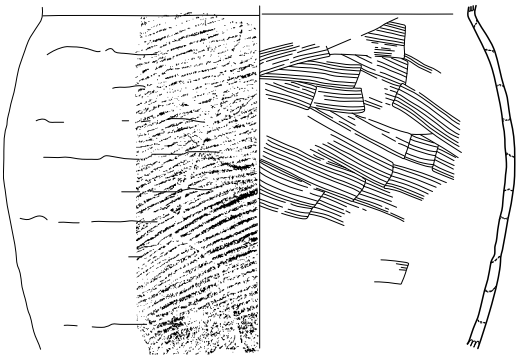
1546.



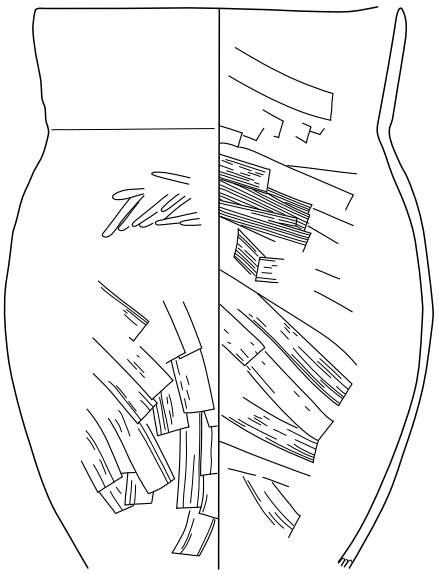
1547.



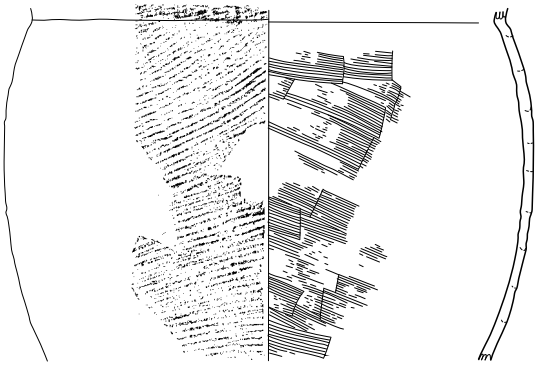
1548.



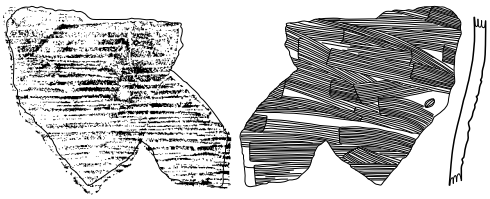
1549.



1551.



1550.



1552.

1553.

1554.

0 1:4 20cm

第 204 図　第８号竪穴住居跡出土の土器　Ｓ＝１／４

1548 ～ 1551 がＢ類に該当する。1553 ～ 1554 は高坏である。

遺構の廃絶時期であるが、甕Ａ類のようにな口縁部の屈曲部から判断すると５世紀初頭、甕Ｂ類のように、口縁部の屈曲部が緩やかなものから推測すると、５世紀中頃となる。

■第９号竪穴住居跡（第 205 図）

概要　Ａ区中央部に位置し、SX01 を切る。規模は長軸約４ｍ、短軸約４ｍ、床面積約 16㎡を測る方形プランである。検出面からの壁の残存高は40㎝程度で、ほぼ垂直に立ち上がる。

床面は概して平坦であり、主柱穴は検出されなかった。

出土遺物

■土師器（第 206 図）

甕・鉢でセットを構成している。

1535 はＣ類の甕、1556 はＢ類の甕である。1559 は鉢である。

甕を基準に遺構の廃絶時期を推定するならば、甕の口縁部の直口化が認められることから、５世紀中頃～後半と考えられる。

石器の図示は割愛したが、本来は SX01 に帰属させるべき資料も一定量含まれる可能性が高い。

■第 13 号竪穴住居跡（第 207 図）

概要　Ｃ区北西部から検出された、プランの南側半分を後世の撹乱土坑によって破壊されている。覆土の残存状況も 10㎝程度と良好ではない。検出されたピットも浅く、柱穴とは考えにくいため、構造には不明な部分が多い。

残存する状況からは一辺が約 2.5 ｍの隅円方形プランが推定される。プラン内からは土師器の出土はほとんど見られず、縄文時代後期の集落と分布が接するためか、縄文土器の出土が目立った。

■第 14 号竪穴住居跡（第 208 図）

概要　Ｃ区北西部に位置し、第 17 号竪穴住居跡（SA17）に接する状態で検出された。SA13 と同様に、プランの南側に後世の撹乱土坑が入り、全容は明らかでない。一辺約３ｍの方形プランであろう。床面からは複数のピットが検出されたが、主柱穴などの配列は不明である。覆土中には炭化物および焼土が多く含まれ、火処なし、焼失住居であった可能性も考えられる。プラン内からは土師器の出土はほとんど見られず、SA13 と同様に縄文土器の出土が目立った。

■第 15・17 号竪穴住居跡
（SA15・17　第 209 図）

概要　Ｃ区北西部から２軒切り合う状態で検出された。規模の小さな SA15 が相対的に規模の大きな SA17 を切る関係にある。SA15 は一辺約 2.5 ｍの方形住居と推定されるが、西側の広い範囲が調査区外に残されたため、詳細は不明である。床面からはピットも検出されず、主柱穴などの配列も明らかでない。SA17 の平面形は長軸約 4.5 ｍ×短軸約 3.6 ｍのやや長方形を呈す。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。床面には主柱穴を構成した可能性が指摘できるピットが３基検出されている。

出土遺物

いずれも遺物の出土量は少ない。図示は割愛した。遺構廃絶時期であるが、時期が推定できる遺物に乏しく、判断に躊躇する。

■第 18 号竪穴住居跡（SA18　第 210 図）

概要　Ｃ区南西部の SA51・53 に隣接して検出された。周辺は縄文時代の竪穴住居が検出されたエリアである。プランは方形であり、規模は一辺約４ｍを測る。壁の残存高は 30㎝程度でほぼ垂直に立ち上がる。

床面は概して平坦である。プラン内で多数のピットが検出されているが、ほとんどが遺構廃絶以降の所産であると考えられる。南側の壁面西側には楕円形の土坑が切っている（SA18-SC01）。これは SA18 と近い時期の構築と考えられる。

プラン内からは、土師器の出土は、ほとんど見られず、縄文土器の出土が目立った。

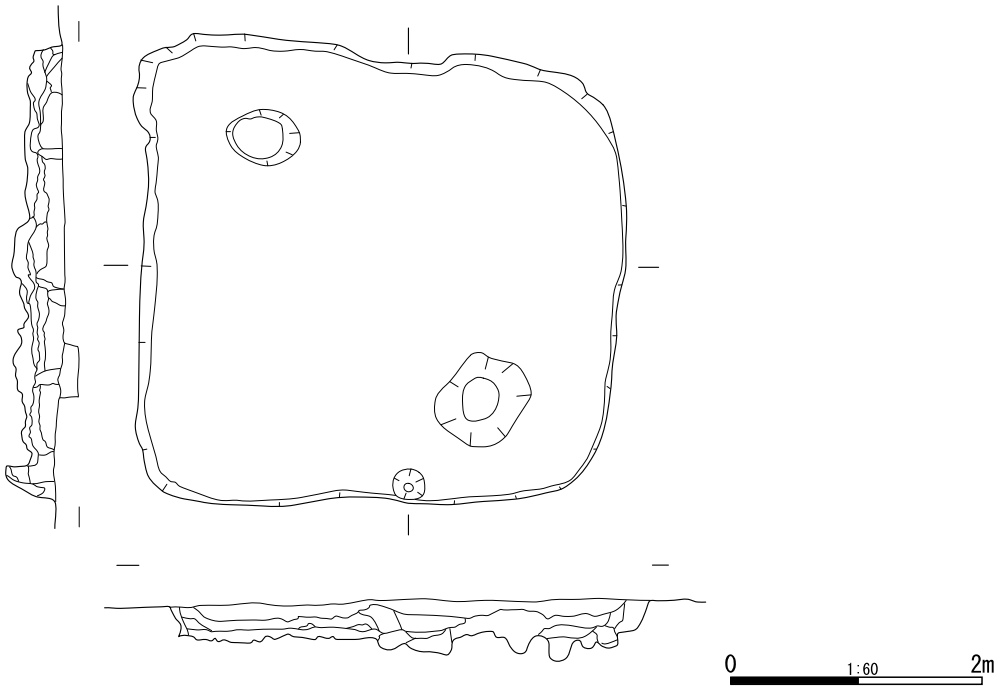
出土遺物

プラン内から、時期が推測されるような土師器・須恵器片の出土はなかった。

Ｃ区にはこの SA18 に代表されるように、遺構内に土師器・須恵器の出土が見られないものが多い。Ｃ区には廃棄住居である SA38 が存在する。

SA18 も廃絶の際に、土師器類は SA38 に一括投棄したのだろうか。

なお、SA18 から出土した縄文土器・石器は前

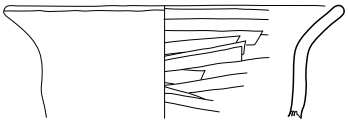


SA09 土層注記

1：黒褐色（10 Y R 2.5 ／ 2）極細砂質土。軟質でやや粘性有り。Ⅲ層ブロック（径3 ～ 15㎜）をわずかに含む。
2：黒色（10 Y R 1.85 ／ 1.5）極細砂質土。軟質で粘性有り。Ⅲ層ブロック（径3～ 30㎜）をわずかに含む。
3：黒褐色（10 Y R 2.5 ／ 2）極細砂～シルト質土。やや硬質で粘性有り。Ⅲ～Ⅳ層ブロック（径3～ 25㎜）をまばらに含む。
4：黒褐色（10 Y R 3 ／ 2.5）極細砂質土。やや硬質（3層と同程度）で粘性有り。Ⅲ～Ⅳ層ブロック（径1～3㎜）をわずかに含む。
5：黒褐色（10 Y R 1.7 ／ 1.5）極細砂質土。軟質（1層より軟質）で粘性有り。Ⅲ層ブロック（径1～2㎜）をごくわずかに含む。
6：暗褐色（10 Y R 3 ／ 3）極細砂質土。やや硬質で粘性有り。Ⅲ層ブロック（径1～2㎜）をごくわずかに含む。
7：暗褐色（10 Y R 2.5 ／ 3.5）極細砂質土。硬質で粘性有り。Ⅳ層ブロック（径1～ 20㎜）をわずかに含む。
8：黒色（10 Y R 1.85 ／ 1.5）極細砂質土。やや軟質（中央ほど軟質）で若干粘性に富む。Ⅲ層ブロック（径1～ 15㎜）をごくわずかに含む。中央付近には焼土粒（径1～2㎜）をわずかに含む。
9：黒色（10 Y R 1.85 ／ 1）極細砂質土。やや軟質で若干粘性に富む。Ⅲ～Ⅳ層ブロック (径1～ 30㎜) をわずかに含む。
10：黒褐色（10 Y R 2 ／ 2）極細砂質土。やや軟質（9層より軟質）で粘性有り。
11：黒褐色（10 Y R 2.5 ／ 2）極細砂質土。やや硬質で若干粘性有り。
12：黒褐色（10 Y R 2.5 ／ 2）シルト～粘土質土。軟質で粘性有り。Ⅳ～Ⅴ層ブロック（径5～ 30㎜）をまばらに含む。
13：暗褐色（10 Y R 3 ／ 3）極細砂質土。軟質（12 層より軟質）で粘性有り。
14：暗褐色（10 Y R 2.5 ／ 3）シルト～粘土質土。やや硬質で若干粘性に富む。Ⅳ～Ⅴ層ブロック（径5～ 25㎜）をまばらに含む。
15：暗褐色（10 Y R 3 ／ 3.5）シルト～粘土質土。やや硬質で粘性高い。Ⅳ～Ⅴ層ブロック（径5～ 25㎜）を多く含む。
16：黒褐色（10 Y R 1.85 ／ 2.5）極細砂質土。硬質で粘性やや有り。Ⅲ層ブロック（径1～5㎜）をわずかに含む。
17：黒褐色（10 Y R 2 ／ 3）シルト～粘土質土。やや軟質で粘性に富む。Ⅳ～Ⅴ層ブロック（径1～１０㎜）をまばら に含む。
18：黒褐色（10 Y R 2．5 ／ 2）極細砂質土。軟質で粘性有り。Ⅲ層ブロック（径1～3㎜）をごくわずかに含む。
19：黒褐色（10 Y R 2 ／ 1.5）極細砂質土。軟質で粘性有り。Ⅲ層ブロック（径1㎜）をごくわずかに含む。
20：暗褐色（10 Y R 3 ／ 3.5）極細砂質土。軟質で粘性有り。
21：暗褐色（10 Y R 2．5 ／ 3）極細砂質土。やや硬質で若干粘性有り。
22：暗褐色（10 Y R 3 ／ 3）極細砂質土。やや硬質で粘性有り。Ⅲ層ブロック（径1～3㎜）をごくわずかに含む。
23：暗褐色（10 Y R 2.5 ／ 3）極細砂質土。やや硬質で粘性有り。Ⅲ層ブロック（径1～5㎜）をわずかに含む。
24：黒褐色（10 Y R 2 ／ 3）極細砂質土。軟質で粘性有り。Ⅲ～Ⅳ層ブロック（径5～ 25㎜）をまばらに含む。
25：黒褐色（10 Y R 1.85 ／ 1.5）極細砂～シルト質土。軟質でやや粘性に富む。Ⅲ～Ⅳ層ブロック（径3～ 10㎜）をわずかに含む。
26：暗褐色（10 Y R 2.5 ／ 3.5）極細砂～シルト質土。やや軟質で粘性強い。Ⅲ～Ⅳ層ブロック（径3～ 10㎜）を一部マーブル状に含む。
27：黒褐色（10 Y R 2.5 ／ 1.5）極細砂～シルト質土。軟質で粘性強い。Ⅳ層ブロック（径1～ 25㎜）を一部マーブル状にまばらに含む。
28：黒褐色（10 Y R 2 ／ 2）極細砂質土。軟質で粘性有り。

第 205 図　第９号竪穴住居跡（SA09）　Ｓ＝１／６０

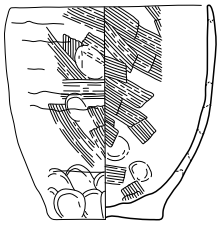
1555.



1556.

1557.

1558.



1559.

0 1:4 20cm

第 206 図　第９号竪穴住居跡出土の土器　Ｓ＝１／４

節において扱っている。

■第 19 号竪穴住居跡（SA19　第 212 図）

概要　Ｃ区南東部から検出された。一辺約 3.8 m の方形プランを持つ。縄文時代後期の竪穴住居 SA43 を切っている。北西隅に壁溝の可能性がある土色の変化を確認したが、残存状況は安定しない。床面からは複数のピットが検出されたが、主柱穴などの配列は明らかではない。住居の中央部では焼土と土師器片を含む炉が検出された。

出土遺物

■石器（第 213 図）

図示に耐えうる土師器・須恵器の出土は認められなかった。1564 は尾鈴山産溶結凝灰岩製の敲石、1565 は打欠石錘である。いずれも縄文時代後期の石器と考えられる。台石等は出土していない。

■第 23・24 号竪穴住居跡

（SA23・24　第 214 図）

概要　Ｃ区南西部調査区際から２軒切りあう状で検出された。小形の第 24 号竪穴住居跡が相対的に大きな第 23 号竪穴住居跡を切る。その際主軸を違える点は、先述した SA15・17 の事例と共通する。

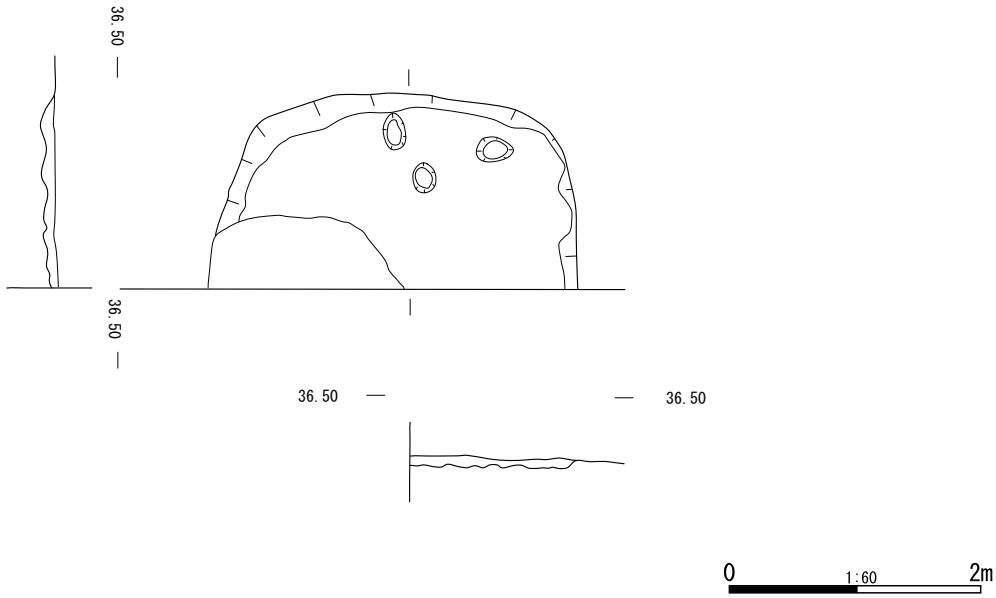
SA23 は一辺約 4.7 m の方形プラン、SA24 は一辺約 3 m のやはり方形プランである。SA23 の床面からは複数のピットが検出され、4 本の主柱穴と考えうる配列も見出されるが、ややいびつな四辺形を呈するため、断定はできない。SA24 の床面には相対的にピットが少なく、やはり、主柱穴の配列は不明である。

出土遺物

■石器（第 215 図）

いずれの竪穴住居跡からも、土師器・須恵器などの出土は少なかった。ここでは一部の石器のみ図示した。

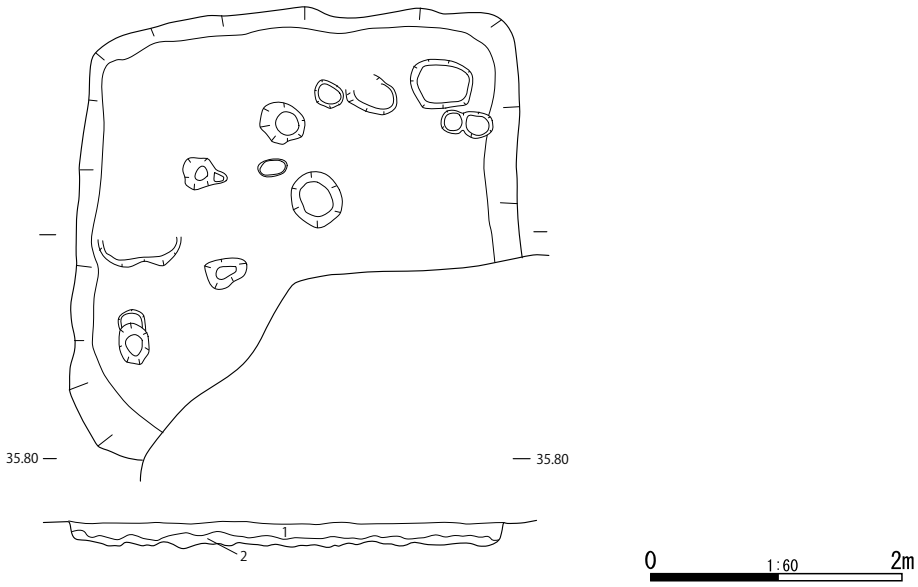
1566 は SA23 から出土した台石である。表裏両面に敲打痕の集中する範囲が認められる。縄文時代後期遺物の混入である可能性も考えうるが、



SA13 土層注記

1：黒褐色（10YR2/2）粘質土。しまりは弱い。

第 207 図　第 13 号竪穴住居跡（SA13）　S＝1／6 0

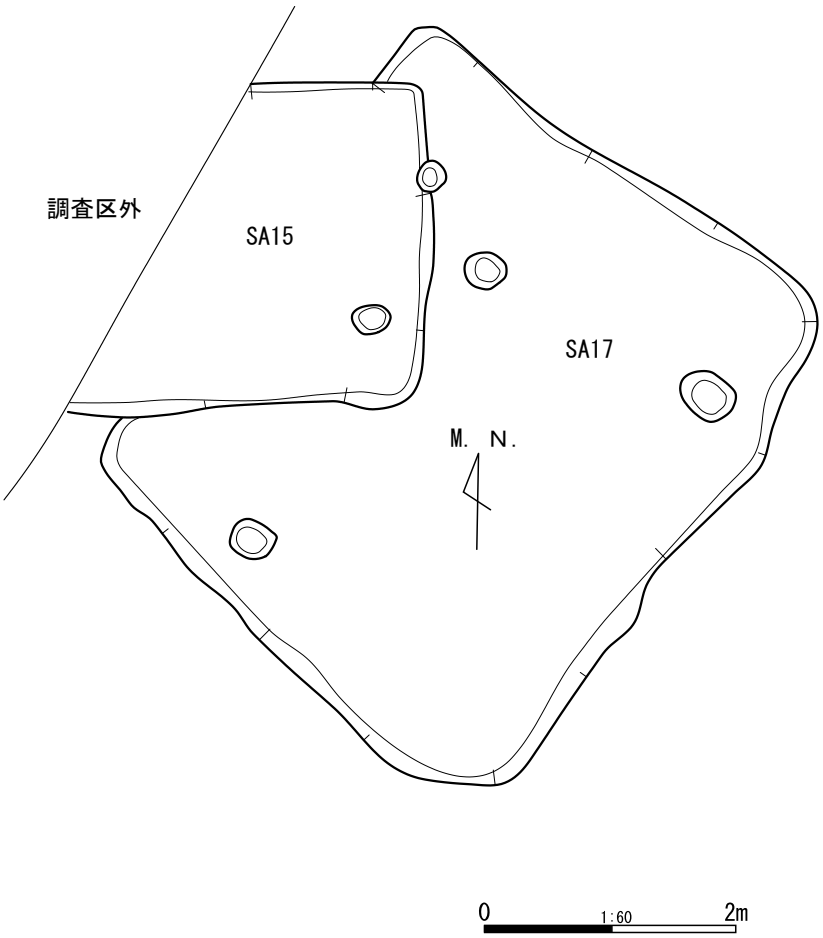


SA14 土層注記

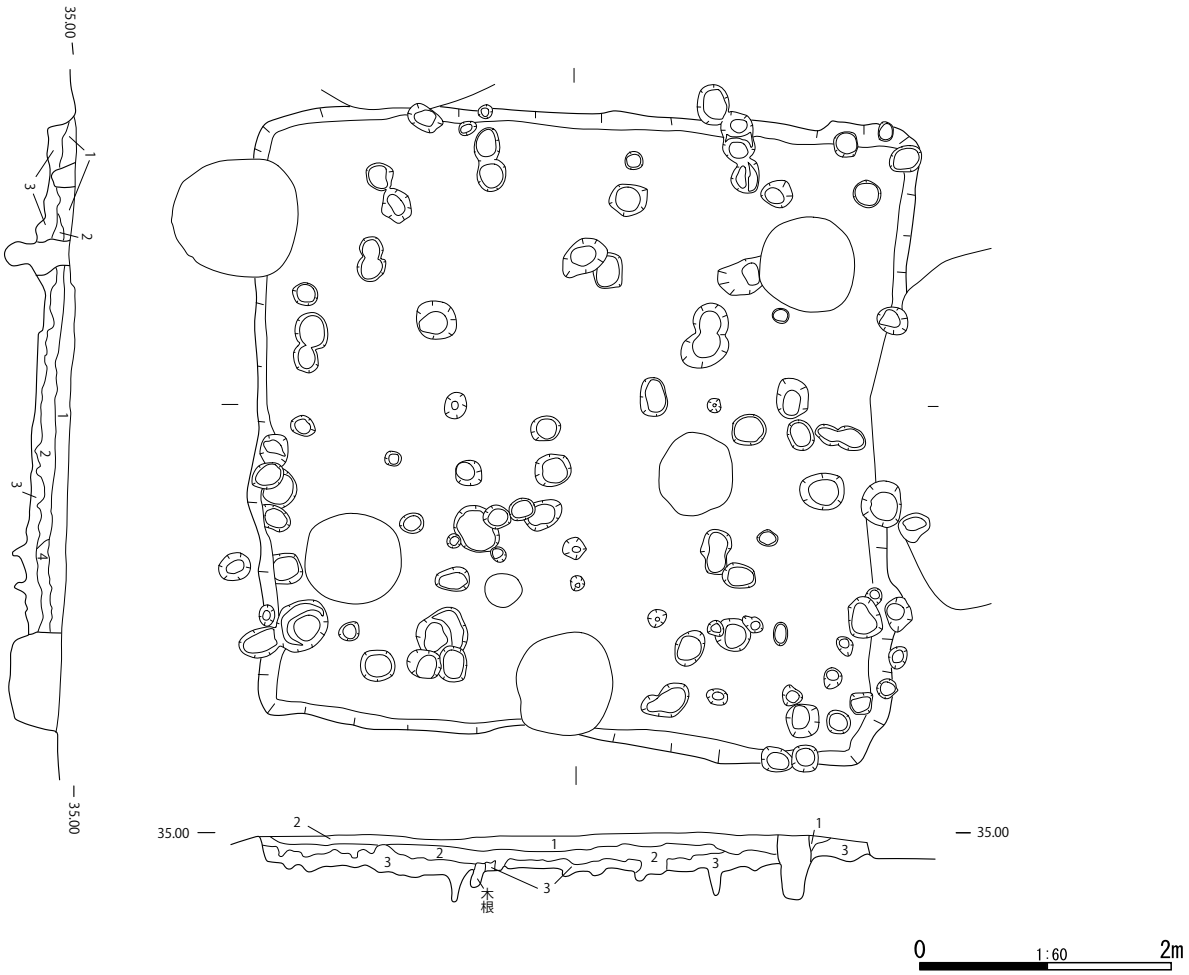
1：黒褐色（10YR2/2）粘質土。しまりが強い。

2：暗褐色（10YR3/2.5）粘質土。1よりもしまりが強い。炭化物・焼土粒（径 1 ～ 2㎜）を部分的に含む。

第 208 図　第 14 号竪穴住居跡（SA14）　S＝1／6 0



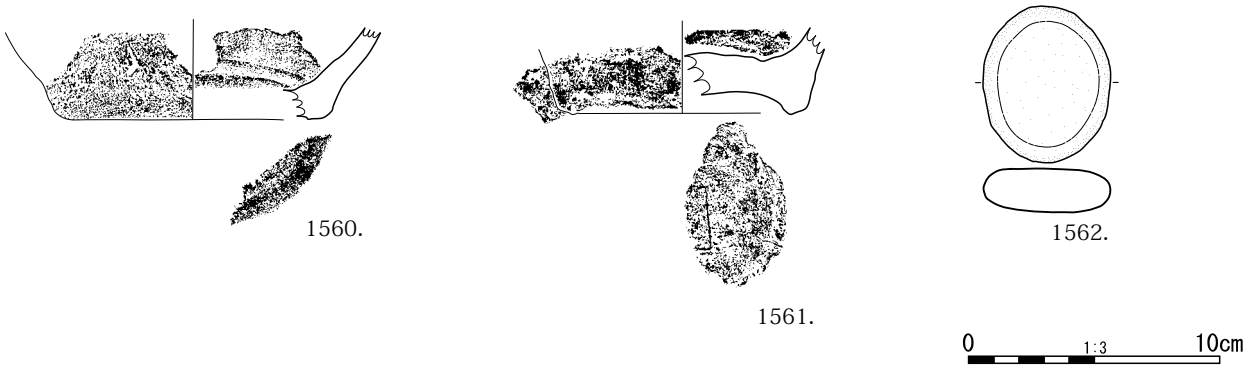
第 209 図　第 15・17 号竪穴住居跡（SA15・17）　S= １／６０



SA18 土層注記

１：黒褐色（10YR2/2）粘質土。しまりは普通。
２：黒褐色（10YR2/2.5）粘質土。しまりは普通。第Ⅲ層起源のブロック（径 50㎜）をわずかに，炭化物粒（径１～ 30㎜）を多く含む。
３：暗褐色（10YR3/4）粘質土。しまりは普通。第Ⅳ層起源のブロック（径１～ 30㎜）を多く含む。
４：２と同質であるが，若干明るめの色調。

第 210 図　第 18 号竪穴住居跡（SA18）　Ｓ＝１／６０



第 211 図　第 18 号竪穴住居跡出土の縄文土器・石器　S＝1／3

通時代的・普遍的な石器なので、古墳時代も所産として差し支えないであろう。

■第 36 号竪穴住居跡（SA36　第 216 図）

概要　C 区北部中央寄りの位置から検出された。SA37 と SA38 に挟まれる位置になる。一辺約 3.8 mの方形プランを有する。床面からは複数のピットが検出されたが、主柱穴の配列は明らかでない。

出土遺物

覆土中からは縄文時代後期を中心とする土器・石器が出土したが、時期決定に資するような古墳時代の遺物は見出されなかった。特筆すべき現象として、検出時にプランのほぼ中央の覆土上層に砂岩・尾鈴山産溶結凝灰岩の礫が廃棄された土坑が検出された。SA36 の機能時よりも下る時期の人間の行為であろがうが、SA36 が埋まった後も、凹地として認識されていたのであろう。

■第 37 号竪穴住居跡（SA37　第 217 図）

概要　C 区北部中央寄りの位置から検出された。SA37 に隣接する。東側縁辺は先行トレンチにより未記録であるが、一辺 4 m前後で、隣接する SA36 とほぼ同規模の方形プランを有するのであろう。床面からは少数のピットが検出されたが、主柱穴の配列は明らかでない。

出土遺物

覆土中からは縄文時代後期を中心とする土器・石器が出土したが、時期決定に資するような古墳時代の遺物は見出されなかった。

■第 38 号竪穴住居跡（SA38　第 218 図）

概要　C 区中央部より検出された。一辺約 4.6 m の中形の方形プランを持つ。床面には複数のピットが検出されたが、主柱穴などの配列は明らかでない。床面からそのやや上部にかけて、夥しい量の土師器と、それに混じって縄文時代の石器が出土している。

出土遺物

■土器（第 219 ～ 224 図）

本遺跡の古墳時代竪穴住居跡の中で、最大の遺物出土量を誇る。出土している器種や形態も雑多であり、まさに当遺跡における古墳時代出土土器の縮図である。

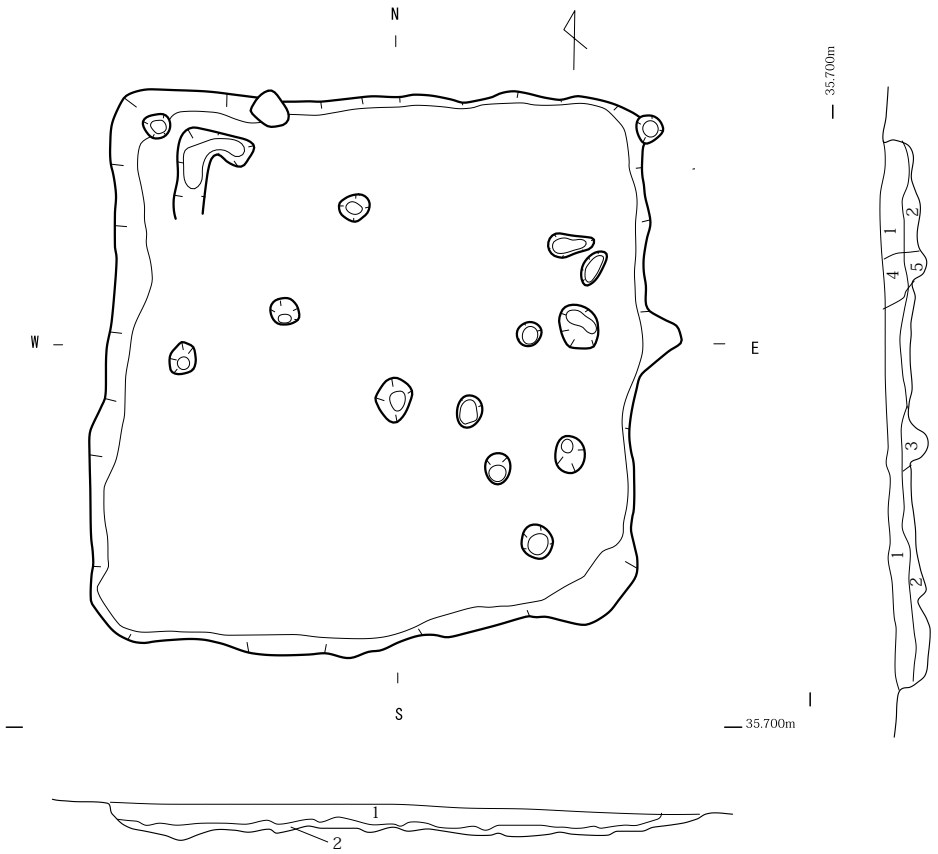
甕は A 類から C 類に至るまで、全てのバリエーションが見られる。一方で、壷や高坏の出土点数は限られており、そのほとんどが砕片で接合が困難であった。

この遺構の廃絶時期であるが、甕 A 類に属する土器が、純粋にこの遺構に伴うものであれば、５世紀初頭～中頃には廃絶されていたことになる。一方で、土器投棄の時期幅としては、甕 C 類で、口縁部の直口化が進行している資料、また高坏で受部が小さく、坏部が深い資料が一定量存在することから、５世紀後半までと推測される。C 区には遺物の出土しない古墳時代の住居跡が複数存在するが、これは SA38 に廃棄を集中させているためと考えられる。これに礫や縄文時代の石器が一定量混入する現象も、当時の廃棄行為を考えるうえで興味深い。

なお、個別の事実記載は省略しているので、観察表（第 20 ～ 23 表）を参照されたい。

■第 45 号竪穴住居跡（SA45　第 225 図）

概要　C 区北西部から検出された。小形の方形プランを持つ。SA17 に接し、SA14 と同様の撹乱坑に北辺を切られる。また、中央付近と西側にも

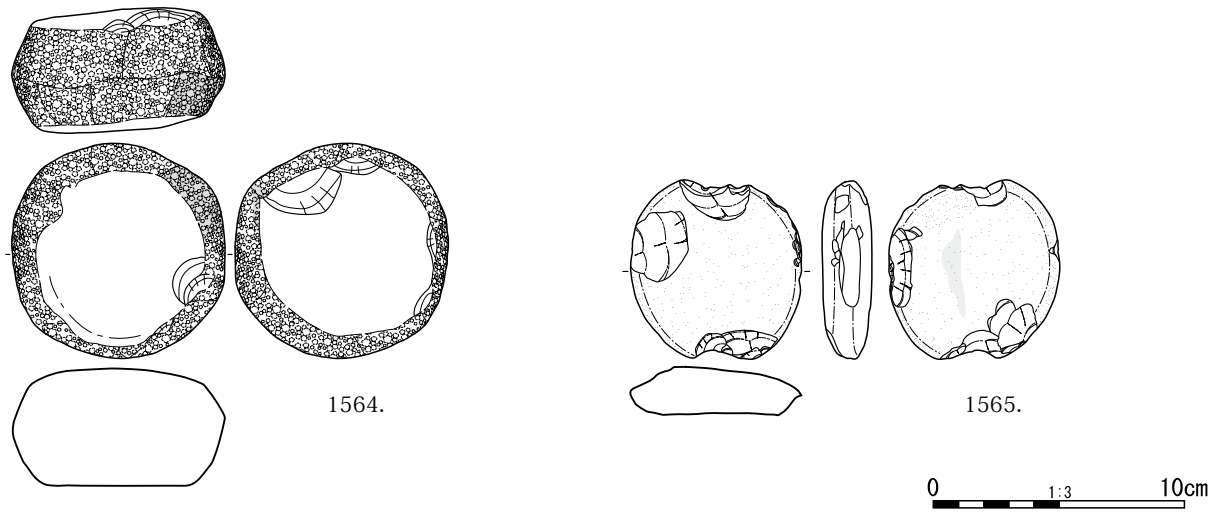


SA19土層注記

1　黒色土(Hue10YR2/1.5)シルト質土。粒子が細かく軟質。炭化物を含む。
2　黒褐色土(Hue10YR2/2.5)粘質土。1層より粒子が大きく硬質。
3　黒色土(Hue10YR1.7/1.5)粒子が非常に細かく軟質。やや粘性あり。焼土・炭化物を多く含む。炉跡か?
4　黒色土(Hue10YR1.85/1)粒子が非常に細かく硬質。粘性なし。炭化物を若干含む。
5　黒褐色土(Hue10YR2/2.5)粒子が非常に細かく軟質。炭化物を含む。

0　1:60　2m

第212図　第19号竪穴住居跡（SA19）　S＝1／60



第 213 図　第 19 号竪穴住居跡出土の石器　S＝1／3

後続する時期の溝状遺構が走り、遺構の全容は明らかにしがたい。主柱穴の配列などは不明だが，溝状遺構に切られる中央部付近に，焼土の分布する範囲が認められ，火処と評価できよう。

出土遺物は少なく，図示は割愛した。

■第 16･46 号竪穴住居跡（SA46　第 226 図）

概要　C 区北西部から検出された，切り合う 2 軒の竪穴住居跡である。SA15・17，SA23・24，の切り合い事例と同様に，小さな規模の竪穴住居が，相対的に大きなサイズの竪穴住居跡を切る関係がここでも認められる。なお，ＳＡ 46 は東辺を後続する時期の溝状遺構に切られている。

SA16 については床面の主柱穴の様相などは明らかでないが，SA46 には直線状に並ぶ三つのピットが検出され，主柱穴の配列に関連する可能性が指摘できる。

出土遺物

□土器（第 227 図）

面積の割りに出土量に乏しいが，図示したような遺物が認めらた。石製遺物は認められなかった。

■第 47 号竪穴住居跡（SA47　第 228 図）

縄文時代の事実記載でも触れたが，SA47 は複数の竪穴住居跡の重複した様相である可能性が高い。このうち SA47-2 とした範囲が古墳時代の所産である可能性が高い部分である。ただし，壁面の輪郭など p は認められず，土色の変化のみを追って線を引いたものである。

出土遺物

□土器（第 229 図）

他の多くの古墳時代中期の竪穴住居跡群とは異なり，1790 の甕の器形や，1791 の高坏の様相から判断しても，他より古相と評価でき，興味深い。

□石器（第 229 図）

凝灰岩製の砥石が 1 点認められた。他にも複数の石器が出土したが，縄文後期の竪穴住居跡に掘り込んでいる可能性が高いため，その反映と感がられる。

■第 57 号竪穴住居跡（SA57）

概要　C 区北西端の調査区際から検出された不整形の小規模プランである。一応，土師器片の出土が確認されたが，縄文の遺構に偶発的に入り込んだものである可能性も高い。。

■第 70 号竪穴住居跡（SA70　第 230 図）

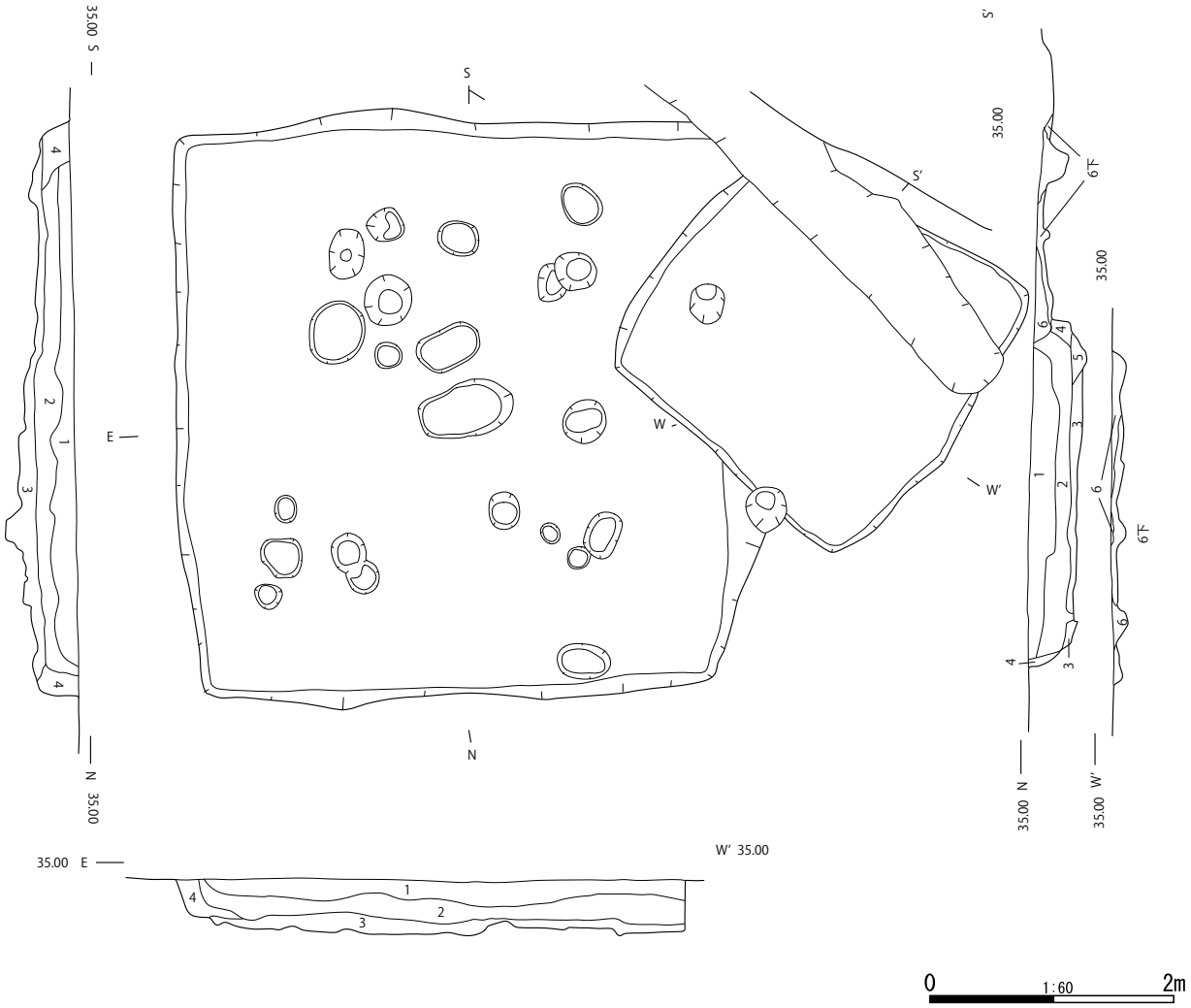
概要　B 区の北西部に位置し，SA73 と SA74 に挟まれる。

一辺約 3 m の方形プランであり，小形のグループに入る。床面などからピットはわずかのみ検出され，主柱穴などの構造は明らかではない。

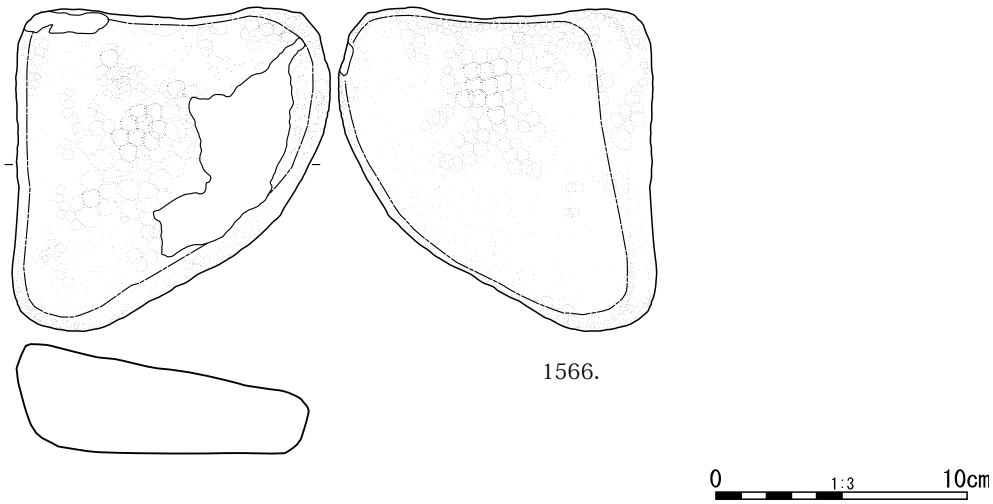
出土遺物

□土器（第 231 図）

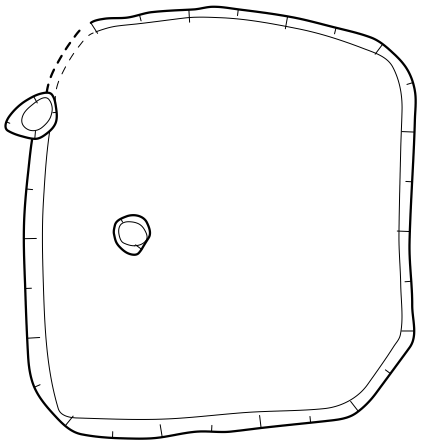
狭い面積に比較して，遺物は割合に豊富である。甕（1646 ～ 1648）や大形・小形壷（1649・1650），高坏（1652 ～ 1653）などが認められた。

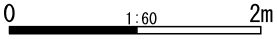


第 214 図　第 23・24 号竪穴住居跡（SA23・24）　S＝1／6 0

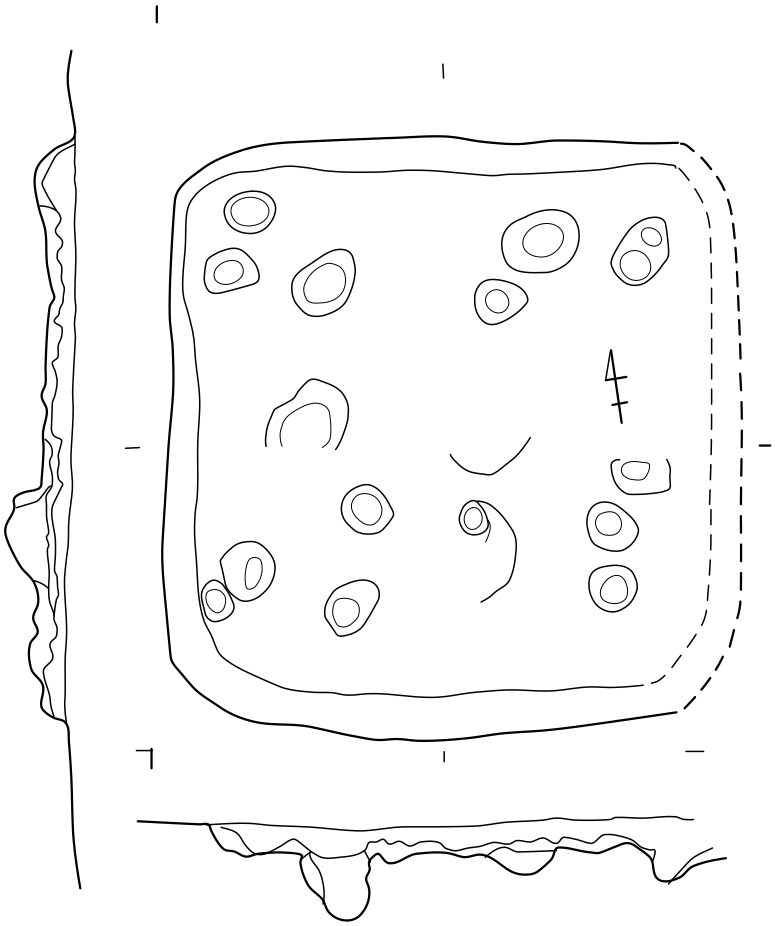


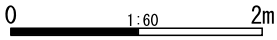
第 215 図　第 23 号竪穴住居跡出土の石器　S＝1／4



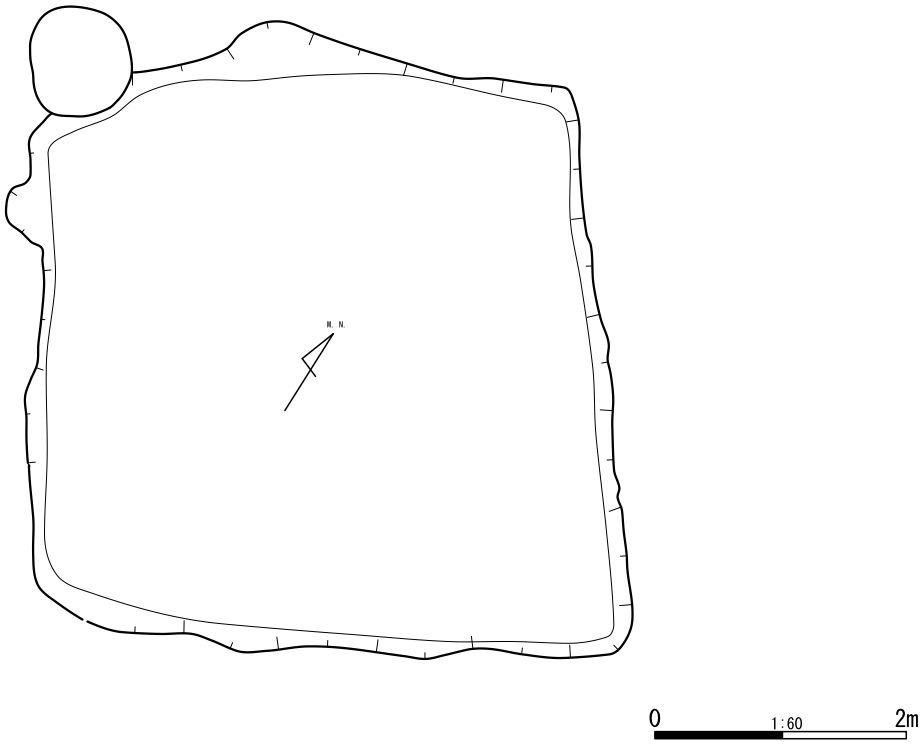


第 216 図　第 36 号竪穴住居跡（SA36）　S= １／６０

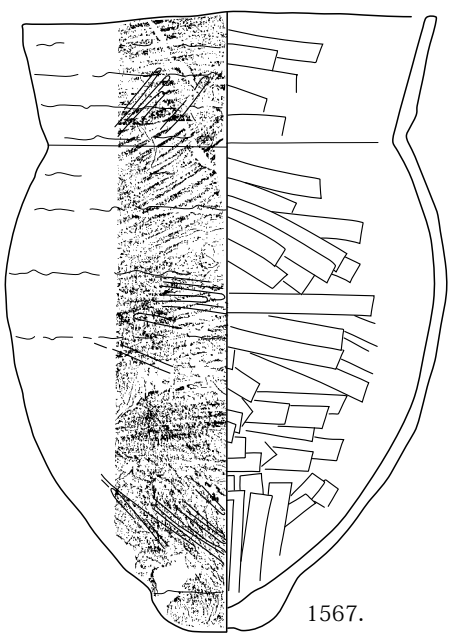




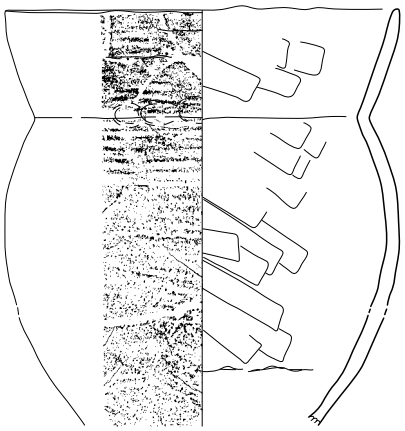
第 217 図　第 37 号竪穴住居跡（SA37）　S= １／６０



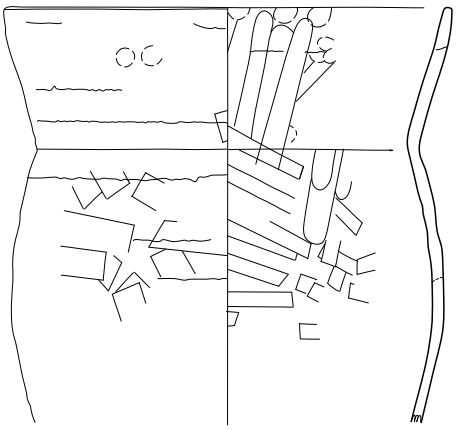
第 218 図　第 38 号竪穴住居跡（SA38）　S= 1／6 0



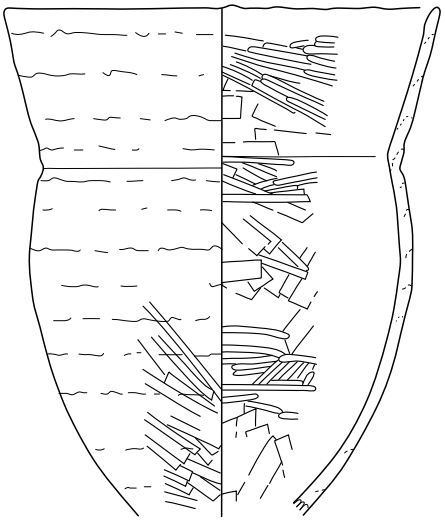
1567.



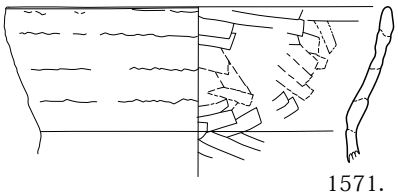
1568.



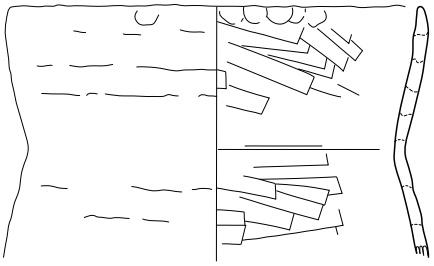
1570.



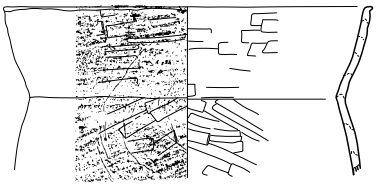
1569.



1571.



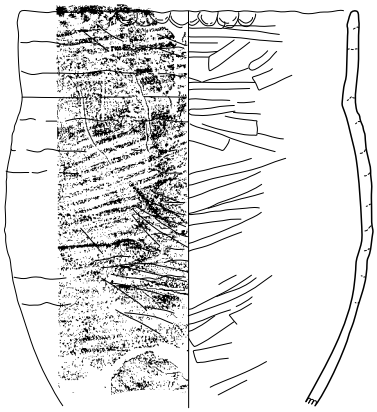
1572.



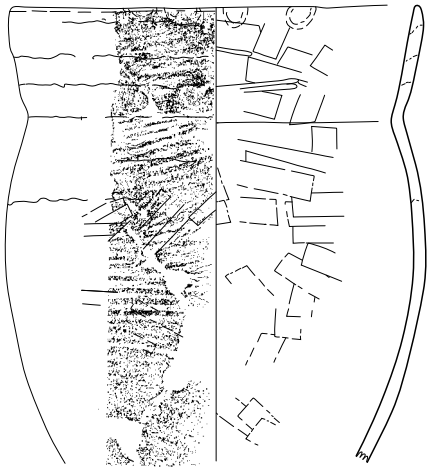
1573.

0 1:4 20cm

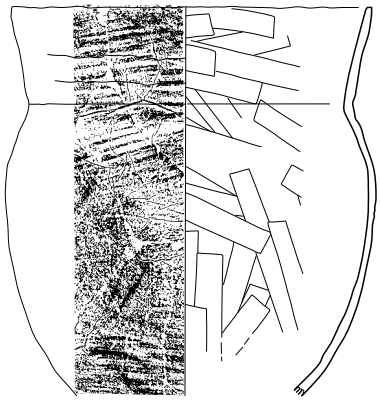
第 219 図　第 38 号竪穴住居跡出土の土器（1）　S＝1／4



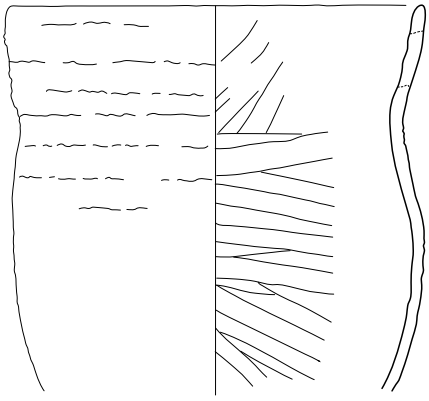
1574.



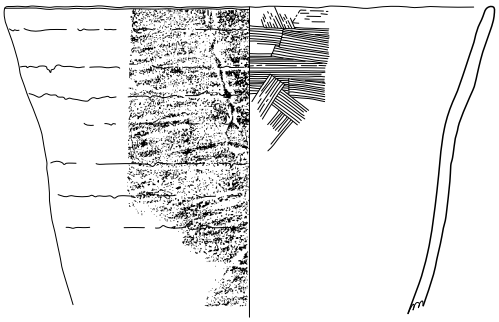
1575.



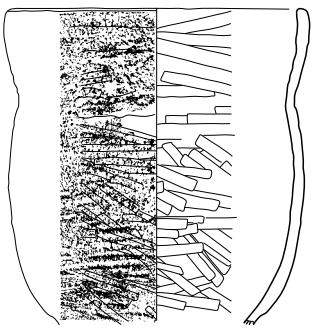
1576.



1577.



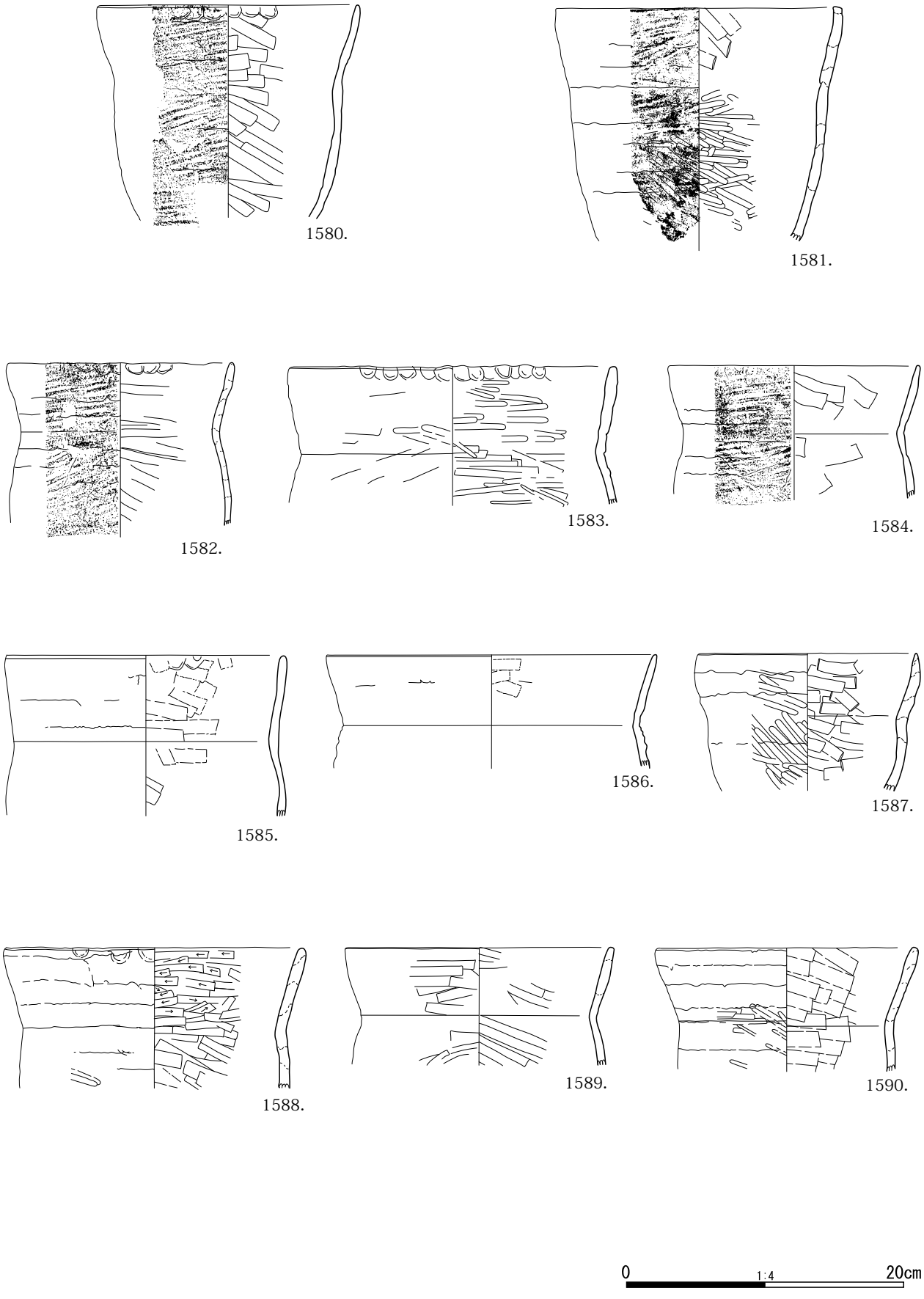
1578.



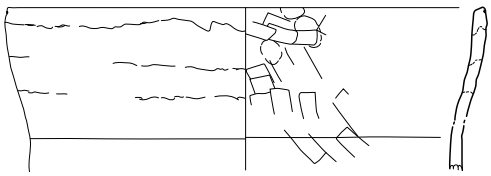
1579.

0 1:4 20cm

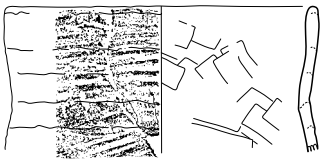
第 220 図　第 38 号竪穴住居跡出土の土器（2）　S＝1／4



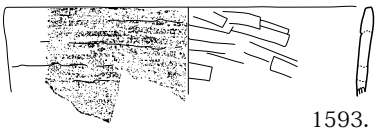
第 221 図　第 38 号竪穴住居跡出土の土器（3）　S＝1／4



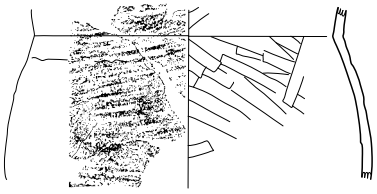
1591.



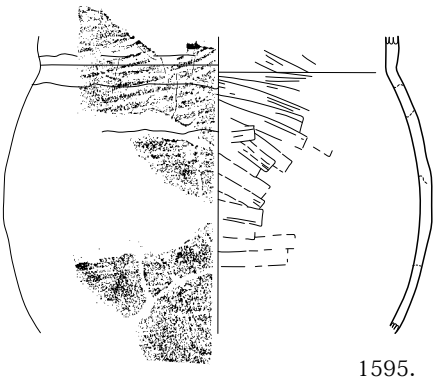
1592.



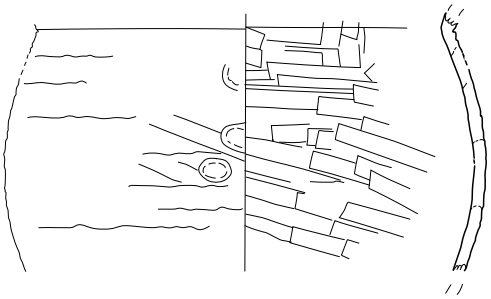
1593.



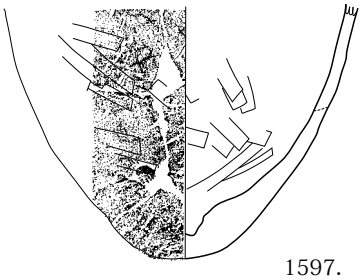
1594.



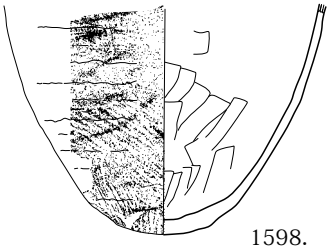
1595.



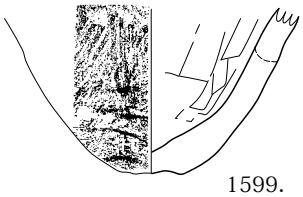
1596.



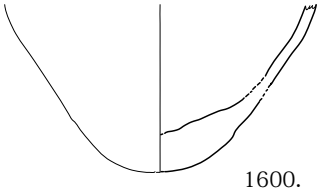
1597.



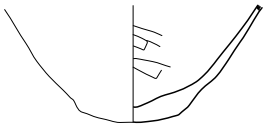
1598.



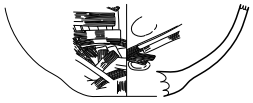
1599.



1600.



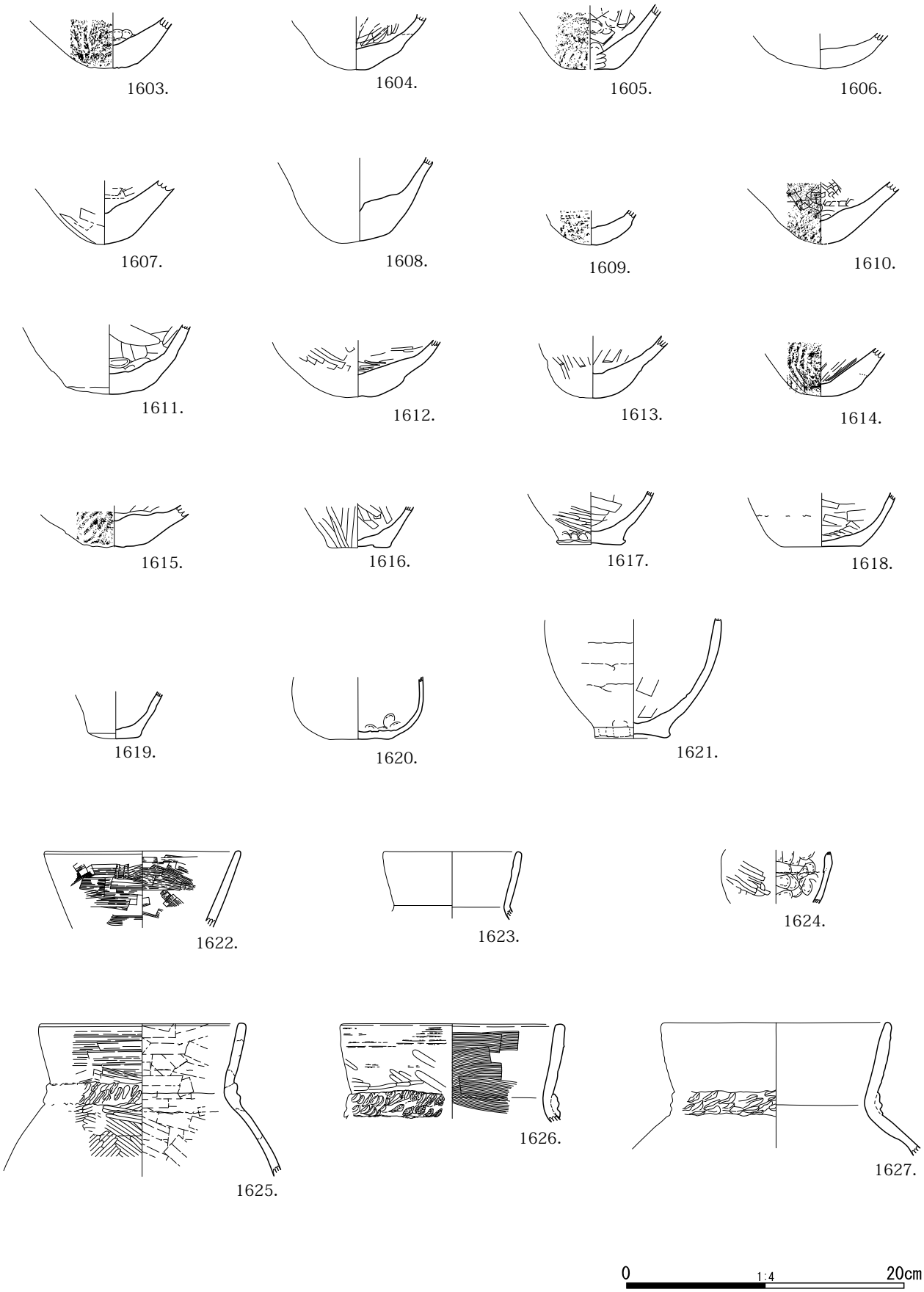
1601.



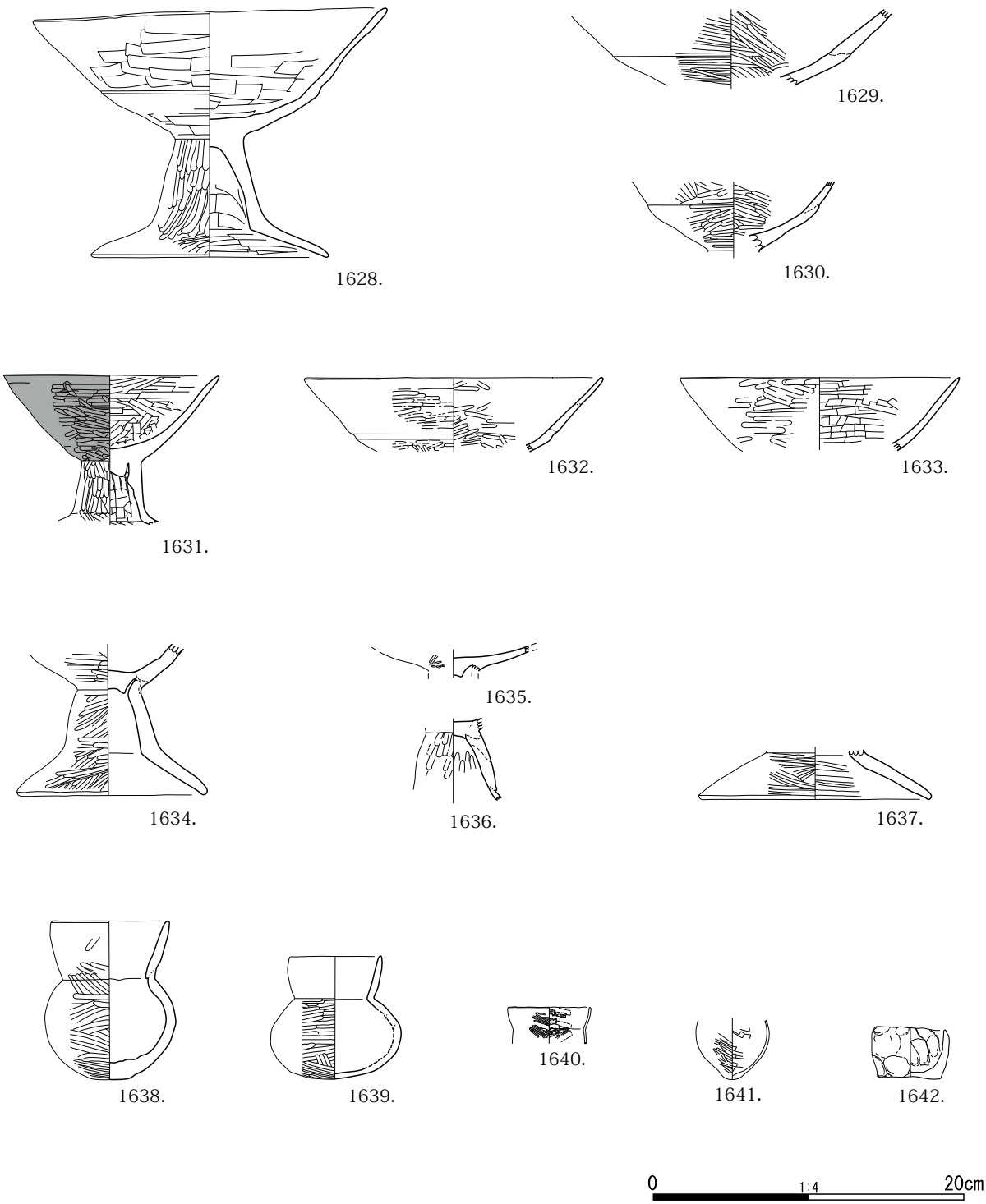
1602.

0 1:4 20cm

第 222 図　第 38 号竪穴住居跡出土の土器（4）　S＝1／4



第 223 図　第 38 号竪穴住居跡出土の土器（５）　Ｓ＝１／４



第 224 図　第 38 号竪穴住居跡出土の土器（6）　S＝1／4

■石器（第 231 図）

縄文時代および弥生時代遺物の混入と考えられる資料が若干出土している。1769 は打製石斧有抉群の未成品である。剥片を素材とする。弥生時代と所産である可能性が指摘できるが、古墳時代まで残存した可能性を排除できないため、掲載している。1858 は敲打痕が残る尾鈴山産溶結凝灰岩製の剥片である。縄文時代の磨敲石の破損品か。

■第 71 号竪穴住居跡（SA71　第 232 図）

概要　B 区のほぼ中央部から検出された。一辺が４mの方形プランを持つ。床面から検出されたピットには主柱穴の可能性を持つものもあるが、厳密には断定できない。グリッドの土層断面図作成用ベルトにかかった部分では掘り込みの様相がよく観察できた。これによると基本層序第Ⅰ層を上下に分けた場合、第Ⅰ層下部を当時の地山として、第Ⅰ層下部に遺構を掘り込んでいる様子がよくわかる。

遺物は土師器を中心によく残存していた。特筆される資料としては、土師器の甕破片が重ねて置かれたその下に出土した磨製石斧などがある。

出土遺物

■土器（第 233・234 図）

甕（1655 ～ 1665）が多く出土し、壷・高坏などのセットが揃う。詳細は後頁の該当する観察表を参照されたい。

■石器（第 234 図）

特筆すべき石器として、床面から出土した９点の臼玉と磨製石斧がある。臼玉については他の玉類とまとめて本節に後述する。

□磨製石斧（第 234 図 1859）

淡緑色を呈する緑色岩を用いた全面磨製の石斧である。扁平で側縁も面取りし板状に仕上げている。刃部は多くを欠損するが、両刃に近い。帰属が弥生時代以前に遡る可能性もあるが、床面から出土の土師器甕の下部に重なるように出土しており、SA71 の住人によって存在が認知されていたことは疑いなかろう。

■第 72 号竪穴住居跡（SA72　第 265 図）

概要　B 区中央部で検出された。東西方向に主軸のある方形プランである。一辺約 3.8 mの方形プランを持ち、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。

出土遺物（第 235 ～ 241 図）

■土器（第 235 ～ 238 図）

土師器は甕・壷・高坏でセットを構成する。甕の調整にはバリエーションがあるが、形態的な差異には乏しい。

口唇部を指でつまみあげる事により、細かい波状を呈するものが多い。また外面に粘土紐の輪積痕が明瞭に残る。

1694 は B 類の壷、1696 ～ 1700 は 1 類の高坏である。

遺構の廃絶時期であるが、甕 B 類の口縁部は緩やかに外反し、まだ直口化していない。C 類とした資料も、直口化しつつも、まだ僅かに口縁部が外反していた面影を残している。これらの点を考慮すると、５世紀中葉が推測される。

第 235 図 1862 の須恵器大甕は当該住居に伴うと言うよりは、当該住居の廃絶後に投棄されたものと考えられる。当該住居が輪郭が検出されるより以前の段階で、すでに須恵器大甕の出土は確認され、当初は「須恵器片集中区」と認定して記録を進めていたことも、その理由の一つである。

■石器（第 239 ～ 241 図）

ほとんどが覆土上層からの出土で、縄文時代の所産であるが、当該 b 住居の廃絶後、一定期間が立ち、覆土の堆積進んだ後に、土師器、須恵器などとともに一括廃棄されたものを含むと思われる。ただし第 241 図 1730・1731 は床面近くの出土状況であることから、この竪穴住居に本来的に伴う可能性が高い。

■第 73 号竪穴住居跡（SA73）

概要　遺構の平面形はやや歪な方形で、一辺約３mを測る。壁面ほぼ垂直に立ち上がる。

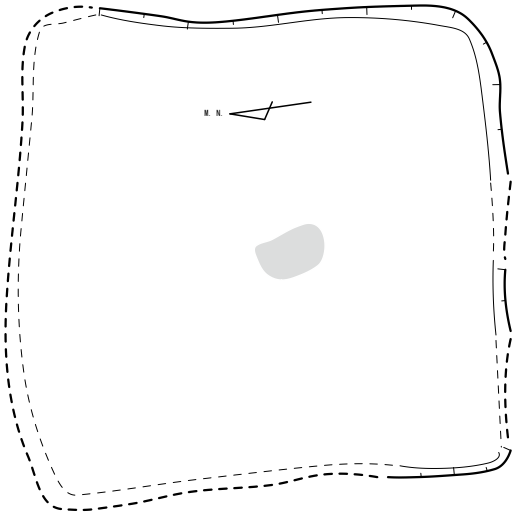
出土遺物

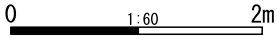
■土器

遺構内部から出土した遺物は少なく、図化は行なっていない。

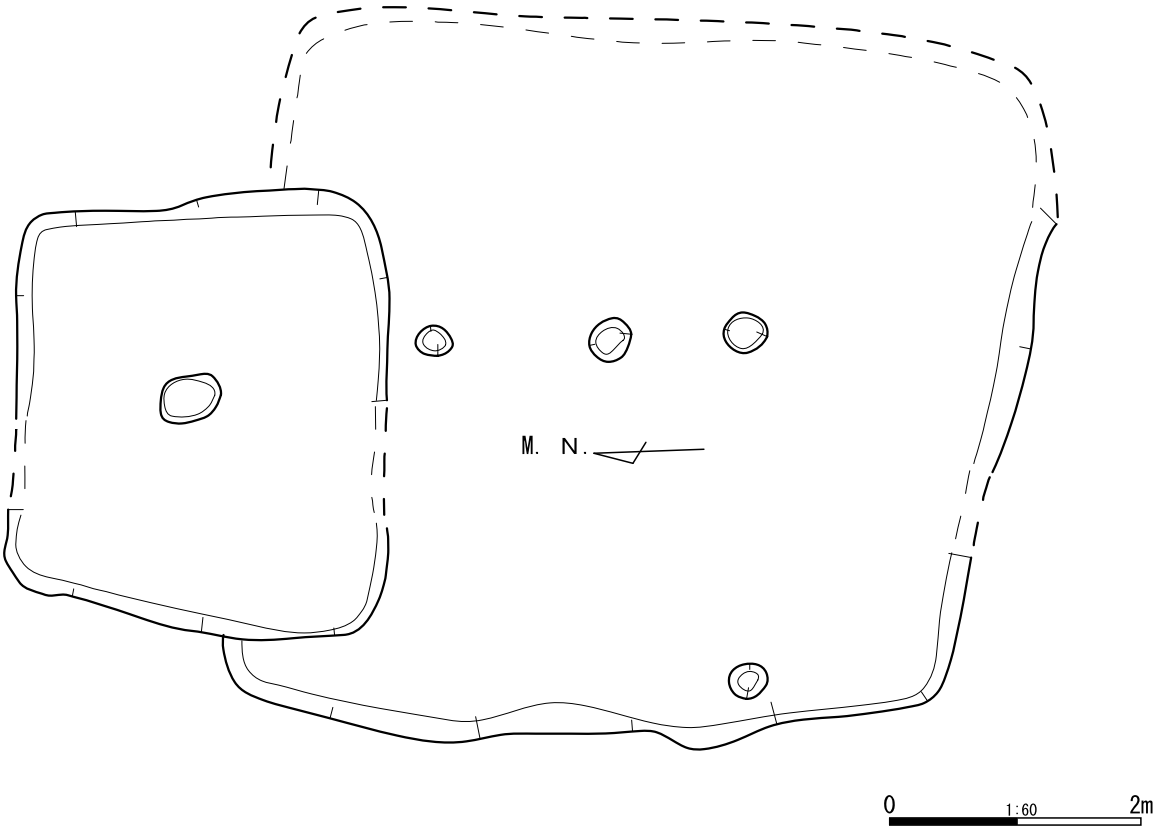
■第 74・75 号竪穴住居跡
（SA74・75　第 229 図）

概要　B 区北部から検出された。一応竪穴住居の類型として数えたが、いずれも確実ではない。

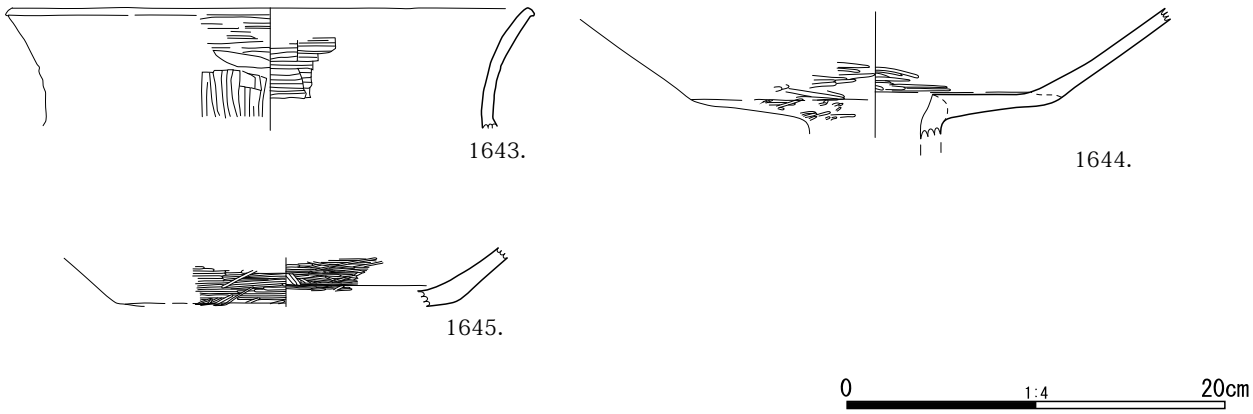




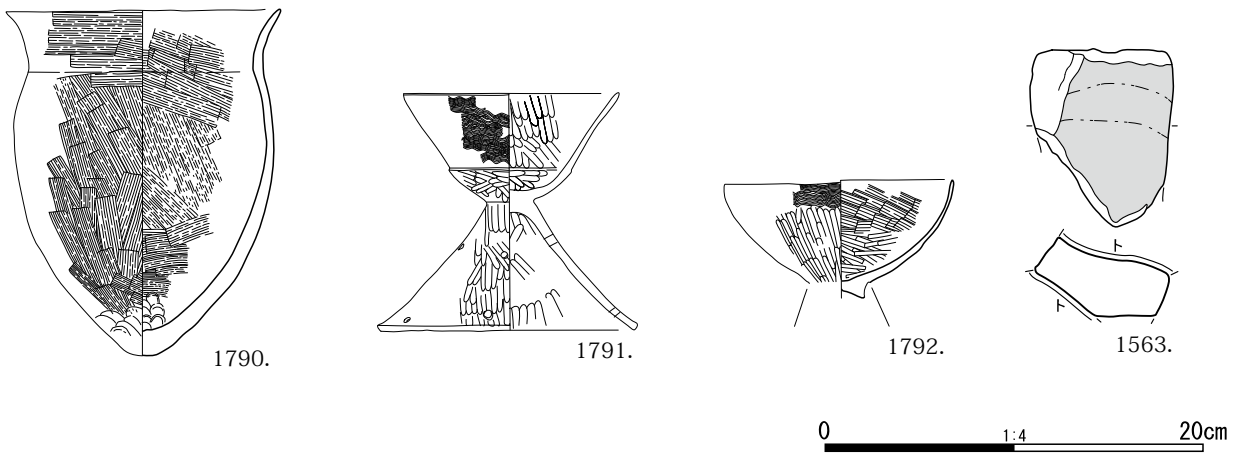
第 225 図　第 45 号竪穴住居跡（SA45）　Ｓ＝１／６０



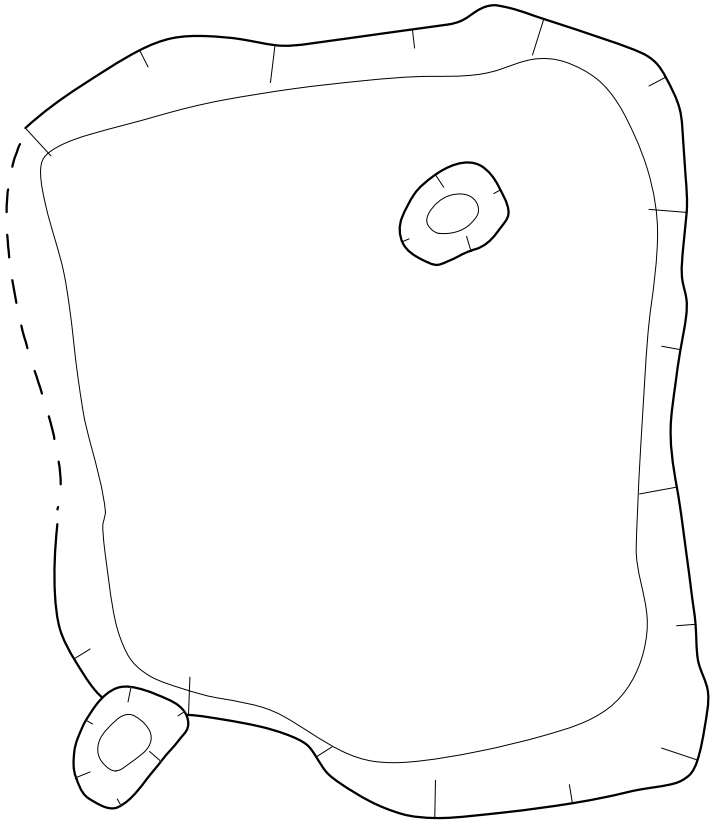
第 226 図　第 16・46 号竪穴住居跡（SA16・46）　S= １／６０



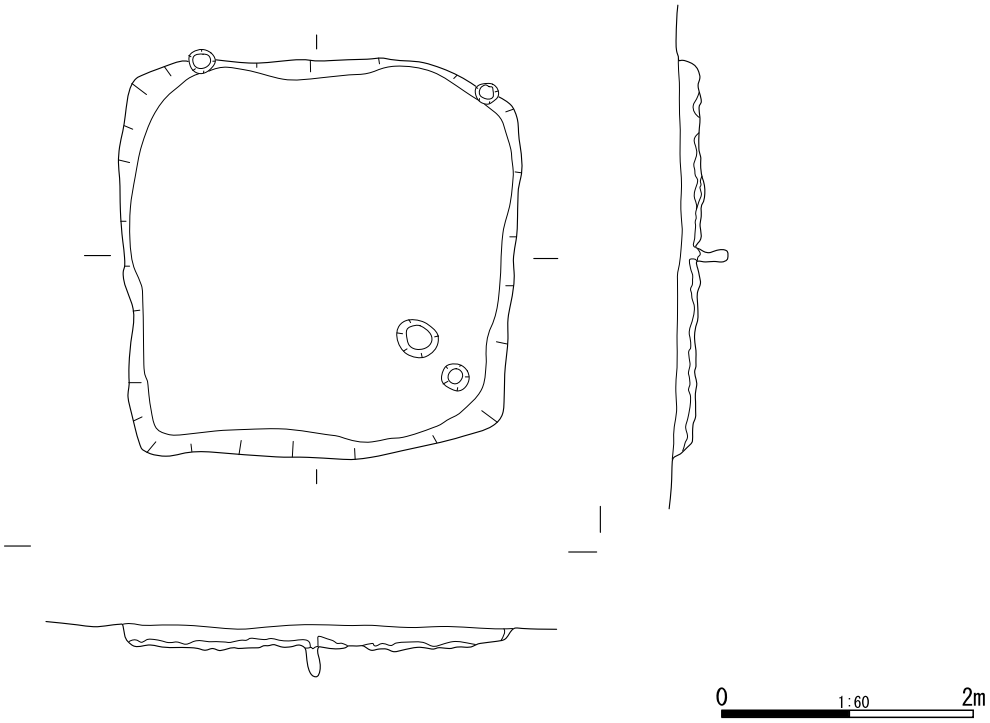
第 227 図　第 46 号竪穴住居跡出土の土器　Ｓ＝１／４



第 228 図　第 47 号竪穴住居跡出土の土器　S＝1／4



第 229 図　第 74 号竪穴住居跡（SA74）　S= 1／２０



SA70 土層注記

１：黒褐色（10 Ｙ Ｒ ２／ 2.5）軟質で、上半部に少量の炭化材（径 10 ～ 20㎜）を含む。

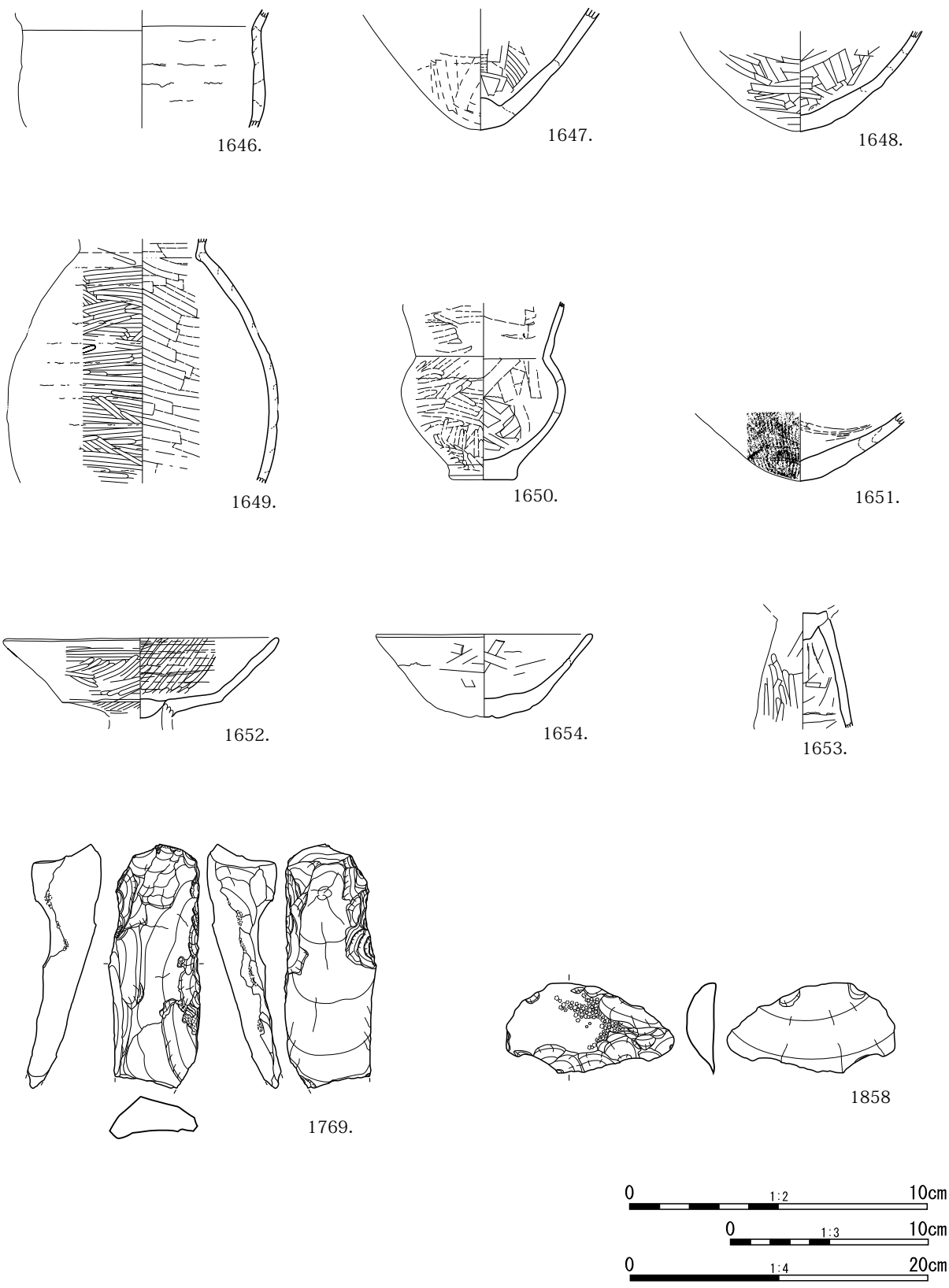
２：暗褐色（10 Ｙ Ｒ 2.5 ／３）やや硬質で、一部、Ⅳ層ブロックをマーブル状に含む。

３：暗褐色（10 Ｙ Ｒ ３／３）硬質で、一部、Ⅳ層ブロックをマーブル状に含む。

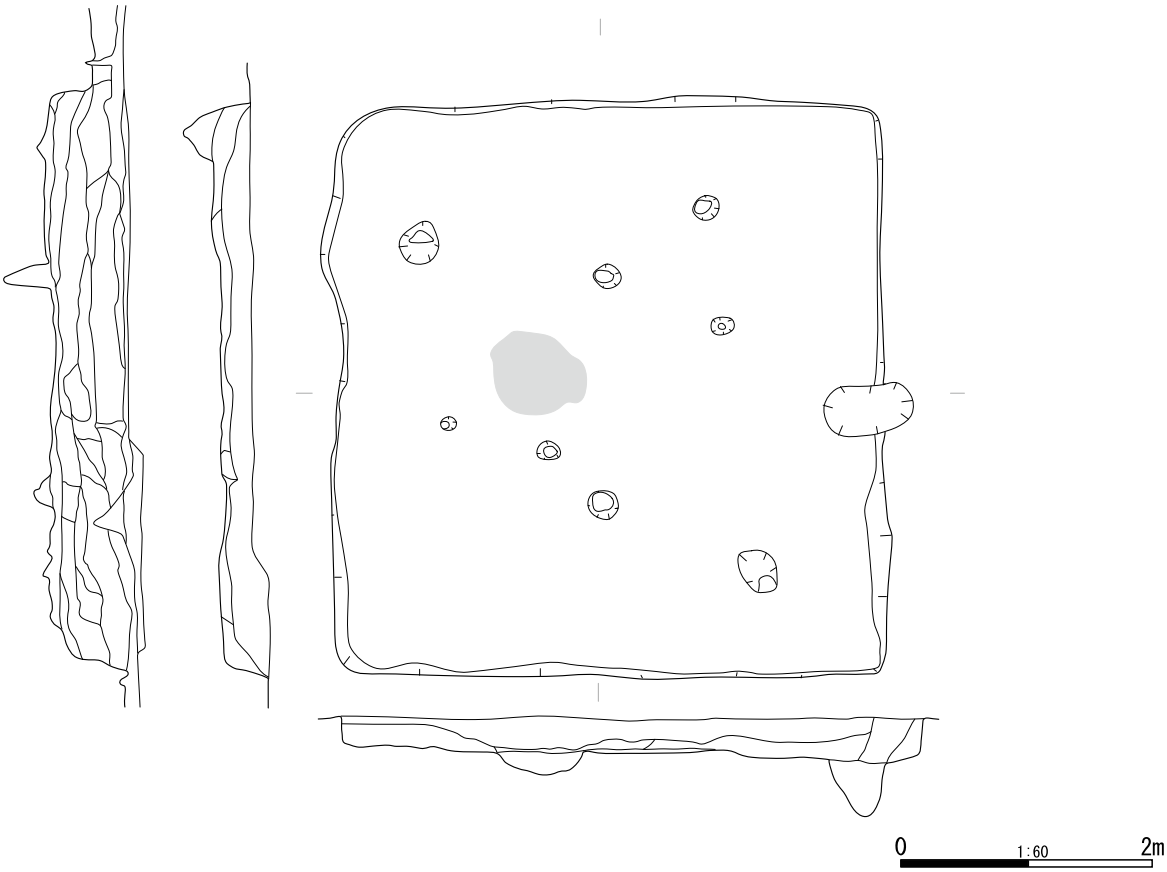
４：暗褐色（10 Ｙ Ｒ ３／３）やや硬質で、一部、Ⅳ層ブロックをマーブル状に含む。

５：黒褐色（10 Ｙ Ｒ ２／２）軟質。

第 230 図　第 70 号竪穴住居跡（SA70）　Ｓ＝１／６０



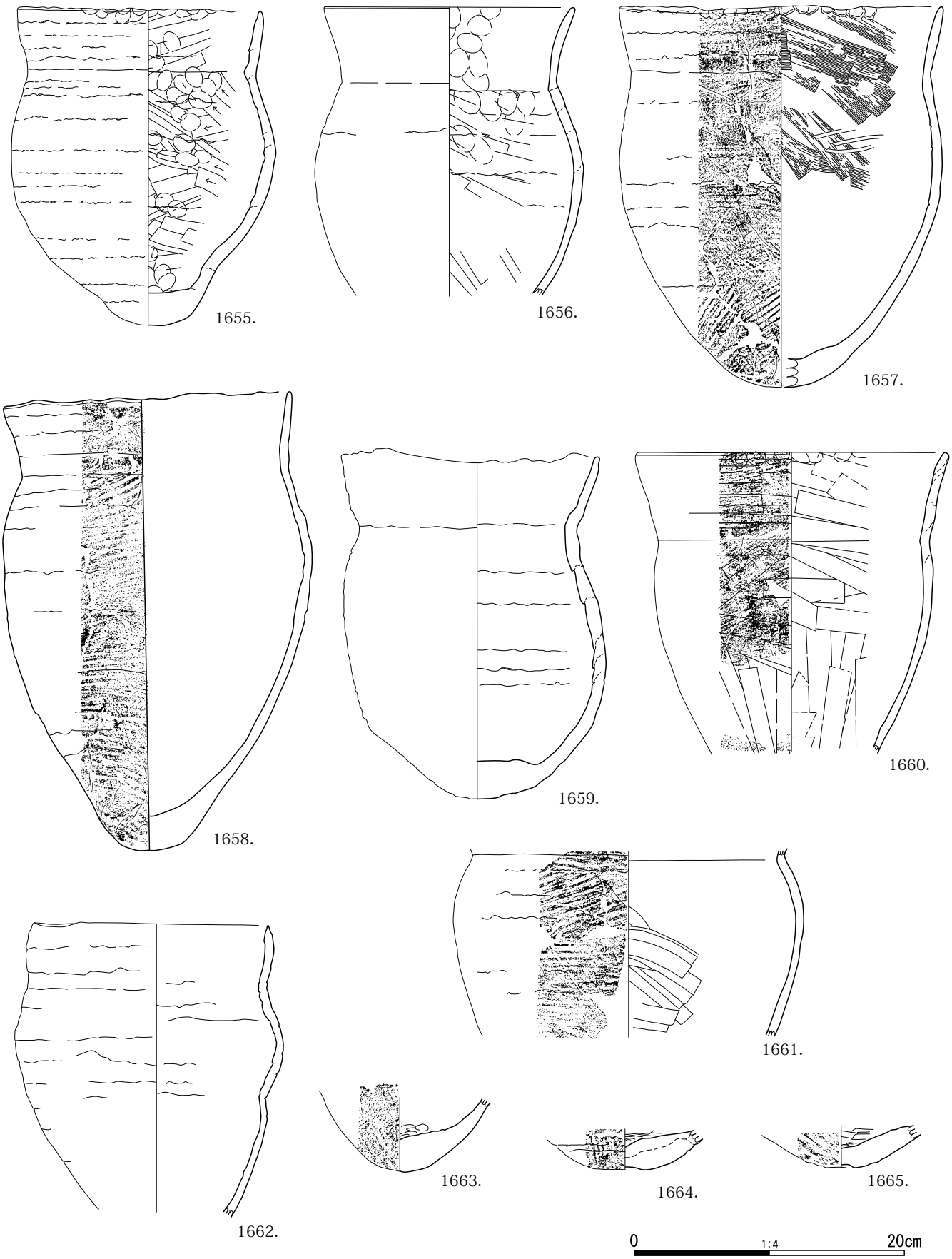
第 231 図　第 70 号竪穴住居跡出土の土器・石器　1858：S＝1／2，1769：S＝1／3，1646～1653：S＝1／4



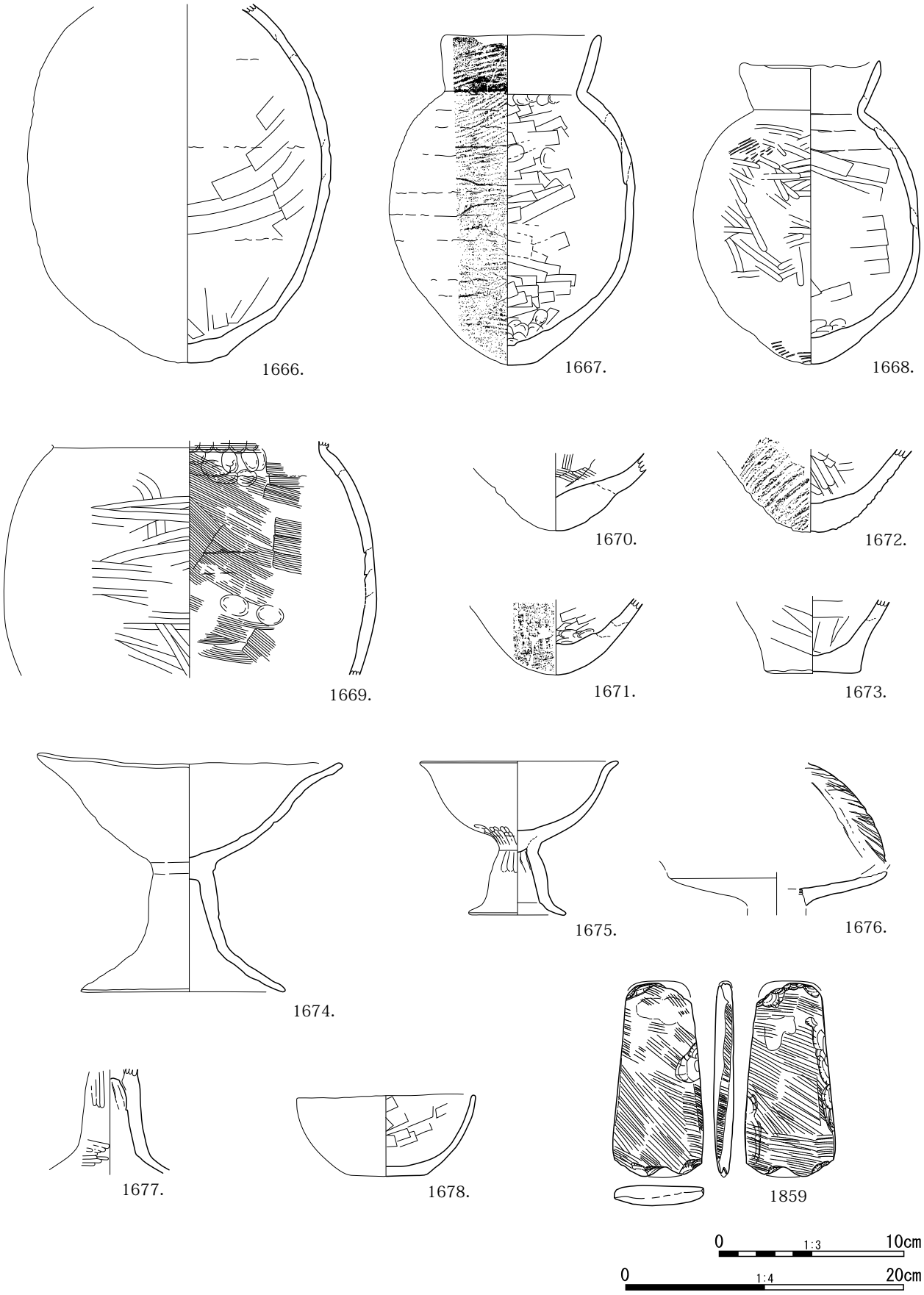
SA71 土層注記

Ⅰ－ａ：黒褐色（10 Ｙ Ｒ 2 ／ 3 ）軟質で粘性に乏しい。炭化物（径 1 ～ 5 ㎜）をごく僅かに含む。
Ⅰ－ｂ：黒褐色 (7.5YR 3 ／ 2) やや硬質で粘性に乏しい。炭化物（径Ⅰ～ 2㎜）、Ⅳ層ブロックを僅かに含む。
1：黒褐色（10 Ｙ Ｒ 2 ／ 2.5）やや硬質で粘性に乏しい。炭化物（径 1 ㎜）、焼土粒を僅かに含む。
2：炭化物（径 1 ㎜）、焼土粒をごく僅かに含む。
3：黒色（10 Ｙ Ｒ 2 ／ 2.5） 1 層より明るい色調。やや硬質で粘性に乏しい。炭化物（径 1 ～ 3 mm）、焼土粒（径 1 ㎜）をごく僅かに含む。
4：黒褐色（10 Ｙ Ｒ 2 ／ 3 ）軟質。炭化物（径 1 ～ 3 mm）、焼土粒を僅かに含む。
5：黒褐色（10 Ｙ Ｒ 2 ／ 2.5）軟質で粘性に乏しい。炭化物（径 1 ～ 3 mm）、焼土粒、Ⅳ層ブロック（径 1 ㎜）をごく僅かに含む。
6：暗褐色（10 Ｙ Ｒ 2.5 ／ 3 ）軟質で粘性に乏しい。 焼土（径 1 ～ 3 mm）、炭化物（径 1 ㎜）、Ⅵ層ブロック（径 10 ～ 40㎜）をごく僅かに含む。
7：黒褐色（10 Ｙ Ｒ 2 ／ 3 ）軟質で粘性に乏しい。炭化物（径 1 ～ 3 mm）、焼土粒（径 1 ㎜），Ⅵ層ブロック（径 5 ㎜）をごく僅かに含む。
8：黒褐色（10 Ｙ Ｒ 2 ／ 2 ）軟質で粘性に乏しいく、上下の層に比べ、黒味が目立つ。炭化物（径 1 ～ 3 mm）、 焼土粒を僅かに含む。
9：黒褐色（10 Ｙ Ｒ 2.5 ／ 2.5）軟質で、粘性に乏しい。炭化物（径 1 ～ 2 ㎜）、焼土粒をごく僅かに含む。
10：褐色（10 Ｙ Ｒ 2.5 ／ 3 ）軟質で、やや粘性に富む。
11：黒褐色（10 Ｙ Ｒ 2.5 ／ 2 ）やや軟質で、やや粘性に富む。Ⅳ層ブロック（径 20 ～ 30㎜）を斑状に僅かに含む。
12：暗褐色（10 Ｙ Ｒ 2.5 ／ 3 ）やや硬質で、粘性に乏しい。Ⅳ層ブロック（径 10 ～ 15㎜）をごく僅か、炭化物（径 1 ～ 3 ㎜）をわずかに含む。
13：暗褐色（10 Ｙ Ｒ 2.5 ／ 3.5）軟質。Ⅳ・Ⅵ層ブロック（径 10 ～ 15㎜）を僅かに含む。
14：暗褐色（10 Ｙ Ｒ 2.5 ／ 3.5）13 層よりも明るい色調。やや軟質で粘性に富む。
15：黒褐色（10 Ｙ Ｒ 2 ／ 2 ）軟質で粘性に乏しい。焼土粒（径 1 ㎜）、炭化物粒（径 1 ～ 4 ㎜）をまばらに含む。
16：黒褐色（10 Ｙ Ｒ 2 ／ 2.5）やや硬質で粘性に乏しい。焼土粒（径 1 ㎜）、炭化物粒（径 1 ㎜）を僅かに含む。
17：黒褐色（7.5 Ｙ Ｒ 3 ／ 2.5）軟質で粘性に乏しい。Ⅵ層ブロック（径 20 ～ 30㎜）をまばらに含む。

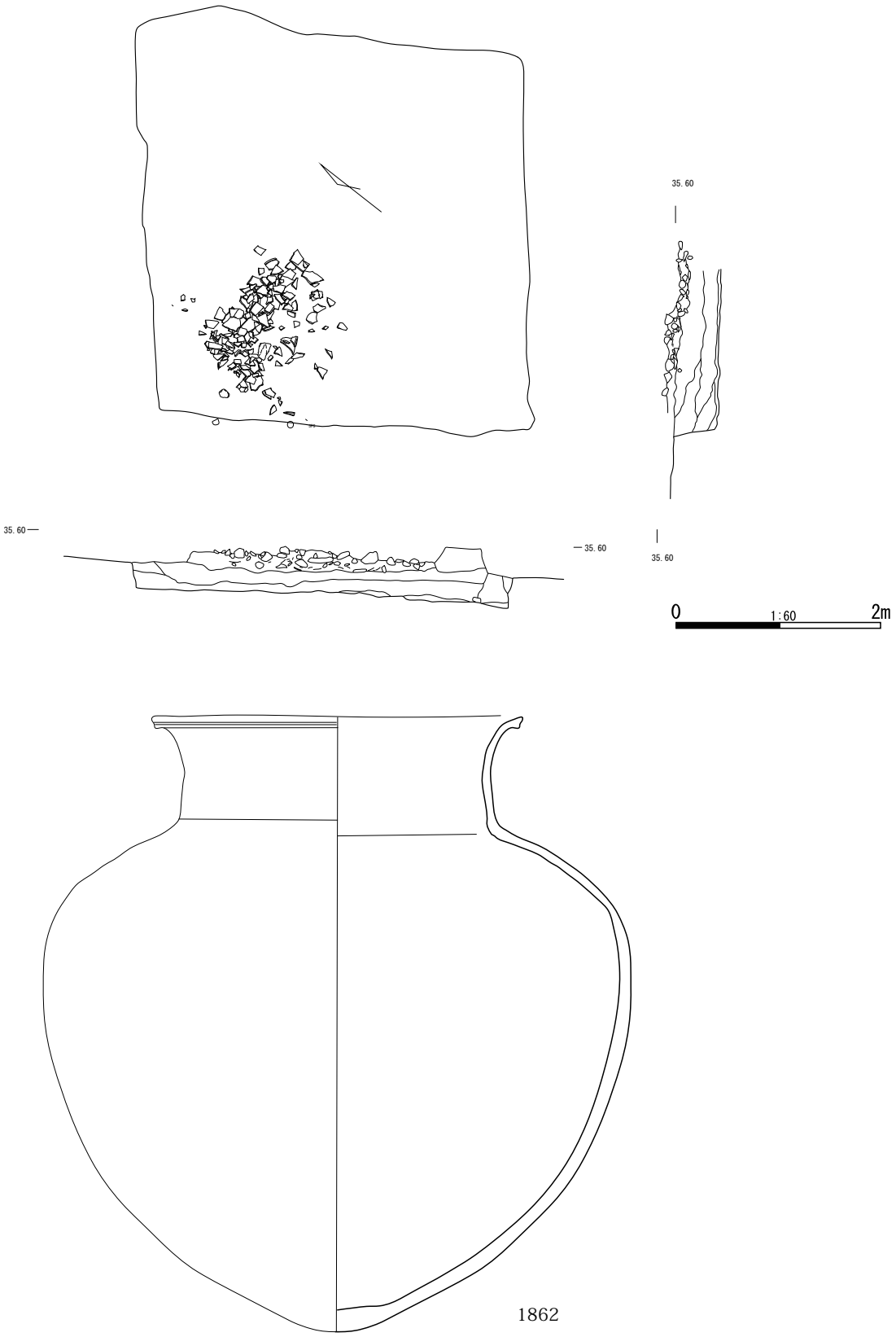
第 232 図　第 71 号竪穴住居跡（SA71）　Ｓ＝１／６０



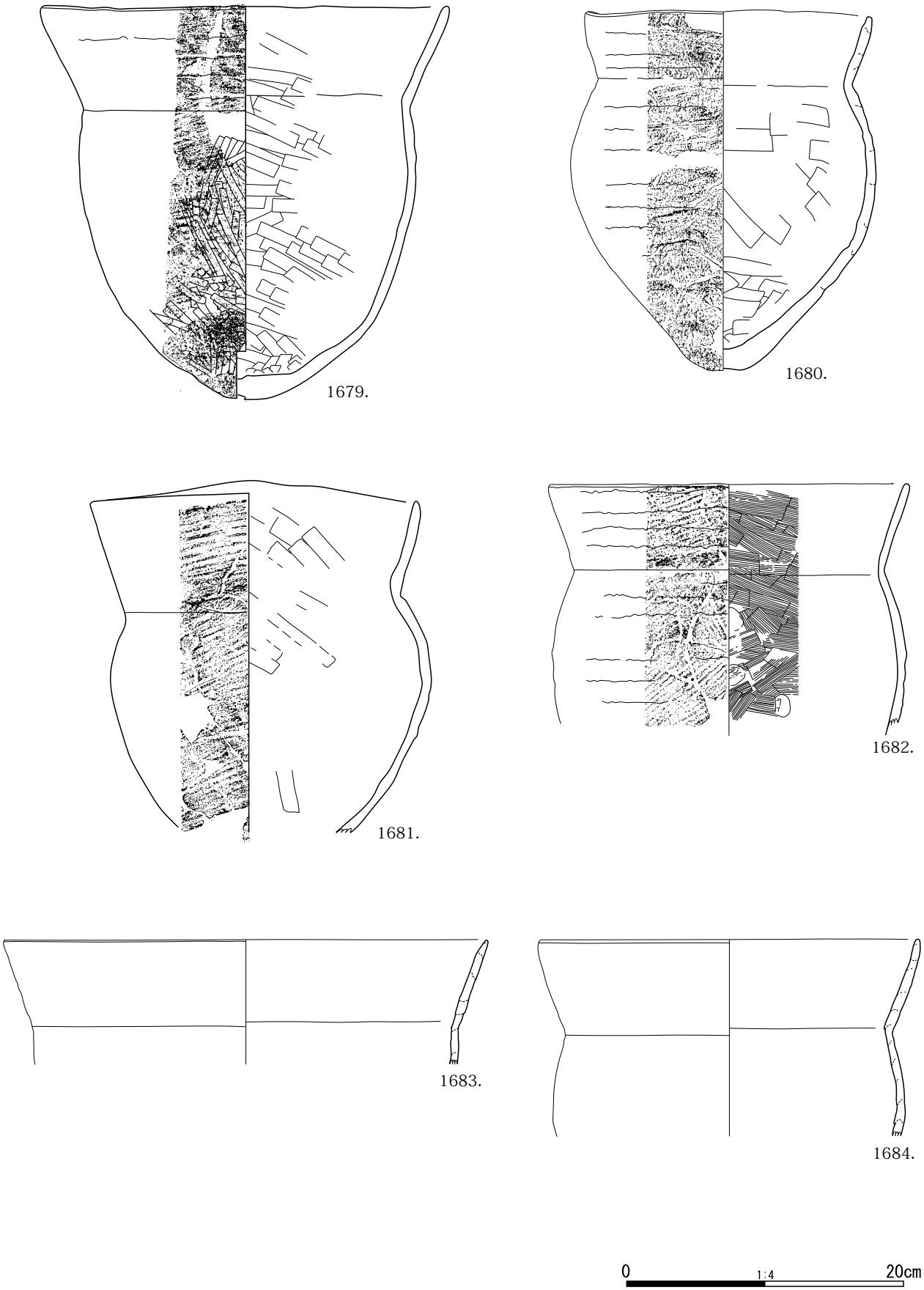
第 233 図　第 71 号竪穴住居跡出土の土器（1）　S＝1／4



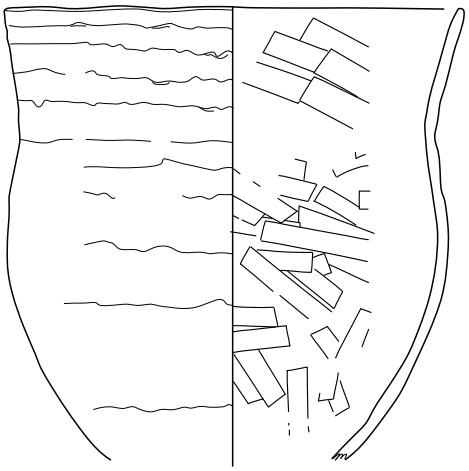
第 234 図　第 71 号竪穴住居跡出土の土器（2）・石器　1859：S＝1／3，1666 ～ 1678：S＝1／4



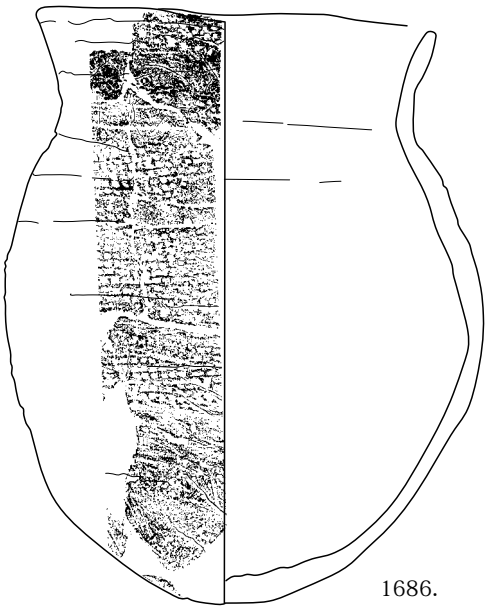
第 235 図　第 72 号竪穴住居跡（SA72）における須恵器大甕とその出土状況　上：Ｓ＝１／６０，下：Ｓ＝１／８



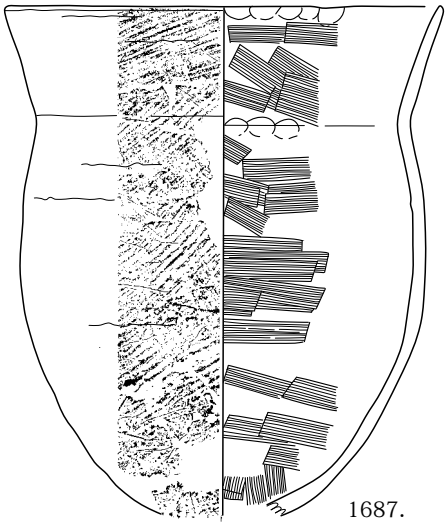
第 236 図　第 72 号竪穴住居跡出土の土器（1）　S＝1／4



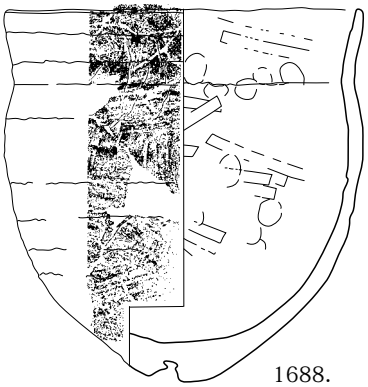
1685.



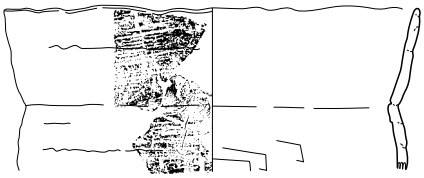
1686.



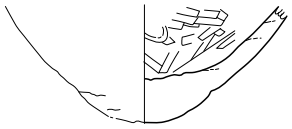
1687.



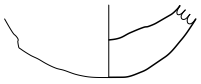
1688.



1689.



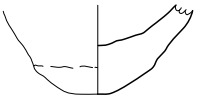
1690.



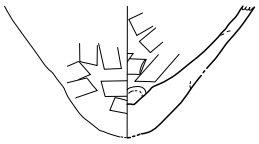
1691.

0 1:4 20cm

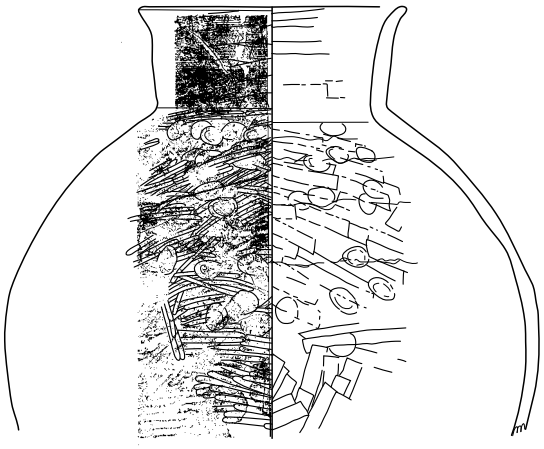
第 237 図　第 72 号竪穴住居跡出土の土器（2）　S＝1／4



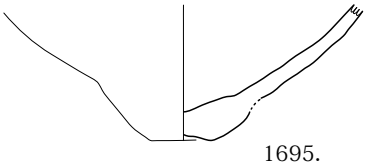
1692.



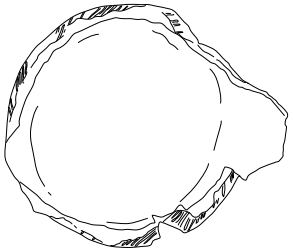
1693.

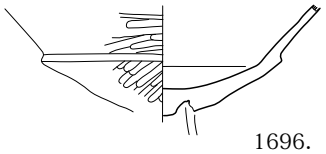


1694.

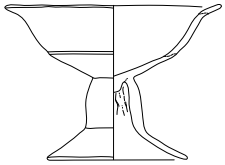


1695.

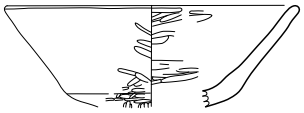




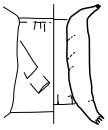
1696.



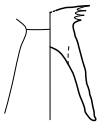
1697.



1698.



1699.

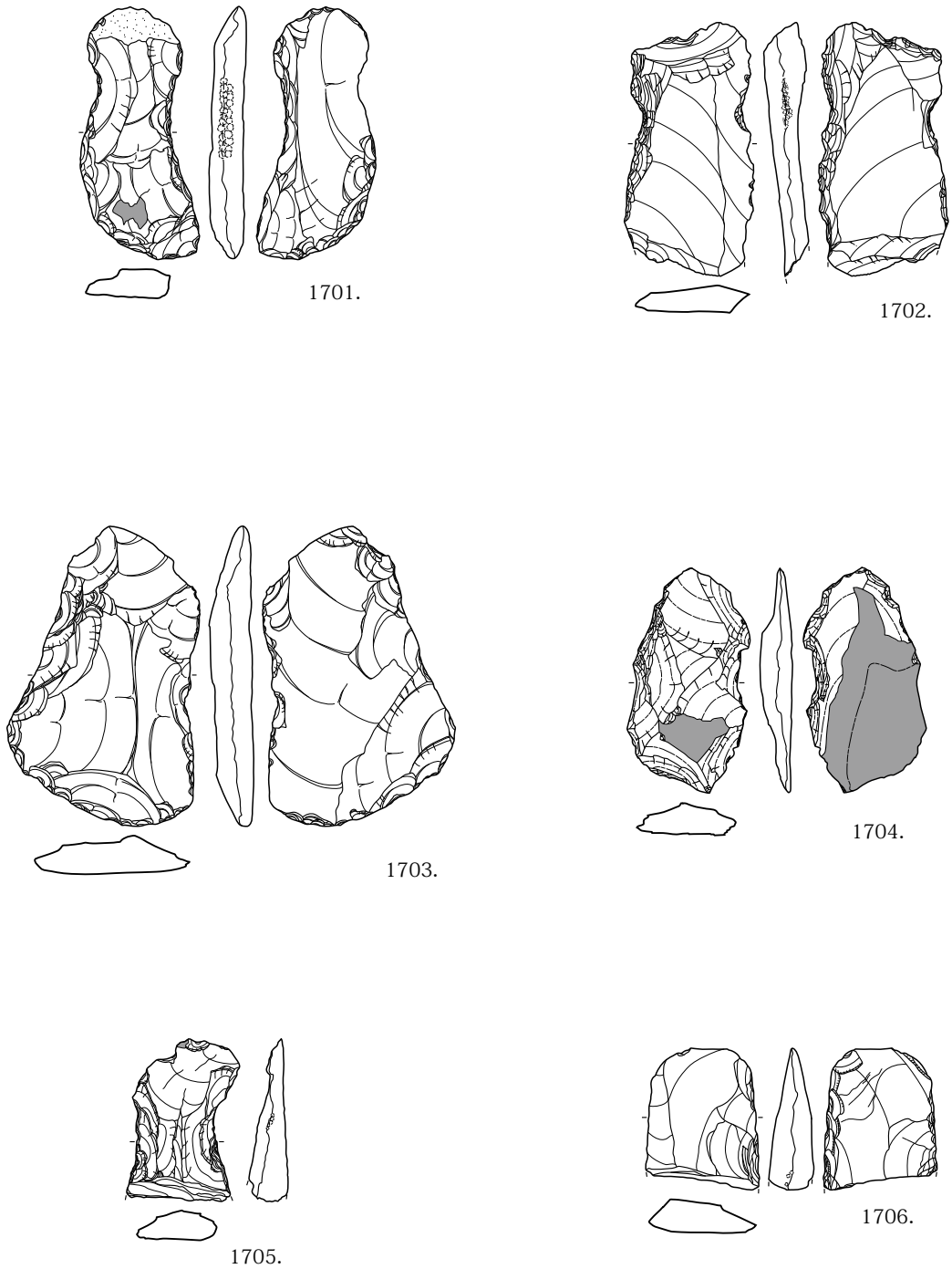


1700.

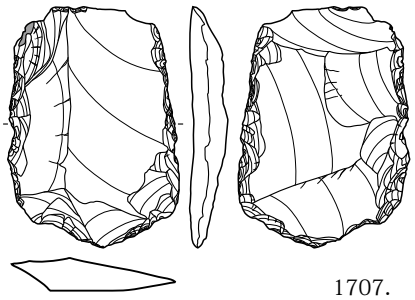
1860.

0 1:4 20cm

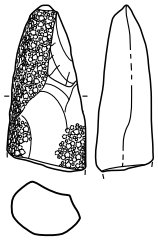
第 238 図　第 72 号竪穴住居跡出土の土器（3）　S＝1／4



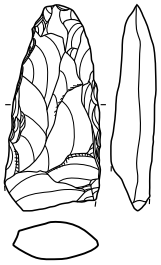
第 239 図　第 72 号竪穴住居跡出土の石器（1）　S＝1／3



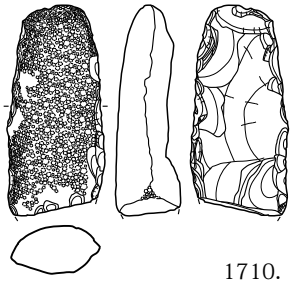
1707.



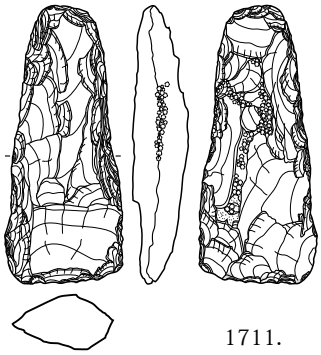
1708.



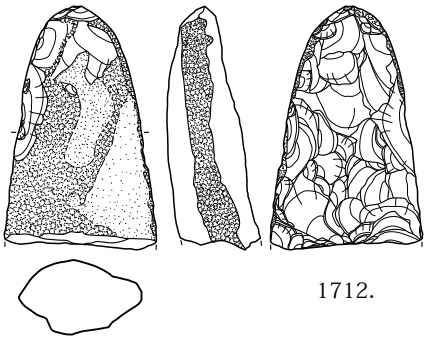
1709.



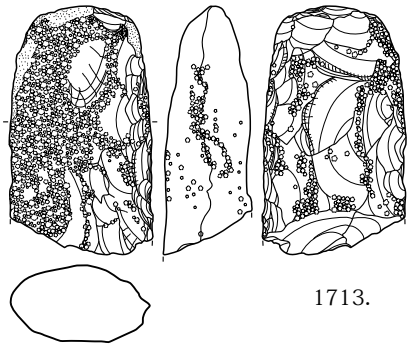
1710.



1711.



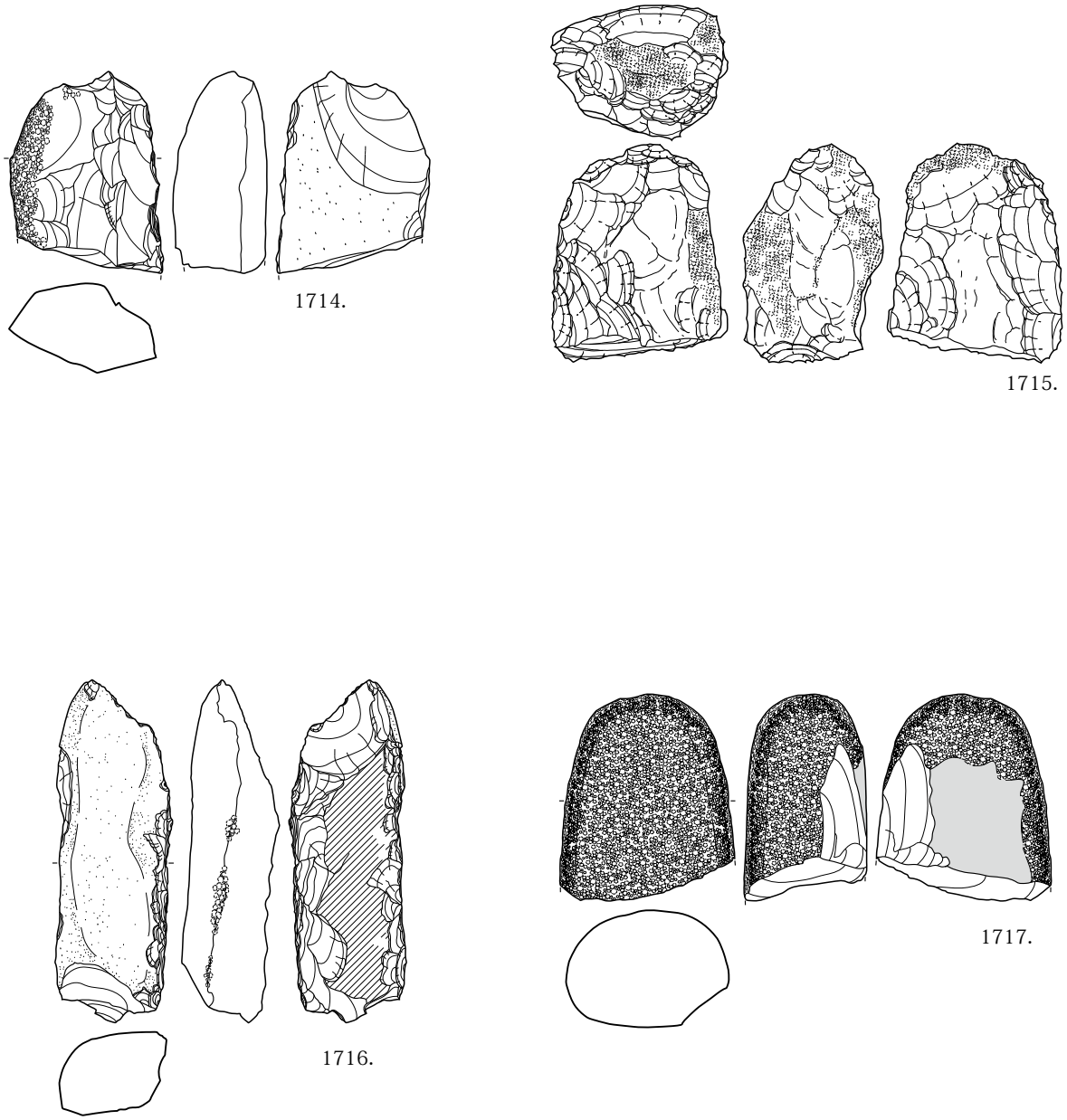
1712.



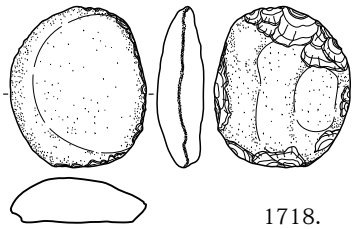
1713.

0 1:3 10cm

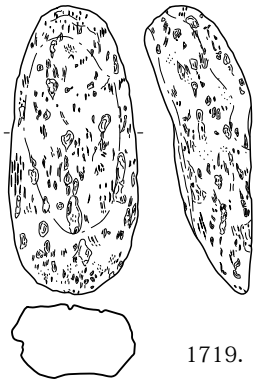
第 240 図　第 72 号竪穴住居跡出土の石器（2）　S＝1／3



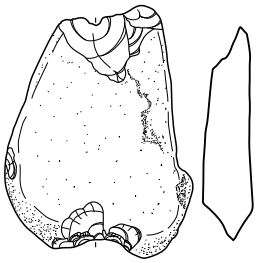
第 240 図 -2　第 72 号竪穴住居跡出土の石器（2）　S＝1／3



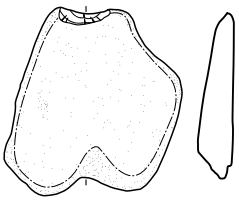
1718.



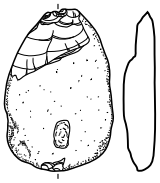
1719.



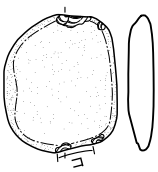
1720.



1721.



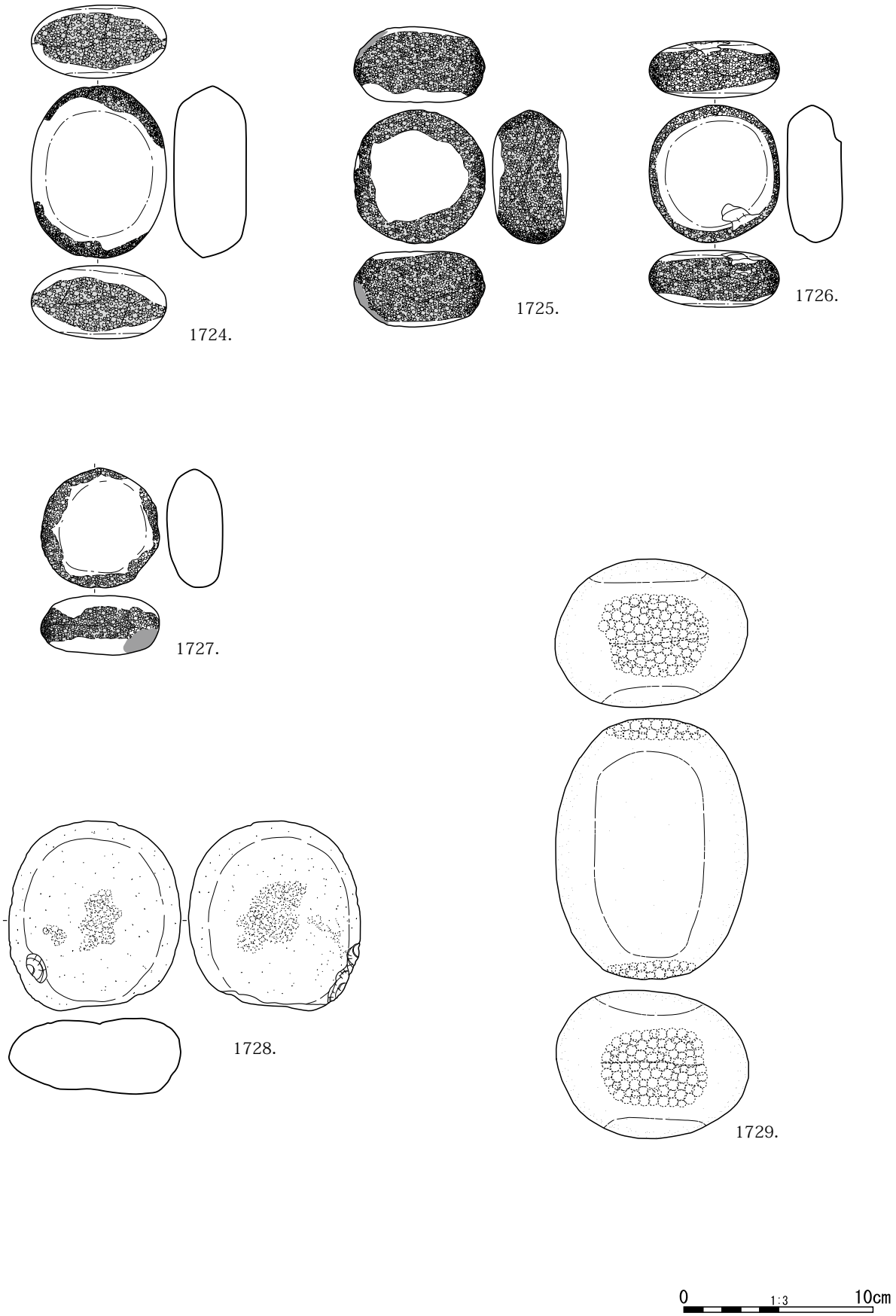
1722.



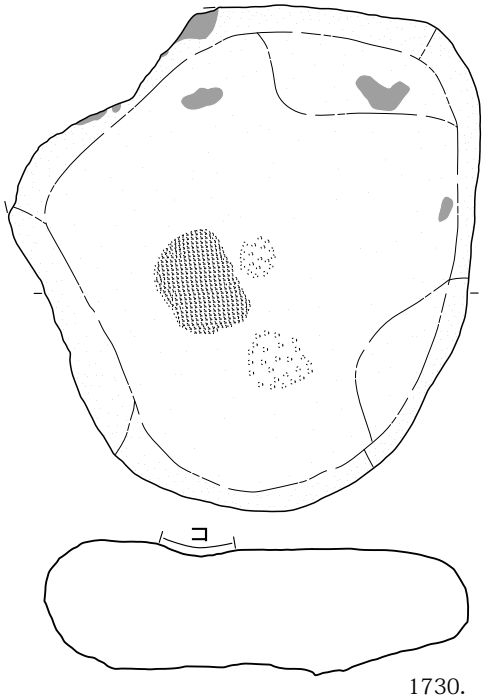
1723.

0 1:3 10cm

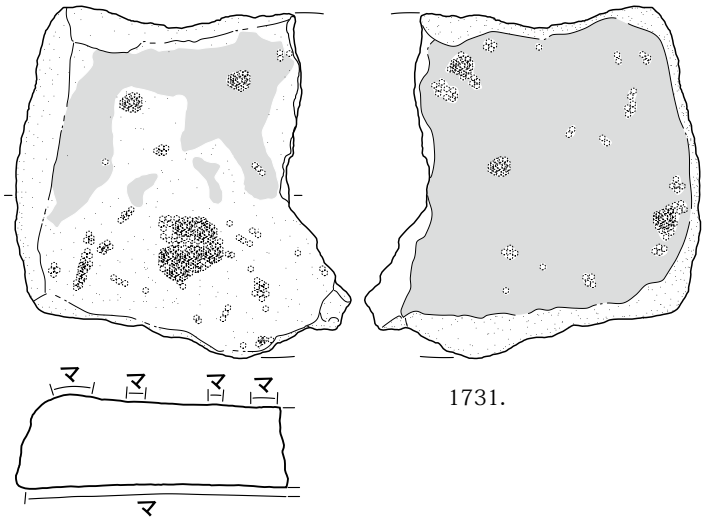
第 240 図 -3　第 72 号竪穴住居跡出土の石器（2）　S＝1／3



第 241 図　第 72 号竪穴住居跡出土の石器（3）　S＝1／3



1730.



1731.

0 1:3 10cm

0 1:4 20cm

第 241 図 -2　第 72 号竪穴住居跡出土の石器（3）　1724 ～ 1729：S ＝ 1 ／ 3，1730・1731：S ＝ 1 ／ 4

SA74 は長軸２ｍ×短軸 1.7 ｍの小さな方形プランで、土坑とした方がより適切かもしれない。

SA75 は図化していないが、竪穴住居跡の床面のみが残った可能性があるものであるが、上部が削平されていたわけではないので、厳密には性格不明の土色変化とせざるを得ない。出土遺物もまとまったものはなく、様相不明である。

第 76 号竪穴住居跡（第 242 図）

概要　Ｂ区中央部の調査区際にわずかに東隅部をかけた位置かえら検出された。一辺が約６ｍの略方形プランであり、Ａ区の SA06 や輪郭が不完全ではあるがＣ区の SA46 と並ぶ規模のサイズで、、本遺跡最大の面積を誇る竪穴住居跡となる。

床面の周囲には壁溝が巡る。主柱穴は明瞭な配列を見せる４本柱である。壁面は若干傾斜が大きい部分も認められる。

出土遺物

■土器（第 243 ～ 245 図）

床面からはまとまった量の土師器の出土が確認された。須恵器は出土していない。甕（1732 ～ 1739）、壷（1750 ～ 1754）、高坏（1755 ～ 1763）、鉢（1764 ～ 1767）でセットを構成する。詳細は後頁の該当する観察表を参照されたい。

■石器（第 245 図）

覆土を中心に、縄文時代の所産と考えられる石器類が多く出土したが、床面から出土し、本来的に当該住居の帰属と考えられる遺物は少ない。

1768 は砂岩製の敲石である。棒状礫を素材とするもので、普遍的な石器であるから、一応この住居に伴う可能性も考えておきたい。

■第 77 号竪穴住居跡（第 246 図）

概要　Ｂ区南部から検出された。ＳＡ 79 とともに、Ｂ区北部・Ｃ区の古墳時代集落の中心から離れ、その中間に位置する竪穴住居跡のうちの１軒である。北側縁辺を土層観察用トレンチ掘削の際に、未記録のまま掘り進めてしまっている。

そのため、全容が明らかでないが、床面に残る壁溝の位置から一辺約３ｍの方形プランを有すると推定される。

床面の北辺、南辺、東西辺の一部には壁溝が巡る。床面からは他に複数のピットが検出されているが、主柱穴の配列は明らかではない。床面の中央部には焼土の分布が確認され、地床炉と評価できよう。壁面は上端ラインと下端ラインの差が大きく、若干傾斜が大きい。

出土遺物

■土器

まとまった量の土器の出土は確認されなかった。

■石器（第 247 図）

1770 は強いて抽出したものであるが、磨敲石としたものである。半分に破損しているが、尾鈴山産溶結凝灰岩製の扁平棒状礫を素材とし、その平坦面に磨滅痕、端部に敲打痕が観察される。用途は不明でり、無論、縄文時代や弥生時代の所産である可能性は排除できない。

■第 79 号竪穴住居跡（SA79）

概要　SA77 とともに集落の中心から外れた位置から検出された竪穴住居跡である。長軸約 3.7 ｍ×短軸約 3.5 ｍのほぼ方形のプランを持つ。後世の溝状遺構（SE18・19）に切られる。床面の中央には焼土を「含む土壌の範囲が認められ、地床炉と評価できる。床面からは複数のピットが検出されているが、主柱穴などの配列は明らかでない。

出土遺物

■土器

若干の土師器片が出土しているが、まとまった量は出土していない。

■石器

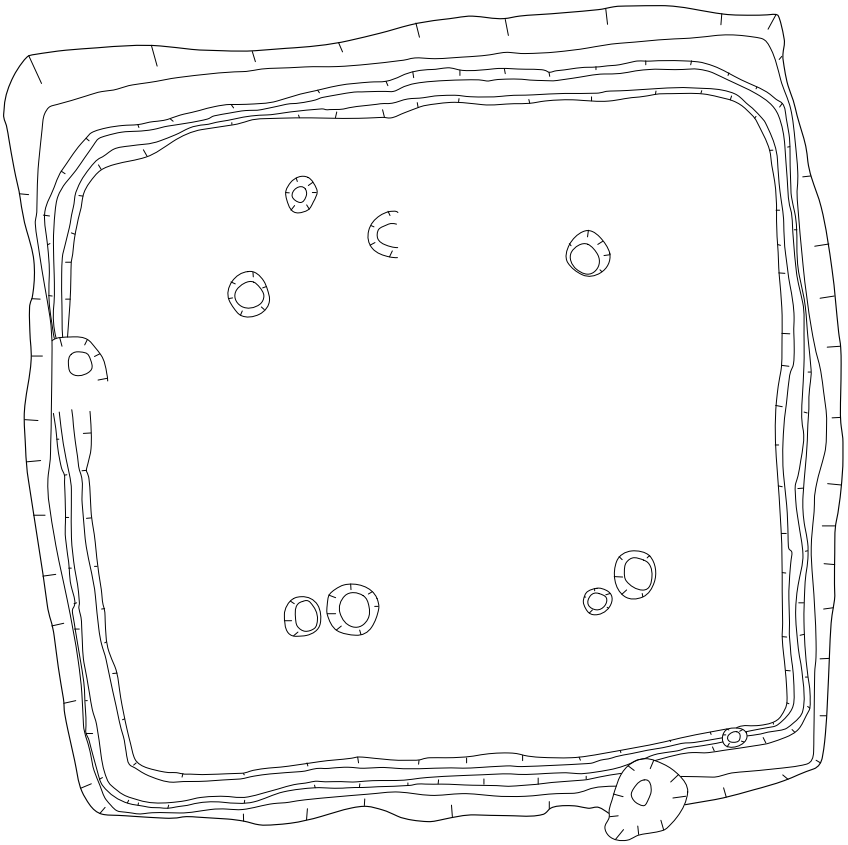
縄文の所産である可能性が高い石器類が覆土中から出土している。

ｂ　溝状遺構（第 249 ～ 253 図）

野首第２遺跡では、Ａ区で２本、Ｂ・Ｃ区では大小含めて、20 本程度の溝状遺構の存在が確認されている。このうち、Ａ区の１本は縄文時代後期の所産である（SE02）。

これらの溝状遺構中からは多くの遺物が出土しているが、縄文時代･古墳時代などの遺物が多く、一部にのみ、より新しい時期の遺物の出土が確認される状況であった。

多くの溝は幅が 50㎝から１ｍ程度のもので、深さも検出面からの高さが 50㎝を超えるものは

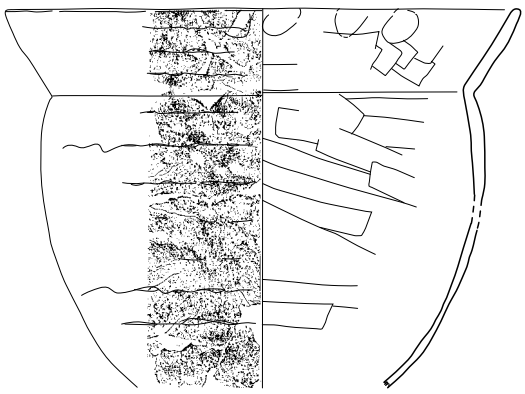


0　1:60　2m

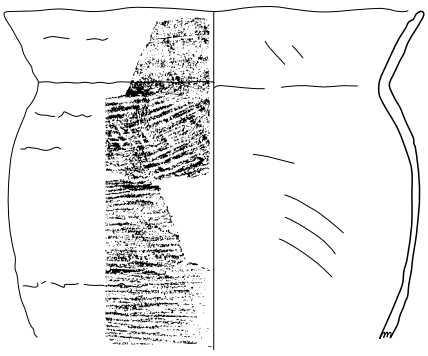
SA76

１：黒褐色（10ＹＲ２／３）細砂質土。軟質で粘性なし。炭化物（径１～２㎜）を少量含む。
２：黒褐色（10ＹＲ ２／２）１層よりやや粒子が細かく硬質で粘性あり。 炭化物（径５㎜）を１層よりも多く含む。
３：黒褐色（10ＹＲ２／ 1.5）２層とほぼ同じ粒径で硬質だが、粘性あり。 炭化物（径５～ 10 ㎜）のものが多い。
４：暗褐色（10ＹＲ 2.5 ／３）１層とほぼ同じ粒径で、硬質（１層と同程度)。粘性あり。炭化物（径１～２㎜）を含む。
５：赤褐色（10ＹＲ４／８）焼土。ブロック状（径 50 ～ 100㎜）で、非常に硬質。焼土の上下において炭化物（径２～３㎜）を多く含む。
６：暗褐色（10ＹＲ３／６）焼土。ブロック状（径 50 ～ 70㎜）で、５層より軟質。５層よりも濁った色をしている。炭化物（径２～３㎜）を多く含む。
７：黒褐色（10ＹＲ２／ 1.5）貼床。シルト質土。非常に硬質で粘性あり。炭化物（径２～３㎜）を多く含む。 ところどころに暗褐色（10ＹＲ３／ 3.5）のブロック（径 20 ～ 30㎜）を含む。ブロックの粒子は荒く、硬質で粘性あり。
８：黒褐色（10ＹＲ２／ 3.5）粒径はほぼ２層と同程度だが、硬質で粘性に富む。炭化物（径１～２㎜）を多く含む。
９：暗褐色（10ＹＲ３／４） ４層より、粒子は細かく、硬度・粘性は同程度。
10：黒褐色（7.5ＹＲ２／ 2.5）壁溝の埋土。粒子はやや大きく、軟質で粘性に乏しい。炭化物（径２～３㎜）ところどころに含む。

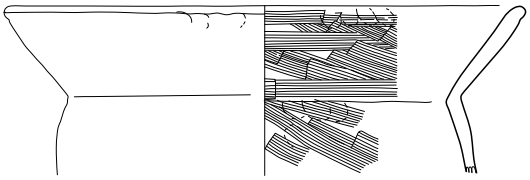
第 242 図　第 76 号竪穴住居跡（SA76） S= １／６０



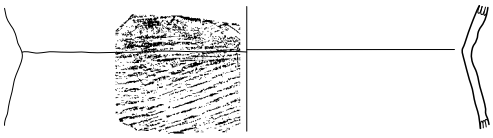
1732.



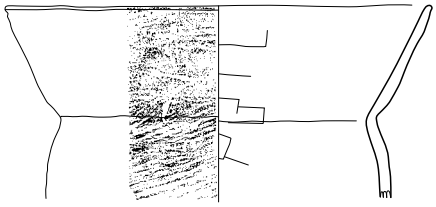
1733.



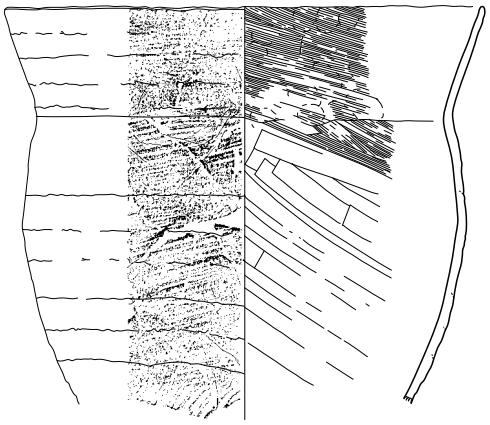
1734.



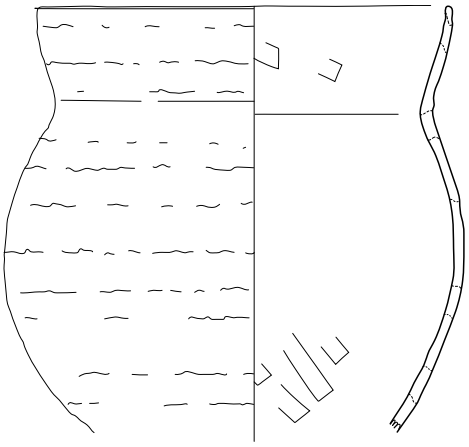
1735.



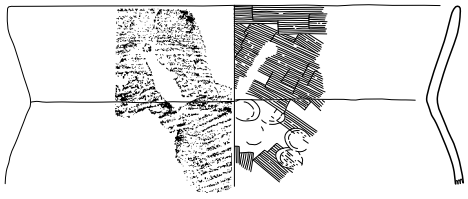
1736.



1737.



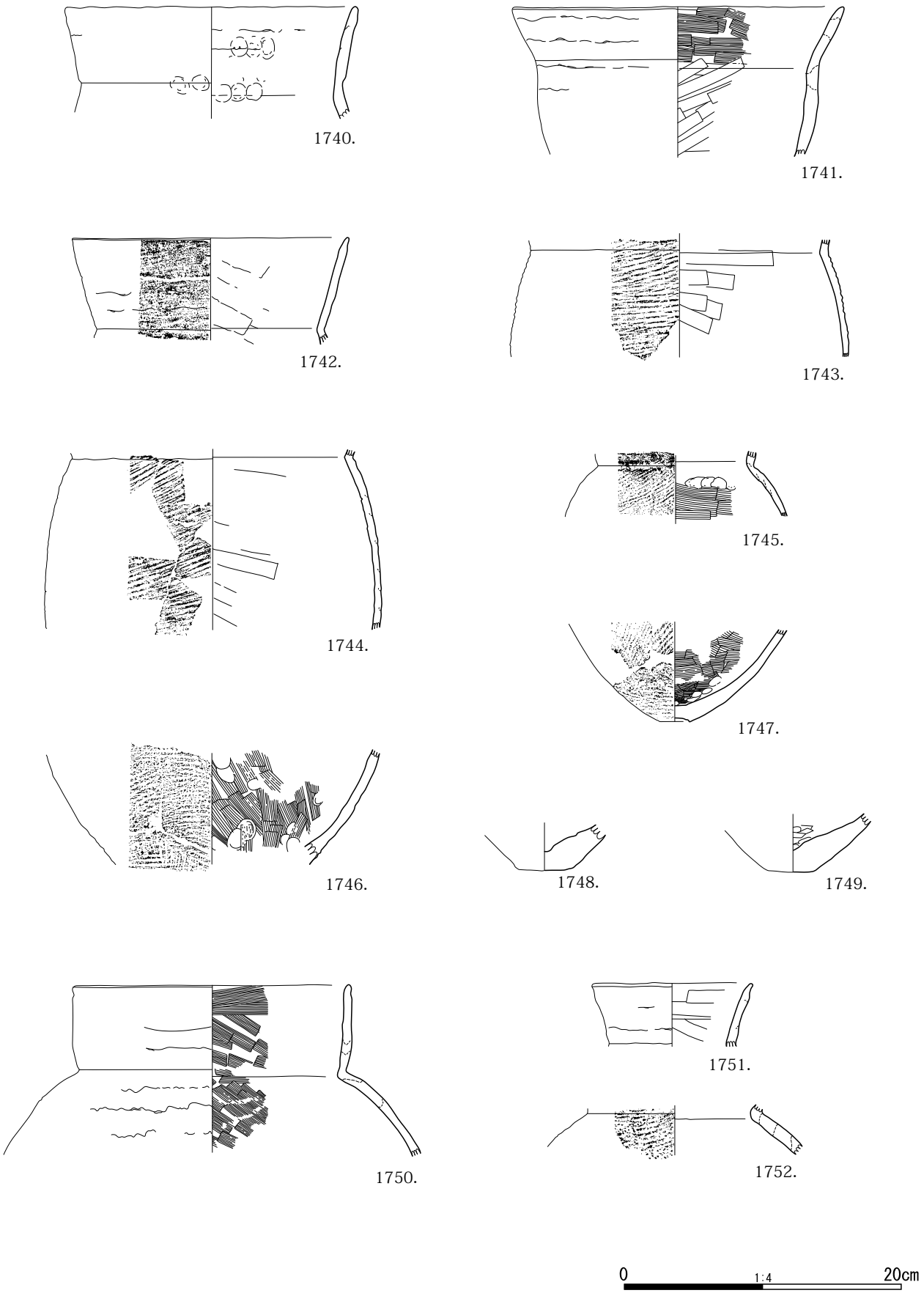
1738.



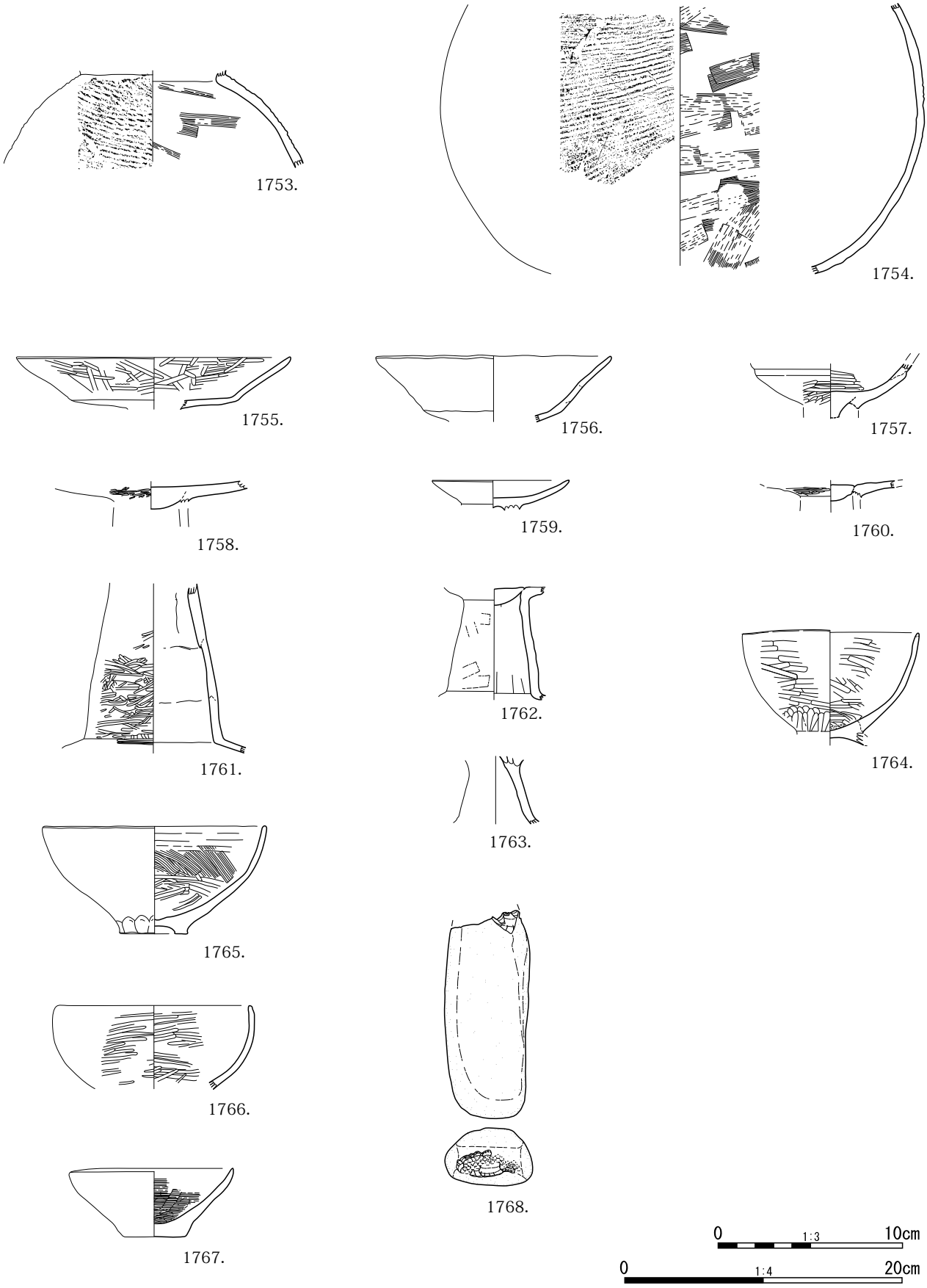
1739.

0 1:4 20cm

第 243 図　第 76 号竪穴住居跡出土の土器（1）　S＝1／4



第 244 図　第 76 号竪穴住居跡出土の土器（2）　S＝1／4



第 245 図　第 76 号竪穴住居跡出土の土器（3）・石器　1768：S＝1／3，1753 ～ 1767：S＝1／4

まれであった。

なかには若干の硬化面が確認されるものもあるが、基本的には道の機能は担っていないように思われる。

（３）包含層・その他の遺構出土の遺物

■土器・土製品

□土師器（第 254・255 図）

包含層中の土師器は、ほとんどが小片であり、形態的にも住居中より出土した土師器から逸脱するものは少ない。

1771 ～ 1779 が甕である。。

1780 は 丸 底 の 壷。1781 ～ 1785 は 高 坏、1786 ～ 1788 が椀である。

第 128 図 1292 ～ 1293 は SA47 の埋土中より出土した甕と高坏である。先述のとおり、SA47 はその大部分が縄文時代に該当する遺構であり、その覆土中より出土したという事は、古墳時代住居が切り合った可能性とともに、住居埋没途中にあって、何らかの理由によりこれらの土器を埋納した可能性も考慮する必要がある。

■土製品（第 255 図）

1789 は、C 区の第 I 層から出土した管状土錘である。土師質で、比較的太く大形である。

■石製品

□玉類（第 256 図）

概要　弥生時代以降の所産と考えられる玉は総計 18 点出土した。玉の種類には臼玉、小玉、勾玉、不定形垂飾が認められた。19 点中 12 点は古墳時代中期の竪穴住居跡からの出土であり、この時期の所産と考えられる。臼玉はほとんどが 0.1g 以下の極小の資料群である。

観察所見　以下、遺構出土資料は遺構ごとに、包含層出土資料は類型ごとに説明を加える。

■第 7 号竪穴住居跡出土の玉類

（第 256 図 1783）

床面からやや浮いた覆土からの出土である。検出後、周辺を精査したが資料の追加は無かった。濃緑色の蛇紋岩製で算盤玉状を呈する。臼玉全点中最もサイズが大きい。

第 9 号竪穴住居跡出土の玉類（第 256 図 1784）

床面北西部中央の焼土中から出土した黒色の滑石ないし蛇紋岩製の臼玉である。土壌のフローテーションの過程で検出されたもので、被熱したものか表面が変色している。調査中には気付かなかったものであり、他にも資料が存在したおそれがある。垂直・水平いずれの方向も破損するが、形態的には後述する第 71 号竪穴住居跡出土資料と同一類型である。

■第 70 号竪穴住居跡出土の玉類

（第 256 図 1785）

住居跡床面からの出土である。濃緑色の蛇紋岩製の臼玉であり、竪穴住居跡第 9 ・71 号住居跡出土資料群と技術・形態的には同類であるが、サイズはやや大きい。直径は第 7 号竪穴住居跡出土資料に等しい。側縁もよく研磨され線状痕は観察されないが、元は算盤玉状であったことを示す稜が 1 条観察される。

注目されるのは中央の穿孔とは別に、環部にも穿孔が 1 箇所観察される点である。

■第 71 号竪穴住居跡出土の玉類

（第 256 図玉 1786 ～ 1794）

住居跡床面に設置された台石の下から出土した計 9 点の臼玉であり、本来は一連の装飾品であった可能性があるが、それにしては数量が少ない。

また石材はいずれも滑石ないし蛇紋岩を用いるが、色調には黒色・黒灰色・濃緑色と変異が認められ、同一母岩である可能性は低い。サイズの点ではバラつきがあり、特に 1796・1797 は径・厚さが他の一群よりも大きい。1803・1804 は破損品である。

製作途上で算盤玉状であったことを示す稜はいくつかの資料に認められる（玉 26・28 ～ 32）。

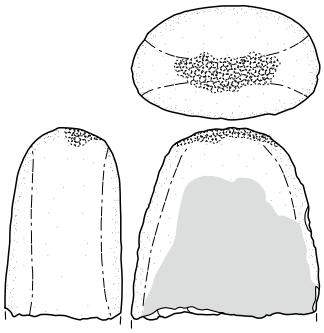
■第 76 号竪穴住居跡出土の玉類

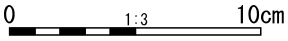
（第 256 図玉 1809・1810）

ボタン大の扁平で不定形なシルエットを有する不定形垂飾が、住居跡覆土中から 2 点確認された。いずれも蛇紋岩中の緑色部分を利用したものと推定され、1809 は淡黄緑色、1810 は淡青緑色の色調で、よく研磨されている。いずれも穿孔は両側から施される鼓形を呈する。

第 81 号土坑出土の玉類

（第 256 図玉 1805・1806）





第 247 図　第 77 号竪穴住居跡出土の石器　S= 1 ／ 3

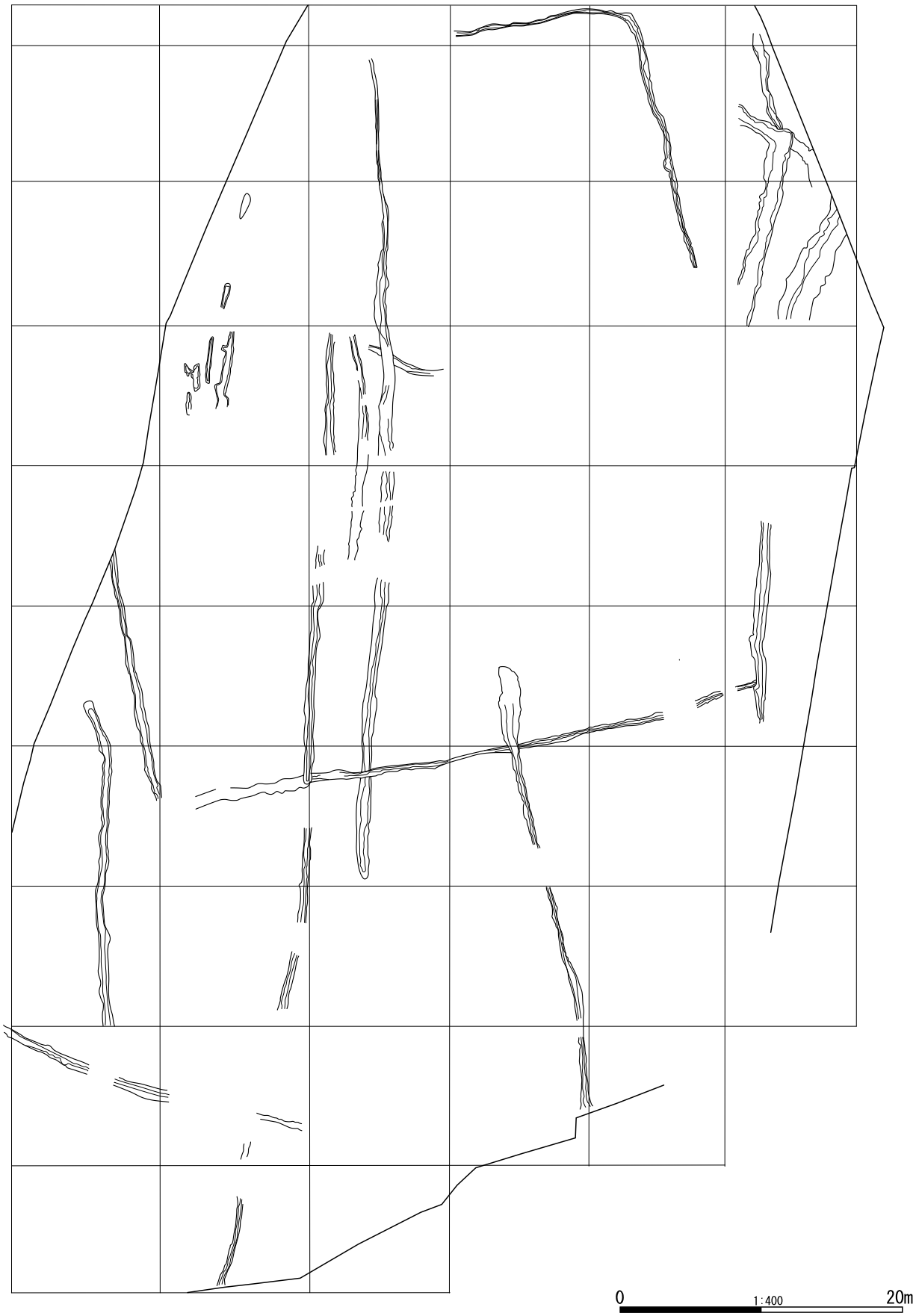
２点を土坑覆土中から確認した。1805 は暗緑灰色の滑石製小玉である。石材的には縄文時代の紡錘形小形垂飾と同質の石材で、形態的にも片側からの穿孔である可能性が高く丸玉に近い。1805 は古墳時代中期の竪穴住居跡から出土した臼玉類と同類の資料であり、同時期の所産である可能性が指摘できる。なお、第 81 号土坑では時期決定に資する土器類は共伴していない。

第Ⅰ層・表土出土の玉類（第 256 図 1807・1808・1811）

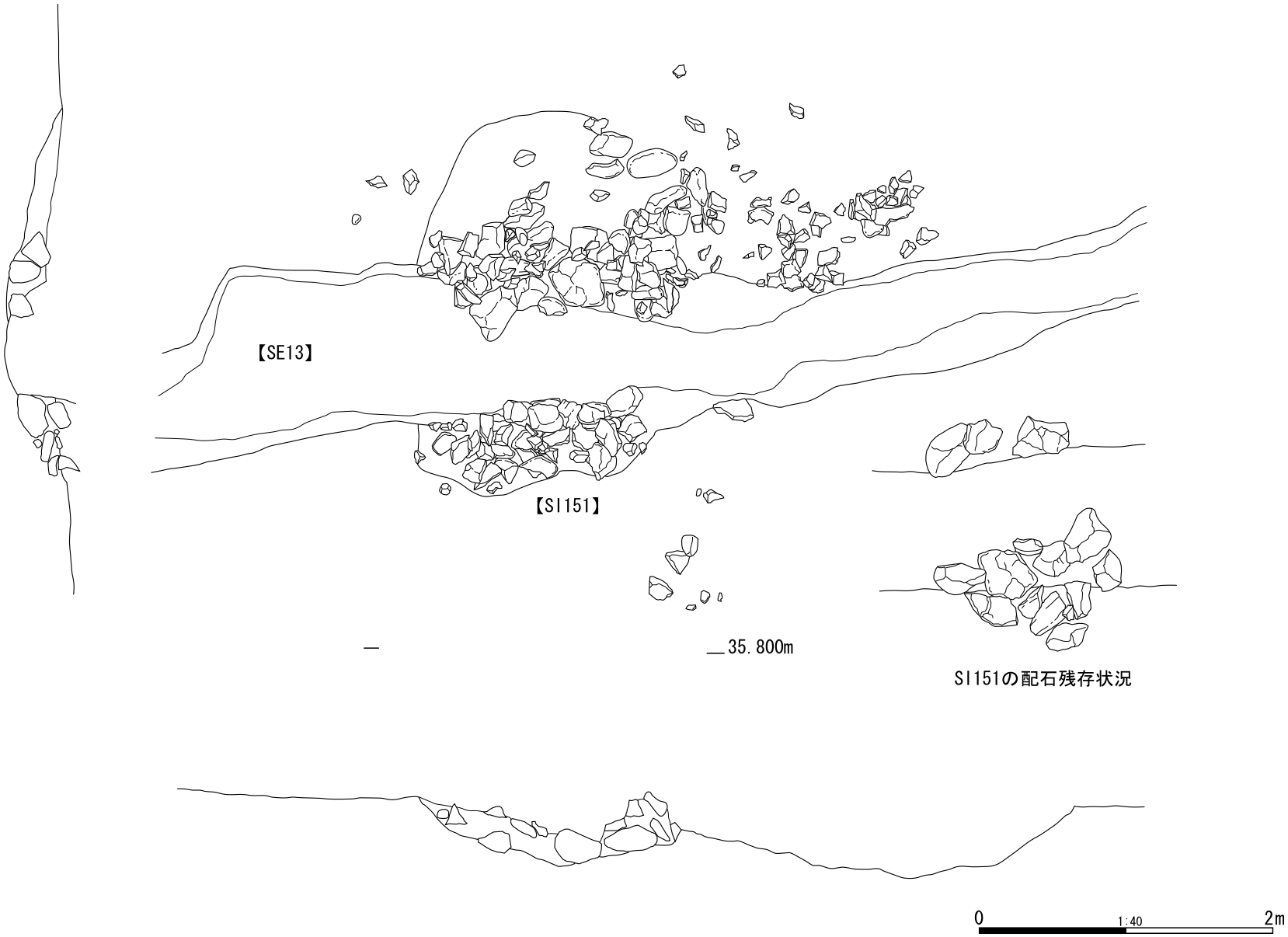
1811 はＣ字形の平面形で、穿孔は片側からのみなされる。丁寧な研磨整形がなされ、研磨作業単位の痕跡である稜線も消去されている。Ｂ区の表土からの検出であり、厳密な時期比定は困難で、あるいは縄文時代の所産である可能性も残すが、形態から判断して弥生時代以降の可能性を推したい。当該時期では唯一ヒスイ輝石を用いる。

1807 は暗緑灰色の滑石ないし蛇紋岩を用いた小玉であり、側面の整形は線状痕を残した算盤玉状である。技術・形態的な特徴から竪穴住居跡出土の臼玉と共通性が看取されることから、古墳時代の所産である可能性が考えられよう。概報Ⅱ（文献 26）図９の４で蛇紋岩製と表記した資料である。

1808 は蛇紋岩製の扁平不整棒状の資料で、よく研磨されるが穿孔は施されない。表土中からの出土で、厳密な時期は不明である。



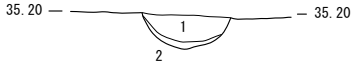
第 249 図　B（D）・C 区における古墳時代以降の溝状以降（SE03 ～ 18）　S＝1／４００



第 250 図　第 13 号溝状遺構（SE13）と縄文時代早期の第 151 号集石遺構（SI151）の切り合い関係　Ｓ＝１／４０

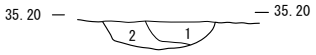
SE3断面図

SE4第１ベルト

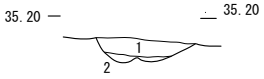


SE4第２ベルト

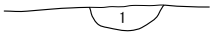
SE4第３ベルト



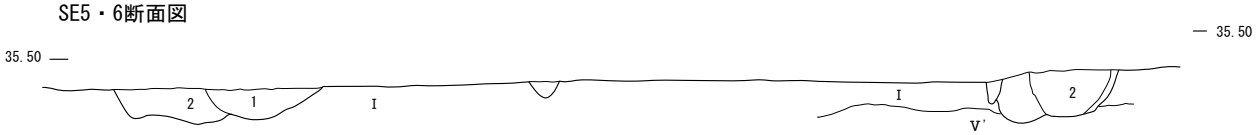
SE4第４ベルト



SE4第５ベルト



SE5・6断面図

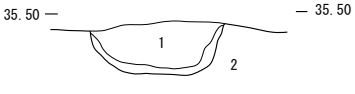


1 黒色土（Hue10YR2/1）細砂～シルト質土。軟質で粘性あり。

2 黒色土（Hue10YR2/1）細砂～シルト質土。硬質で粘性あり。

3 黒色土（Hue10YR2/1）細砂～シルト質土。やや硬質で粘性あり。

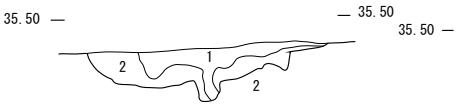
SE11断面図



1 黒色土（Hue10YR2/1）細砂質土。やや軟質で粘性あり。

2 １層とⅣa層の混合土。

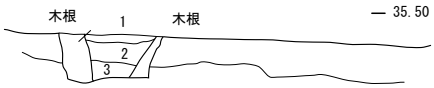
SE14断面図



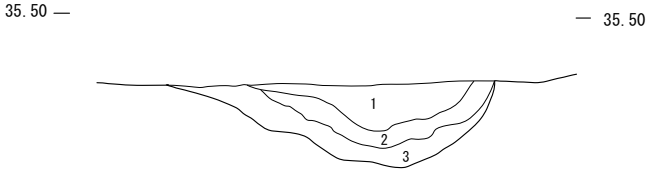
1 黒褐色土（Hue10YR2/２）細砂質土。やや軟質で粘性あり。わずかに炭化物を含む。

2 黒色土（Hue10YR2/1）細砂質土。軟質で粘性あり。

SE15断面図



SE16断面図

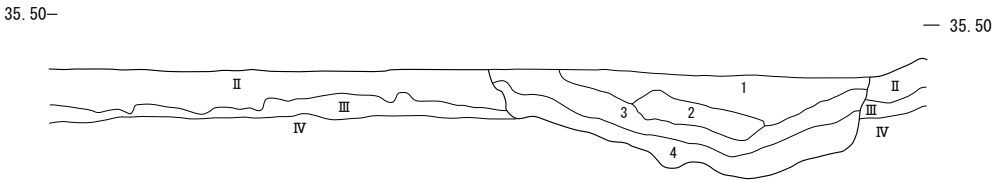


1 黒褐色土（Hue10YR2/2）シルト質土。軟質で粒子が細かい。１～２mmの炭化物を含む。

2 黒褐色土（Hue10YR2/2）シルト質土。軟質で粘性あり。１～２mmの炭化物を少量含む。

3 黒褐色土（Hue10YR2/2）シルト質土。軟質で粒子が細かい。

SE16断面図



1 黒褐色土（Hue10YR2/2）シルト質土。軟質で粒子が細かい。１～２mmの炭化物を含む。

2 黒褐色土（Hue10YR2/2）シルト質土。軟質で粘性あり。１～２mmの炭化物を少量含む。

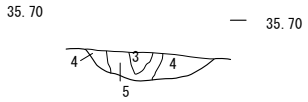
3 黒褐色土（Hue10YR2/2）シルト質土。軟質で粒子が細かい。

4 黒褐色土（Hue10YR3/2）シルト質土。軟質で粒子が細かい。３層より明るい色調

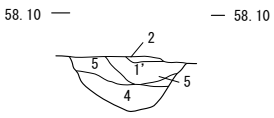
0　1:20　1m

第 251 図　溝状遺構断面図（１）　Ｓ＝１／２０

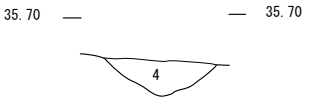
SE18土層断面図



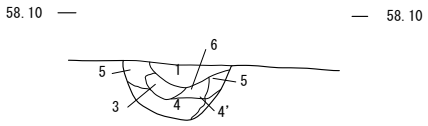
SE18土層断面図



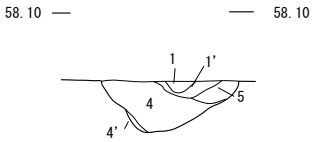
SE18土層断面図



SE18土層断面図



SE18土層断面図



SE18土層注記

1 黒褐色（Hue10YR2/2）軟質でやや粘性あり。炭化物をわずかに含む。

2 黒褐色（Hue10YR3/1）硬質で粘性なし。砂利をわずかに含む。

4 黒褐色（Hue7.5YR2/2）やや硬質で若干粘性あり。炭化物をわずかに含む。

5 黒褐色（Hue10YR3/1）やや硬質で粘性なし。

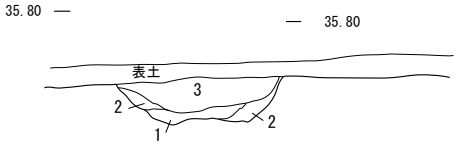
1' 黒褐色（Hue10YR3/1）軟質でやや粘性あり。

3 黒褐色（Hue7.5YR3/1）やや硬質で若干粘性あり。テフラをわずかに含む。

4' 黒褐色（Hue7.5YR3/1）漸移層。

6 黒褐色（Hue10YR2/2）軟質でやや粘性あり。

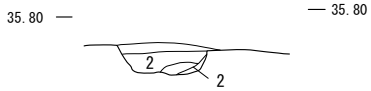
SE19土層断面図



SE19土層断面図

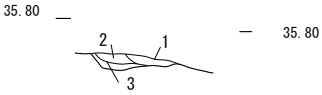
SE19土層断面図

SE19土層断面図

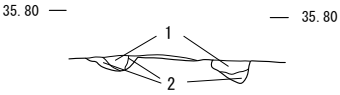


SE19土層断面図

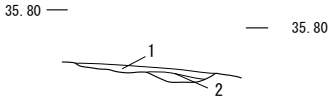
SE19土層断面図



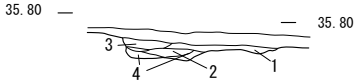
SE19土層断面図



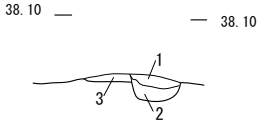
SE19土層断面図



SE19土層断面図

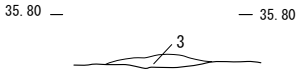


SE19土層断面図

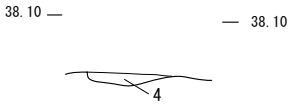


SE19土層断面図

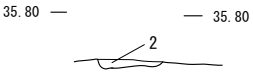
SE19土層断面図



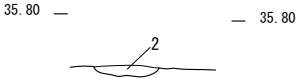
SE19土層断面図



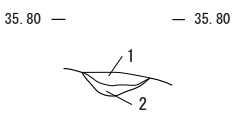
SE19土層断面図



SE19土層断面図



SE19土層断面図



SE19土層注記

1 黒褐色（Hue10YR2/2）やや硬質でやや粘性あり。炭化物をわずかに含む。

2 黒褐色（Hue10YR3/1）硬質で粘性なし。

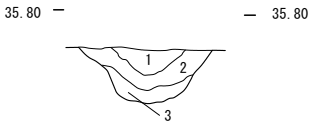
3 黒褐色（Hue10YR3/1）やや軟質で粘性なし。

4 黒褐色（Hue7.5YR2/2）やや硬質で若干粘性あり。

0 1:20 1m

第252図　溝状遺構断面図（２）　Ｓ＝１／２０

SE20土層断面図

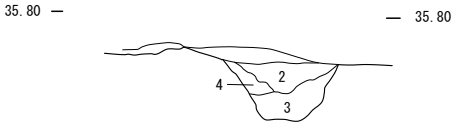


SE20土層断面図

SE20土層注記

1 黒褐色（Hue7.5YR3/1）軟質でやや粘性あり。炭化物をわずかに含む。
2 黒褐色（Hue10YR3/1）軟質でやや粘性あり。炭化物をわずかに含む。
3 黒褐色（Hue7.5YR3/1）若干硬質でやや粘性あり。Ⅳ層のブロックをわずかに含む。
4 黒褐色（Hue7.5YR3/1）軟質でやや粘性あり。炭化物をわずかに含む。2層より明るい色調。

SE20土層断面図



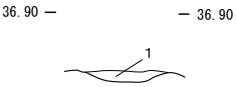
SE22土層断面図

SE21土層断面図

SE23土層断面図

1 黒褐色（Hue7.5YR3/1）硬質でやや粘性あり。
炭化物をわずかに含む。

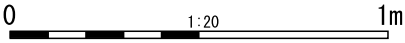
SE24土層断面図



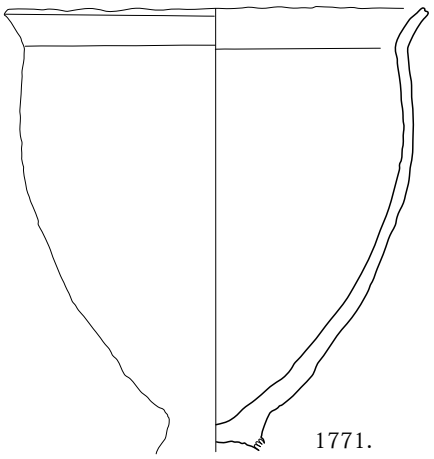
1 黒褐色（Hue7.5YR3/1）軟質でやや粘性あり。炭化
物をわずかに含む。

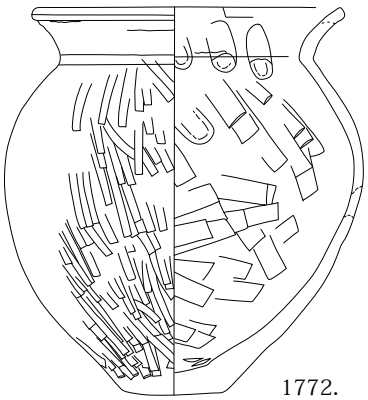
SE25土層断面図

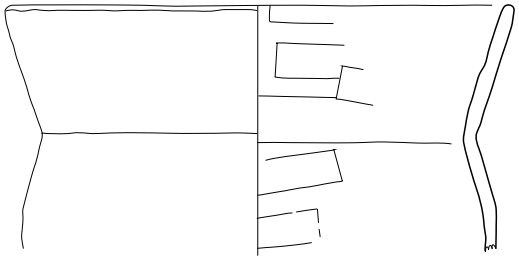
SE26土層断面図

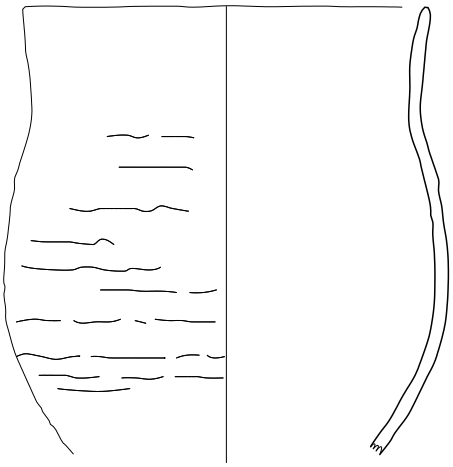


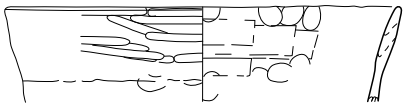
第253図　溝状遺構断面図（3）　S＝1／20

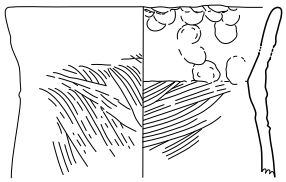

1771.

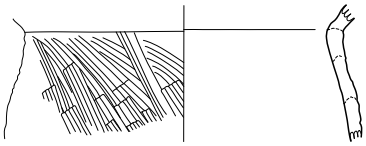

1772.

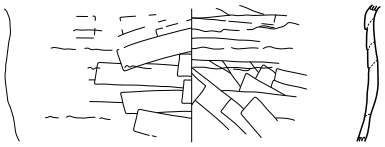

1773.


1775.


1774.

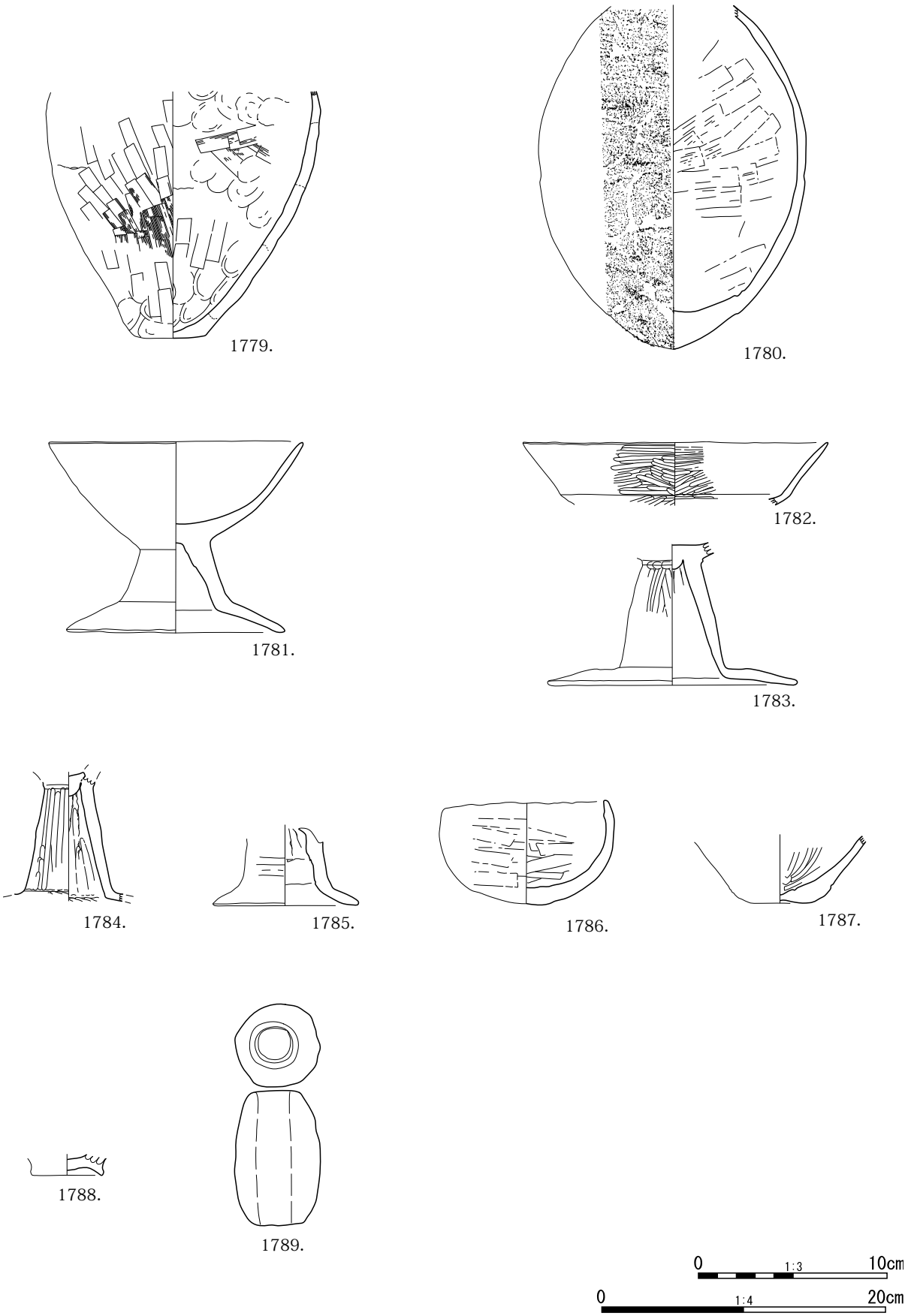

1776.


1777.


1778.

0 1:4 20cm

第 254 図　包含層出土の土師器（1）　S＝1／4



第 255 図　包含層出土の土師器（2）　1789：S＝1／3，1779～1788：S＝1／4

第 16 表　竪穴住居跡出土の土師器観察表（1）

No.	種別	器種	部位	取上番号	出土区・地点・層位	調整・文様 外面	調整・文様 内面	法量（cm） 口径	法量（cm） 底径	法量（cm） 器高	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
1457	土師器	深鉢	口縁	Ｅベルト	SA2	ヘラナデ	ヘラナデ	(22.4)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1458	土師器	甕	底部	W 区上層	SA2	タタキ . ミガキ	ヘラ→ナデ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒、砂粒①	内外面スス付着
1459	土師器	甕	底部	２E ベルト	SA2	ヘラナデ	ヘラナデ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着
1460	土師器	脚台付甕	底部	Wベルト	SA2	ヘラナデ	ヘラナデ	—	(2.6)	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1461	土師器	壷	頸部～胴部	ユカ F ４９＋ 273 ＋ 653 ＋ 238	SA2	タタキ	ナデ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1462	土師器	甕	底部	708	ＳＡ２	タタキ	ナデ	—	4.4	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1463	土師器	高坏	坏部	142	SA2	ヘラミガキ	ヘラミガキ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1464	土師器	小型丸底壷	口縁～胴部	ユカ 1 W ＋ユカ 1 F 区＋ 355 ＋ 592	SA2	ミガキ	ミガキ	(9.0)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1465	土師器	小型丸底壷	頸～胴部	172 ＋ユカ 1	ＳＡ２	ミガキ	ナデ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1466	土師器	ミニチュア	口縁～底部	Ｅベルト	ＳＡ２	ケズリ	ナデ	3.2	1.7	4.6	橙色	橙色	赤褐色粒	
1467	土師器	ミニチュア	口縁～底部	Ｅベルト	ＳＡ２	ナデ→ケズリ	ユビオサエ	(6.5)	—	3.3	橙色	橙色	赤褐色粒、砂粒①	
1468	土師器	壷	底部	W ベルト	SA2	ナデ	ナデ	—	(9.2)	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1469	土師器	甕	底部	Ｅベルト	ＳＡ２	ナデ	ナデ	—	5.5	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1473	土師器	壷	口縁～胴部	ユカ３＋ 420	ＳＡ３	ミガキ→口縁部ヘラナデ	ヘラナデ	(8.5)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1474	土師器	高坏	受部	96	ＳＡ３	ミガキ	ミガキ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1475	土師器	椀	口縁～底部	512 ＋ 62 ＋ 829 ＋ 025 ＋ユカ 50 ＋ユカ F(16 ＋ 57 ＋ 58)	ＳＡ３	ミガキ . ナデ	ミガキ	—	(5.4)	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1476	土師器	椀	口縁～底部	721	ＳＡ３	ミガキ	ヘラナデ	(15.5)	—	5.5	橙色	橙色	赤褐色粒、砂粒①	
1477	土師器	椀	口縁～底部	５６１＋ユカ１３８	ＳＡ３	ミガキ	ミガキ	15.1	2.3	6.1	橙色	橙色	赤褐色粒、砂粒①	
1478	土師器	甕	口縁～底部	ユカ F71 ＋ユカ F15 ＋②床一括＋ E ベルト	SA4	タタキ	ナデ	26.5	4.0	31.8	橙色	橙色	赤褐色粒、砂粒①	外面にスス付着。内面に炭化物付
1479	土師器	甕	口縁～胴部 (底部付近)	１９０＋４１＋ S 区＋ CS 区＋ C ベルト＋ E ベルト＋ CSE ベルト＋ CSW ベルト＋ CSE ＋ CS サブトレ＋床一括＋ユカ F(２４＋２５＋６０＋７１＋７５＋７６＋７７＋８２＋８３)	SA4	ヘラ	ヘラ	(24.7)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒、砂粒①	
1480	土師器	甕	頸～胴部	ユカ 43	ＳＡ４	タタキ	ヘラナデ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒、砂粒①	外面スス付着
1481	土師器	甕	胴部	46	ＳＡ４	刻目突帯文→ハケ	ヘラナデ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒、砂粒①	
1482	土師器	甕	胴～底部	—	ＳＡ４	ハケ	ハケ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1483	土師器	甕	底部	ユカ 17	ＳＡ４	タタキ→ナデ	ヘラナデ→ナデ	—	5.1	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1484	土師器	高坏	脚部	ユカ 40	ＳＡ４	ミガキ	ナデ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1485	土師器	小型丸底壷	口縁～底部	ユカ 98 ＋ 87 ＋ 92 ＋ 176	ＳＡ４	ミガキ	胴部ヘラナデ→口縁部ナデ	(10.6)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	

第 17 表　竪穴住居跡出土の土師器観察表（2）

№	種別	器種	部位	取上番号	出土区・地点・層位	調整・文様 外面	調整・文様 内面	法量（cm） 口径	法量（cm） 底径	法量（cm） 器高	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
1486	土師器	小型丸底壷	頸～底部	ユカ 54 ＋ 2 ＋ 71	ＳＡ４	ミガキ	ナデ	—	4.5	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1487	土師器	小型丸底壷	胴～底部	65 ＋ 187	ＳＡ４	ミガキ	ナデ	—	(2.6)	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1488	土師器	甕	口縁～底部	ＳＷ区＋ＮＷ区	ＳＡ５	タタキ→一部ナデ	ハケ→ナデ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1489	土師器	甕	口縁～底部	SW ベルト － 1 ＋ SW 区＋ SC 1	ＳＡ５	タタキ . 口唇部のみヘラナデ	口縁部 = ハケ→ナデ 胴部 = ハケ . 頸部 = ヘラナデ	29.4	2.7	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面にスス付着。内面に炭化物付着
1490	土師器	甕	口縁～底部	ＳＷ区＋ＮＷ区	ＳＡ５	タタキ→一部ナデ	ハケ→ナデ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒、砂粒①	
1491	土師器	壷	口縁～胴部	SSW 区 3 L 一括＋ 138 ＋ 153	ＳＡ５	タタキ→一部ナデ	ハケ→ナデ	(27.3)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒、砂粒①	
1492	土師器	甕	口縁～胴部	ＳＷ区＋ＮＷ区	ＳＡ５	タタキ	ハケ	30.3	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒、砂粒①	外面スス付着
1493	土師器	甕	口縁～胴部	ユカ F-1 ＋ NW 区＋ NW 区 2 レイヤー＋ベルト＋ A ベルト＋ S ベルト＋ W ベルト＋ SW ベルト－ 3 ＋ SC 1 W サブトレ＋ SSW 区 2 レイヤー＋ SSW 区 3 L 一括	ＳＡ５	口縁 = タタキ→ハケ→指ナデ　胴部 = タタキ	ハケ	(25.7)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面にスス付着
1494	土師器	甕	口縁～胴部	ＳＷ区	ＳＡ５	タタキ	ハケ	26.8	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着
1495	土師器	甕	頸～底部	ユカ 1 ＋ 603	ＳＡ２	タタキ	ハケ	—	5.7	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着
1496	土師器	甕	口縁～胴部	ＮＥ区	ＳＡ５	タタキ	ハケ	(30.4)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着
1497	土師器	甕	口縁～胴部	ＳＷ区＋ＮＷ区	ＳＡ５	タタキ→ナデ	ハケ	(28.2)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒、砂粒①	
1498	土師器	甕	口縁～胴部	ＳＷ区	ＳＡ５	タタキ	ハケ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1499	土師器	甕	頸部～胴部	NW 区＋ SC1 ＋ SC1 サブトレ	ＳＡ５	タタキ	ハケナデ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	内外面スス付着
1500	土師器	甕	口縁～胴部	ＳＳＷ区	ＳＡ５	タタキ	ハケ	(27.6)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着
1501	土師器	甕	口縁～頸部	ＳＷ区	ＳＡ５	タタキ	ハケ	(26.7)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着
1502	土師器	甕	口縁部	ユカ 21	ＳＡ５	タタキ	ナデ	(29.6)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1503	土師器	甕	頸～胴部	ＮＷ区	ＳＡ５	タタキ→ナデ	ハケ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒、砂粒①	
1504	土師器	甕	頸～胴部	ＮＷ区	ＳＡ５	タタキ→ナデ	ハケ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒、砂粒①	
1505	土師器	壷	口縁～胴部	Ｗベルト	ＳＡ５	タタキ	ハケ	(17.2)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒、砂粒①	外面スス付着
1506	土師器	甕	頸～胴部	ＳＣ１	ＳＡ５	タタキ	ハケ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒、砂粒①	外面スス付着
1507	土師器	甕	頸～胴部	ＳＣ１＋68 ＋ＮＷ区	ＳＡ５	タタキ	ハケ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒、砂粒①	外面スス付着
1508	土師器	甕	口縁～底部	ユカ 43	ＳＡ５	タタキ→ナデ	ハケ	14.8	—	13.2	橙色	橙色	赤褐色粒、砂粒①	外面スス付着
1509	土師器	甕	口縁～底部	ＮＷ区	ＳＡ５	ナデ	ハケ	(17.6)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒、砂粒①	外面スス付着

第 18 表　竪穴住居跡出土の土師器観察表（3）

№	種別	器種	部位	取上番号	出土区・地点・層位	調整・文様 外面	調整・文様 内面	法量（cm） 口径	法量（cm） 底径	法量（cm） 器高	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
1510	土師器	小型甕	口縁～胴部	SW ベルト‐２＋SSW 区３L 一括	ＳＡ５	ヘラナデ→ユビナデ→ミガキ	ハケナデ	(13.4)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着
1511	土師器	甕	口縁～底部	ＳＷ区	ＳＡ５	ヘラナデ、口唇部つまみあげ	ハケ	(16.3)	—	9.6	橙色	橙色	赤褐色粒	
1512	土師器	甕	底部	ＳＳＷ区＋ＮＷ区	ＳＡ５	タタキ	ハケ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1513	土師器	甕	底部	ＮＥ区	ＳＡ５	タタキ	ハケ	—	2.9	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着
1514	土師器	甕	底部	ＳＷ区	ＳＡ５	タタキ→ナデ	ハケ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1515	土師器	甕	底部	203＋ＳＷ区＋ＮＷ区	ＳＡ５	タタキ→ミガキ	ハケ	—	1.3	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着
1516	土師器	甕	底部	ＮＷ区	ＳＡ５	ナデ	ナデ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1517	土師器	甕	底部	Ｓベルト	ＳＡ５	タタキ	ヘラナデ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1518	土師器	甕	底部	ＳＮＷ区	ＳＡ５	タタキ	ヘラナデ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1519	土師器	甕	底部	ＳＮＷ区	ＳＡ５	タタキ	ヘラナデ	—	4.0	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1520	土師器	甕	胴部～底部	56	ＳＡ５	ヘラナデ→指ナデ．一部ヘラミガキ	ヘラナデ→指ナデ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1521	土師器	壷	口縁～胴部	ＮＥ区	ＳＡ５	タタキ、口縁部ヘラナデ	ハケ	13.1	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着
1522	土師器	小型丸底壷	口縁～底部	100＋ＮＷ区	ＳＡ５	ミガキ	胴部ハケ→頸部～口縁部ミガキ、底部ユビオサエ	(14.3)	2.4	17.9	橙色	橙色	赤褐色粒	
1523	土師器	高坏	坏部	399＋ＳＥ区	ＳＡ５	ミガキ	丁寧なナデ	(16.2)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1524	土師器	高坏	脚部	ＮＷ区	ＳＡ５	ミガキ	ナデ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1525	土師器	高坏	脚部	Ｗサブトレ	ＳＡ５	ミガキ	ミガキ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1526	土師器	小型丸底壷	口縁～底部	ＳＣ７	ＳＡ５	風化著しい	口縁部ハケ	9.5	1.6	12.7	橙色	橙色	赤褐色粒	
1527	土師器	小型丸底壷	口縁～底部	NW 区２レイヤー	ＳＡ５	ミガキ	ハケ→ナデ	(8.5)	1.4	—	橙色	橙色	赤褐色粒	内外面赤彩
1528	土師器	小型丸底壷	頸～底部	ＳＣ１	ＳＡ５	ミガキ	ユビオサエ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1530	土師器	甕	口縁～胴部	ユカＦ５４	SA6	タタキ	ハケ	(22.8)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着
1531	土師器	甕	口縁～胴部	ユカ 82＋81＋84＋86＋88	ＳＡ６	タタキ→口縁部ナデ	ハケ	24.6	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着
1532	土師器	甕	口縁～底部	ユカ４	ＳＡ６	タタキ→ケズリ、口縁部荒いミガキ	ハケ	14.2	1.2	14.2	橙色	橙色	赤褐色粒	
1533	土師器	甕	底部	1744＋1711	ＳＡ６	タタキ→ヘラナデ	指ナデ．指押さえ→ヘラナデ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着 内面炭化物付着
1534	土師器	甕	底部	SW ベルト	ＳＡ６	タタキ→ヘラ	ヘラ	—	(3.4)	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着

第 19 表　竪穴住居跡出土の土師器観察表（4）

No.	種別	器種	部位	取上番号	出土区・地点・層位	調整・文様 外面	調整・文様 内面	法量（cm） 口径	法量（cm） 底径	法量（cm） 器高	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
1535	土師器	高坏	口縁～頸部	494	ＳＡ６	ヘラナデ	ヘラナデ	(22.2)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着
1536	土師器	高坏	脚部	Ｎベルト	ＳＡ６	ミガキ	ミガキ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1537	土師器	ミニチュア	口縁～底部	ユカ 21	ＳＡ６	ユビオサエ	ユビオサエ	5.3	—	4.1	橙色	橙色	赤褐色粒	
1538	土師器	甕	口縁～胴部	1010 ＋ 1099 ＋ 1200 ＋ 1208 ＋ 1241 ＋ 1242 ＋ 1262 ＋ 1287 ＋ 1300 ＋ 1301 ＋ 1302 ＋ 1303 ＋ 1313 ＋ 1328 ＋ 1331 ＋ 1334 ＋ 1338 ＋ 1382 ＋ 1387 ＋ 1389 ＋ 1394 ＋ 1416 ＋ 1448 ＋ 1497 ＋ 1498 ＋ 1499 ＋ 1500 ＋ SE 区	SA7	ヘラナデ	ヘラナデ	22.7	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着
1539	土師器	甕	口縁～胴部	1251 ＋ 1252 ＋ 1265 ＋ 1284 ＋ 1288 ＋ 1289 ＋ 1290 ＋ 1291 ＋ 1306 ＋ 1307 ＋ 1309 ＋ 1312 ＋ 1391 ＋ 1392 ＋ １３９６＋１４０２＋１４０５＋１４１１	SA7	ヘラナデ	ヘラナデ	21.3	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着。内面炭化物付着
1540	土師器	深鉢	胴部～底部	1219 ＋ 1254 ＋ 1260 ＋ 1274 ＋ 1278 ＋ 1280 ＋１２８２＋１４２２＋１４２６＋１５０３＋ SW 区ユカサンプル４３	SA7	ヘラナデ	ヘラナデ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着、内面スス付着
1541	土師器	壷	口縁～胴部	1269	SA7	ナデ→ミガキ	ハケ	(20.0)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1542	土師器	鉢	口縁～底部	—	SA7	ヘラナデ→口唇部つまみだし	ヘラナデ→口唇部つまみだし	7.9	5.8	8.5	橙色	橙色	赤褐色粒	
1543	土師器	椀	口縁～胴部	1242 ＋ 1272 ＋ 1305 ＋ 1382	SA7	ミガキ	ミガキ→口縁部付近のみナデ	16.4	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面赤彩
1544	土師器	椀	口縁～胴部	1505 ＋ 1506	SA7	ミガキ	ミガキ→口縁部付近のみハケ	18.0	—	5.7	橙色	橙色	赤褐色粒	
1545	須恵器	蓋	口縁～底部	—	SA7	回転ヘラケズリ	回転ナデ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1546	土師器	甕	口縁～胴部	308 ＋ 238 ＋ 293 ＋ 285 ＋ 296 ＋ 287 ＋ 288 ＋ 286 ＋ 410 ＋ 289 ＋ 290 ＋ 291 ＋ 407 ＋ 309 ＋ 230 ＋ 261 ＋ 258 ＋ 224	SA8	ナデ	口縁＝ハケ→指ナデ。胴部＝ヘラ。頸部＝連続指押さえ	(27.7)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着
1547	土師器	甕	口縁～胴部	ユカ 1	ＳＡ８	ナデ、口唇部つまみあげ	胴部ハケ→口縁部ヘラナデ→口唇部つまみあげ	29.5	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着
1548	土師器	甕	口縁～胴部	ユカ 1	ＳＡ８	タタキ	ハケ	(19.0)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着
1549	土師器	甕	頸～胴部	ユカ２＋ユカ３＋ＳＥ区	ＳＡ８	タタキ	ハケ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着
1550	土師器	甕	頸～胴部	304 ＋ 305 ＋ 311	ＳＡ８	タタキ	ハケ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着
1551	土師器	甕	頸～胴部	ＳＥ区	ＳＡ８	ハケ	ハケ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1552	土師器	甕	胴部	ユカピット７	ＳＡ８	タタキ	ハケ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着、外面に籾痕
1553	土師器	高坏	皿部	—	ＳＡ８	風化著しい	風化著しい	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1554	土師器	高坏	裾部	—	ＳＡ８	風化著しい	風化著しい	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	

第 20 表　竪穴住居跡出土の土師器観察表（５）

№	種別	器種	部位	取上番号	出土区・地点・層位	調整・文様 外面	調整・文様 内面	法量（cm） 口径	法量（cm） 底径	法量（cm） 器高	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
1555	土師器	甕	口縁～胴部	ユカ 33	ＳＡ９	タタキ→ヘラナデ、口縁部ナデ	ヘラナデ	23.5	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着
1556	土師器	甕	口縁～胴部	10 ＋ 14 ＋ 170	ＳＡ９	ヘラナデ	ヘラナデ	(17.5)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1557	土師器	甕	底部	ＳＥベルト	ＳＡ９	タタキ→ナデ	ヘラナデ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒、砂粒①	
1558	土師器	甕	底部	872	ＳＡ９	タタキ	ナデ	—	2.2	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1559	土師器	鉢	口縁～底部	ユカ１＋ＳＥベルト	ＳＡ９	ハケ、底部付近に指頭圧痕	ハケ	13.0	5.6	11.3	橙色	橙色	赤褐色粒	
1560	縄文土器	深鉢	口縁部	—	ＳＡ 18	ヘラナデ	ヘラナデ	—	—	—	にぶい橙色	にぶい橙色	赤褐色粒	
1561	縄文土器	深鉢	口縁部	—	ＳＡ 18	ナデ	ナデ	—	—	—	褐色	褐色	白色透明粒、砂粒①、黒色透明粒	
1562	縄文土器	深鉢	底部	208	ＳＡ 18	ナデ	ヘラナデ	—	—	—	橙色	灰褐色	透明粒	内面スス付着
1567	土師器	甕	口縁～底部	Ｎ区	ＳＡ 38	タタキ→ナデ	ヘラナデ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1568	土師器	甕	口縁～胴部	Ｎ区	ＳＡ 38	タタキ→ナデ	ヘラナデ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1569	土師器	甕	口縁～胴部	Ｎ区	ＳＡ 38	タタキ→ナデ、口唇部つまみあげ	ヘラナデ	26.0	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面にスス付着
1570	土師器	甕	口縁～胴部	Ｎ区	ＳＡ 38	ヘラナデ	ヘラナデ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1571	土師器	甕	口縁～胴部	Ｓ区ユカ	ＳＡ 38	ヘラナデ	ヘラナデ	23.3	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着
1572	土師器	甕	口縁～胴部	Ｎ区	ＳＡ 38	タタキ	ヘラナデ→ユビナデ	(20.0)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1573	土師器	甕	口縁～胴部	Ｎ区	ＳＡ 38	タタキ	ヘラナデ	(21.3)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1574	土師器	甕	口縁～胴部	105 ＋ 113 ＋ 115 ＋ 144 ＋ 157 ＋ 192	ＳＡ 38	タタキ→ヘラナデ	ヘラナデ	(24.4)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着
1575	土師器	甕	口縁～胴部	Ｎ区	ＳＡ 38	ヘラナデ、口唇部つまみだし	ヘラナデ	22.3	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒、砂粒①	
1576	土師器	甕	口縁～胴部	Ｎ区	ＳＡ 38	タタキ→ヘラナデ	ヘラナデ一部ミガキ	(21.2)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒、砂粒①	外面・内面にスス付着
1577	土師器	甕	口縁～胴部	Ｎ区	ＳＡ 38	タタキ→ナデ	ヘラナデ	(21.0)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒、砂粒①	外面スス付着
1578	土師器	甕	口縁～胴部	Ｗ区	ＳＡ 38	タタキ、口唇部つまみだし	ヘラナデ	21.7	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒、砂粒①	外面スス付着
1579	土師器	甕	口縁～胴部	Ｗ区	ＳＡ 38	タタキ	ハケ	(25.6)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒、砂粒①	
1580	土師器	甕	口縁～胴部	53 ＋ 54	ＳＡ 38	タタキ→ヘラナデ	ヘラナデ	(20.0)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒、砂粒①	外面スス付着
1581	土師器	甕	口縁～胴部	Ｗ区	ＳＡ 38	タタキ、口唇部つまみだし	ヘラナデ	23.4	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒、砂粒①	外面スス付着
1582	土師器	甕	口縁～胴部	51	ＳＡ 38	タタキ→ナデ	ヘラナデ→ミガキ	(20.6)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒、砂粒①	外面スス付着
1583	土師器	甕	口縁～胴部	Ｎ区	ＳＡ 38	タタキ	ヘラナデ	20.3	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着

第 21 表　竪穴住居跡出土の土師器観察表（6）

No.	種別	器種	部位	取上番号	出土区・地点・層位	調整・文様 外面	調整・文様 内面	法量（cm） 口径	法量（cm） 底径	法量（cm） 器高	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
1584	土師器	甕	口縁～胴部	W区	ＳＡ38	ナデ→口唇部つまみだし	ヘラナデ→口唇部つまみだし	(23.1)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着
1585	土師器	甕	口縁～胴部	W区	ＳＡ38	タタキ	ヘラナデ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1586	土師器	甕	口縁～胴部	N区	ＳＡ38	タタキ→ナデ	ヘラナデ→指ナデ	(20.0)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着
1587	土師器	甕	口縁～胴部	７３＋７８	ＳＡ38	タタキ	ヘラナデ	(23.4)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1588	土師器	甕	口縁～胴部	W区	ＳＡ38	ナデ　ミガキ	ヘラナデ	(15.6)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1589	土師器	甕	口縁～胴部	N区	ＳＡ38	タタキ．一部ミガキ	ケズリ．二種類の工具によるナデ	(21.4)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着
1590	土師器	甕	口縁～胴部	S区	ＳＡ38	ヘラナデ	ヘラナデ	24.0	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1591	土師器	深鉢	口縁	N区	ＳＡ38	タタキ→ヘラナデ	ヘラ→ナデ	(18.2)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1592	土師器	甕	口縁～頸部	N区	ＳＡ38	タタキ→ナデ	ヘラ状工具によるナデ→指押さえ	(25.2)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面に炭化物付着
1593	土師器	甕	口縁～胴部	E区ユカ	ＳＡ38	タタキ→ナデ、口唇部つまみあげ	ヘラナデ	20.5	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着
1594	土師器	甕	口縁部	S区	ＳＡ38	タタキ	ヘラナデ	24.0	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1595	土師器	甕	口縁～頸部	N区	ＳＡ38	タタキ	ヘラナデ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着
1596	土師器	甕	頸～胴部	W区	ＳＡ38	タタキ	ハケ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1597	土師器	甕	頸部～胴部	N区	ＳＡ38	タタキ→ヘラナデ→指押さえ	工具によるヘラナデ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面にスス付着
1598	土師器	甕	胴部～底部	S区ユカ	ＳＡ38	タタキ→板状工具によるナデ	板状工具によるナデ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	内面底部指おさえ
1599	土師器	甕	胴～底部	E区	ＳＡ38	タタキ	ヘラナデ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着
1600	土師器	甕	底部	N区	ＳＡ38	タタキ	ヘラナデ	—	2.3	—	橙色	橙色	赤褐色粒、白色透明粒	内面炭化物付着
1601	土師器	甕	底部	W区＋W区上層	ＳＡ38	風化著しい	ヘラナデ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1602	土師器	甕	底部	N区	ＳＡ38	荒いミガキ？	ヘラナデ	—	(7.3)	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1603	土師器	甕	胴～底部	E区	ＳＡ38	ハケ	ハケ	—	(5.0)	—	橙色	橙色	赤褐色粒、白色透明粒	
1604	土師器	甕	底部	N区	ＳＡ38	タタキ	ナデ	—	1.9	—	橙色	橙色	赤褐色粒、砂粒①	
1605	土師器	甕	底部	W区上層	ＳＡ38	ヘラナデ→ユビナデ	ヘラナデ	—	(1.7)	—	橙色	橙色	赤褐色粒、砂粒①	外面スス付着
1606	土師器	甕	底部	N区	ＳＡ38	タタキ	ヘラナデ	—	3.2	—	橙色	橙色	赤褐色粒、白色透明粒	外面スス付着
1607	土師器	甕	底部	E区	ＳＡ38	風化著しい	ユビオサエ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒、砂粒①	
1608	土師器	甕	胴～底部	193	ＳＡ38	ヘラナデ→指ナデ	ヘラナデ→指ナデ	—	(0.6)	—	橙色	橙色	赤褐色粒	内外面スス付着

第 22 表　竪穴住居跡出土の土師器観察表（7）

№	種別	器種	部位	取上番号	出土区・地点・層位	調整・文様 外面	調整・文様 内面	法量（cm） 口径	法量（cm） 底径	法量（cm） 器高	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
1609	土師器	甕	底部	W 区	S A 38	タタキ	ユビオサエ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1610	土師器	甕	底部	E 区ユカ	S A 38	タタキ→ナデ	ナデ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1611	土師器	甕	底部	N 区	S A 38	タタキ→ヘラナデ	ヘラナデ	—	(1.0)	—	橙色	橙色	赤褐色粒	内面スス付着
1612	土師器	甕	底部	N区	S A 38	ナデ	ナデ	—	5.5	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1613	土師器	甕	底部	N 区	S A 38	タタキ	ヘラナデ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	内面スス付着
1614	土師器	甕	胴部～底部	S 区	S A 38	タタキ→工具によるナデ	工具によるナデ	—	1.2	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1615	土師器	甕	底部	N区	S A 38	タタキ→ミガキ	ヘラナデ	—	3.7	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着
1616	土師器	甕	底部	N区	S A 38	タタキ	ヘラナデ	—	4.3	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1617	土師器	壷	底部	E 区	S A 38	ヘラナデ	ヘラナデ	—	4.2	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1618	土師器	鉢	底部	E 区	S A 38	ミガキ	ヘラナデ	—	5.5	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1619	土師器	壷	底部	W区	S A 38	ナデ	ヘラナデ	—	7.2	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1620	土師器	壷	底部	E 区ユカ	S A 38	ミガキ	ミガキ	—	1.3	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1621	土師器	壷	底部	W区	S A 38	風化著しい	へらナデ？	—	5.5	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1622	土師器	鉢	口縁～底部	E 区	S A 38	ヘラナデ→ユビナデ	ヘラナデ→ユビナデ	—	(5.0)	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1623	土師器	甕	口縁	114	S A 38	ハケ	ハケ	(14.0)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1624	土師器	壷	胴部	E 区	S A 38	欠番	欠番	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	115 と接合
1625	土師器	壷	胴部	E 区	S A 38	ミガキ→ナデ	ユビオサエ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1626	土師器	壷	口縁～頸部	E 区＋ユカ	S A 38	胴部ミガキ→口縁部ハケ→頸部に刻目突帯文	ヘラナデ	(14.2)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1627	土師器	壷	口縁～頸部	N区	S A 38	ヘラナデ→頸部に刻目突帯文、ナデ	ヘラナデ	(16.2)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒、白色透明粒	
1628	土師器	壷	口縁～頸部	E 区	S A 38	ミガキ→頸部に刻目突帯文、ナデ	ハケ	15.8	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1629	土師器	高坏	口縁～脚部	N 区	S A 38	ミガキ	ヘラナデ	(22.8)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1630	土師器	高坏	坏部	95	S A 38	ミガキ	ミガキ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	内面赤彩
1631	土師器	高坏	坏部	315	S A 38	ミガキ	ミガキ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1632	土師器	高坏	口縁～底部	56 ＋N区	S A 38	ミガキ	ミガキ	17.4	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	内・外面赤彩
1633	土師器	高坏	坏部	49	S A 38	ミガキ	ミガキ	(24.2)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	

第 23 表　竪穴住居跡出土の土師器観察表（8）

№	種別	器種	部位	取上番号	出土区・地点・層位	調整・文様 外面	調整・文様 内面	法量（cm） 口径	法量（cm） 底径	法量（cm） 器高	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
1634	土師器	高坏	坏部	N区	ＳＡ 38	ミガキ	ヘラミガキ	(9.0)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1635	土師器	高坏	受～脚部	N区	ＳＡ 38	ミガキ	ヘラナデ	—	(11.6)	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1636	土師器	高坏	受部	W区	ＳＡ 38	ミガキ？	ミガキ？	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1637	土師器	高坏	裾部	W区	ＳＡ 38	ミガキ	ミガキ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1638	土師器	高坏	裾部	Ｅ区ユカ	ＳＡ 38	ミガキ	ミガキ	—	(14.6)	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1639	土師器	小型丸底壷	口縁～底部	Ｅ区	ＳＡ 38	ミガキ	ナデ	7.4	1.5	10.2	橙色	橙色	精選	外面赤彩
1640	土師器	小型丸底壷	口縁～底部	68	ＳＡ 38	ミガキ	ナデ	5.9	—	7.9	橙色	橙色	精選	外面赤彩
1641	土師器	小型丸底壷	胴～底部	S区	ＳＡ 38	ミガキ	ミガキ	—	—	—	橙色	橙色	精選	
1642	土師器	小型丸底壷	胴～底部	56	ＳＡ 38	タタキ→ヘラナデ	ヘラナデ	—	—	—	橙色	橙色	精選	
1643	土師器	ミニチュア	口縁～底部	S区	ＳＡ 38	ナデ→連続指頭圧痕つまみ痕有り	連続つまみ上げ痕有り	4.4	4.1	—	橙色	橙色	精選	
1643	土師器	甕	口縁部	336	ＳＡ 46	ハケ	ハケ	(20.4)	—	—	橙色	橙色	砂粒①	
1644	土師器	高坏	受部	310	ＳＡ 46	ミガキ	ミガキ	—	—	—	橙色	橙色	精選	
1645	土師器	高坏	坏部	67 ＋ 92	ＳＡ 46	ミガキ	ミガキ	—	—	—	橙色	橙色	精選	
1646	土師器	甕	頸部～胴部	Y365	ＳＡ 70	ヘラナデ	ヘラナデ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面にスス付着
1647	土師器	壷	胴部～底部	Y338 ＋ Y368	SA70	ヘラナデ	ハケ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1648	土師器	甕	底部	Y355	ＳＡ 70	ヘラナデ	ヘラ→指ナデ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1649	土師器	壷	頸～胴部	329 ＋ 330 ＋ 334 ＋ 336 ＋ 355 ＋ 360	ＳＡ 70	ミガキ	ミガキ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1650	土師器	広口長頸壷	口縁部付近～底部	Y359	SA70	ミガキ	ヘラナデ→指ナデ	—	4.0	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1651	土師器	壷	底部	Y361	SA70	タタキ→ナデ一部ミガキ	ヘラナデ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面にスス付着
1652	土師器	高坏	坏部	1266	ＳＡ 70	ミガキ	ミガキ	18.2	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1653	土師器	高坏	脚部	Y332	SA70	ミガキ . ヘラ	ヘラ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1654	土師器	坏	口縁～底部	Y(３０４＋ 310 ＋ 316 ＋ 320 ＋ 324)	ＳＡ 70	ヘラナデ	指ナデ . 指押さえ . ヘラナデ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1655	土師器	甕	口縁～底部	446 ＋ 448	ＳＡ 71	ナデ	ヘラナデ	(18.0)	—	23.8	橙色	橙色	赤褐色粒	
1656	土師器	甕	口縁～胴部	391 ＋ 393 ＋ 442 ＋ 464 ＋ 509 ＋ 514	ＳＡ 71	タタキ	ヘラナデ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着

第 24 表　竪穴住居跡出土の土師器観察表（9）

No.	種別	器種	部位	取上番号	出土区・地点・層位	調整・文様 外面	調整・文様 内面	法量（cm） 口径	法量（cm） 底径	法量（cm） 器高	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
1657	土師器	甕	口縁～底部	—	ＳＡ71	タタキ→ナデ	ハケ	23.8	2.0	23.3	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着
1658	土師器	甕	口縁～底部	1274	SA71	タタキ→ナデ．指押さえ有り	ヘラ→ナデ．指押さえ	(21.0)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着
1659	土師器	甕	口縁～底部	445	SA71	全体タタキ→口縁部ナデ、口唇部つまみだし	ヘラナデ→底部付近ケズリ	18.9	1.2	26.0	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着
1660	土師器	甕	口縁～胴部	441＋939＋1099＋1110＋1186	ＳＡ71	タタキ→ヘラナデ、口唇部つまみあげ	ヘラナデ	23.0	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着
1661	土師器	甕	頸～胴部	691＋982＋1122＋1141＋1182＋1183＋1185	ＳＡ71	タタキ	ヘラナデ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1662	土師器	甕	口縁～底部	444＋446＋447＋467＋468＋564＋856	ＳＡ71	ナデ、口唇部つまみあげ	ヘラナデ、ナデ、口唇部つまみあげ	17.3	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1663	土師器	甕	底部	—	ＳＡ71	タタキ	ユビオサエ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1664	土師器	甕	底部	1147	ＳＡ71	タタキ	ヘラナデ	—	3.4	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1665	土師器	甕	底部	471	ＳＡ71	タタキ	ハケ	—	2.7	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1666	土師器	壷	胴部～底部	444	SA71	風化著しい	ヘラナデ	—	(1.5)	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着
1667	土師器	壷	口縁～底部	1248	SA71	タタキ	ヘラナデ→口縁部ナデ	(11.0)	1.3	23.8	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着
1668	土師器	壷	口縁～底部	446＋454	ＳＡ71	口縁部ナデ、胴部タタキ→ミガキ	ヘラナデ→ナデ	(10.0)	—	21.8	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着
1669	土師器	甕	頸～胴部	517＋550＋633＋840＋842＋843＋846	ＳＡ71	タタキ→ヘラナデ	ハケ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着
1670	土師器	甕	底部	1040	ＳＡ71	タタキ→ナデ	ハケ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1671	土師器	甕	底部	360	ＳＡ71	タタキ	ヘラナデ	—	1229.0	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面にスス付着
1672	土師器	甕	底部	400＋401	ＳＡ71	タタキ	ヘラナデ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1673	土師器	甕	底部	391	ＳＡ71	ヘラナデ	ヘラナデ	—	4.6	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1674	土師器	高坏	口縁～裾部	446	ＳＡ71	風化著しい	風化著しい	(22.0)	14.8	17.3	橙色	橙色	赤褐色粒	
1675	土師器	高坏	口縁～裾部	431	ＳＡ71	ミガキ	丁寧なナデ	(13.9)	7・0	11.0	橙色	橙色	赤褐色粒	
1676	土師器	高坏	受部	1109	ＳＡ71	風化著しい	風化著しい	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1677	土師器	高坏	脚部	443	ＳＡ71	ミガキ	ミガキ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1678	土師器	鉢	口縁～底部	422	ＳＡ71	ナデ	ヘラナデ	(12.5)	5.5	5.9	橙色	橙色	赤褐色粒	
1679	土師器	甕	口縁～底部	833＋824＋790＋793	ＳＡ72	口縁＝タタキ→指ナデ　胴部＝タタキ→ヘラナデ	口縁＝ヘラナデ→指ナデ　胴部＝ヘラナデ	(29.1)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着

第 25 表　竪穴住居跡出土の土師器観察表（10）

No.	種別	器種	部位	取上番号	出土区・地点・層位	調整・文様 外面	調整・文様 内面	法量（cm） 口径	法量（cm） 底径	法量（cm） 器高	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
1680	土師器	甕	口縁～底部	800 ＋ 813 ＋ 1120 ＋ 1125 ＋ 1208	ＳＡ 72	ナデ	ヘラナデ	(20.7)	2.7	21.0	橙色	橙色	赤褐色粒	
1681	土師器	甕	口縁～胴部	1542 ＋ 1141 ＋ 1631 ＋ 1276 ＋ 1553 ＋ 1926 ＋ 1928 ＋ 1270 ＋ 1098 ＋ 1919 ＋ 1955 ＋ 974 ＋ 973 ＋ W 区＋ 1840 ＋ 991 ＋ 1425 ＋ 1959 ＋ 923 ＋ 1464 ＋ 1635 ＋ S 区 ＋ 1918 ＋ 1961 ＋ 1550 ＋ 1823 ＋ 1782 ＋ 1916 ＋ 1095 ＋ 2185 ＋ 952 ＋ 1930 ＋ 2184 ＋ 1775 ＋ 1531 ＋ 1533 ＋ 1836 ＋ 1833 ＋ 1925 ＋ 1830 ＋ 992 ＋ 1920 ＋ 1910 ＋ 1912 ＋ 1786 ＋ 1783 ＋ 1532 ＋ 1987 ＋ 1085 ＋ 1632 ＋ 877 ＋ 2104 ＋ 2175 ＋ 1774 ＋ 2070 ＋ 1886 ＋ N 区 ＋ 1633 ＋ 1142 ＋ 1702 ＋ 1634 ＋ 1931 ＋ 1911 ＋ 1954 ＋ 1639 ＋ 1630 ＋ 1548 ＋ 1544 ＋ 1423 ＋ 1541 ＋ (? 1547.1782.1836)	ＳＡ 72	タタキ→ナデ	ヘラ→ナデ	23.2	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着
1682	土師器	甕	口縁～胴部	929 ＋ 1100 ＋ 1049 ＋ 1171 ＋ 1172 ＋ 1173	ＳＡ 72	タタキ	ハケ	(25.6)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着
1683	土師器	甕	口縁～頸部	1061	SA72	タタキ	ハケ	(34.8)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1684	土師器	甕	口縁～胴部	451 ＋ 1001	SA72	タタキ	ハケ	(27.2)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1685	土師器	甕	口縁～底部付近	1516 ＋ 1132 ＋ 1518 ＋ 1968 ＋ 1938	ＳＡ 72	タタキ→指頭圧痕	ヘラナデ . 指頭圧痕	(24.3)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着
1686	土師器	甕	口縁～底部	1097 ＋ 1551 ＋ 1146 ＋ 2172 ＋ 2193 ＋ 1779 ＋ 1922 ＋ 1165 ＋ 1114 ＋ 922 ＋ 1145 ＋ 1148 ＋ 1421 ＋ 1989 ＋ 1917 ＋ 1117 ＋ 1000 ＋ 1108 ＋ 1846 ＋ (? 995) ＋ 2132 ＋ 1785 ＋ W 区＋ 1819 ＋ 1961 ＋ 2130 ＋ 2160 ＋ 1170 ＋ 1174 ＋ 1100 ＋ 2044 ＋ 1138 ＋ 1101 ＋ 1139 ＋ 2146 ＋ 1841 ＋ 1825 ＋ 1166 ＋ 1051 ＋ 929 ＋ 984 ＋ 1158 ＋ 2148 ＋ 1118 ＋ 1161 ＋ 2149 ＋ 2122 ＋ 1072 ＋ 996	ＳＡ 72	格子目タタキ→ナデ	板状ヘラによるナデ	21.2	4.9	31.2	橙色	橙色	赤褐色粒	外面にスス付着 . 内面に炭化物付着
1687	土師器	甕	口縁～底部付近	807 ＋ 867 ＋ 93 ＋ 1503 ＋ 1177 ＋ 1529 ＋ 981 ＋ 1514 ＋ 1496 ＋ 1495 ＋ 1505 ＋ 97	ＳＡ 72	タタキ→指ナデ	指押さえ→ハケナデ	(22.7)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着
1688	土師器	甕	口縁～底部	821 ＋ 820 ＋ 811 ＋ 948 ＋ 1904	ＳＡ 72	口縁部ナデ、胴部タタキ	ヘラナデ、ユビオサエ多数	18.4	—	19.9	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着
1689	土師器	甕	口縁～胴部	—	ＳＡ 72	タタキ	ヘラナデ、ナデ	(11.0)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1690	土師器	甕	胴～底部	526 ＋ 949	SA72	タタキ	ヘラナデ→指ナデ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	

第 26 表　竪穴住居跡出土の土師器観察表（11）

№	種別	器種	部位	取上番号	出土区・地点・層位	調整・文様 外面	調整・文様 内面	法量（cm） 口径	法量（cm） 底径	法量（cm） 器高	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
1691	土師器	甕	底部	—	SA72	風化著しい	風化著しい	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1692	土師器	甕	底部	—	SA72	ナデ	ナデ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1693	土師器	甕	胴部～底部	967 ＋ 975 ＋ 1091 ＋ 1134 ＋ 1164	SA72	ヘラナデ→指ナデ	工具によるナデ→指ナデ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1694	土師器	壷	口縁～胴部	W 区＋ 459 ＋ 929 ＋ 956 ＋ 1049 ＋ 1073 ＋ 1076 ＋ 2038	SA72	口縁＝ヘラナデ 胴部＝タタキ →ミガキ	ヘラナデ→指ナデ．指押さえ	(13・6)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1695	土師器	壷	底部	25 ＋ 394	SA72	タタキ	ナデ	—	(3.2)	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1696	土師器	高坏	坏部	—	SA72	ミガキ	ミガキ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1697	土師器	高坏	口縁～裾部	1040 ＋ 1041	ＳＡ 72	風化著しい	風化著しい	22.6	14.8	16.5	橙色	橙色	赤褐色粒	
1698	土師器	高坏	坏部	28 ＋ 32 ＋ 357 ＋ 367 ＋N区	ＳＡ 72	ミガキ	ミガキ	15.3	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1699	土師器	高坏	坏部～裾部	1969	SA72	ヘラミガキ→指ナデ	ヘラナデ→指ナデ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒、砂粒①	
1700	土師器	高坏	脚部	60	SA72	風化著しい	風化著しい	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1701	土師器	甕？	底部	—	SA72	ナデ	ナデ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1732	土師器	甕	口縁～胴部	—	ＳＡ 76	タタキ→ナデ	ヘラナデ	(27.0)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着
1733	土師器	甕	口縁～胴部	181 ＋ 734 ＋ 848 ＋ 1226	ＳＡ 76	タタキ→口縁部ナデ	ハケ	(22.2)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1734	土師器	甕	口縁～頸部	183 ＋ 187 ＋ 217 ＋ 347	ＳＡ 76	ナデ	ハケ	(27.6)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒、砂粒①	
1735	土師器	甕	頸～胴部	215	ＳＡ 76	タタキ	風化	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒、砂粒①	
1736	土師器	甕	頸～胴部	297 ＋ 1074	ＳＡ 76	タタキ	ヘラナデ	(22.6)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒、砂粒①	外面スス付着
1737	土師器	甕	口縁～胴部	270	ＳＡ 76	タタキ→口縁部ナデ	口縁部ハケ→ヘラナデ	(25.2)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒、砂粒①	外面スス付着
1738	土師器	甕	口縁～胴部	SW 区＋５７５＋４３５＋５３３＋３３８＋８８２＋１３６２	SA76	タタキ→ナデ	ヘラナデ→ナデ	(20.6)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒、砂粒①	内面スス付着
1739	土師器	甕	口縁～胴部	242 ＋N区	ＳＡ 76	タタキ	ハケ	20.6	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1740	土師器	甕	口縁～胴部	ＳW区	ＳＡ 76	風化著しい	風化著しい	(20.8)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1741	土師器	甕	口縁～胴部	468 ＋ＳW区	ＳＡ 76	ナデ	口縁部ハケ→胴部ヘラナデ	(23.8)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1742	土師器	甕	口縁部	545 ＋ 546 ＋ 548	ＳＡ 76	タタキ	ナデ	19.8	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1743	土師器	甕	頸～胴部	248 ＋ 355 ＋ 1148	ＳＡ 76	タタキ	ヘラナデ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着

第 27 表　竪穴住居跡出土の土師器観察表（12）

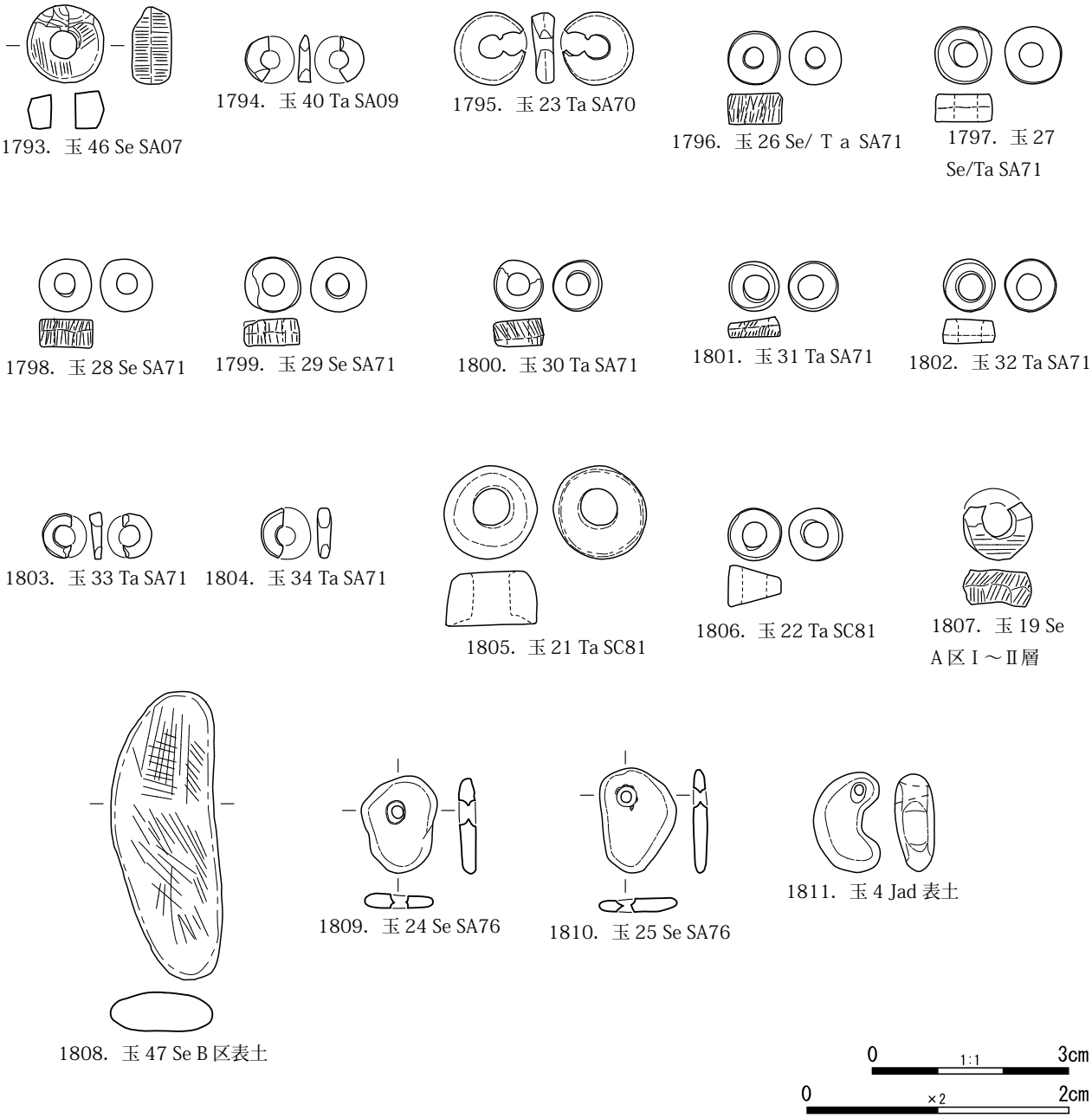
No.	種別	器種	部位	取上番号	出土区・地点・層位	調整・文様 外面	調整・文様 内面	法量（cm） 口径	法量（cm） 底径	法量（cm） 器高	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
1744	土師器	甕	頸～胴部	956 ＋ 1082	ＳＡ 76	タタキ	ヘラナデ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1745	土師器	甕	頸～胴部	771 ＋ 1023	ＳＡ 76	タタキ	ハケ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1746	土師器	壷	胴部	560	ＳＡ 76	タタキ	ハケ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着
1747	土師器	甕	底部	617 ＋ 1076 ＋ 1153	ＳＡ 76	タタキ	ハケ	—	2.2	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1748	土師器	甕	底部	33 ＋ 40	ＳＡ 76	ヘラナデ	ハケ	—	(3.4)	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1749	土師器	甕	底部	1177	ＳＡ 76	ヘラナデ？	ヘラナデ	—	(3.4)	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1750	土師器	壷	口縁～胴部	570 ＋ ＳＷ区	ＳＡ 76	ヘラナデ	ハケ	(19.6)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1751	土師器	壷	口縁部	102 ＋ 205 ＋ 818	ＳＡ 76	ナデ	ヘラナデ	(11.6)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1752	土師器	壷	頸～胴部	193	ＳＡ 76	タタキ	ハケ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1753	土師器	壷	頸～胴部	281 ＋ 377 ＋ 508 ＋ 511 ＋ 512 ＋ 576	ＳＡ 76	タタキ	ハケ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着
1754	土師器	甕	胴部	574	ＳＡ 76	タタキ	ハケ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着
1755	土師器	高坏	坏部	388 ＋ 390 ＋ 611	SA76	ヘラミガキ	ヘラミガキ	(19.8)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1756	土師器	高坏	坏部	1127	ＳＡ 76	丁寧なナデ	丁寧なナデ	(17.0)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1757	土師器	高坏	坏部	780	ＳＡ 76	ミガキ	ミガキ	(51.0)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1758	土師器	高坏	受部	663	ＳＡ 76	ミガキ	ミガキ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1759	土師器	高坏	坏部	513 ＋ 829 ＋ 830 ＋ 839	ＳＡ 76	指ナデ	指ナデ	(9.8)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1760	土師器	高坏	受部	—	ＳＡ 76	ミガキ	ナデ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1761	土師器	高坏	脚部	299 ＋ 571 ＋ＮＥ区	ＳＡ 76	ミガキ	ナデ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1762	土師器	高坏	坏部～裾部	1022	ＳＡ 76	ヘラナデ→指ナデ	ヘラナデ→指ナデ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1763	土師器	鉢	口縁～底部付近	501 ＋ 502 ＋ 515 ＋ 603 ＋ 1092	ＳＡ 76	荒いミガキ	荒いミガキ	(12.5)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1764	土師器	鉢	口縁～底部	409 ＋ 602 ＋ 844 ＋ 1090 ＋ 1091 ＋ 1300 ＋ 1306	ＳＡ 76	丁寧なナデ	ハケ→底部付近ミガキ、口縁部ナデ	16.0	4.8	7.8	橙色	橙色	赤褐色粒	
1765	土師器	椀	口縁～胴部	392	ＳＡ７６	ミガキ	ミガキ	(13.6)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1766	土師器	鉢	口縁～底部	1277 ＋ ＳＷ区	ＳＡ 76	ナデ	ハケ	11.7	(4.2)	5.0	橙色	橙色	赤褐色粒	
1767	土師器	甕	口縁～底部	988	ＳＡ 76	ヘラナデ→指ナデ	ヘラナデ→指ナデ	(22.0)	—	(23.7)	橙色	橙色	赤褐色粒	外面にスス付着

第 28 表　竪穴住居跡出土の土師器観察表（13）

№	種別	器種	部位	取上番号	出土区・地点・層位	調整・文様 外面	調整・文様 内面	法量（cm） 口径	法量（cm） 底径	法量（cm） 器高	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
1771	土師器	甕	口縁～底部	—	C区	ナデ	ナデ	—	—	—	橙色	橙色	砂粒、白色透明粒	
1772	土師器	甕	口縁～底部	—	C区	ヘラナデ	ヘラナデ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1773	土師器	甕	口縁～胴部	—	B区Ⅰ層	タタキ	ヘラナデ、ユビオサエ多数	(21.4)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着
1774	土師器	甕	頸～胴部	—	C区	ヘラナデ	ヘラナデ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	外面スス付着
1775	土師器	甕	口縁～胴部	—	C区			—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1776	土師器	甕	口縁～胴部	—	C区	胴部ハケ→口縁部ナデ→口唇部つまみだし	胴部ハケ→口縁部ナデ→口唇部つまみだし	14.2	—	6.2	橙色	橙色	赤褐色粒	
1777	土師器	甕	胴部	—	—	ハケ	ナデ	—	—	—	橙色	橙色	砂粒	
1778	土師器	甕	胴部	—	C区			—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1779	土師器	甕	胴部	—	C区	ハケ	ハケ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1780	土師器	壷	胴～底部	—	C区	タタキ	ハケ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1781	土師器	壷	胴～底部	—	B区Ⅰ層	タタキ？	ハケ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1782	土師器	高坏	口縁～裾部	64＋65	B区Ⅰ層	ミガキ	ミガキ	(17.8)	15.4	13.7	橙色	橙色	赤褐色粒	
1783	土師器	高坏	坏部	—	B区Ⅰ層	ミガキ	ミガキ	(21.2)	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1784	土師器	高坏	脚～裾部	S 1	SX1	ミガキ	風化著しい	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1785	土師器	高坏	脚部	—		ミガキ	ミガキ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1786	土師器	椀	口縁～底部	—	B区Ⅰ層	ヘラナデ	ヘラナデ	—	—	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1787	土師器	椀	口縁～底部	5731	B区Ⅰ層	ヘラナデ	ヘラナデ	(11.5)	—	6.9	橙色	橙色	赤褐色粒	
1788	土師器	甕	底部	サブトレ	B区Ⅰ層	タタキ→ナデ	ヘラナデ	—	(4.0)	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1789	土師器	甕	底部	—	B区Ⅰ層	ナデ	風化	—	6.2	—	橙色	橙色	赤褐色粒	
1790	土師器	管状土錘		—	B区Ⅰ層			3.5	—	10.6	橙色	橙色	赤褐色粒	
1813	土師器	坏	胴部～底部	—	TⅠ表土	回転ナデ	風化著しい	—	(8.0)	—	橙色	橙色	精選	
1814	土師器	坏	底部	TPB	C区	回転ナデ	回転ナデ	—	—	—	橙色	橙色	精選	
1815	土師器	坏	口縁～底部	42	C区	回転ヘラナデ、底部ヘラによる切り離し、底部に板状圧痕有り	回転ヘラナデ	12.6	7.0	4.1	橙色	橙色	精選	
1816	土師器	皿	底部	—	０７Ⅰ層	回転ナデ、底部ヘラによる切り離し	回転ナデ	—	(5.4)	—	橙色	橙色	精選	

第 29 表　竪穴住居跡出土の土師器観察表（14）

№	種別	器種	部位	取上番号	出土区・地点・層位	調整・文様 外面	調整・文様 内面	法量（cm） 口径	法量（cm） 底径	法量（cm） 器高	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
1817	土師器	皿	底部	—	ＮＳベルト	回転ナデ、底部ヘラによる切り離し	回転ナデ	—	(5.5)	—	橙色	橙色	精選	
1818	土師器	皿	口縁～底部	43	C区	回転ナデ、底部ヘラによる切り離し	回転ナデ	8.6	7.2	1.8	橙色	橙色	精選	
1819	土師器	皿	口縁～底部	41	C区	回転ナデ、底部ヘラによる切り離し	回転ナデ	8.2	6.7	1.6	橙色	橙色	精選	
1820	土師器	皿	口縁～底部	40	C区	回転ナデ、底部ヘラによる切り離し	回転ナデ	8.0	6.3	1.1	橙色	橙色	精選	
1821	土師器	坏	口縁～底部	—	C区	回転ナデ	回転ナデ	—	—	—	橙色	橙色	精選	
1822	土師器	坏	口縁～底部	—	C区	回転ナデ	回転ナデ	—	—	—	橙色	橙色	精選	
1823	須恵器	蓋	口縁～底部	TPB	C区	回転ヘラケズリ	回転ヘラナデ→ユビナデ	(13.6)	—	—	橙色	橙色	精選	
1824	須恵器	蓋	口縁～底部	E6-1	B区	回転ヘラケズリ。回転ヘラナデ	回転ヘラナデ→ユビナデ	(12.3)	—	—	橙色	橙色	精選	外面灰かぶり
1825	須恵器	坏	口縁～底部	—	Ｍ９　Ⅰ層	回転ナデ	回転ナデ	(13.2)	(7.1)	—	明褐灰色	明褐灰色	精選	
1826	須恵器	坏	底部	—	Ｍ９	回転ヘラナデ	回転ナデ	—	(7.6)	—	灰白	灰白	精選	
1827	須恵器	坏	底部	TPB	C区	回転ヘラナデ	回転ヘラナデ	—	(6.5)	—	灰白	灰白	精選	
1828	須恵器	坏	胴部～底部	—	C区　表土	風化著しい	回転ナデ	—	(6.4)	—	明褐灰色	明褐灰色	精選	
1829	須恵器	坏	胴部～底部	—	B区	風化著しい	回転ナデ	—	—	—	灰白	灰白	精選	
1830	須恵器	瓶	頸部	TPB	C区	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	—	—	—	灰白	灰白	精選	外面灰かぶり
1831	須恵器	大甕	底部	L6-4	C区	回転ナデ	回転ナデ	—	—	—	灰白	灰白	精選	
1832	磁器	椀	底部	—	C区		草花文	—	—	—	灰白	灰白	精選	



第 256 図　弥生時代以降の玉類　1793 ～ 1807：S＝×２，1808 ～ 1811：S＝１／１

第 30 表　弥生時代以降の玉観察表

掲載No.	器種No.	注記				石材				サイズ				分類基準					時代・時期	備考
						色調	種類	肉眼原産地推定	化学分析結果	長軸(mm)	短軸(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	形態	穿孔数	穿孔技術	線刻	器種		
1793	玉 46	ノクビ2	A	SA7	963	濃緑	Se	不明	未分析	5.9	5.9	3.0	0.15	円・扁平	1	両側・筒状	―	臼玉	古墳	
1794	玉 40	ノクビ2	A	SA9	NW区中央焼土	黒灰	Ta	不明	未分析	(3.3)	(1.5)	1.0	0.01	円・扁平	1	両側・筒状	―	臼玉	古墳	縦／横に半分折損
1795	玉 23	ノクビ2	B	SA70	ユカ369	濃緑・白斑	Se	不明	滑石	5.7	5.5	1.7	0.07	円・扁平	1	両側・筒状	―	臼玉	古墳か	
1796	玉 26	ノクビ2	B	SA71	904－1	灰緑	Se/Ta	不明	その他	4.1	4.1	2.2	0.07	円・扁平	1	両側・筒状	―	臼玉	古墳	
1797	玉 27	ノクビ2	B	SA71	904－2	灰緑	Se/Ta	不明	滑石	4.3	4.1	1.4	0.03	円・扁平	1	両側・筒状	―	臼玉	古墳	
1798	玉 28	ノクビ2	B	SA71	904－3	灰緑	Se	不明	滑石	5.0	4.9	1.2	0.03	円・扁平	1	両側・筒状	―	臼玉	古墳	
1799	玉 29	ノクビ2	B	SA71	904－4	濃緑	Se	不明	滑石	5.0	5.0	1.3	0.04	円・扁平	1	両側・筒状	―	臼玉	古墳	
1800	玉 30	ノクビ2	B	SA71	904－5	黒灰	Ta	不明	滑石	4.7	4.6	1.3	0.03	円・扁平	1	両側・筒状	―	臼玉	古墳	一部欠損
1801	玉 31	ノクビ2	B	SA71	904－6	黒灰	Ta	不明	滑石	3.3	3.2	1.2	0.02	円・扁平	1	両側・筒状	―	臼玉	古墳	
1802	玉 32	ノクビ2	B	SA71	904－7	黒灰	Ta	不明	滑石	4.4	4.4	1.3	0.02	円・扁平	1	両側・筒状	―	臼玉	古墳	
1803	玉 33	ノクビ2	B	SA71	904－8	黒灰	Ta	不明	滑石	(3.5)	(2.2)	(0.8)	0.01	円・扁平	1	両側・筒状	―	臼玉	古墳	
1804	玉 34	ノクビ2	B	SA71	904－9	灰	Ta	不明	未分析	(3.1)	(1.3)	(0.9)	0.01	円・扁平	1	両側・筒状	―	臼玉	古墳	半分破損
1805	玉 21	ノクビ2	B	SC81	-22	暗緑黄	Ta	不明	滑石	6.7	6.4	4.0	0.27	略扁平球	1	両側・筒状	―	小玉	古墳か	
1806	玉 22	ノクビ2	B	SC81	-35	黒・白斑	Ta	不明	滑石	4.1	4.1	2.8	0.06	円・扁平	1	両側・筒状	―	臼玉	古墳か	
1807	玉 19	ノクビ2	A	―	Ⅰ～Ⅱ	暗緑	Se	不明	滑石	5.2	(4.1)	2.9	0.07	円・扁平	1	両側・筒状	―	臼玉	古墳か	
1808	玉 47	ノクビ2	B	表土	―	濃緑・淡緑黄	Se	不明	未分析	43.7	15.9	6.6	7.07	不整・扁平棒	0	―	―	その他	古墳か	
1809	玉 24	ノクビ2	B	SA76	-1265	浅緑灰	Se	不明	滑石	14.5	11.2	2.9	0.59	不整・扁平	1	両側・鼓状	―	その他	古墳	
1810	玉 25	ノクビ2	B	SA76	-1330	淡青緑	Se	不明	その他	15.8	11.5	2.8	0.70	不整・扁平	1	両側・鼓状	―	その他	古墳	
1811	玉 4	ノクビ2	B	I5-3	表土	白・鮮緑筋	Jad	糸魚川・青海	ヒスイ	15.4	10.5	5.4	1.52	C字	1	片側	―	勾玉	弥生以降か	

第６節　古代

（１）概要

総計４軒の掘立柱建物跡、２条の溝・道路状遺構（波板状硬化面）が検出された。遺物としては、土師器、須恵器、緑釉陶器、布目瓦の出土が確認された。

■掘立柱建物跡（第 257・258 図）

SB02・03 は２棟の切り合う掘立柱建物跡である。２間×３間で、面積もほぼ同規模である。時間的先後関係は不詳だが、先行した１棟の廃絶後間も無く建て替えられたものであろう。C 区北側から検出された。

■溝・道路状遺構（第 259 図）

いわゆる波板状硬化面を有する溝・道路状遺構が２条確認された。C 区北側中央付近から同区南西方向に向かうにつれ、痕跡が途切れる。

（２）包含層出土の土器・陶磁器

■土師器（第 260 図）

包含層中より、わずかながら坏・皿が出土している。底部はいずれもヘラによる切り離しであり、中には製作台のものと思われる圧痕が残されている資料がある。

1813･1814 が高台付の坏､1815 ～ 1817 が坏、1818 ～ 1820 が皿である。

■須恵器（第 260 図）

包含層中より、わずかながら出土しているが、その出土数は非常に少なく、出土した全点を図示したといっても過言ではない。

1823・1824 が　蓋、1825 ～ 1829 が　坏、1830・1831 が壷である。

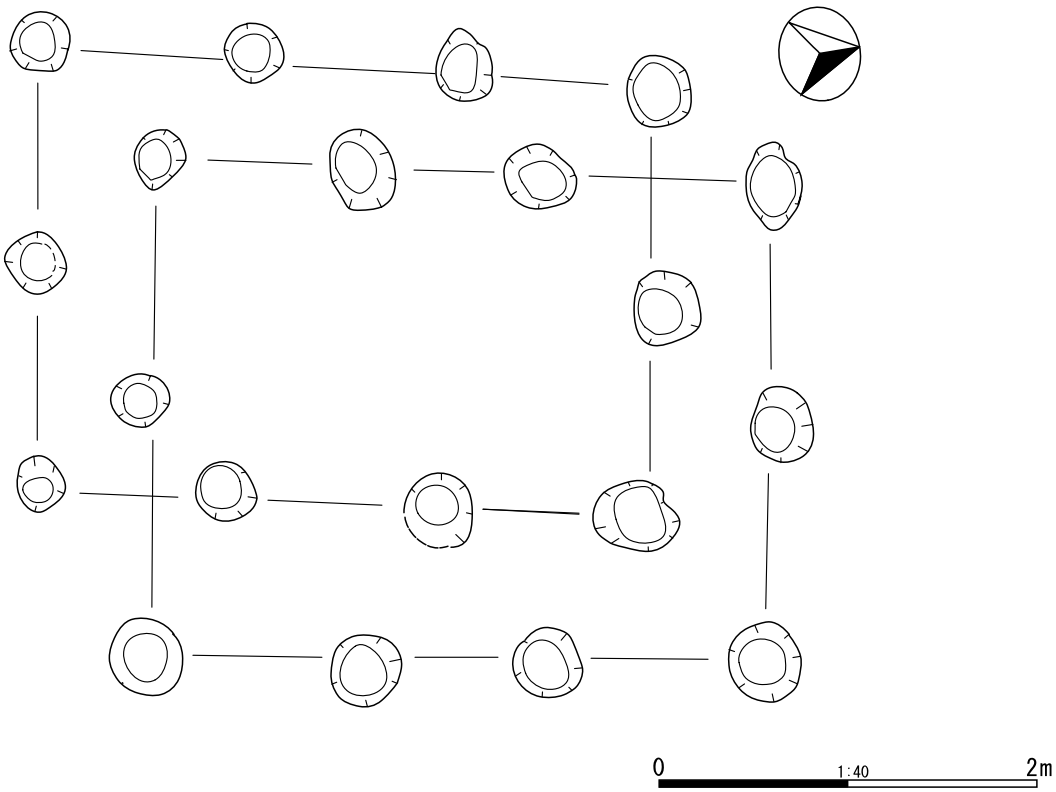
■緑釉陶器（第 260 図）

数点の出土を確認した。うち２点を図示した。

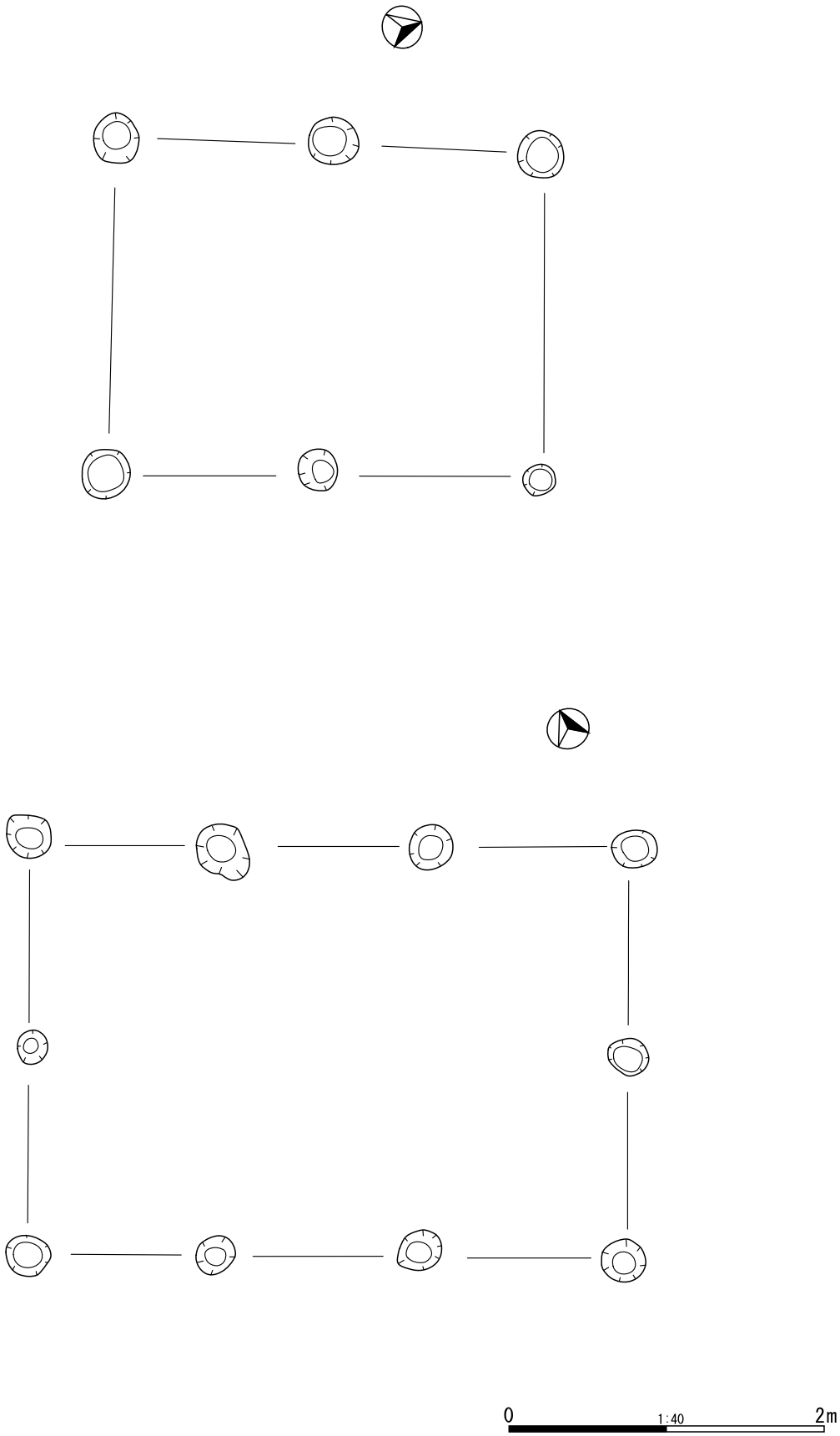
1821 は高台付の坏、1822 が坏である。いずれも畿内系と推定される釉と胎土の特徴を持つ。

■布目瓦

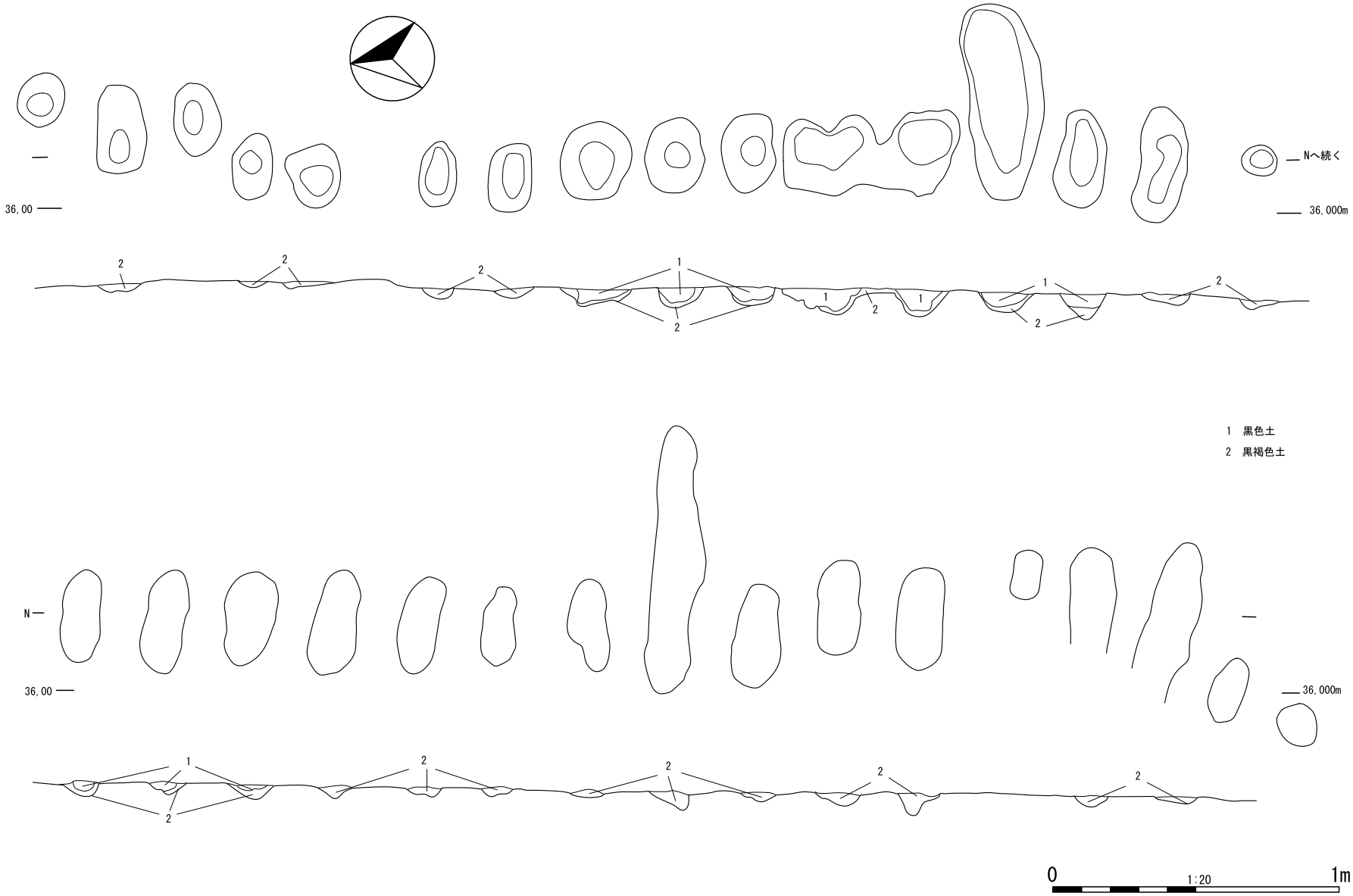
図示は割愛したが、数点の出土が確認された。いずれも小片であり、C 区と B（D）区の境界付近を中心に、他の近接する時期の遺物と分布範囲を重ねる。



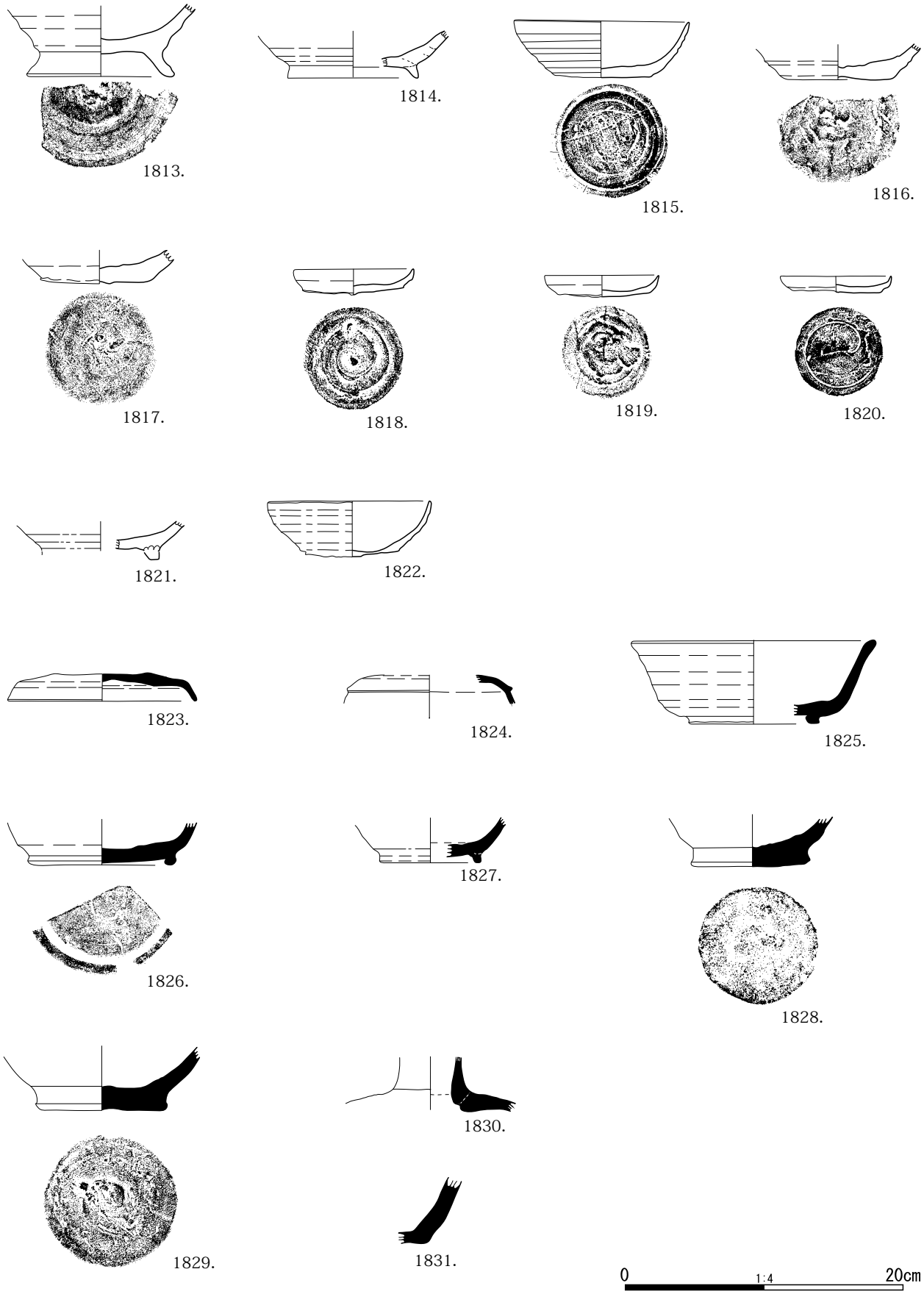
第 257 図　古代の遺構（１）　第２・３号掘立柱建物跡（ＳＢ２・３）　Ｓ＝１／４０



第 258 図　古代の遺構（2）　第４・５号掘立柱建物跡（ＳＢ４・５）　Ｓ＝１／４０



第 259 図　道路状遺構（波板状硬化面）断面図（1）　S＝1／29



第 260 図　古代の遺物　S＝1／4

第７節　中・近世以降

（１）概要

遺物としては、中・近世および近・現代の陶磁器類、銭貨、滑石製品、砥石、煙管、火打石、ガラス瓶などが出土した。

中・近世に属する可能性のある遺構としては、墓穴と考えられる土坑が１基あり、その他多数あるピット群の一部が候補に挙がるが厳密に捉えきれたものはない。また、後述するようにＥ区では火打石が２点出土したＴ８－２区の撹乱が近世に属するものであった可能性が高い。

近・現代に属する遺構としては、Ｃ区から検出された階段付き土坑が挙げられる。人一人が通ることができるほどの幅で、地下２ｍほど掘り下げており、地山削り出しの階段を備えていた。内部からは薬品のアンプル瓶、ガラス製注射器などが出土したが、安全衛生上の配慮から大半は廃棄し、遺構の記録も平面図のみの実測とレベリングのみにとどめた。

（２）遺構

第 115 号土坑（SC115　第 261 図）

長軸 1.3 m、短軸 0.9 mを測る略長方形の土坑である。形態から墓穴である可能性が考えられる。南端に落ち込みが認められた。底面からは磁器が１点出土している。

（３）遺物

ａ　出土遺物の概要

遺物はＢ区およびＥ区を中心に出土し、Ｃ区からも若干の遺物を確認している。

ｂ　遺物詳説

■陶磁器（第 262 図）

近世に遡る資料で図示に耐えうるものには、1832 の染付けがあるが、量は多くない。

■銭貨（第 262 図）

総計６点が確認された。

1833 は新寛永通寶である。銭径 22.8㎜、穿径 7.0㎜、輪厚 1.1㎜、重量 1.62g を測る。若干拉げている。

1834 も新寛永通寶である。銭径 25.0㎜、穿径 5.6㎜、輪厚 1.8㎜、残存重量 2.44g を測る。上辺の一部を欠損する。

1835 も若干銭銘に不明瞭な部分があるが新寛永通寶であろう。銭径 23.9 ～ 24.2㎜、穿径 5.8㎜、輪厚 1.5㎜、残存重量 2.66g を測る。

非掲載資料の銭貨４は明治７（1874）年銘の半銭青銅貨である。銭径 22㎜、重量 2.86g を測る。後述の煙管１と同一四半グリッドからの出土である。非掲載資料として、他に２枚の新寛永がある。

■滑石製品（第 263 図 1837）

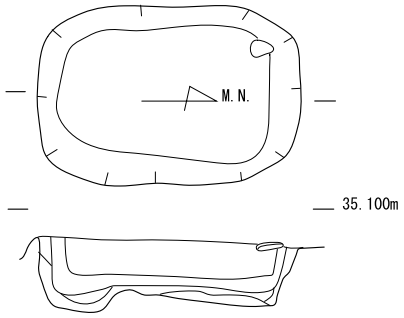
１点のみ確認した。黒灰色の滑石を用いる。側面観が若干湾曲することから、石鍋の破片を再利用した可能性が指摘できる。Ｃ区Ｎ９グリッドの撹乱中からの出土である。研磨により整形され、全体に線条痕が残る。両端にくびれが設けられる。注目されるのは図上半に顕著に付着する煤で、縦・横方向に緊縛した痕跡が看取される。用途は不明だが、類品のある福岡県博多 108 遺跡では漁労に関わる石錘と報告されている（文献 38）。宮崎県内では都城市正坂原遺跡にも類例があり、棒状製品と報告されている（文献 39）。緊縛して使用した事実からすると、いずれにせよ重量が重視された道具であったと推定される。したがって権衡に関わる可能性も排除できない（文献 40）。厳密な時期比定は困難だが、博多 108・正坂原両遺跡の成果からすれば、12 世紀代の所産である可能性も指摘できよう。

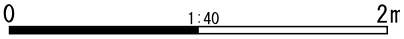
■砥石（第 263 図）

Ｃ区南西端に設けたＥ区と向かい合う拡張区表土中から出土した。淡橙灰色の凝灰岩を素材とし、両面が使用の結果、わずかな凹面を呈する。図上・下辺ともに人為的に刻みを入れる整形加工が施され、両端は欠損する。本来は長方形であったものか。残存するのは、完形時のほぼ中央に近い部位と推定される。

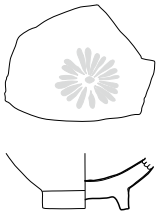
■火打石（第 264 図）

総計 17 点確認された。主な分布はＢ区とＥ区の大きく二つに分かれる。Ｂ区ではＩ～Ｋ・４～７グリッドの範囲に収まり、Ｅ区ではＴ８－２区の撹乱中から２点がまとまって出土した点が注目される。この他、Ｃ区から１点のみ大形品（1850）の出土が確認された。石材は、Ｂ区でチャート・玉髄・石英、Ｅ区で玉髄とチャートＣ区でチャー

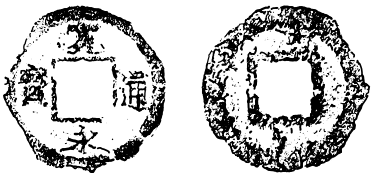




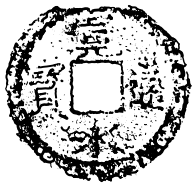
第 261 図　第 115 号土坑　S ＝ 1 ／ 40

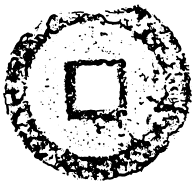


1832.

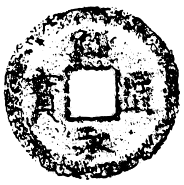


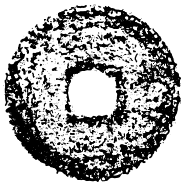
1833. 銭貨 1　C 区 I 層



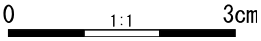


1834. 銭貨 2　E 区

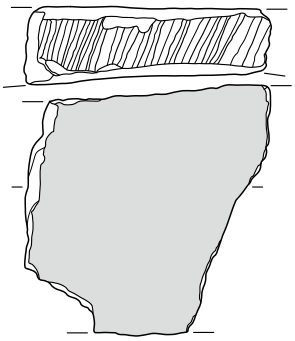


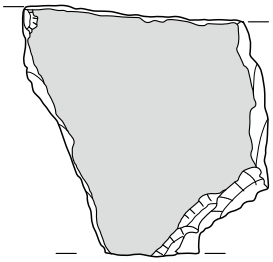


1835. 銭貨 3　E 区撹乱

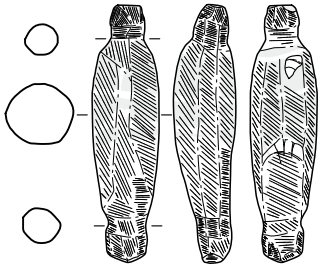


第 262 図　磁器・銭貨　1832：S ＝ 1 ／ 3，1833 ～ 1835：原寸

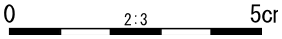




1836.



1837. 滑石製品　C 区 N9 撹乱



第 263 図　砥石・滑石製品　S= 2 ／ 3

第 31 表　近世の火打石観察表

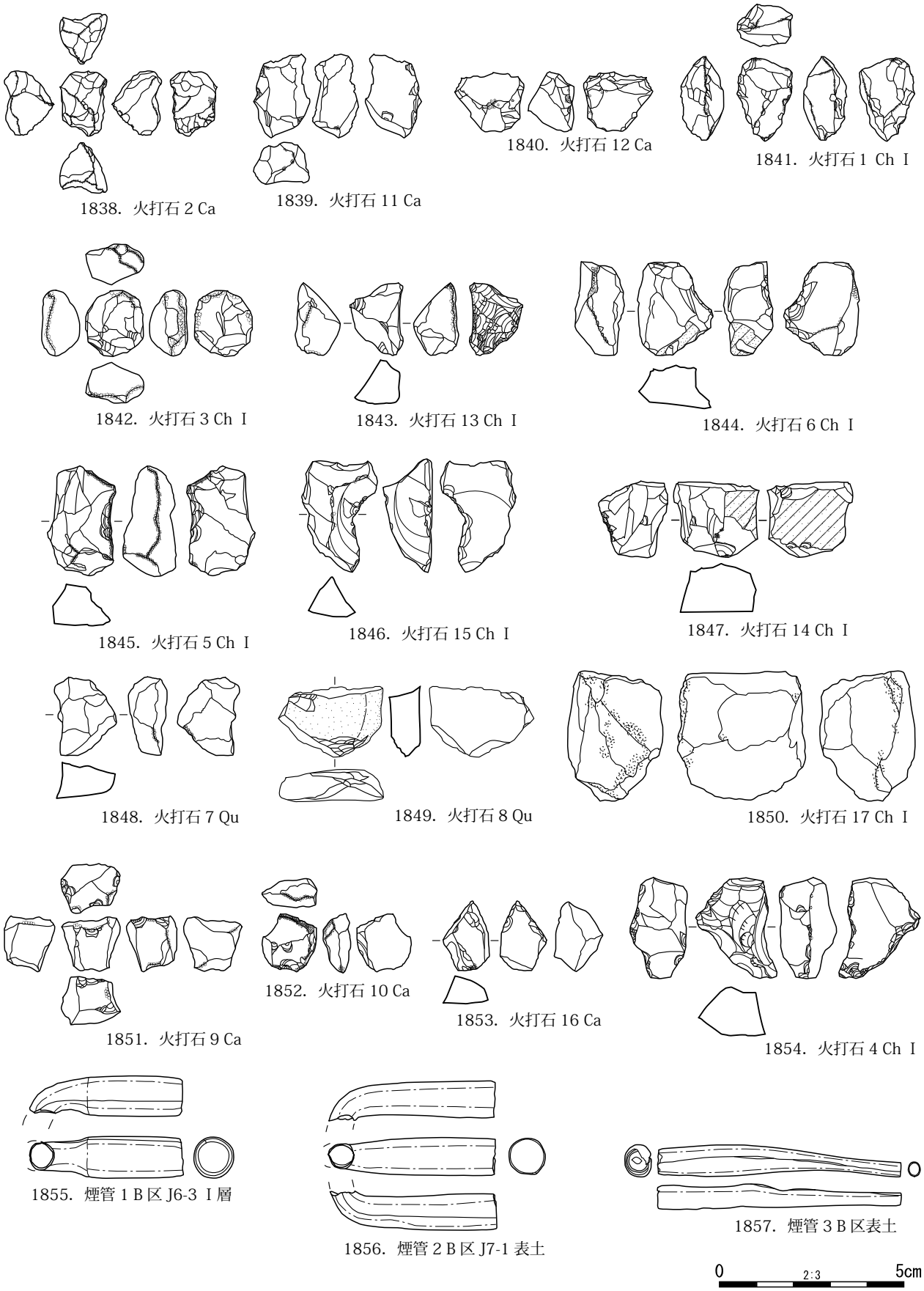
掲載No.	器種No.	注　記		石　材 色調	石質	種類	サイズ 長軸(mm)	短軸(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備　考
1838	火打石2	ノクビ2 B K4-1/2	Ⅰ	白	良	Ca	17.9	13.2	12.1	3.01	―
1839	火打石11	ノクビ2 B 16011	Ⅰ	灰白	良	Ca	23.4	14.5	10.8	3.72	鉄サビ付着
1840	火打石12	ノクビ2 B 16339	Ⅰ	灰	良	Ca	18.2	17.2	12.4	4.05	鉄サビ付着
1841	火打石1	ノクビ2 B J4-2	表土	黒灰＋灰	良	Ch	21.0	19.2	11.6	3.88	鉄サビ付着
1842	火打石3	ノクビ2 B I7-3	Ⅰ	暗緑灰	良	Ch	17.9	15.6	9.8	3.45	鉄サビ付着
1843	火打石13	ノクビ2 B K7-3	Ⅰ	暗緑灰	良	Ch	18.0	15.3	11.8	2.69	
1844	火打石6	ノクビ2 B K6-2	表土	黒灰	良	Ch	25.9	19.9	12.5	7.20	
1845	火打石5	ノクビ2 B K6-2	表土	黒灰	やや粗	Ch	29.7	17.9	13.9	7.74	
1846	火打石15	ノクビ2 B ―	表土	黒灰＋灰	良	Ch	30.1	19.7	13.8	6.58	鉄サビ付着
1847	火打石14	ノクビ2 B I6-4	表土	淡青灰	良	Ch	23.0	21.0	16.5	9.55	鉄サビ付着　縄文石核か
1848	火打石7	ノクビ2 B J5-3	表土	白	粗	Qu	20.9	19.0	9.8	3.90	
1849	火打石8	ノクビ2 B I5-4	Ⅰ	白	粗	Qu	27.9	18.1	8.1	5.86	手擦れ痕か
1850	火打石17	ノクビ2 C 5213	Ⅰ	暗灰褐＋灰白	粗	Ch	35.1	33.8	26.1	47.29	
1851	火打石9	ノクビ2 E T8-2	カクラン	灰	良	Ca	16.2	13.3	12.7	3.41	
1852	火打石10	ノクビ2 E T8-2	カクラン	灰	良	Ca	14.9	14.3	7.2	1.81	
1853	火打石16	ノクビ2 E T5・6・7	表土	灰褐色	良	Ca	19.1	11.9	9.1	1.90	鉄サビ付着
1854	火打石4	ノクビ2 E カクニン340	Ⅲ	淡緑灰	良	Ch	28.7	20.3	13.3	7.47	鉄サビ付着

トが認められた。出土層位はＥ区の１点（1854）のみ、縄文時代早期包含層である第Ⅲ層から出土したが、他は第Ⅰ層・表土・撹乱中からの出土である。1854 は暗灰緑色チャート製で石核形状の資料である。長軸２辺に細かな剥離痕と潰れが多く観察され、他の稜上にも複数の潰れが認められる。縄文時代の石核の可能性も排除できないものの、鉄錆の付着もみられることから、ここでは火打石の可能性を推したい。Ｂ・Ｅ区出土の他のチャート製資料も黒褐色、暗灰色、暗青灰色など地味な色調で占められる。隣接する野首第１遺跡（文献５）から出土した、いわゆる徳島県阿南市大田井産の青緑色チャート（文献 41・42）は認められない。本遺跡の資料の石質は節理が多く入る石質もあることから、流通品としても、そう遠くない産地が想定され、ごく近傍地産の可能性も考えられる。　唯一Ｃ区から出土した 1850 も、剥片石器生産には向かない粗質のチャートである。一方、玉髄製は飴色がかった灰色の色調と石質で斉一性が高く、チャートに比較してより広域に流通した製品である可能性も指摘できる。ただし、1851 のみは他の資料に比べ、透光性が低く石英に近い特徴を有する。ただ、1852 とともに撹乱からの出土であるため、これも玉髄の変異に収まるか。石英製資料２点は、火打石との認定がやや心許ない。1848 はわずかな鉄錆が観察されるが、使用痕に乏しい。同質の 1849 も使用痕に乏しいが、表面全体に手擦れらしき磨耗痕が残る。軟質であるが、一応火打石の可能性を考えたい。

■煙管（第 264 図）

総計２点の雁首と１点の吸口が確認された。全て銅製である。雁首２点の火皿はいずれも欠損し、Ｂ区の比較的近接した位置から出土した。吸口もＢ区からの出土であるが、厳密な位置は特定できない。1855 は肩付きで、短い首部との境界は不明瞭である。安芸毬子氏による江戸遺跡出土資料の編年案（文献 43）に従えば、雁首の形態分類 B1 類ないし B2 類に相当し、18 世紀後半～ 19 世紀前半の所産と推定される。図上面の如く、肩から首部にかけて一体に製作した接合痕が観察される。1856 は肩が付かないもので、安芸編年に従えば、形態分類 A1 類に相当し、19 世紀後半（明治期）の所産と理解される。首部の下には二次的な凹みが観察される。使用に伴うものか。

1857 は内部に羅宇の残存する吸口である。厳密な時期は決定できないが、形態的特徴から 19 世紀以降の所産と考えられる。煙管２と同様に、複数箇所に凹みが観察される。



第 264 図　火打石・煙管　S＝2／3

第Ⅳ章　成果と課題

第１節　縄文時代後・晩期土器の時間的評価

（１）本節の目的

第Ⅱ章では本遺跡出土の縄文時代後・晩期に該当する土器群の分類を行ない報告した。

本節においては、これら分類した土器群と、従来使用されてきた土器編年との比較を行なうことで、野首第２遺跡の縄文時代後・晩期土器群の時間的評価を行う。

（２）後期土器の時間的評価

ａ　丸尾式並行期

第１群は丸尾式に相当する。深鉢と脚台付皿形土器でセットを構成している。基本的にはＡ区を中心に出土し、わずかにＣ区において散見される。土器類型ごとの出土比率は高くはない。

深鉢はＡ区を中心にＣ区でもわずかに認められる。有文土器と無文土器に二分されるが、基本的な器形や調整等に差異は認められない。有文深鉢の中でも、口縁部の断面形状が三角形のもの（319 など）は、口縁部の断面形状が「くの字」形のものよりも時間的に先行するという指摘があり（文献 44・45）これに拠るならば、当遺跡の該当期には数段階が存在することになる。

脚台付皿形土器の分布はＡ区とＣ区に偏在している。これは後期の住居の分布域と同様である。その中でもＡ区の SX01 からは脚台付の浅鉢が 12 個体まとまって出土しており、その大多数が赤彩されている。しかしながら深鉢等の日常雑器と思われる器種の出土は極少数に限られ、また後期の集落からも離れた位置に存在している事から、非日常的な施設とも想定される。

ｂ　西平式並行期

第２群１類は従来西平式と呼称された土器の一群である。おそらく西平式並行期に属するものと考えられる。

深鉢と埦でセットを構成している。胴部小片などは、後続する土器型式との識別が困難であり、認識できた出土総量は多くない。

ｃ　太郎迫式並行期

第２群２類は太郎迫式にほぼ該当する。深鉢、浅鉢と高坏でセットを構成している。磨消縄文を施す最終土器型式であるが、野首第２遺跡からは磨消縄文土器はごく少数の出土に限られる。

ｄ　三万田式

第６群１類は、富田紘一の三万田式（文献 46 ほか）、宮内克巳の三万田Ⅱ式（文献 47）にほぼ該当すると考えられる。後続する鳥井原式と共に野首第２遺跡の主体となる土器型式である。

深鉢と浅鉢、注口土器という器種構成である。その中でも線刻羽状文などが施された有文土器は極僅かであり、ほとんどが無文深鉢で占められている。三万田式の器種構成において無文深鉢が多数を占める点は、宮崎平野共通の事象である。

この無文深鉢は一見すると同じ器形・文様要素だが、詳細に観察すると、ごく微妙な差異を共有するグループに分ける事ができる。このグループ差は時間的な前後関係を示すものでは無く、作り手の個性が表象した可能性も捨てきれないが、詳述していきたい。

■フェイズ１　三万田式に先行する太郎迫式の口縁部形態をほぼ踏襲しているものをフェイズ１とした。内面は無文のものと、１条の沈線を持つものがある。

内面の沈線文は、この時期にあらたに出現する要素だと考えられる。

胴部は球形状を成すものが多く、器形の点からも三万田式の有文深鉢との関連性が窺える。調整は丁寧なミガキ・ナデが施されている。

■フェイズ２　口唇部の傾斜が緩くなる段階である。内面は無文と沈線が１条施されたものがある。

胴部は球形状の丸みを帯びる。

■フェイズ３　口縁部が外反し、口唇部を平坦に仕上げるものをフェイズ３とする。無文のものが大多数を占めるが、先行するフェイズ２からの系譜である１条沈線を持つものと、２条沈線を持つものがある。

胴部は球形状の丸みを帯びるのは稀であり、ほとんどが口縁部から頸部にかけてゆるやかに屈曲し、そのままゆるやかに底部に至るものと推測される。

有文土器との関係性で明確なセットが理解できるのはフェイズ２までであり、フェイズ３の土器群は後続する鳥井原式にまで伴う可能性がある。

以上のように、無文深鉢は３類に分類可能である。器形の全体像が把握できず、口縁部が主体となった分類であるが、先に論述したとおり各フェイズの形態は先行する土器型式との関連で説明する事が可能である。

底部形態に関しては完形資料に乏しく不明瞭な点が多いが、出土している底部を観察すると形態変化に乏しい事から、フェイズ１～３まで同じ形態の底部を有する可能性が高い。

e　鳥井原式土器並行期

第４群１・２類は富田紘一氏の鳥井原式（文献46)、宮内克巳氏の三万田Ⅲ式（文献 47）にほぼ該当するものと考えられるが、タイプサイトをはじめとする西九州地方とは異なる点もあることから、鳥井原式並行期とよびたい。深鉢と２種類の浅鉢という器種構成である。その中で出土量の大半を占めるのが浅鉢である。

この鳥井原式並行期の器種構成には深鉢と浅鉢があるが、その文様構成も含め、いずれも前段階の三万田式からの系譜を辿る事ができる。

文様要素としては、口縁部に施された凹線文があるが、これには先の分類にもあるとおりａ類とｂ類に２分する事が可能である。凹線文を施す際には丁寧にミガキ上げているが、この施文技法は関西地方に広く分布する宮滝式にも共通する要素であり、西日本レベルでの野首第２遺跡のあり方を考える上で重要な指標となりうる。

f　御領式

第 91 図 469 は御領式に該当すると考えられる。いずれも口縁部資料だが、胴部片では明確に御領式と判断できるものは無かった。後続する天城式にも共通する事であるが、タイプサイトの資料と異なり胴部最大径に沈線文を持たないものも多い。

g　天城式並行期

第４群１類Ａ、３類は天城式並行期もしくは上加世田式並行期に該当する。胴部片は他型式との差異に乏しく明確に天城式と認識できるものは少数に限られた。

深鉢・浅鉢でセットを構成するが、その中で多数を占めるのは浅鉢である。口縁部付近を観察する限りにおいては天城式・上加世田式のタイプサイト資料と大きな差異は持たないが、本来型式判断の指標の一つとなる胴部最大径に施される沈線文が、本遺跡出土資料においては消失している。

またタイプサイト資料は黒色磨研処理が施されているものが大半を占めるのに対し、本遺跡出土のものは半磨研ともいうべきものや、磨研処理が施されていないものが大半を占めている。

また土器製作に使用される胎土は、ヴァリェーションに富んでおり、三万田式の様に斉一性は高くない。

この時期以降は晩期の黒川式中段階まで、土器型式はかろうじて連続するものの、個体数・分布とも散漫であり、主体的にこの領域の使用は行われていないと考えられる。

（３）晩期土器の時間的評価

a　晩期開始期

本遺跡においてはＢ区において２個体ながら、橿原文様を持つ土器が出土している（第 90 図 462・463)。　これは滋賀里Ⅱ式の文様モチーフとして知られている。滋賀里Ⅱ式は近畿地方においていわゆる晩期開始期の亀ヶ岡式との共伴事例が知られている。この共伴関係を辿ると、南九州においては入佐式新段階との共伴関係が知られており、この土器型式をもって晩期の開始期と考えられる（水ノ江 48、泉 49、清田 50)。

本遺跡の資料においては、これまで主体的に使用されていた天城式並行期の深鉢に文様を施している。これは広田式同様に文様の補完完形が成立していたものと考えられる。

b　入佐式

第４群４類は入佐式に該当する。浅鉢でセットを構成し、深鉢の出土は認められなかった。

c　黒川式

第４群５類､第５群は黒川式に該当する。深鉢、精製浅鉢、粗製浅鉢でセットを構成している。黒川式に関しては堂込により詳細な研究がなされている（文献 51)。以下、その研究内容に依拠し詳

述していきたい。

■新段階　粗製深鉢、精製浅鉢、粗製浅鉢でセットを構成している。

その中で圧倒的に目を引くのが無刻目突帯文を持つ深鉢である。東九州地方において上菅生Ｂ式とも称されるこの一群は、突帯の貼り付け諸法により３類に分類する事が可能である。なお深鉢の調整は荒い条痕で行われている場合が多い。

なお、無刻目突帯文と孔列文を併用する土器が多い。その場合、孔列文は突帯の下部に施されるものが多数を占めている。

ｄ　刻目突帯文土器

晩期終末～弥生初頭の刻目突帯文土器がわずかながら出土している。中には刻目突帯文と孔列文の双方を使用している資料が出土している。

（４）第６群土器の時間的位置付け

本遺跡において最大出土比率を誇るのが、無文土器の集合体である第６群である。うち１類に関しては三万田式並行期という時間的位置付けを行う事ができたが、残り２・３類の編年的位置付けは不明瞭なままである。

これら土器群の類例を求めるとするならば、平畑遺跡がある。平畑遺跡は市来式から天城式にかけての土器にともない一定量の無文土器が出土している。

これらの土器の大部分は三万田式に伴う無文土器の器形に類似し、その近縁性が窺える。しかし、平畑遺跡においては三万田式の一定量の出土は無く、この型式に伴うとは考え難い。後続する御領式～天城式期にかけて、三万田式の系譜を継ぐ粗製深鉢を使用し続けていたと捉えたい。

これに拠るならば、本遺跡の無文土器群は御領式～天城式の、タイプサイトに存在する深鉢を補完する存在であると推測できる。

（５）総括

以上、簡単ながら縄文土器の時間的位置付けについて考察を行なった。出土資料とタイプサイトとの差異が大きく、明確な型式名を用いず、並行期と呼称しているものが多い。

野首第２遺跡の縄文時代後期は丸尾式からスタートする。これには数段階が認められるが、数的なまとまりに欠け、散布地的な様相が濃い。この中でも第 90 図 459 のように北久根山式の出土が認められるなど、わずかではあるが、外的な接触が看取される。

この外的な接触によりもたらされた土器が主体となるのが西平式並行期以降である。これは後続する三万田式期および鳥井原式期にピークを迎える。この時期にはタイプサイトと同様な資料が客体的にあるものの、在地的色彩が強い土器が主体的に使われている。換言すれば、西日本全体における、土器様式の斉一化のもとに、成熟した土器文化が花開いているとも言える。

しかし、御領式以降は土器の出土量は極端に減少する傾向にあり、セット内における深鉢の欠落が目立つようになる。浅鉢には２次的な焼成痕が無いことから、他に煮沸具があった事は確かであるが、それがどの資料を指すのかは推測の域を出なかった。

宮崎県内において、滋賀里並行期の資料が出土する事は稀であるが、本遺跡においては少数ながら出土が認められる。晩期においては、各型式とも、その出土量は少なく散布地的な域をでるものではない。

このように本遺跡の土器群の様相として、各時期において常に外的な土器型式が少数ながら存在する事が挙げられる。おそらく日向灘から小丸川を経て持ち込まれたであろう、これらの文物が、野首第２遺跡が西日本全域と同様の文化基盤を作るに至った一助となったのであろう。

第２節　土器製作の動作連鎖と土器の使用実態

（１）本節の目的

本遺跡では複数時期に亘る集落の造営を背景に、土器の大量出土が認められた。集落跡の調査報告では土器の帰属時期のみが注目され、根元的な問題がなおざりにされる場合が多い。そうした問題の一つが、土器製作方法とその使用である。

そこで本節では、土器の肉眼観察を中心として各時代・時期の土器製作過程を可能な限り復元するとともに、その使用方法も検討していきたい。

（２）用語の規定

本節において使用する用語の定義を行う。

本節における動作連鎖とは、土器製作における一連の作成戦略であり、その結果としての製作工程も含んでいる。

本節における胎土とは、土器製作において使用される粘土と混和材の総体である。

本節における整形とは、土器製作工程中の器形形成過程を指す。この工程で、土器の基本的なプロポーションが形成される。

本節における調整とは、土器製作工程中の調整工程を指す。この過程で残された痕跡が調整痕であり、施文時につけられる文様とは区別される。

（３）縄文土器製作の動作連鎖

ａ　深鉢

■胎土　最もバリエーションに富む器種だけに、その胎土は多種多様である。とはいえ、ベースとなる粘土には共通性が多く、かつ縄文時時代早期土器に使用された粘土に類似するものも多い。以下、類型毎に記述する。

□第１群　A 類の有文土器と無文土器における粘土の差は看取されない。ただし、混和材として金色粒を使用するものがあり、これらは搬入品の可能性が高い。

B 類に関しては白色系の粘土の使用が目立つ。焼成の状態は堅緻とは言い難く、視覚的には発泡したような器面であるが、調整の精緻さがそれを補っている。なお、この白色系粘土は第一分冊に掲載した第Ⅱ群と類似する。

□第２群　全ての類型に共通するが、黒色磨研処理が施されたものと、それ以外では胎土が異なる。基本的には褐色系の粘土が使用されるが、これは第一分冊において掲載した第Ⅲ群と類似する。

□第４群　第２群と同じ様相である。

□第５群　褐色系の粘土が使用されるが、最も多用されるのは白色系の粘土である。これに砂粒・小礫・褐色粒を混和材として使用する。傾向としては、無刻目突帯文が施されるものは、褐色系の粘土を使用し、孔列文が施されるものは白色系の粘土を使用する。全体的に、他の土器群とは異質な胎土という印象がある。

□第６群　雑多な胎土であるが、これは複数時期・型式の土器を内包する結果と推測される。より詳細に胎土の観察を行なうことで第６群の各類型と、他の土器群との関係を類推する事が可能となろう。

胎土面では、第２群と第４群に共通の属性が多い。これらは時間軸上の前後関係にあり、先行する土器製作の伝統基盤を引き継いだ結果、このような事象が起こったものと推測される。

■整形　粘土紐の上に円盤状の粘土を重ねて底部とし、その上に粘土紐を輪積みで器形を形成する。平底の資料は円盤状の粘土の外側に粘土紐を巻きつけ底部とし、その上に粘土紐を重ねてゆく。これら円盤状の底部から、粘土紐が剥落した資料が第 107 図 641 ～ 642 である。

土師器の甕と比べると、器形のたわみが小さく、無文土器であっても、精緻に作られている。

頸部は、粘土紐の接合痕が観察できる資料が多い。接合痕の観察の容易さは、土器作成時における、粘土紐を輪積みする時間に比例すると考えられる。すなわち、先行する粘土紐が乾燥した状態で、新たに粘土紐を重ねると、明瞭に粘土紐の輪積み痕が観察できる傾向にある。これに依拠するならば、深鉢の場合、底部と頸部の形成時には、他の部位の形成よりも時間（手間）が掛かっている事になる。

■調整　全ての土器群に共通するが、器形整形時の粘土紐輪積痕が観察される資料は数少ない。後述する土師器と比較すると、非常に精緻な作り・調整が施されたといえる。

■使用法　器面全体にススが付着したものが多い。この事実は、この器種が煮沸具として使用されたことを示す傍証となろう。ススの付着部位についてさらに言及するならば、底部付近にはスス・炭化物が観察できないものが多い。土器の底部付近を埋設して使用した結果だと考えられる。

この結果は、熊本県御領貝塚において土器の分析を行なった坪井清足の報告と合致しており（文献52）、同時期の他の遺跡においても同様の事例が報告されている。この点は、当時期の土器の使用状況を復元する上で非常に興味深い。

口縁部～胴部に炭化物・ススの付着が集中し、底部にそれが見られないという事は、地面に穴を堀り、土器の下半を埋設して、火を焚き土器の内容物を加熱した可能性が高く、地床炉もしくは、これに類する施設の存在が考えられる。しかしながら、本遺跡の竪穴住居跡からは同様の施設は確認されず、住居の屋外も同様であった。縄文時代後期後葉～晩期における火処の検出は、今後の課題であろう。

b　浅鉢

■胎土　基本的には深鉢に準ずる。ただし第４群第４・５類は、明らかに精選された粘土を用い、混和剤の含有量が少ない。

■整形　粘土紐の輪積みで形成される点は深鉢と変わらない。胴部最大径、頸部～口縁部のポイントは粘土紐の輪積痕が断面で明瞭に観察される場合が多い。

■調整　器面は丁寧に調整され、土師器のように粘土紐が観察される事はない。器形の変化が多い場所は、特に入念に調整が施されている。

■使用法　第２群第４・５類に関しては、二次的な焼成痕は観察されなかった。第２群第１・３類は、外面に二次的な焼成痕が認められる資料が比較的多かった。これらの類型に伴う深鉢の存在は明らかではないが、浅鉢が深鉢の機能を一時的にせよ補完していた可能性が指摘できる。

c　台付皿

■胎土　ベースとなる粘土は、乳白色粘土と褐色粘土に大別される。これに多数の混和材を加えることで土器製作の粘土としている。

乳白色の粘土が、セット関係をなす深鉢において使用される事は稀であり、特定器種と粘土との親和性が看取される。

この粘土の親和性の背景としては、脚台付皿の彩色がある。この器種は赤色や白色で彩色された資料が多いが、本遺跡出土資料に関しては赤彩されたものがほとんどで、白彩された資料は18のみである。つまり白色の粘土を用いることで、白彩と同じ効果を狙ったとも考えられる。

■調整　皿部と脚部で異なる調整を施すものが多い。また皿部外面や脚部内面など、人目に触れない部分は、粗雑な調整が施されている。

皿部内面は、まず器面全てに貝殻条痕などの調整を施す。その後、文様を施す部分のみミガキやナデ調整を行なう事により、最初の調整痕を隠し、文様が視覚的に栄えるような技法を多く用いる。

皿部に突帯文を施すものは、11に見るように、器面全体に調整を行なった後に、粘土紐の貼り付けを行なう。粘土紐の貼り付けには、333のようにユビでなでつけるものや、334のように工具により行なうものがある、突帯文を施した後に、再度、突帯文の整形（貼り付け）過程を隠す意味での調整は行なわれていないようである。

■使用法　内外面にススや炭化物が付いた資料は出土していない。このことから、煮沸具やこれに類する使用法がとられたとは考えにくい。

d　注口土器

■胎土　第２類と同じ胎土を用いている。水さらしなどを行ない精選された粘土を、特に選んで使用しているわけではない。

■整形　胴部の整形は、深鉢と大差はない。537を例にとるならば、胴部最大頸と同様に上部の部分も丁寧に調整が施されている点から、輪積みにより器形を作りあげてから調整を行なうのではなく、段階的に輪積みを行ない、その度ごとに器面の調整を行なったと推測できる。

注口部の整形は、確認された２例とも異なる技法を用いる。536は輪積みで細長い棒状に整形した後に、棒状の工具で穿孔したものと思われる。

注口部と胴部の組合わせこそが、注口土器作成のハイライトとも思われるが、その部分は未出土

であり検討できなかった。

■調整　注口部・胴部ともに丁寧なミガキ調整が施される。

（4）土師器製作の動作連鎖

続いて、土師器の製作工程を検討したい。

a　甕

■胎土　橙色系の粘土を用いた資料が多い。混和材として、褐色粒を多用する傾向にある。この胎土構成は、第一分冊において報告した第Ⅱ群の胎土と近似している。

■整形　底部は粘土の積層で形成されるものと、粘土紐の中央部に粘土塊をつめ込むもの、型作りの三者が認められる。胴部から口縁部にかけては、粘土紐の輪積みである。その際、底部から胴部にかけてと、頸部から口縁部にかけては、普遍的に輪積痕が観察される。したがって、底部・胴部・口縁部それぞれ調整を行なった後に、他の部位を形成する粘土を積みあげ、最後に最終的な調整を行なった可能性が高い。なお、頸部と口縁部の接合は、ユビオサエが多用される。口唇部の整形としては、ユビでナデるもの、工具を用いるもの、ユビでつまみあげるものという三つの技法のうち、いずれか一つを選択している。

■調整　内外面とも同じ調整を行なっているものと、内外面で異なる調整を施すものに二分される。内面・外面で複数の調整痕が観察される資料も多い。この場合、ハケとヘラの併用が最も良く見受けられるパターンである。この場合、口縁部と胴部など、器形の大きな変化がある場所で調整具が異なる場合が多い。しかしながら、調整具の幅自体には変化が無いことが多い点には注意が必要であろう。すなわち、調整具の製作者には「一定の規格の調整具を作る」という考えはあっても、「ハケとヘラ」の調整具としての別は無い可能性がある。この点は、同じ調整ながらも、調整具の幅が異なる場合にも当てはまろう。

調整方向は、口縁部、頸部、胴部最大径上部、胴部最大径下部、底部で異なるものが多い。

口縁部・胴部という部位の差は関係なく、内面は外面よりも丁寧に調整が施されるものが多い。

印象として、時期が下るほど、粗雑な作りが多い。言い換えれば、多くの需要を満たすために、使用に耐えうる最低限の品質で土器の供給を行なっているともとれる。

■使用法　器面にはススがついているものが多く、煮沸具としての使用が考えられる。

ススが付着する部位は底部以外であることから、底部を埋設し、煮沸を行なったと推測できる。

一方で、器面にススが付いていない資料が存在する事も確かである。これは、何らかの貯蔵具として使用されたものであろうか。

b　高坏

■胎土　白色系の粘土と、橙色系の粘土が多用される。混和材が含まれないものが多い。

■整形　坏部、脚部それぞれの部位を整形した後に、これら二つの部位を接合する事により器形を構成している。以下、各部位毎に整形手法の観察所見を記載する。

□坏部　基本的には粘土紐の輪積みで基本的なプロポーションが形成される点は、甕などと同様である。しかしながら、坏の下部から口縁部の立上り部分のパーツを接合する際に、独特の整形手法を用いている。受部の口縁部接合箇所に、粘土の接地面や強度の確保を目的に、筋状の掘り込みを入れており、第234図1676などがその典型例といえる。

□脚部　脚部は基本的に輪積により器形が形成される。器形整形後、坏の下部に設けた舌状部と脚部中央に開いた部分を組み合わせる事により初めて、高坏の器形となる。この時、坏部と脚部の接合を強固とするために、脚部の上端を、しぼりあげている。また、舌部は、指で押さえて脚部に接着するものと、そのままの状態で処理するものがある。この舌部の処理は同じ器形の高坏で見られるものであり、この異なる技法が共存していたと考えられる。なお、本遺跡出土高坏においては、舌部の処理を行なわないものが圧倒的に多く、処理を行なうものでも、粗雑なものが多い。

■調整　器面全体に丁寧なミガキ調整を施されたものが多い。ただし、脚部内面は簡単にナデられたものが多い。一部の資料は赤彩されている。

坏部内面の中央部（受け部）は口縁部に向かっ

て、放射状に調整されるが、受け部〜口縁部は横方向の調整が行なわれる。

■使用法　器面に二次的な焼成痕が付着した資料は存在しなかった。そのため、煮沸具としての使用は想定し難い。

c　壺

■胎土　甕と同じ胎土が用いられる。混和材として小礫、褐色粒を含む資料が多い。

■整形　粘土紐の輪積みで器形を構成する。胴部最大径付近で器形がたわむ資料が多く、器形形成の困難さを物語っている。頸部の調整は粗雑なものが多く、輪積み痕が観察できるものが多い。

■調整　甕の調整と似る。

■使用法　貯蔵具としての使用が主たる目的の器種であろうが、器面にススが付くものが一定量存在する（小型の壷に多い）。何らかの要因で甕と同じ使用をしたものと思われる。

d　小型丸底壺

■胎土　非常に精選された粘土を用いている。混和材なども含まれないものが多い。

■整形　粘土の輪積みにより器形を構築する。胴部と口縁部の境目においては、粘土の輪積み痕が観察されるのだが、それ以外の部分で、粘土紐痕を観察する事は非常に困難である。

■調整　整形・調整パターンとしては、①器形全体を作った後、調整を行なう、②器形の部位毎に輪積み→調整を繰り返し、最後に全体的な調整を行なうという二者に大別される。

①の場合、外面は丁寧にミガキが施されることが多いのに対し、内面はユビ押さえなど粗雑な調整が多く、輪積みの際の粘土紐が明瞭に観察される。また、調整が困難だと思われる頸部付近は、粘土のたるみが見られるなど、人目に触れない部分での粗雑な作りが特徴となる。

②に関しては、内外面ともに精巧な作りが多い。頸部においても、胴部と接合する際に生じたたるみなどは丁寧に調整が施されており、その痕跡を窺い知る事はできない。

■使用法　器面にススが付着した資料は皆無である。よって煮沸具等として使用されていたとは考え難い。

（5）まとめ

a　隔世遺伝的に使用される粘土

たとえば、型式ごとに使用される粘土が異なる事例は無い。混和材の組み合わせも同様である。第一分冊に掲載した縄文時代早期の土器と同様の胎土を用いる土器は、土師器にも存在する。

ただし、型式学的に同じ系統に属する資料では共通する胎土を用いる事が多い。そのなかの、異なる胎土で作られた土器の存在こそが、各時代における他地域との交流を物語っているといえよう。

b　基本的には変化のない土器整形技術と使用法

土器の基本的な構造は粘土紐の輪積みによって成される。輪積みの幅や、粘土紐のナデつけなどの整形技法は大局的には変化ない。

そのなかで、縄文時代晩期の圧痕土器や土師器の底部の型作りなど、それまでの、技術的発想からは生まれないであろう技術が存在する点が注目される。

c　規格化された調整具

土師器作成に用いられる調整具は規格性が非常に高い。これはハケとヘラが同じ大きさの調整原体である可能性の高さを物語る。

第３節　縄文時代後・晩期の石器および石製品について

（１）石器組成と石材利用について

当該期の石器の出土量はきわめて多い。それぞれ破損品・未成品も含むが打製石斧、十・Ｘ字形石器、円盤形石器、横刃形石器などが 1500 点以上、磨製石斧 1000 点以上の出土が確認されている。打製石鏃も６00 点あまり、尾鈴山産溶結凝灰岩素材を主とした磨石、敲石、磨敲石も完形品のみで 700 点以上が出土した。打欠石錘にいたっては実に 4000 点を越える出土量を誇る。玉類も一定量を認め、石刀を含む磨製石製品も 80 点以上を数える。その他に石匙、異形石器、筋砥石、凹石、石皿、台石など多様な石器器種が確認された。

これらの石器類を用途論的に評価するならば、開墾（土壌掘削）および除草が想定される打製石斧や横刃形石器、木材伐採が想定される磨製石斧、狩猟あるいは漁労に用いた石鏃、漁労ないし屋内労働に用いた打欠石錘、食物加工や石器製作が推定される磨石、敲石、磨敲石、石皿、台石、その他の石錐や石匙などの加工具など、多岐に亘る人間活動の証拠とみることができる。これらの石器群は、一部に後期中葉（丸尾式）および晩期前葉（入佐・黒川式）・後葉（刻目突帯文）の資料を含むものの、竪穴住居跡や遺構、包含層中の資料の様相からみて、大半は後期後葉の土器群（三万田・鳥井原式）に伴うものと推定される。

県内において本遺跡と匹敵する規模の事例としては、宮崎市平畑遺跡（文献 7）がある。平畑遺跡の集落は複数時期の累積の結果を示すが、これに三万田・鳥井原式期の竪穴住居跡を含む。正確な出土量は不詳であるものの、100 点以上の石鏃、60 点以上の磨製石斧、20 点あまりの打製石斧、打欠・切目合わせて 200 点あまりの石錘、その他に筋砥石、石皿、凹石、磨製石器類、玉類など野首第２と酷似した石器組成を示す。

九州島内に視野を拡げて類例を求めると、佐賀県鳥栖市蔵上遺跡（文献 53）が比較に好適である。両端抉入石製品や糸巻形石器など地域色の強い石器も組成するが、30 点以上のＸ字形石器、20 点あまりの円盤形石器（石製円盤）、500 点あまりの石鏃、30 点あまりの磨製石斧、その他に石匙、打製石斧、玉、石棒などが認められる。これらの石器の帰属時期は包含層中の土器から判断して、西平・太郎迫・三万田・鳥井原・御領・広田式の存続期と推定され、なかでも三万田式の出土量が多い。やはり後期後葉の集落遺跡と評価できる。

この他、熊本県域にも比較可能な遺跡がいくつかある。梶尾町鶴羽田遺跡（文献 54）は三万田・鳥井原式を含みつつ量的には御領・天城式にピークを持つ集落であり、石鏃 33 点、磨製石斧 17 点、打製石斧 52 点、十・Ｘ字形石器３点、円盤形石器（円盤状石器）８点以上に加え、敲石、磨石、凹石、石皿、砥石、石棒、双刃石斧などが確認されている。また太郎迫・妙見遺跡（文献 55）においても、縄文後期の磨消縄文から晩期の刻目突帯文段階まで存続する集落が確認された。報告書には玉類以外の石器・石製品は掲載されていないが、あとがきには打製石斧をはじめとする石器類が 10 万点を越えると記される。

実はこうした後期後葉の集落遺跡の石器組成には、後期前・中葉の集落と比較して興味深い様相差が看取される。近年あいついで刊行された東南部九州の後期前・中葉の集落遺跡の事例を中心にその石器組成を概観してみよう。

宮崎県宮崎市（旧田野町）本野原遺跡（文献 56 ～ 58）では集落の存続期を、中期前葉の並木式に代表される１期から後期後葉の御領式に相当する 15 期まで区分し、それぞれの時期の遺構・遺物の多寡に基づく集落・土地利用の変遷を描き出している（文献 59）。これによれば大半の竪穴住居跡が２期（宮之迫１・阿高１式期）～５期（宮之迫４・本野原１式・南福寺・福田Ｋ２宿毛・門川南町式期）に帰属し、６期（本野原２・成川Ｋａ・出水・福田Ｋ２宿毛式期）～９期（市来Ⅱ・浜ン洲タイプ・北久根山内陸・北久根山一式期）にも集落は存続するが、竪穴住居跡は減少し窪地遺構を含めた土地利用形態も変容をきたす。続く 10 期（丸尾Ａ・宮下辛川Ⅰ・納曽１式期）～ 13 期（納屋向・西平式後期・中岳Ⅰ式期）には竪穴住居跡は確認されず、窪地遺構は祭祀的空間とし

検出で、また出土状況が安定しておらず、特に前者は弥生時代以降の所産である可能性を考慮せねばならない。

1811 は、腹部が滑らかなラインで象られる勾玉である。鹿児島県上加世田遺跡などにみられる九州に特有の形態といわれる「コの字勾玉」（文献 20）とは特徴が明らかに異なる。形態に限って縄文時代後期・晩期の類例をしいて求めれば、県内では宮崎市右葛ヶ迫遺跡の勾玉３点が挙げられる（文献 65）。だが、より広く時間軸上に対象をとれば、むしろ類例は古墳時代に多い印象がある（文献 66）。右葛ヶ迫例にしても、古墳時代の集落遺跡でもあり、砂丘上立地であることも手伝って包含層出土資料の厳密な帰属時期を絞り込めない憾みがある。このため、1811 については、今後、さしあたり県内の弥生・古墳時代遺跡から出土する勾玉の石材利用動向や穿孔・成形・整形技術との比較検討を通じて評価を絞り込む必要があろう。

一方、エンタシス形の管玉である 703 は、弥生時代以降に類例を求めるよりは、熊本県乾原・迎八反田遺跡群の縄文時代晩期前半とされる例なども考慮して、およそ後期終末～晩期前半の幅で理解するのが妥当と考える。

丸玉・小玉に関しては、出土状況が不安定なものを含むとはいえ、技術・形態的にはきわめて斉一性の高い資料群を構成している。706 が出土した第２号溝状遺構は三万田式並行期などの土器が出土し、704 が出土した第 33 号住居跡は三万田式併行期、710 が出土した第 47 号住居跡もおよそ同時期であるから、これら３点以外の丸玉・小玉も概ね縄文時代後期後半～終末までの所産と推定できよう。

小珠の 701 は、第１号凹地状遺構（SX01：竪穴住居跡）の床面から出土しており、共伴する土器は丸尾式にほぼ特定できる。したがって、縄文時代後期中葉の事例として評価できよう。垂玉である 702 は、サイズこそ異なれ、穿孔方法や成形・整形技術が 701 と共通し、近接した時期と推定可能である。大坪氏が指摘するように、当時、両者は同じカテゴリーの事物として扱われていたものと考えられる（文献 19）。平面不整形という形態上の特徴や、穿孔された穴の大きさがほぼ同じでありながら、本体のサイズにみられる 701 と 702 の格差は、今後、分割・再加工といった可能性（文献 67）も視野に入れた検討の必要を考えさせる。

（３）紡錘形小型垂飾について

本遺跡ではヒスイ輝石製以外にも、縄文時代に属する玉類が多く出土している。

特筆すべきものとして、紡錘形小型垂飾とした一群がある。類例は、福岡県アミダ遺跡（文献 68）、同県北古賀遺跡（文献 69）、同県四箇東遺跡（文献 70）、熊本県ワクド石遺跡（文献 71）、同県大久保遺跡（文献 72）などに認められ、宮崎県内は主要な分布域からは外れる。他遺跡の事例の多くが後期後葉に位置付けられていることから、本遺跡についても、概ね同時期の土器に共伴するものと考えられる。これらの小型垂飾の出自に関しては、大坪志子氏が縄文時代中期以前の石製装身具に系譜を求めその小形化したものとする考えを示している。

ところで、丸玉・小玉については、イモガイの殻頂部を素材とした丸玉の材質転換形態説がすでに提出されているが、これらの小型垂飾についても何らかの祖形を想定し得るのではないか。九州と沖縄の縄文時代装身具の集成（文献 73）を参照するならば、その候補として、①マッコウクジラ・シャチなど歯鯨類の歯を用いた垂飾（福岡県天神橋貝塚、同県新延貝塚、佐賀県菜畑遺跡、長崎県佐賀貝塚、鹿児島県麦之浦貝塚、）、②タケノコガイなど長身の巻貝を用いた垂飾（鹿児島県神野貝塚、同県下山田Ⅱ遺跡 , 沖縄県浜崎貝塚 , 同県平安名貝塚Ａ地点 , 同県クマヤー洞穴遺跡）、③ジュゴンなど海獣の肋骨を用いた垂飾（鹿児島県上城遺跡、沖縄県シヌグ堂遺跡、同県地荒原貝塚、同県砂辺貝塚）の三つの可能性がさしあたりの候補として考え得る。いずれの可能性にせよ、これらは海洋の生業と関連する遺物である。これら非石製の小型垂飾が出土する遺跡の分布状況を巨視的にみると、①は九州島の西岸（東シナ海沿岸）、②・③は鹿児島県域南半～南島地域に主要

検出で、また出土状況が安定しておらず、特に前者は弥生時代以降の所産である可能性を考慮せねばならない。

1811 は、腹部が滑らかなラインで象られる勾玉である。鹿児島県上加世田遺跡などにみられる九州に特有の形態といわれる「コの字勾玉」（文献 20）とは特徴が明らかに異なる。形態に限って縄文時代後期・晩期の類例をしいて求めれば、県内では宮崎市右葛ヶ迫遺跡の勾玉３点が挙げられる（文献 65）。だが、より広く時間軸上に対象をとれば、むしろ類例は古墳時代に多い印象がある（文献 66）。右葛ヶ迫例にしても、古墳時代の集落遺跡でもあり、砂丘上立地であることも手伝って包含層出土資料の厳密な帰属時期を絞り込めない憾みがある。このため、1811 については、今後、さしあたり県内の弥生・古墳時代遺跡から出土する勾玉の石材利用動向や穿孔・成形・整形技術との比較検討を通じて評価を絞り込む必要があろう。

一方、エンタシス形の管玉である 703 は、弥生時代以降に類例を求めるよりは、熊本県乾原・迎八反田遺跡群の縄文時代晩期前半とされる例なども考慮して、およそ後期終末～晩期前半の幅で理解するのが妥当と考える。

丸玉・小玉に関しては、出土状況が不安定なものを含むとはいえ、技術・形態的にはきわめて斉一性の高い資料群を構成している。706 が出土した第２号溝状遺構は三万田式並行期などの土器が出土し、704 が出土した第 33 号住居跡は三万田式併行期、710 が出土した第 47 号住居跡もおよそ同時期であるから、これら３点以外の丸玉・小玉も概ね縄文時代後期後半～終末までの所産と推定できよう。

小珠の 701 は、第１号凹地状遺構（SX01：竪穴住居跡）の床面から出土しており、共伴する土器は丸尾式にほぼ特定できる。したがって、縄文時代後期中葉の事例として評価できよう。垂玉である 702 は、サイズこそ異なれ、穿孔方法や成形・整形技術が 701 と共通し、近接した時期と推定可能である。大坪氏が指摘するように、当時、両者は同じカテゴリーの事物として扱われていたものと考えられる（文献 19）。平面不整形という形態上の特徴や、穿孔された穴の大きさがほぼ同じでありながら、本体のサイズにみられる 701 と 702 の格差は、今後、分割・再加工といった可能性（文献 67）も視野に入れた検討の必要を考えさせる。

（３）紡錘形小型垂飾について

本遺跡ではヒスイ輝石製以外にも、縄文時代に属する玉類が多く出土している。

特筆すべきものとして、紡錘形小型垂飾とした一群がある。類例は、福岡県アミダ遺跡（文献 68）、同県北古賀遺跡（文献 69）、同県四箇東遺跡（文献 70）、熊本県ワクド石遺跡（文献 71）、同県大久保遺跡（文献 72）などに認められ、宮崎県内は主要な分布域からは外れる。他遺跡の事例の多くが後期後葉に位置付けられていることから、本遺跡についても、概ね同時期の土器に共伴するものと考えられる。これらの小型垂飾の出自に関しては、大坪志子氏が縄文時代中期以前の石製装身具に系譜を求めその小形化したものとする考えを示している。

ところで、丸玉・小玉については、イモガイの殻頂部を素材とした丸玉の材質転換形態説がすでに提出されているが、これらの小型垂飾についても何らかの祖形を想定し得るのではないか。九州と沖縄の縄文時代装身具の集成（文献 73）を参照するならば、その候補として、①マッコウクジラ・シャチなど歯鯨類の歯を用いた垂飾（福岡県天神橋貝塚、同県新延貝塚、佐賀県菜畑遺跡、長崎県佐賀貝塚、鹿児島県麦之浦貝塚、）、②タケノコガイなど長身の巻貝を用いた垂飾（鹿児島県神野貝塚、同県下山田Ⅱ遺跡 , 沖縄県浜崎貝塚 , 同県平安名貝塚Ａ地点 , 同県クマヤー洞穴遺跡）、③ジュゴンなど海獣の肋骨を用いた垂飾（鹿児島県上城遺跡、沖縄県シヌグ堂遺跡、同県地荒原貝塚、同県砂辺貝塚）の三つの可能性がさしあたりの候補として考え得る。いずれの可能性にせよ、これらは海洋の生業と関連する遺物である。これら非石製の小型垂飾が出土する遺跡の分布状況を巨視的にみると、①は九州島の西岸（東シナ海沿岸）、②・③は鹿児島県域南半～南島地域に主要

な分布域がある。こうした分布論的観点と、形態的な類似度も考え併せたうえで、仮に材質転換形態説を採用するならば、石製小型垂飾の祖形として歯鯨類の歯を用いた装飾品が第一候補に考えられそうである。

今一つ興味深いのは、九州島から遠く離れて、長野県大町市一津遺跡においても、本遺跡の小型垂飾Ｂ類あるいは福岡県四箇東遺跡と類似する例の出土が報じられていることである（文献 74）。

本州島にも類例があるとなると、もう一つの材質転換形態モデルとして、根挟みも考えられる。奈良県滋賀里貝塚から出土した、胴部と基部が連続して、断面形が扁平な事例などとの類似が指摘できる（文献 75）。時期的にも本州島において根挟みが盛行するのは縄文時代後期後葉～晩期中葉であり、本遺跡の様相と合致する。

第４節　縄文時代後期から晩期における集落の形成過程

（１）集落構成と変遷

本項では、本章第１節において検討した縄文土器の編年に基づき、野首第２遺跡における集落構成の検討を行ないたい。

とはいえ、前章において報告したように、遺物が出土した遺構は数少なく特定時期における竪穴住居跡の帰属軒数については不明瞭な点が多い。

ａ　第１期：丸尾式段階（第 265 図）

Ａ区において SX01 が存在するのみである。当該期の土器の分布域は調査区全体で散漫に確認され、SX01 の存在を除くと、散布地的な性格が強い。

近接の遺跡においては、この時期の遺物は確認されているが、遺構は検出されておらず、現状においては SX01 の性格の不可解さが印象的である。

この時期に伴う土器片錘が出土しており、野首第２遺跡における漁労の開始期でもある。

ｂ　第２期：西平式～太郎迫式段階（第 266 図）

SA39 に代表される、円形プランの竪穴住居を構築する時期であるが、この時期の集落の規模は非常に小さい。

遺物はＣ区を中心に出土しており、先行する時期に対して、遺跡内における居住範囲が変化している。

ｃ　第３期：三万田式～鳥井原式段階（第 267 図）

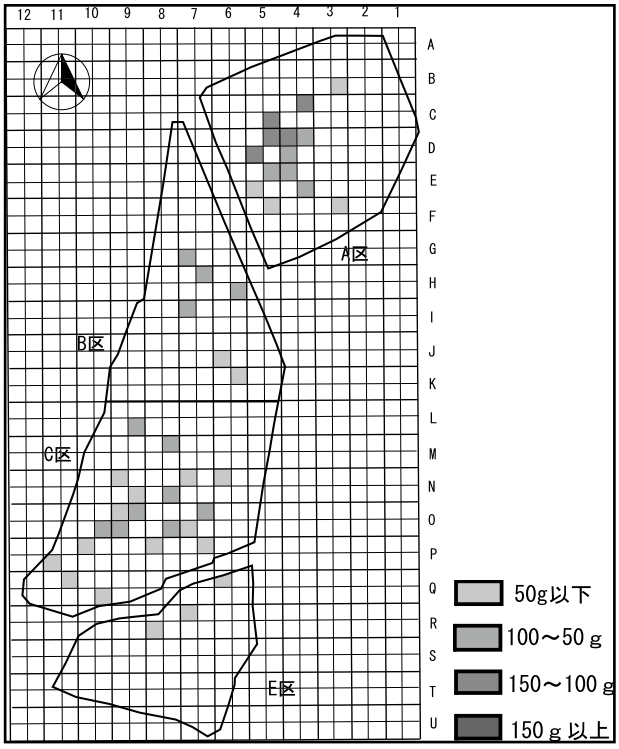
本遺跡の中心となる時期である。竪穴住居は SA33 などに代表される円形プランである。出土遺物からは、さらに時期が細分される可能性もある。

遺物はＣ区を中心に出土しており、先行する段階の居住空間をほぼ踏襲している。

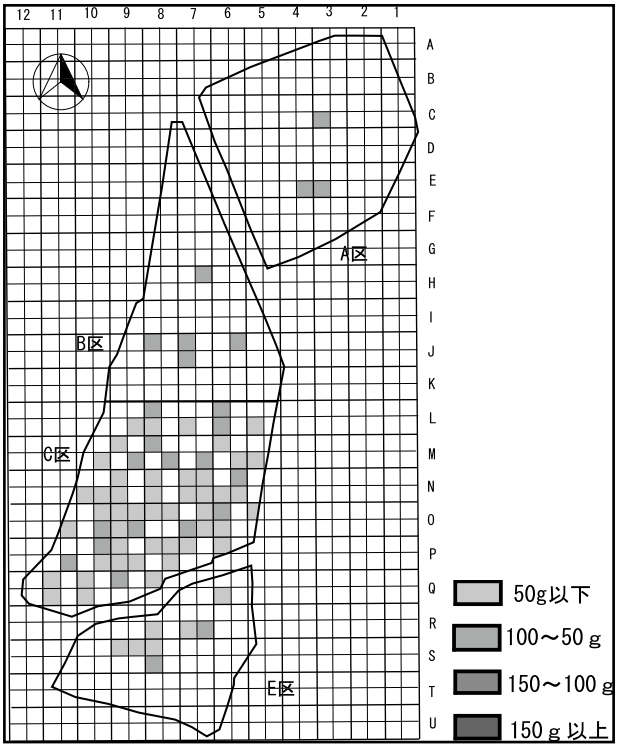
近接する遺跡においては、この時期の遺物が存在しても遺構は検出されていないことから、本遺跡は拠点的な集落として機能したと考えられる。

ｄ　第４期：天城式並行期段階（第 268 図）

遺構の検出は見られず、散布地的様相が濃い。土器の分布はＣ区と中心として、わずかにＡ区・Ｂ区に散見される。



第 265 図　第１期：丸尾式段階の土器分布



第 266 図　第２期：西平～太郎迫式段階の土器分布

e　第５期：黒川式並行期（第 269 図）

遺構は検出されていない。砕片のため掲載は見合わせたが、組織痕を有する資料を含む土器群はＡ区西側を中心にＢ区・Ｃ区において出土している。その中で、分布の中心はＡ区である。なお、遺物分布差は型式差と合致しない。

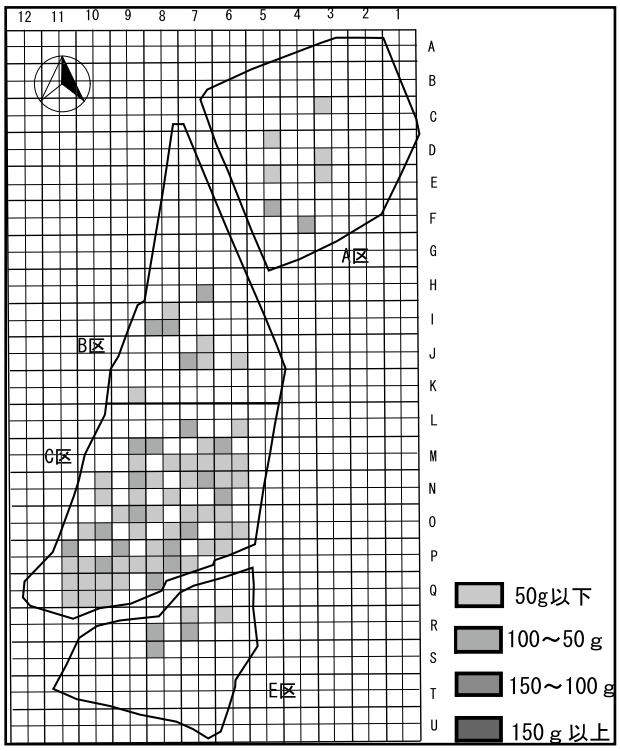
（２）住居の構造

SA25 がプラン内に棚状の施設を持つ可能性を持つ他は円形プランが中心である。

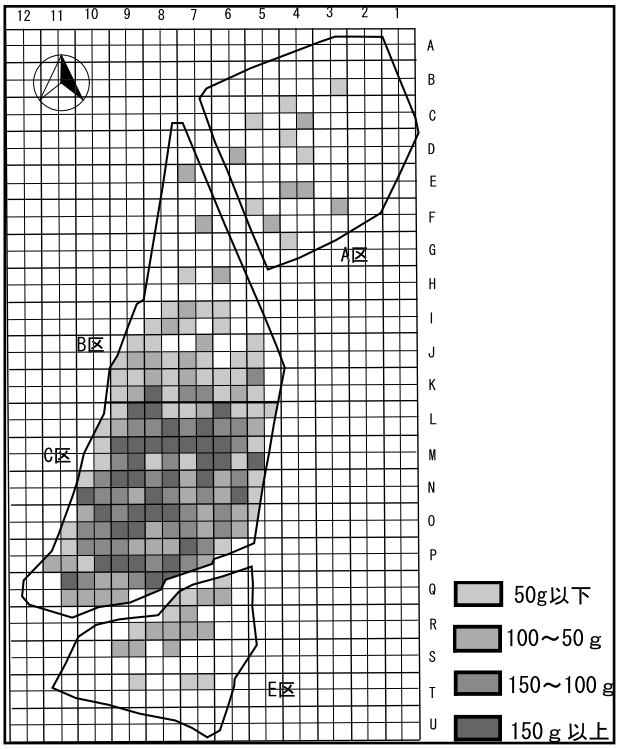
プランの平面形を時期的に見てゆくと、円形を基調とした不整形プラン（第１期）→円形プラン（第２期以降）となる。

住居の規模は約３×３m、床面積約９㎡程度の小規模のものが多く、約５×５m以上、床面積約25㎡の中・大形住居が一定数存在する。

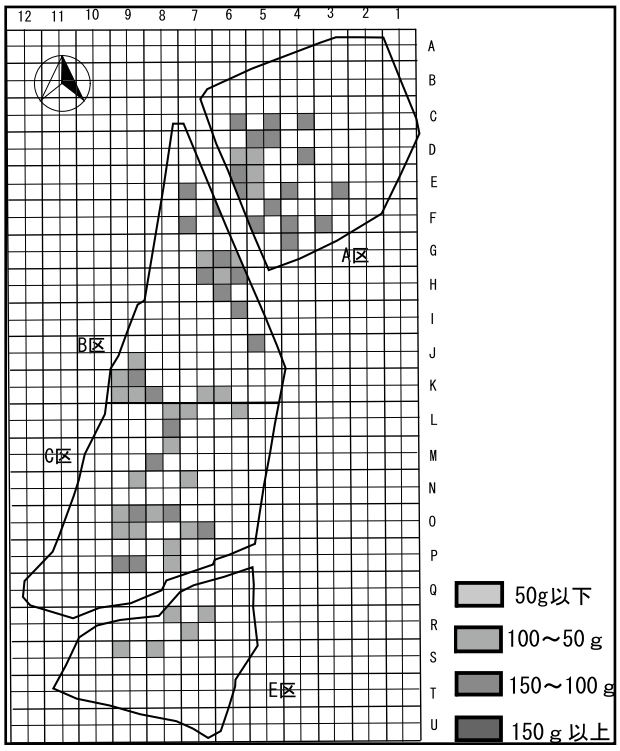
住居の構造としては、壁面の立ち上がりが皿状になるのものが多く、主柱穴が検出されないものが大半を占める。一方で、SA43 のようにプラン外周にピット群が巡る住居跡もあり、総合的な上屋構造の理解にまでは至らなかった。住居床面は平



第 268 図　第４期：天城式並行段階の土器分布



第 267 図　第３期：三万田～鳥居原式段階の土器分布



第 269 図　第５期：黒川式並行段階の土器分布

坦であり、わずかに硬化面もみられるが、焼土痕などが見られる住居跡は少なかった。

（３）住居における器種構成

結論として、深鉢の出土が卓越しており、以下、浅鉢が続く。SX01 は出土土器型式のセット内に含まれる脚台付皿形土器が出土している。

出土深鉢の大半は、外面にススが付着しており、煮沸具として使用されたと考えられるが、住居内に炉としての機能をはたすような施設は確認されなかった。

（４）土壌堆積の過程

第Ⅲ章で明らかにしたように、本遺跡ではＢ（Ｄ）・Ｃ区において、縄文時代後期後葉と古墳時代中期を中心とした集落が確認された。古墳時代中期の竪穴住居跡群に関しては、Ａ区も含めて調査区全域に展開する様相が窺われるが、縄文時代後期の竪穴住居跡群は、概ねＣ区を中心としてＢ（Ｄ）区にわずかにかかるように分布し、調査区北半（ＡおよびＢ（Ｄ）区の大部分）やＥ区には展開しない。唯一Ａ区の第１号凹地状遺構 (SX01) を確認するが、Ｃ区を中心とした後期後葉の集落とは時期が異なり、後期中葉の丸尾式期の所産である。

もっとも縄文時代後・晩期の遺物包含層はＡ・Ｂ（Ｄ）・Ｃ・Ｅ区と調査区全域に拡がる。ただし、出土遺物の様相は均一ではなく、土器の編年的位置付けや、石器組成、また礫の多寡などの点で、有意な分布差が確認された。

このような縄文時代後期後葉の集落を擁する本遺跡において、調査中から注意をひいた地形と土壌堆積上の特徴をいくつか挙げることができる。以下に具体的な特徴を三つ挙げておこう。

① 縄文後時代期後葉の集落が展開する範囲の地形は、J9 グリッド付近がおよそ 36 ｍと最も高く、南東方向に向かって緩やかに傾斜する。

② 全調査区を通じて、K-Ah（喜界アカホヤ火山灰）の堆積がほとんど認められない。ごくわずかにＣ区南端部に二次堆積層と思しき部分が確認され、あるいはピットの埋土中にわずかな K-Ah 粒子が観察されるのみであった。

縄文時代後・晩期や古墳時代に属する竪穴住居跡の覆土中にも明確なかたちで K-Ah が観察された事例はない。

③ 基本土層第Ⅱ層（MBO）以下は地質学的に整合的な堆積と判断されるが、第Ⅰ層下面は不整合な堆積を呈しており、この現象はとりわけＣ区において顕著である。すなわち、第Ⅰ層直下と接する基本土層が場所ごとに違った状況が観察され、第Ⅰ層を除去した地面では平面的に分層が可能であった。なお第Ⅰ層下部には主として縄文時代後・晩期の遺物が包含されている。

上記した三つの事実から、第Ⅰ層に包含される遺物の上限時期である縄文時代後期以降から現代に至るまでのいずれかの時点において、本来は傾斜がより急であった旧地形を浸食・削平するような作用が及ぼされた可能性が指摘できる。検討課題は大きく二つに絞られよう。

第一に、こうした現象が人為的なものなのか、それとも自然の作用によるものなのか（課題１）。

第二に、人為・自然為を問わず、こうした現象が縄文時代後期以降のどの時点で起こったものなのか（課題２）。

以下、それぞれの課題について個別に検討する。

■課題１　人為・自然為の判断

人為的な可能性としては、集落地確保のための意図的な削平・造成などいわゆる土木工事（文献 76 ～ 78）が考えられる。これを肯定する立場からは、さらにその地形改変行為が一回なのか、複数回なのかについても検討する必要がある。また、除去した排土の行方についても説明する必要がある。

一方、自然現象である可能性としては地形的要因や雨水などによる土壌の流出などが考えられる。これを肯定するには、普遍的にそうした現象が地質学的・堆積学的に観察されることが条件となる。

あるいは人為と自然為双方の要因が組み合わさった状況を考える必要もあろう。たとえば、本来的にゆるやかな起伏のある地形が、集落として選地されたことによって住居などの構築による地面の掘削、清掃、伐採、植物栽培など様々な人間の働きかけによってデフォルメされることなどが考えられる。以上に整理したように、課題１については、大きく三つの可能性が考えられる。

■課題２　不整合堆積の開始時期の限定

課題の追究にあたり考慮を要する事柄として、以下のようなものがある。

①　縄文時代後・晩期の竪穴住居跡、古墳時代の竪穴住居跡ともに、その覆土中からはK-Ahの存在が確認できない。

②　縄文時代後期・晩期の竪穴住居跡のなかには非常に浅く、形態は皿状を呈して検出されたもの多い。

①から少なくとも縄文時代後期後葉～晩期前葉の時期に竪穴住居が廃絶された時点には、集落の周囲にはK-Ahの堆積がみられなかったことが窺える。このことはこの時期に前述の現象が起こったことを支持する要因といえる。

②の竪穴住居の検出状況については二つの可能性を指摘できる。一つは本来Ⅰ層中に検出面が存在するものの、確認が著しく困難であり、結果的に第Ⅰ層を除去した段階で検出したことによって浅くなったとする考えである。二つには、古墳時代以降に削平・浸食現象が起こり、縄文時代後・晩期の生活面が失われたとする考えがある。後者は古墳時代において前述の現象が起こったことを支持する考えとなる。

本遺跡のみの検討ではいずれかの可能性に絞ることは望めないが、他遺跡の事例も含めて、総合的に評価するならば、縄文時代後期後葉前後の時期とするほうが、より妥当といえようか。

（５）総括

以上、本遺跡における縄文時代集落の構造・変遷およびその立地状の特性について検討した。

当遺跡からは30軒を越える縄文時代後期竪穴住居跡が検出されたが、これは遺構重層の結果であり、本来は５～６軒程度から成る小集落が継続的に存在したものと考えられる。

丸尾式に代表される、後期中葉は、Ａ区に竪穴住居跡が１軒存在する他は、Ｂ・Ｃ区に遺物が散漫に分布している。

後期後葉に入ると、Ｃ区において活発集落造営を進めている。当該期の土器分布も、Ｃ区を中心としており、Ａ区においては、ほとんど見られない。

集落の造営期間は、土器型式にして３～４型式の幅に収まるものと考えられる。

後期末葉に入ると、Ｂ・Ｃ区を中心に一定量の土器出土が見られるが、これらに伴う遺構は検出されなかった。

晩期においては、遺物の分布はＡ・Ｂ区中心となり、Ｃ区においては散漫な出土状況を見せ、遺跡全体のあり方として、散布地的な様相が色濃い。

また、人為にせよ自然為にせよ、本遺跡の地形や土壌の堆積環境が、一筋縄では理解できないものであることは確かである。今後、他の遺跡の事例も交えて、多角的な検討が必要とされる課題であろう。

第５節　古墳時代の集落構成

野首第２遺跡においては 34 軒の竪穴住居跡が検出された。本来ならば、これらから出土した遺物の時間軸をもとに、１時期あたりの集落構成を復元していくわけだが、遺物の出土が見られない住居跡が多く、集落の復元を考察するまでに至らなかった。各住居跡の推定廃絶時期に関しては、各項目において記載しており、そちらを参照されたい。

遺構廃絶時期の推定は土師器、特に甕の編年に依拠している（文献 80）。

甕は最も個体数が多い器種であるが、本遺跡出土甕の基本的なスタイルは、第Ⅲ章第４節の分類にあるように、形態的・製作技術的なバリェーションには乏しいともいえる。それ故に時期的には、ごく狭い枠内に収まる事は予想に難くない。

基本的な甕の変遷に関しては、口縁部形態に関しては「くの字に大きく屈曲」→「直立気味に外反」→「口縁部が短く屈曲」という流れで構成されており、底部に関しては「平底」→「レンズ状平底」→「尖底」→「丸底」→「平底」という流れで構成されている。

これを踏まえ、野首第２遺跡出土資料に緩用した場合、口縁部 A 類→口縁部 B 類という変遷が仮定できる。口縁部から底部まで連続した資料が少ないため、器形の全体像から変遷を捉え難いが、口縁部と底部の組み合わせに関しては、一部明確な相関関係が見出せない資料が存在する。これは、タタキ調整の存在と併せて、特定地域における土師器のあり方として理解したい（作為的に破片を図示していないため、本文中では目立たないが、本遺跡においては、相当数のタタキ調整が施された甕が出土している）。なお、本遺跡出土甕は、今塩屋・松永編年の第２期～第５期の範囲内に該当するが、これは概ね５世紀初頭から５世紀末～６世紀初頭の枠内に収まるものと考えられる。

この検討により、野首第２遺跡における集落の時期幅は５世紀初頭から５世紀末～６世紀初頭という比較的短い期間に収まることが推測される。

この枠内で竪穴住居が構築されていたわけであるが、１時期あたり３～４軒単位の小集落が継続的に存在したものと推測される。

このうち５世紀中頃～後半期において、集落造営はピークに達したと考えられる。この時期は、須恵器の編年に当てはめると TK208 ～ TK47 並行期であり、甑・竈流入前夜であり、須恵器が竪穴住居内から出土すると共に、土師器の器種が細分化し、合わせてこれらの器種・施設の登場により甕が長胴化する時期でもある。この事象を裏付けるかのように、当遺跡においては甑の出土は無く、住居跡中から竈も検出されなかった。

須恵器の流入に関して言及するならば、SA07 において TK23 相当の須恵器が出土しているが、１個体のみであり、出土量は非常に少ない。しかしながら、椀という銘々器が合わせて出土しており、食膳形態の変化が見て取れる。他に須恵器が出土している竪穴住居跡は SA72 がある。この遺構において出土したのは大甕であるが、覆土中からの出土であり、明確に住居跡に伴うものか判断に苦しむ。SA72 からは、格子目タタキの痕跡を残す甕が出土しており、須恵器製作技術の影響が見て取れる。なお、野首第２遺跡からは模倣坏は出土していない。

住居跡の土器器種構成としては、全ての住居跡から甕が出土している。住居内のセット構成比率も甕が最も高く、以下、高坏、小型丸底壷・壷が続く。

住居内出土の甕には、二次的な焼成痕が無い資料も存在しており、甕には煮沸器としての機能の他に、保有量の少ない、貯蔵具としての壷の役割も与えられていたと考えられよう。

なお、小型の甕は、大型の甕よりもスス・炭化物が付着している資料が多かった。

野首第２遺跡における竪穴住居跡は、その全てが方形プランである。平均規模は１辺３～ 3.5 m、床面積 10.5㎡である。規模が最大の住居跡が SA76、最小のものが SA24 である。

遺構の構造としては、床面は貼床がされており、

平坦なものが多かった。床面には焼土が見られる住居跡もあり、当時は地床炉が使われていたと推測されるが、焼土中より土器がまとまって出土した住居跡は存在しない。

また、主柱穴が確認されなかった住居跡が多い。プラン中には、多数のピットが存在したものもあるが、これらがどのような柱構成をとり、上屋構造を持つのか不明瞭な点が多い。

本文中で、再三指摘した事ではあるが、遺物が出土しない住居跡が存在する中で、SA05、SA38やSA76に代表される、遺物の大量出土が見られる住居跡が存在した。これらの住居中からは、確かに複数時期の遺物が出土するものの、特定時期に該当する土器の集中的な投棄が見て取れる。

また、これらの住居の出土土器の時期幅が微妙に異なっている点も注意が必要であろう。つまり、住居跡を廃絶する際に、特定の住居に遺物を集中的に廃棄するというシステムの下に、野首第２遺跡の集落は成り立っていた可能性がある。その結果として、遺物の出土しない住居跡が存在するに至ったと推測されよう。

竪穴住居の他に、集落を構成する遺構として、土坑があげられる。土坑の帰属時期は不明瞭な点が多く、その機能も判然としない。そのような中で、袋状の貯蔵穴が検出されている。これらの遺構は、住居跡の付近に構築される場合が多いようである。

溝状遺構に関しては、住居跡が完全に埋没した後に構築されているものであり、古墳時代の集落を構成する要素としては考え難い。

以上、簡単ではあるが、古墳時代の集落構成について概観した。本遺跡の集落は５世紀～６世紀という、時間的に限られた範囲で営まれたものである。その１時期あたりの構成単位としては竪穴住居２～４軒と貯蔵穴としての土坑の存在があげられる。

第Ⅴ章　おわりに

終章では、これまで本書に示した内容に加え、昨年度刊行した第一分冊（文献１）の成果および補遺資料にも基づき、野首第２遺跡とその周辺の歴史的変遷を素描したい。

野首第２遺跡の歴史は後期旧石器時代から始まる。AT 下位～上位にかけて多くの石器と礫群が出土した。これらは細分すると、AT 下位３、AT 上位４の計七つの時期に分かれる。

最も古い石器群（第Ⅰ期）は石器組成は安定しないものの、後期旧石器時代の初頭に遡る可能性がある。AT 下位黒色帯 MB2・３から出土した２時期の石器群（第Ⅱ・Ⅲ期）は台形様石器の接合例や石刃製二側縁加工ナイフ形石器などを含む成果となった。

AT 上位では、層位的には AT 直上からの切出形石器（狸谷型ナイフ形石器）が一定量まとまって出土した（第Ⅳ期）。今後は、これに伴う他の器種組成などを追究する必要がある。AT 上位黒色帯 MB1 から出土した大形ナイフ形石器、角錐状石器、国府型ナイフ形石器を主要な組成とする石器群（第Ⅴ期）は、大形・鋸歯縁加工を特徴とする槍先主体の石器群と評価できる。これに剥片尖頭器を１点も伴わないことが重要である。MB １～ kr-kb にかけての層位からはいわゆる“ナイフ形石器文化終末期”に関わる石器群（第Ⅵ期）が接合資料を含み多く出土した。基部加工ナイフ形石器や台形石器を組成する。これとほぼ同じ層位からは細石刃石器群（第Ⅶ期）も出土しているが、時期的には分離される可能性が高い。

基本層序第Ⅱ層（MB0）～第Ⅲ層にかけては、早期の押型文土器期の遺構・遺遺物が多く確認された。集石遺構や炉穴がぞれぞれに 150 基以上あるが、そのほとんどを報告できていない点は大きな反省点である。小丸川を挟んで対岸に位置する尾花坂上遺跡などでも、深い掘り込みを有する集石遺構が確認され、本遺跡や隣接する野首第１遺跡の同遺構の在り方と比較する良い材料となる。

いずれにせよ、大規模な集石遺構が密集する地域は、宮崎県内でも一定の地理的範囲に集中して分布する傾向が看取される。今後は、さしあたり、小丸川流域とその周辺の台地を対象とした地域研究が要求されよう。

本書に報告した後・晩期の遺構・遺物も貴重な成果である。特に後期中葉の第１号凹地状遺構とした竪穴住居跡の孤立的な様相と、後期後葉に至って、盛んな生活痕跡と土地改変の可能性を示す痕跡の対照的な在り方は印象的である。また、ほぼ間違いなく北陸地域からの流通品であろうヒスイ輝石製の玉類が数多く出土したことも特筆される。

ただ大きな反省点としてＣ区の記録の不備がある。Ｃ区の調査については、諸事情から調査を中断した時期が長く、こうした状況に至ったこともあるが、無論、調査者の力量不足が最大の原因である。取り返せない部分も多いが、今後もこれを補う努力は続けたい。

弥生時代の人々の生活痕跡がほとんど残されず、古墳時代中期に至って再びこの地に集落が営まれた変遷も興味深い。小丸川を挟んだ対岸には、弥生時代の集落遺跡も多く、盛んな人類活動が展開されている点からすると、まことに対照的な土地利用の在り方といえる。

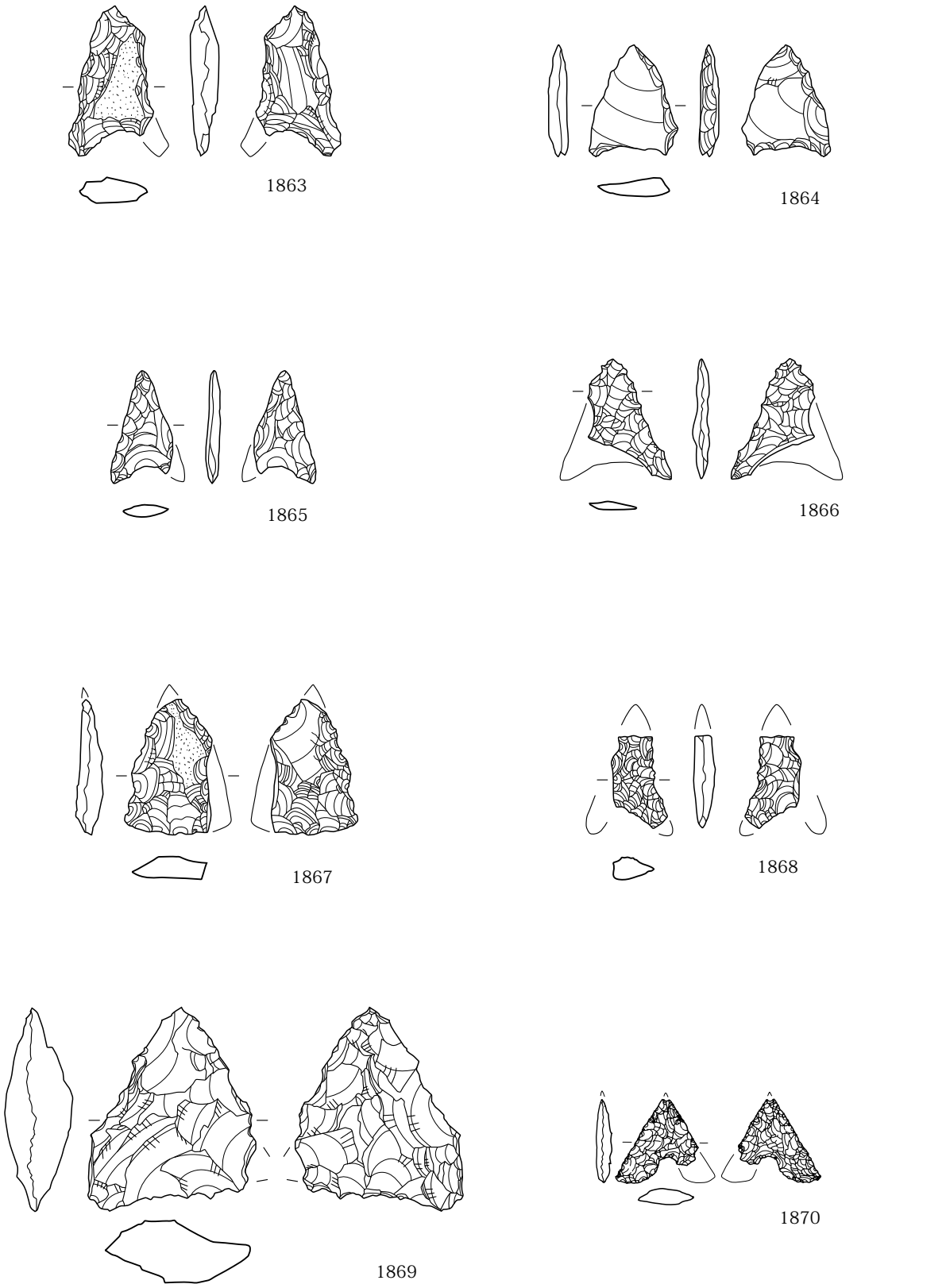
古代の状況も、紙数を尽くすべきであったが、果たせていない。土師器や緑釉陶器、布目瓦などの遺物や、道路状遺構・掘立柱建物との関係など、追究すべき部分は多い。

中・近世には弥生と同様、この土地利用の痕跡は乏しくなる。ただし、近世の所産と理解される火打石が一定量あることと裏腹に、同時期の陶磁器がほとんど見当たらない点はやや不可解であった。隣接する野首第１遺跡が主要な生活空間として利用され、本遺跡が廃棄空間だったにしても、本遺跡に火打石だけが目立つ理由は不明である。

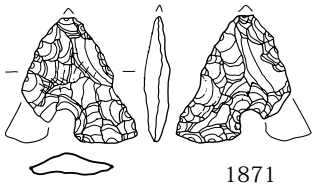
以上に述べた諸点以外にも課題は多い。今後も折に触れ、本遺跡に残された課題を果たすことを期したい。

縄文時代早期・後期旧石器旧石器時代　補遺資料

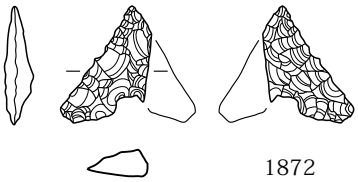
第一分冊では、掲載できなかった資料を一部ではあるが、ここで掲載しておく。資料の中心は、縄文時代早期では、石鏃・石匙などのトゥール類、後期旧石器時代では、最も資料数の多い第Ⅴ期の石器群を主体とした。



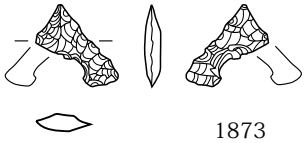
第 270 図　縄文時代早期の石器補遺（1）　原寸



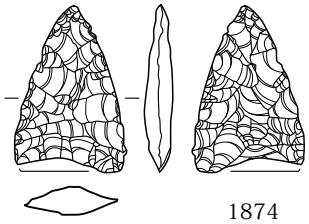
1871



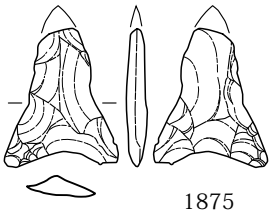
1872



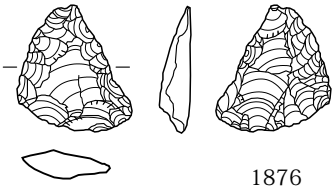
1873



1874



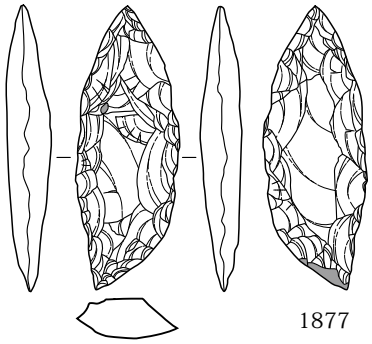
1875



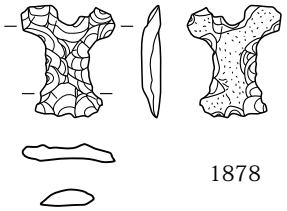
1876

0 1:1 3cm

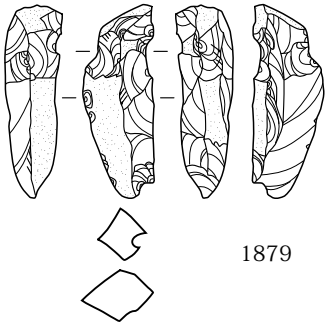
第 271 図　縄文時代早期の石器補遺（2）　原寸



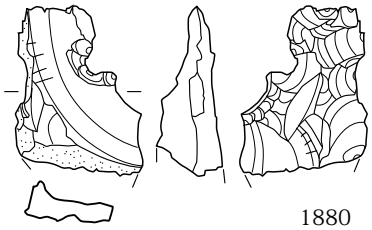
1877



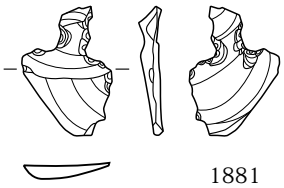
1878



1879



1880



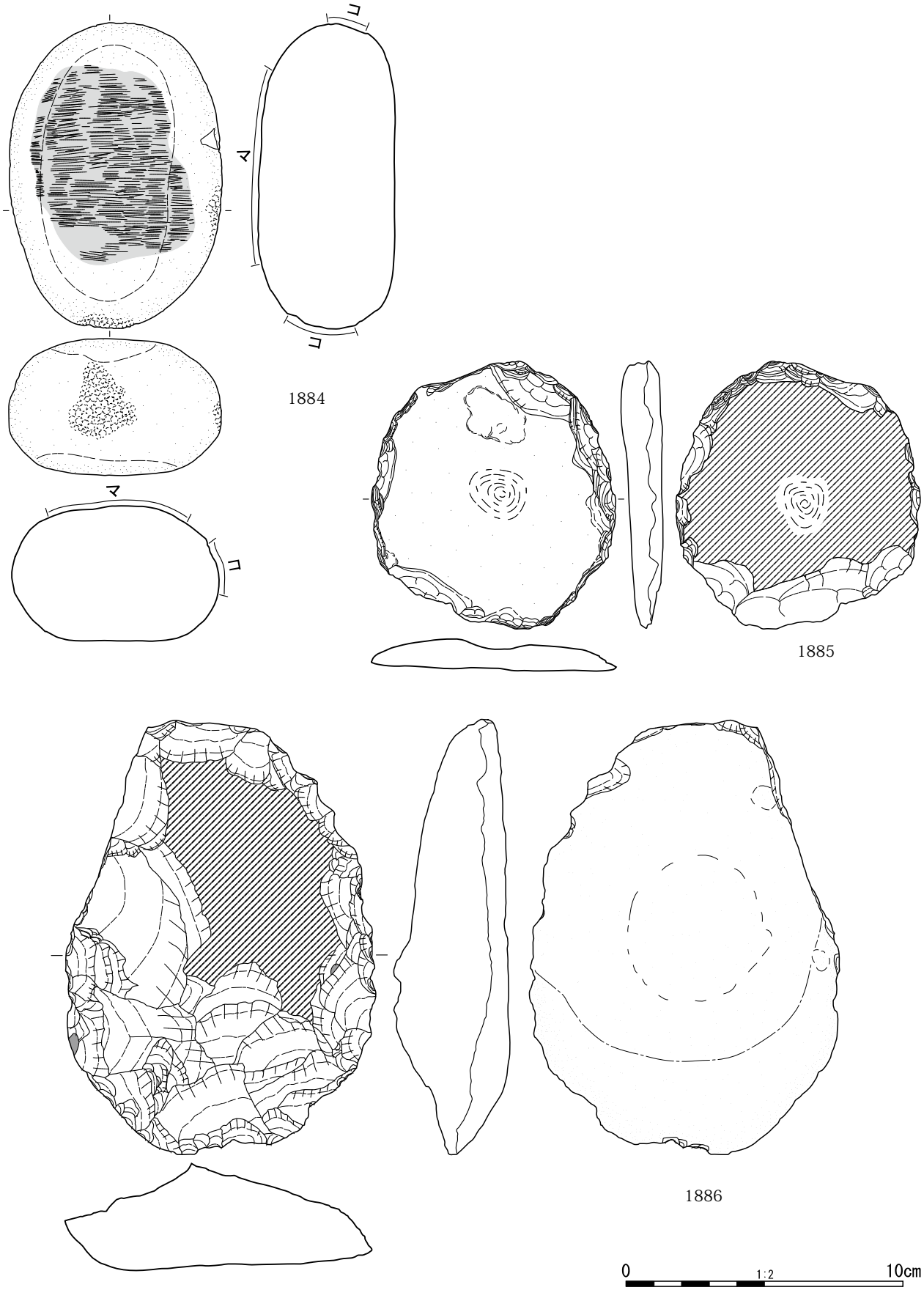
1881

1882

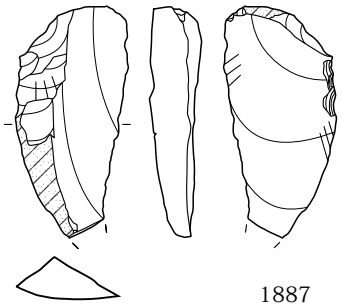
1883

0 1:1 3cm

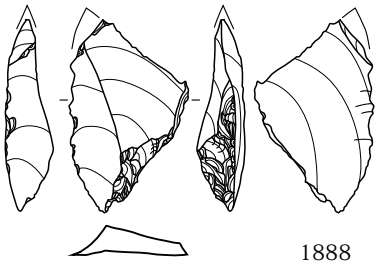
第 272 図　縄文時代早期の石器補遺（3）　原寸

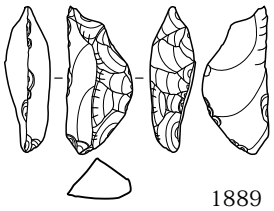


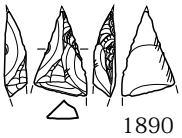
第 273 図　縄文時代早期の石器補遺（4）　S＝1／2

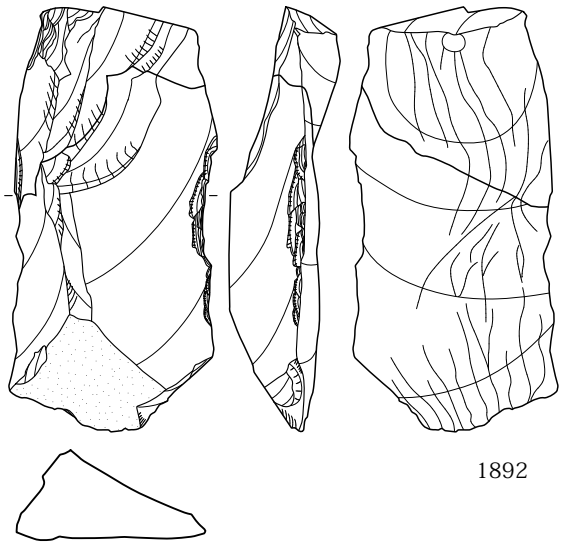


第 274 図　ナイフ形石器石器群補遺（1）　第Ⅱ～Ⅲ期の石器群　S= 1／2



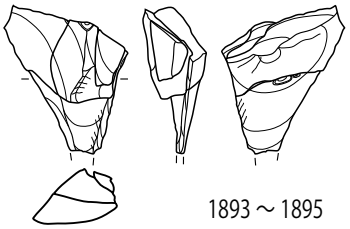




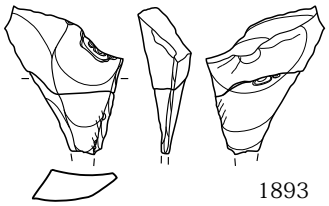


0　1:2　10cm

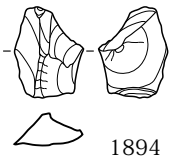
第 275 図　ナイフ形石器石器群補遺（2）　第Ⅴ期の石器群①　トゥール類　S= 1／2



1893～1895

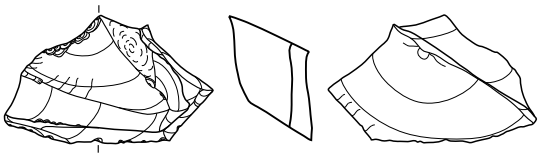


1893

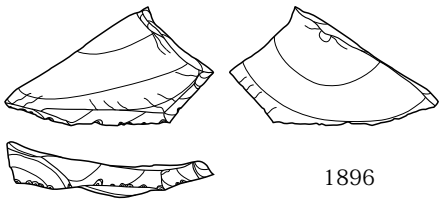


1894

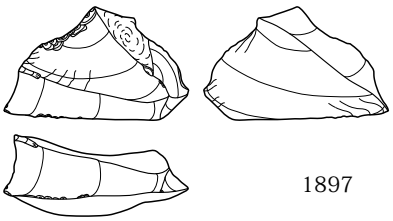
1895



1896＋1897



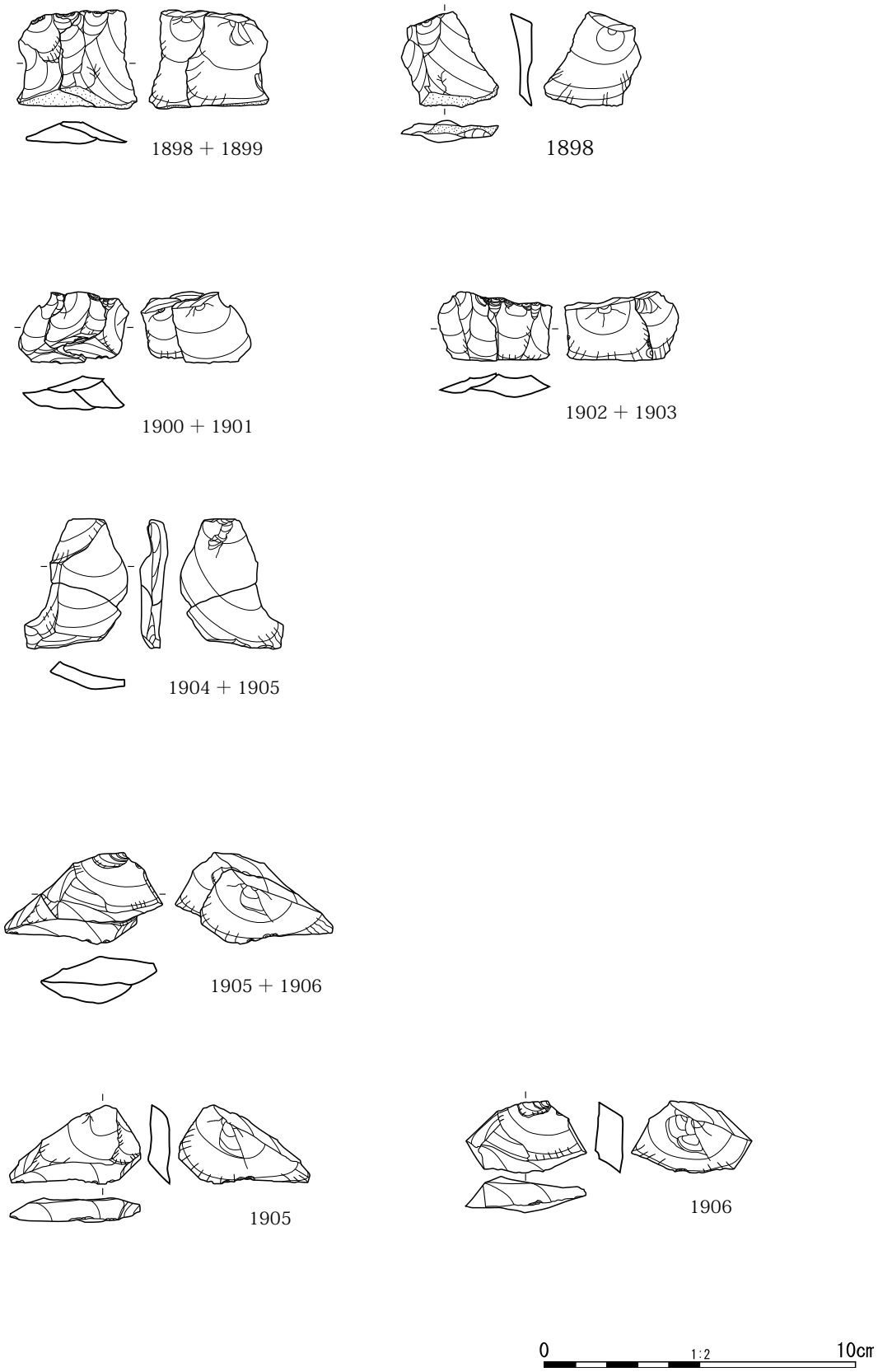
1896



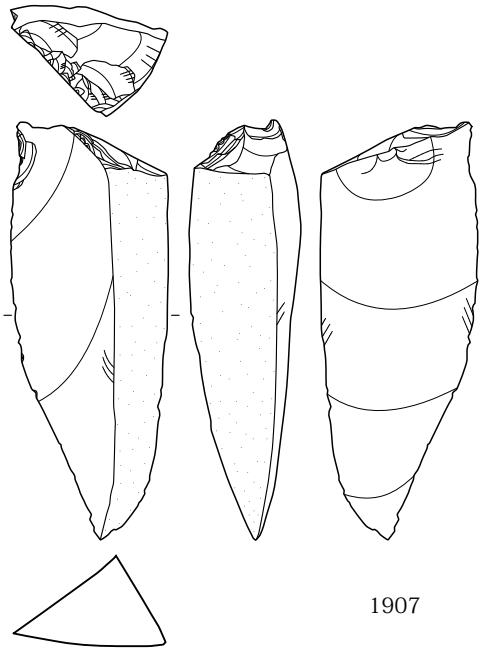
1897

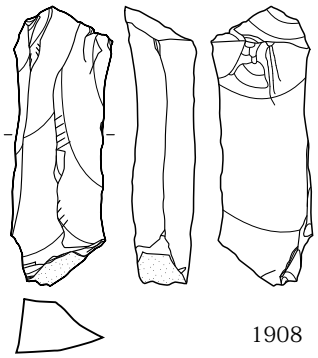
0　1:2　10cm

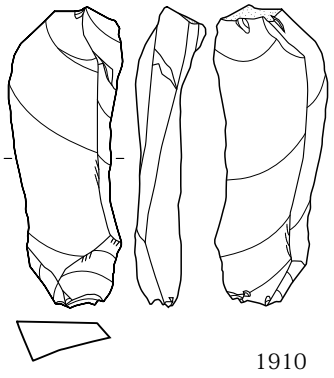
第 276 図　ナイフ形石器石器群補遺（3）第Ⅴ期の石器群②　母岩資料№ 63　S= 1／2



第 277 図　ナイフ形石器石器群補遺（４）第Ⅴ期の石器群③　母岩資料№ 63　S= １／２

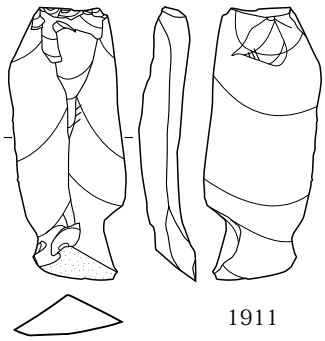


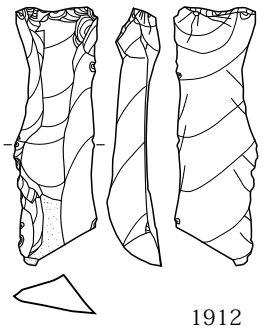


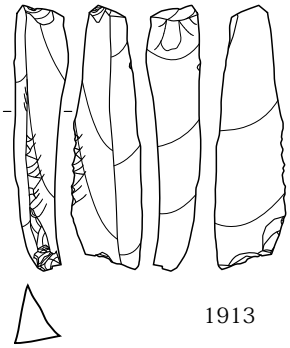


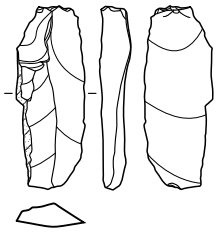
0 1:2 10cm

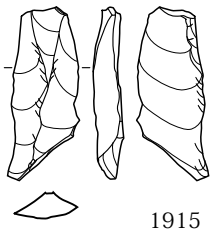
第 278 図　ナイフ形石器石器群補遺（5）　第Ⅴ期の石器群④　石刃　S= 1／2

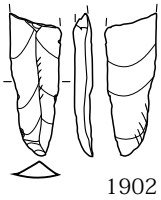






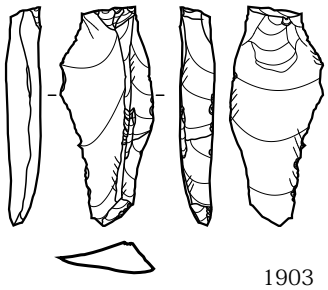


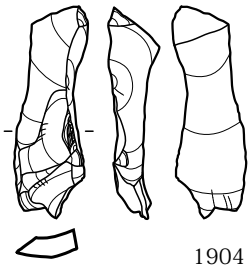


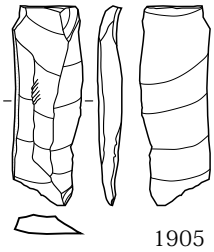


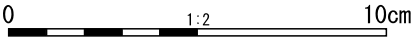
0 1:2 10cm

第 279 図　ナイフ形石器石器群補遺（6）　第Ⅴ期の石器群⑤　石刃　S= 1／2

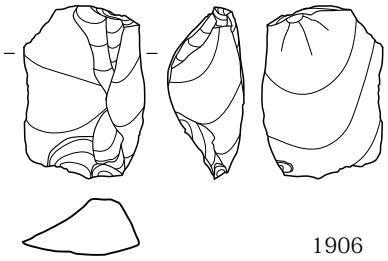


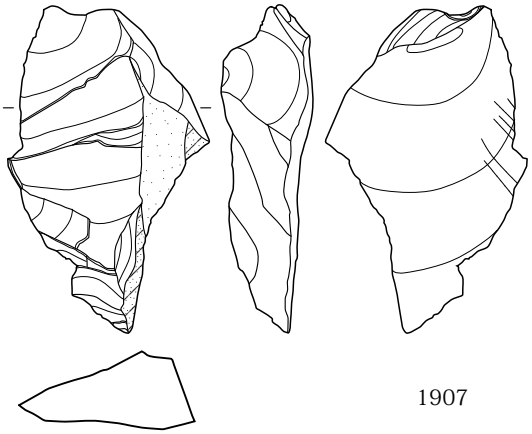


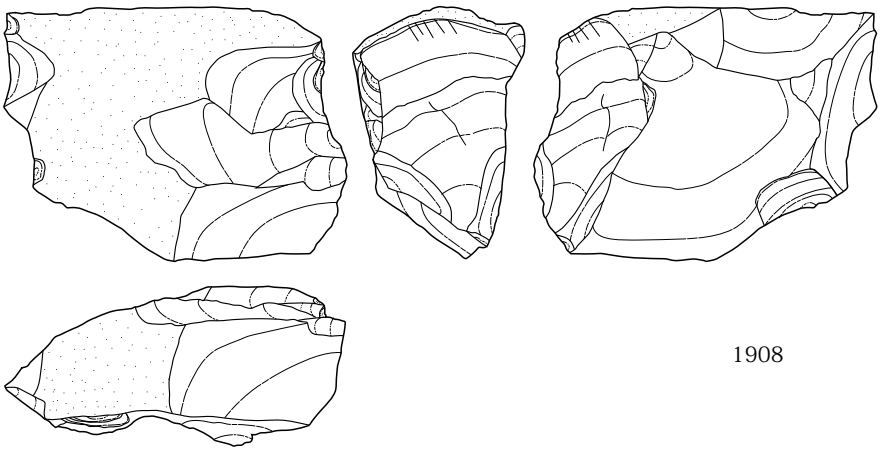




第 280 図　ナイフ形石器石器群補遺（7）　第Ⅴ期の石器群⑥　石刃　S= 1／2

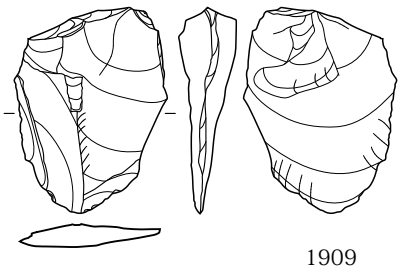




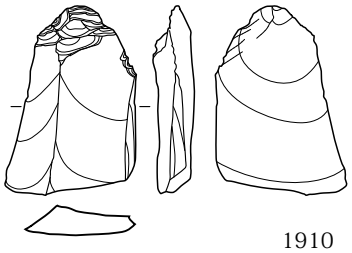


0 2:3 5cm

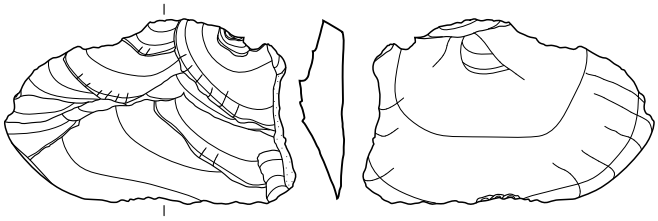
第 281 図　ナイフ形石器石器群補遺（8）　第Ⅴ期の石器群⑦　有底・一般剥片，石核　S= 2／3



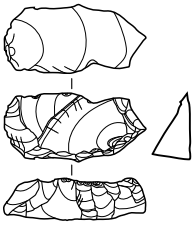
1909



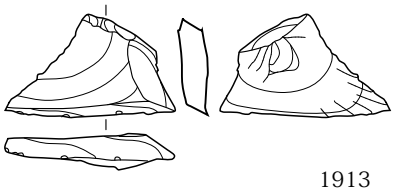
1910



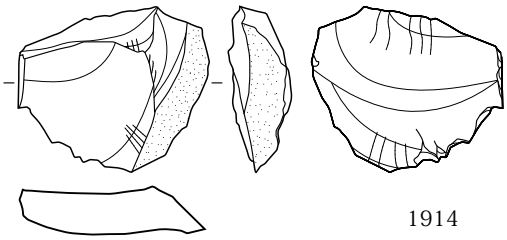
1911



1912



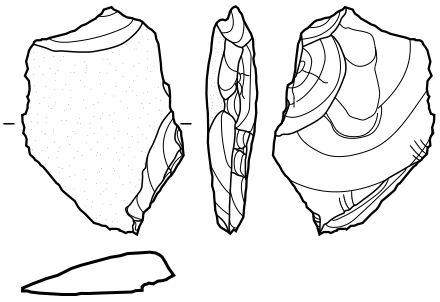
1913



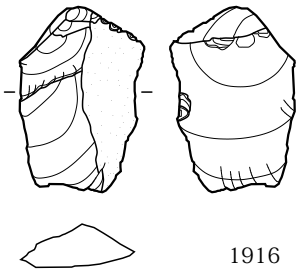
1914

0 2:3 5cm

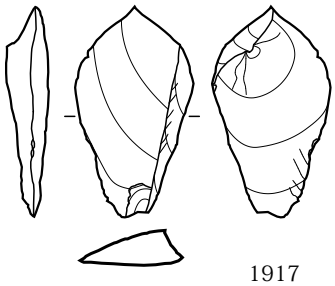
第 282 図　ナイフ形石器石器群補遺（９）　第Ⅴ期の石器群⑧　有底・一般剥片，石核　S= ２／３



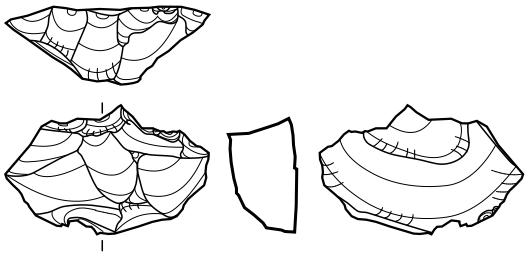
1915



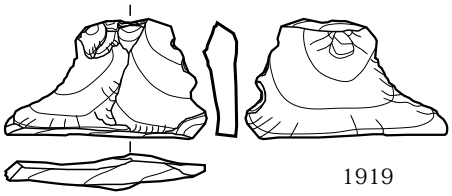
1916



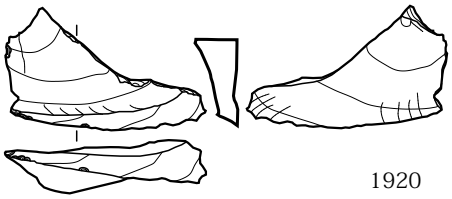
1917



1918



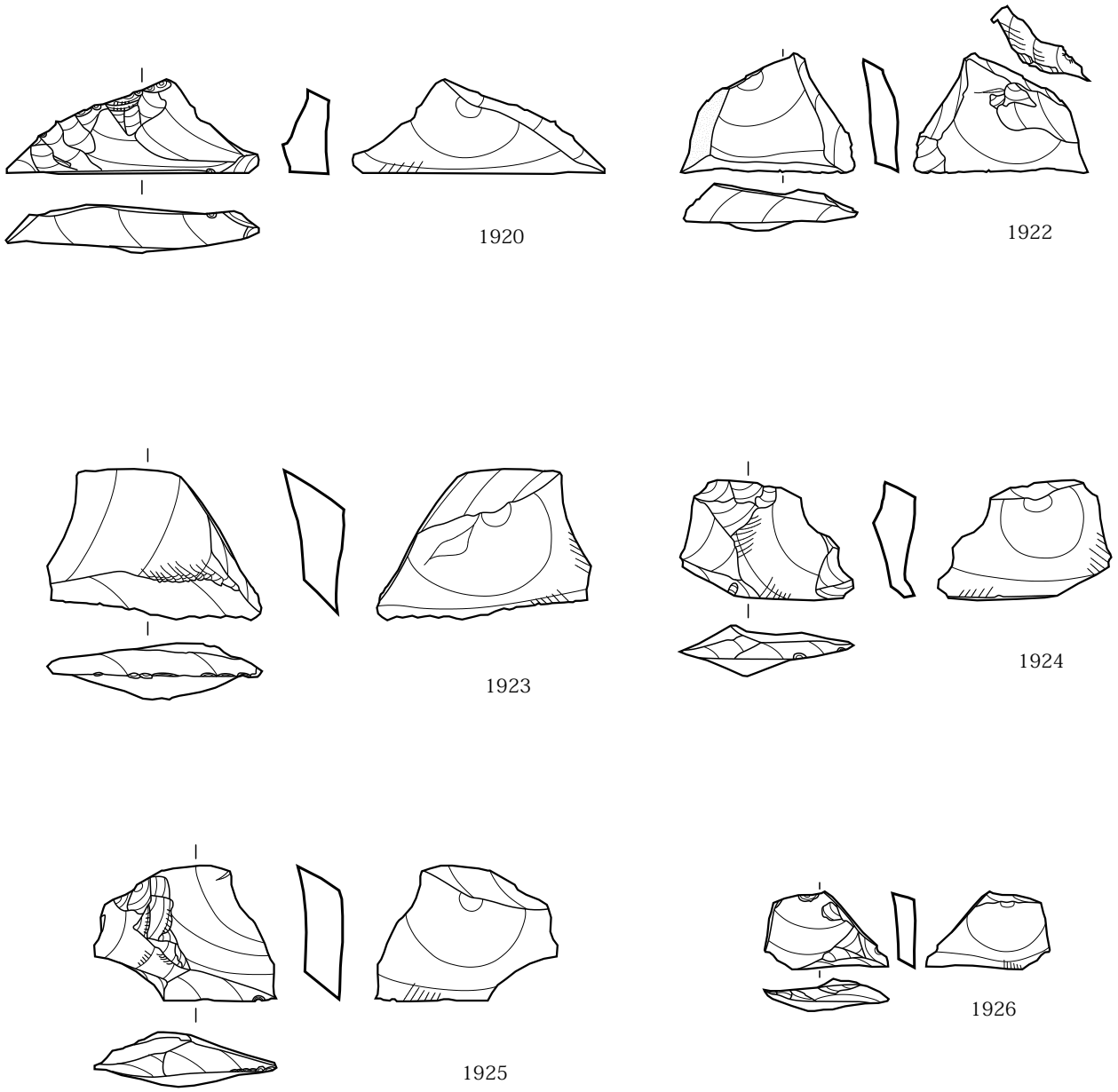
1919



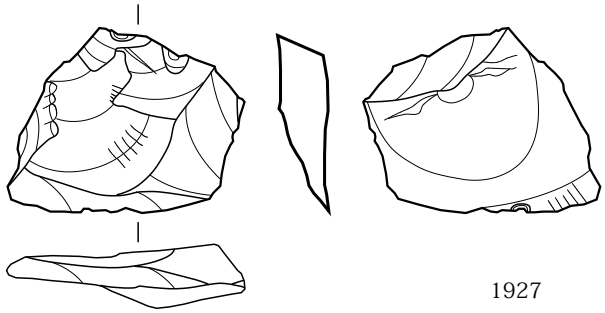
1920

0 2:3 5cm

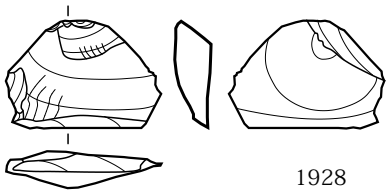
第 283 図　ナイフ形石器石器群補遺（10）　第Ⅴ期の石器群⑨　有底・一般剥片，石核　S= 1／2



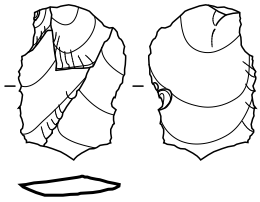
第 284 図　ナイフ形石器石器群補遺 11）　第Ⅴ期の石器群⑩　有底・一般剥片，石核　S= 1／2



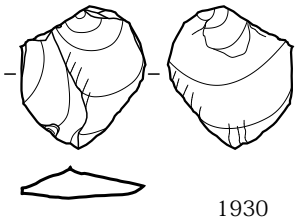
1927



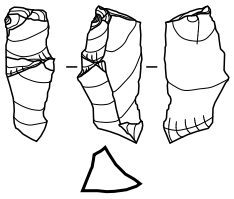
1928



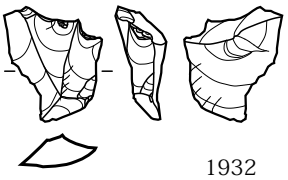
1929



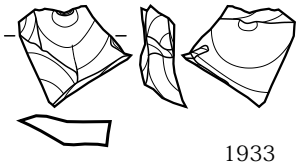
1930



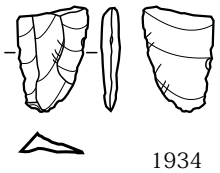
1931



1932



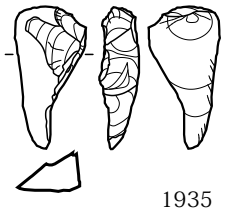
1933



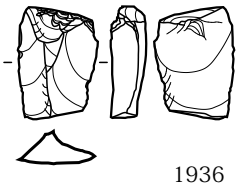
1934

0 2:3 5cm

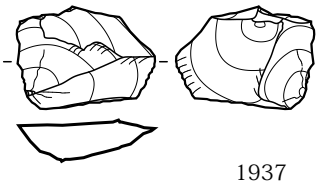
第 285 図　ナイフ形石器石器群補遺（12）　第Ⅴ期の石器群⑪　有底・一般剥片，石核　S= 2／3



1935

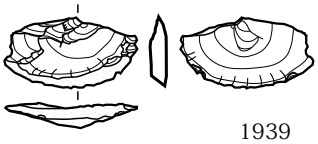


1936

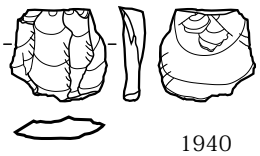


1937

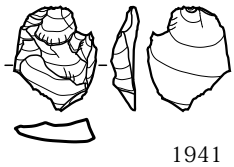
1938



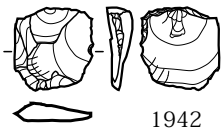
1939



1940



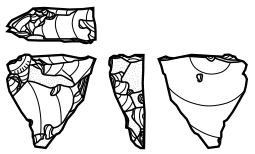
1941



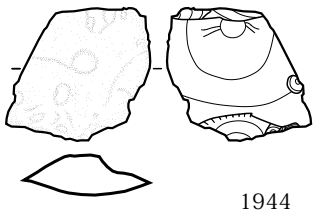
1942

0 1:2 10cm

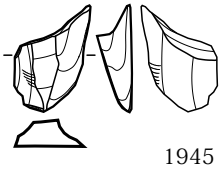
第 286 図　ナイフ形石器石器群補遺（13）　第Ⅴ期の石器群⑫　有底・一般剥片，石核　S= 1／2



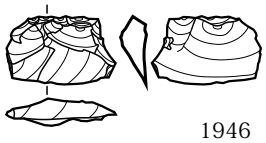
1943



1944

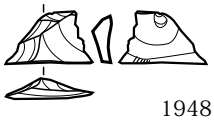


1945



1946

1947



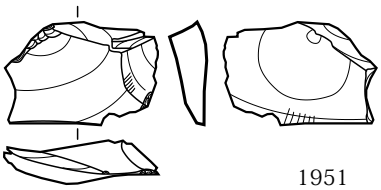
1948

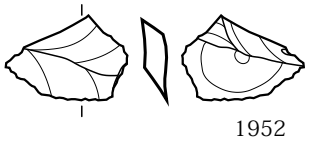
1949

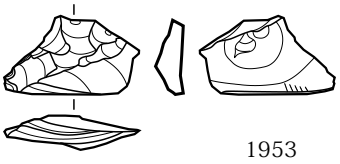
1950

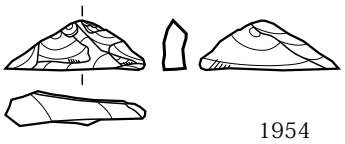
0 1:2 10cm

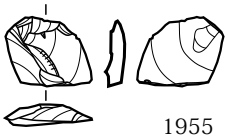
第 287 図　ナイフ形石器石器群補遺（14）　第Ⅴ期の石器群⑬　有底・一般剥片，石核　S= 1／2

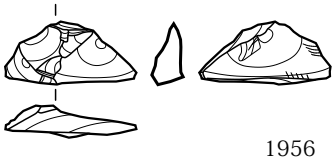


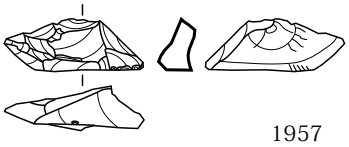


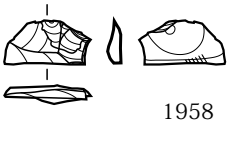






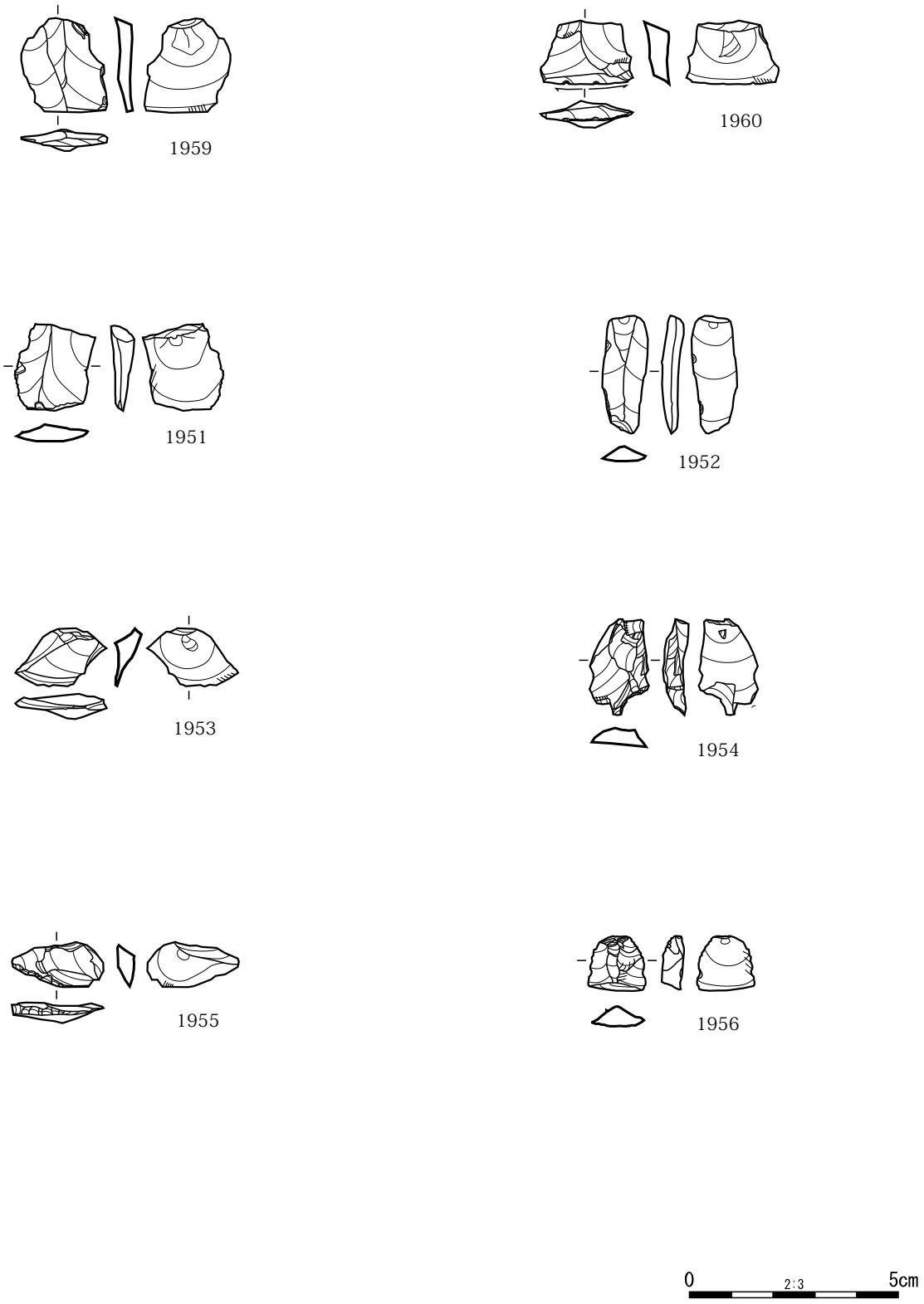




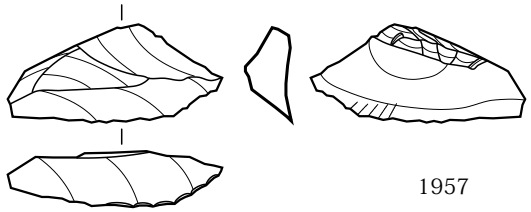


0 1:2 10cm

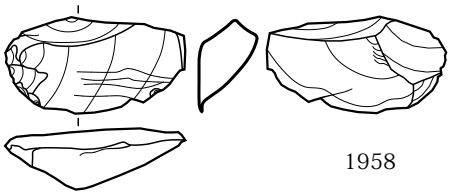
第 288 図　ナイフ形石器石器群補遺（15）　第Ⅴ期の石器群⑭　有底・一般剥片，石核　S= 1／2



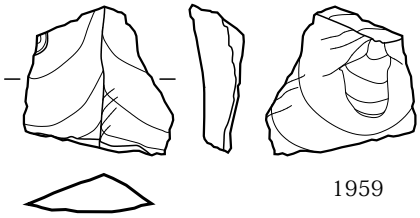
第 289 図　ナイフ形石器石器群補遺（16）　第Ⅴ期の石器群⑯　有底・一般剥片，石核　S= 2／3



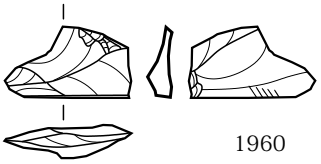
1957



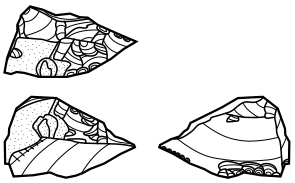
1958



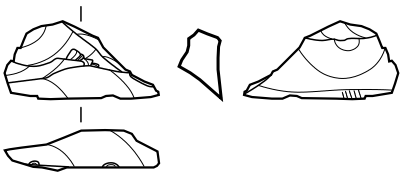
1959



1960

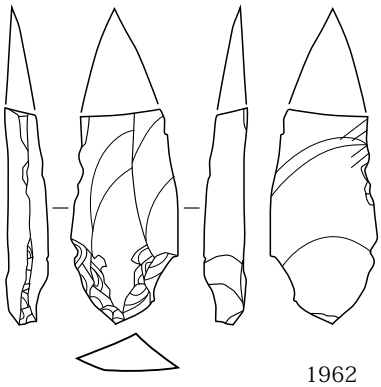


1961

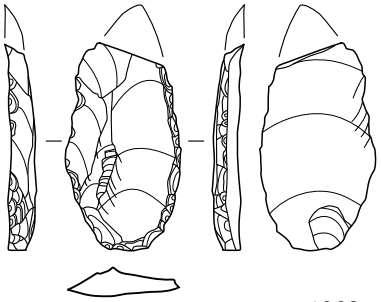


0 1:1 3cm

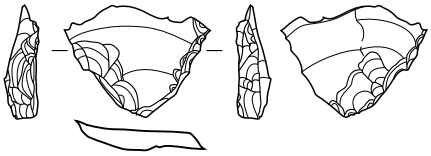
第 290 図　ナイフ形石器石器群補遺（17）　第Ⅴ期の石器群⑰　有底・一般剥片，石核　原寸



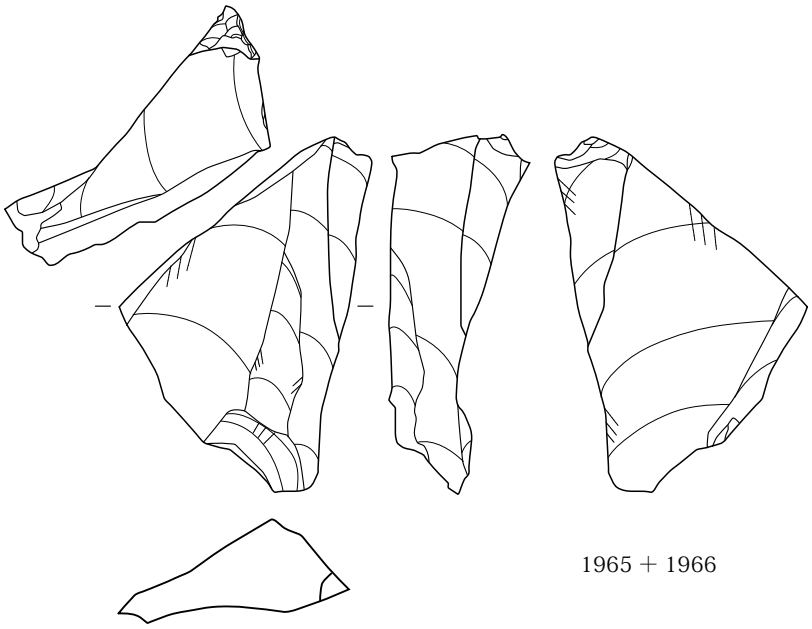
1962



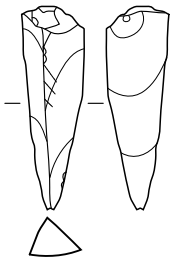
1963



1964



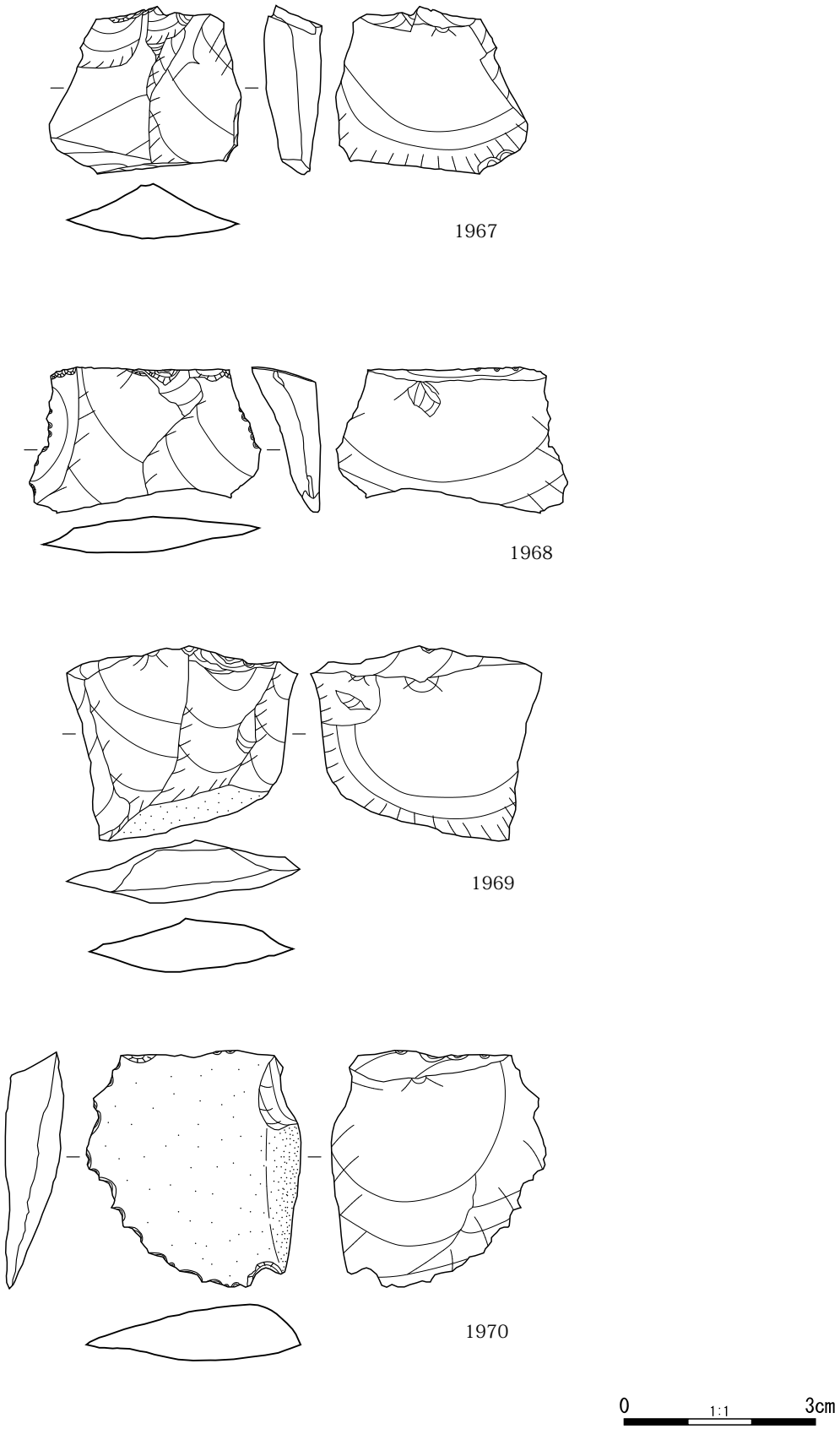
1965 ＋ 1966



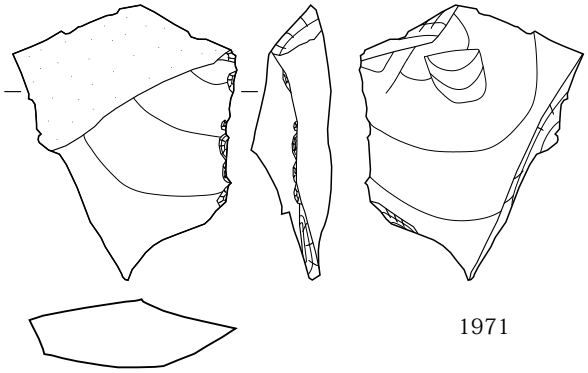
1966

0 1:1 3cm

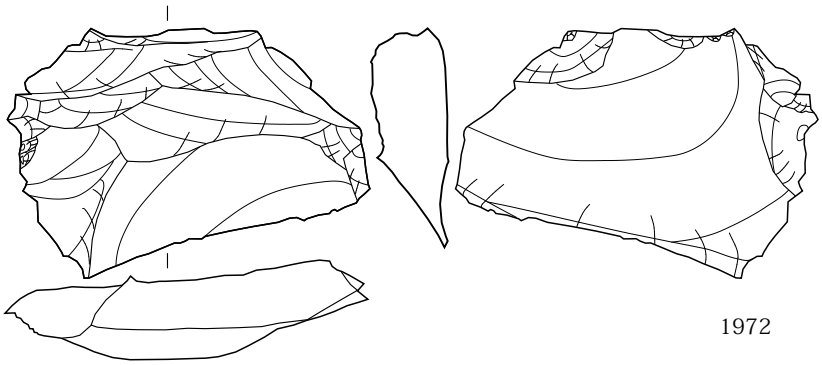
第 291 図　ナイフ形石器石器群補遺（5）　第Ⅵ期の石器群　原寸



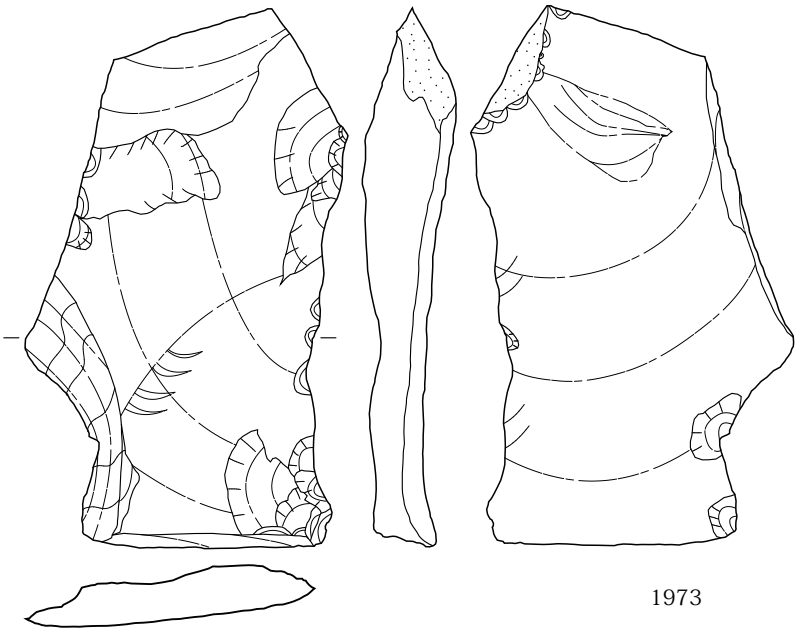
第 292 図　第Ⅰ層中の旧石器（1）　有底・一般剥片，石核　原寸



1971



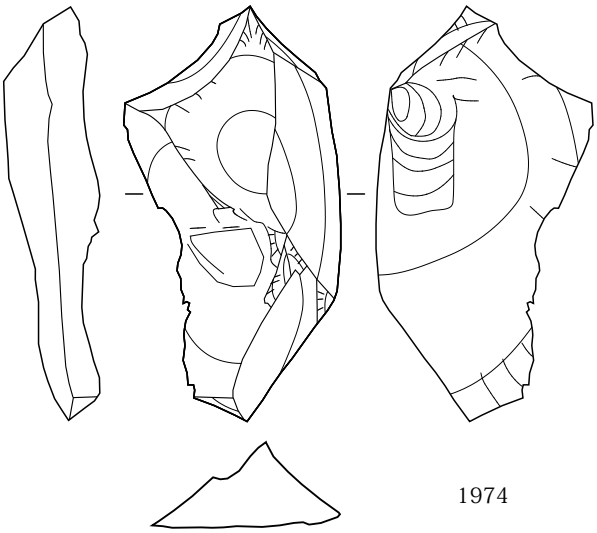
1972

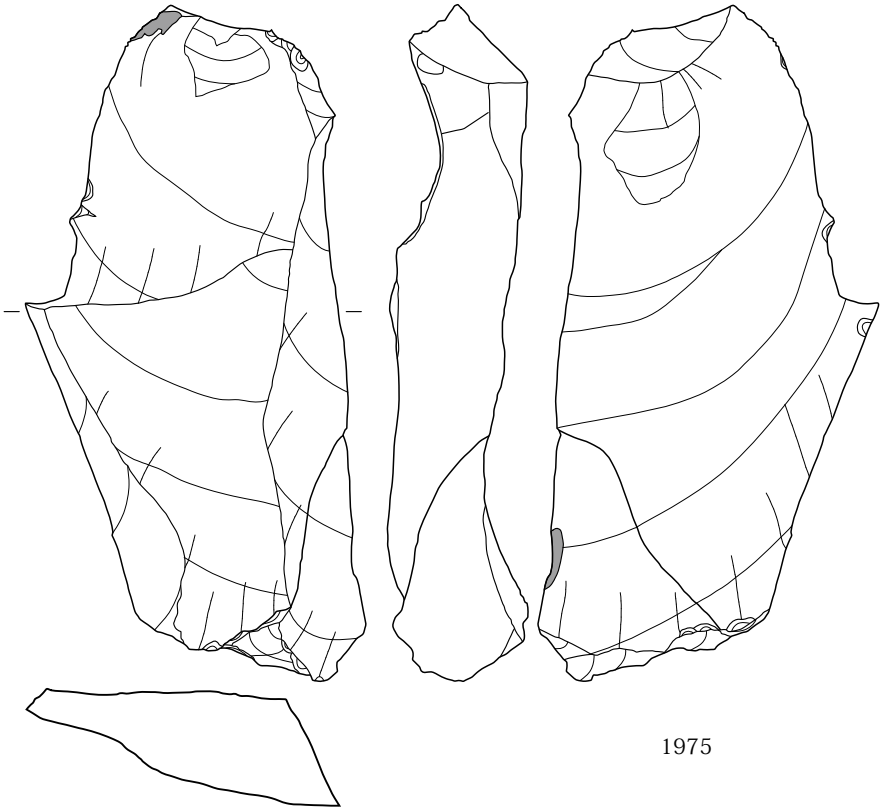


1973

0 1:1 3cm

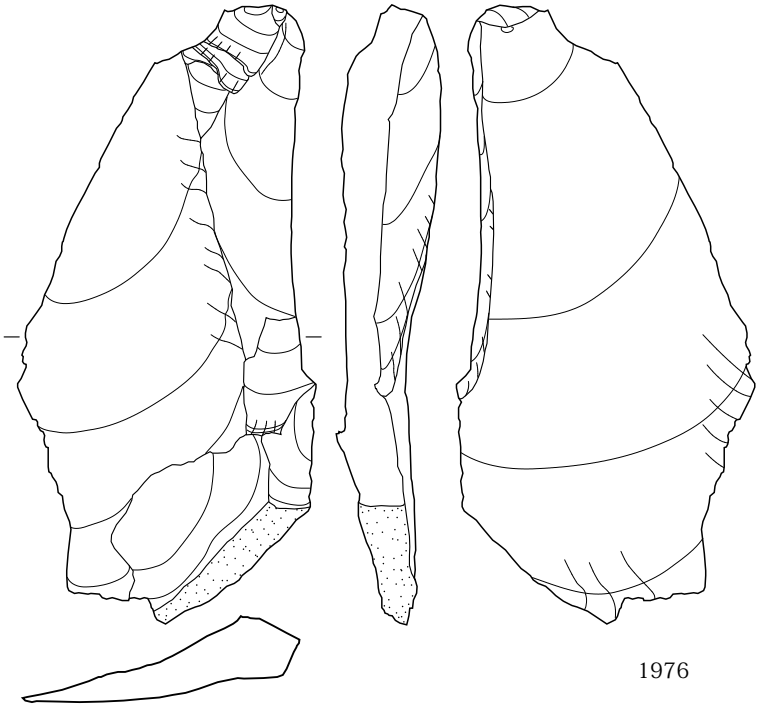
第 293 図　第Ⅰ層中の旧石器（2）　有底・一般剥片，石核　原寸

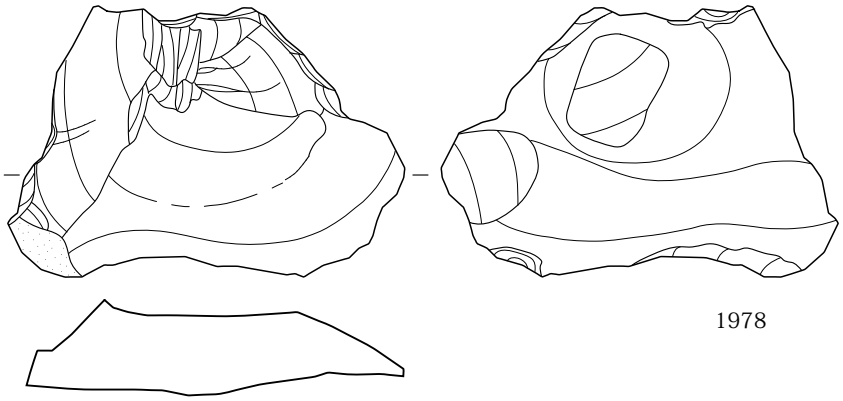




0 1:1 3cm

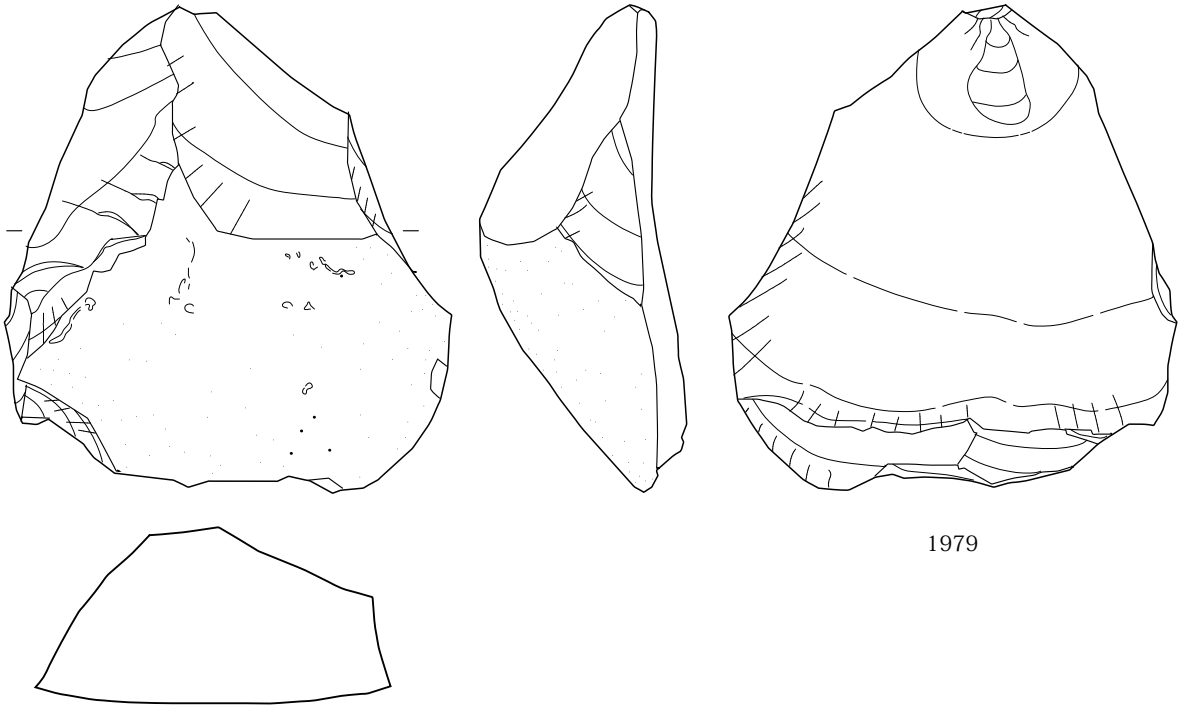
第 294 図　第Ⅰ層中の旧石器（3）　有底・一般剥片，石核　原寸

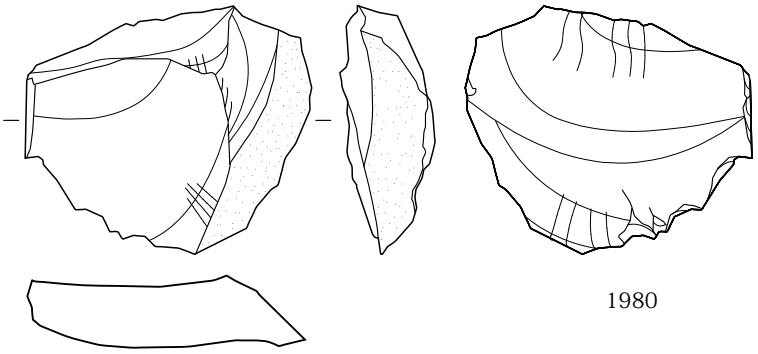




0 1:1 3cm

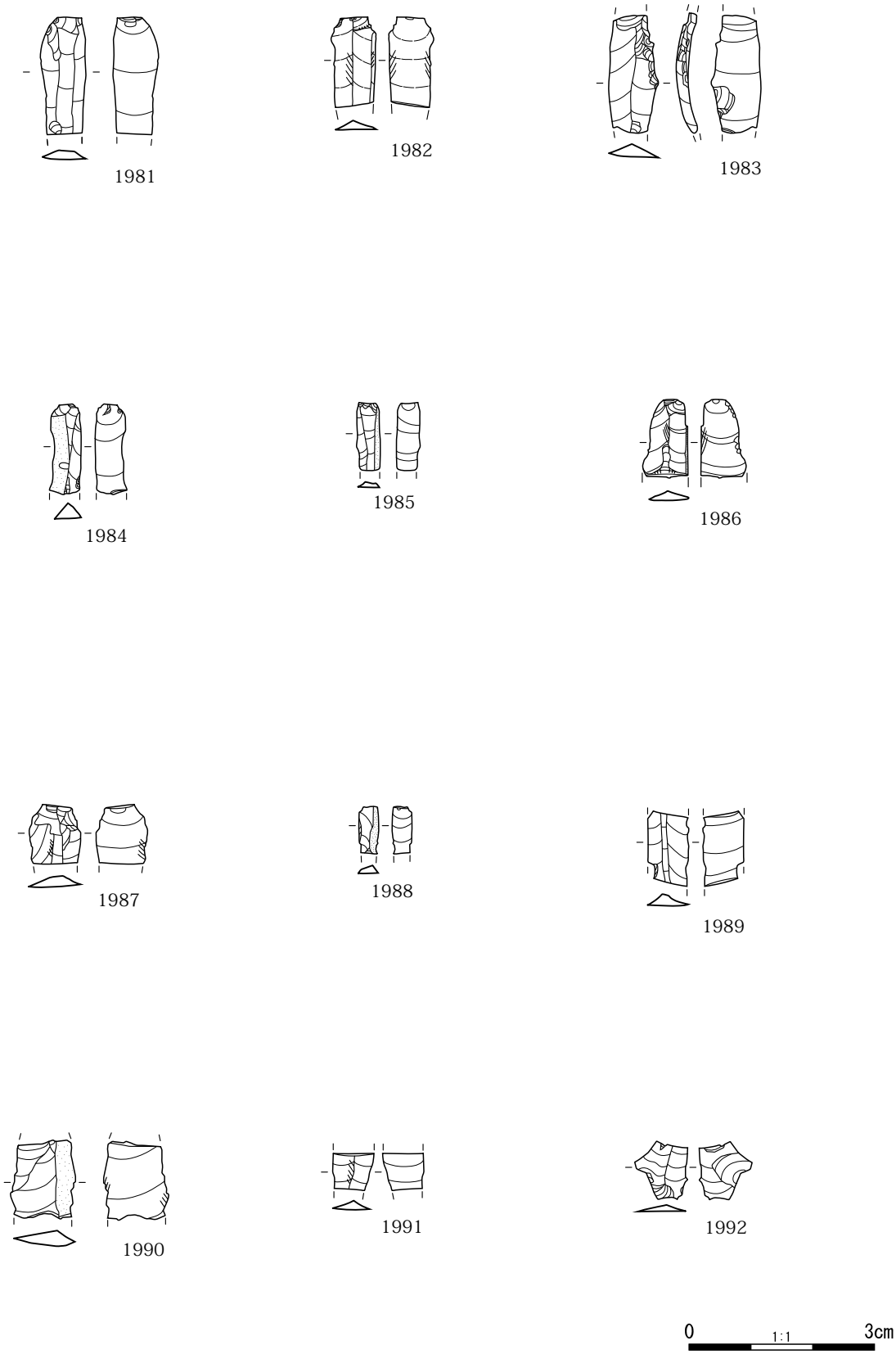
第 295 図　礫群に伴う旧石器（1）　原寸





0 1:1 3cm

第 296 図　礫群に伴う旧石器（2）　原寸


1981
1982
1983
1984
1985
1986
1987
1988
1989
1990
1991
1992
0
1:1
3cm

第 297 図　細石刃　原寸

引用・参考文献　　付章：自然科学分析の成果

引用・参考文献

＜引用文献＞

文献 1：尾園賢二・重留康宏・松本茂編 2007『野首第 2 遺跡　第一分冊：後期旧石器時代～縄文時代早期編　東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 51』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 158 集　宮崎県埋蔵文化財センター

文献 2：奥野充・福島大輔・小林哲夫 2000「南九州のテフラクロノロジー　－最近 10 万年間のテフラ－」『人類史研究』第 12 号　人類史研究会

文献 3：白岩修編 2000『石河内本村遺跡　県営中山間地域総合整備事業に伴う石河内本村遺跡発掘調査報告書』木城町文化財調査報告書第 6 集　木城町教育委員会

文献 4：田中光・藤木聡・飯田博之編 2004『野首第 1 遺跡　県道木城高鍋線高速関連道路・河川等緊急整備事業 (青木地区) に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 86 集　宮崎県埋蔵文化財センター

文献 5：堀田孝博編 2007『野首第 1 遺跡Ⅱ　東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 50』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 157 集　宮崎県埋蔵文化財センター

文献 6：阿部直人・竹田亨志編 2005『老瀬坂上第 3 遺跡　東九州自動車道 (都農～西都間) 建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 23』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 118 集　宮崎県埋蔵文化財センター

文献 7：北郷泰道ほか編 1985「平畑遺跡の調査」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第 2 集　宮崎県教育委員会

文献 8：今塩屋毅行・都成量・永田和久編 2006『下耳切第 3 遺跡　東九州自動車道建設（都農～西都間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 30』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 125 集　宮崎県埋蔵文化財センター

文献 9：永友良典編 1993「南中原遺跡」『宮崎県文化財調査報告書』第 36 集　宮崎県教育委員会

文献 10：堀口悟史編 2007『南中原第 1 遺跡（一次）東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 54』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 162 集　宮崎県埋蔵文化財センター

文献 11：山本格編 1995『中尾・牛牧地区遺跡　農村基盤総合整備パイロット事業尾鈴 2 期地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』高鍋町文化財調査報告書第 7 集　高鍋町教育委員会

文献 12 山本格編 1991『町内遺跡発掘調査報告書　老瀬坂上第 2 遺跡　高鍋城跡』高鍋町文化財調査報告書第 6 集　高鍋町教育委員会

文献 13：今塩屋毅行 2003「野首古墳群・山王古墳群・牛牧古墳群ほか」『第 29 回九州古墳時代研究会古墳見学会資料』第 29 回九州古墳時代研究会実行委員会

文献 14 ：日高正晴ほか編 1979『お染ヶ丘地区特殊農地保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　上ノ別府遺跡』宮崎県教育委員会

文献 15：岩永哲夫・戸高真知子編 1991『大戸ノ口第 2 遺跡』高鍋町文化財調査報告書第 5 集　高鍋町教育委員会

文献 16：江川雅章・永友良典編 1989『高鍋町遺跡詳細分布調査報告書』高鍋町文化財調査報告書第 4 集　高鍋町教育委員会

文献 17：鈴木克彦 2004「硬玉研究序論　－玉研究の現状と諸問題－」『玉文化』創刊号　日本玉文化研究会

文献 18：大坪志子 2004「九州地方の縄文時代硬玉製品」『玉文化』創刊号　日本玉文化研究会

文献 19：大坪志子 2004「九州地方の玉文化」『季刊考古学』第 89 号特集　縄文時代の玉文化　雄山閣

文献 20：松本直子 1998「玉類の分析からみた縄文時代後晩期における文化動態の一側面　－情報伝達にかかわる認知的・社会的要因－」『人類史研究』第 10 号　人類史研究会

文献 21：藁科哲男 2004「縄文時代出土玉類産地の科学分析成果」『季刊考古学』第 89 号特集　縄文時代の玉文化　雄山閣

文献 22：福永裕暁編 1996『上加世田遺跡』加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書（13）　鹿児島県加世田市教育委員会

文献 23：東和幸・野間口勇・関明恵・森雄二・長崎慎太郎・宮田栄二・八木澤一郎・川口雅之・山元真美子・上床真 2005『大坪遺跡　九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財調査報告書ＸⅡ　上巻』鹿児島県立埋蔵文化財センター埋蔵文化財発掘調査報告書（79）鹿児島県立埋蔵文化財センター

文献 24：尾園賢二・松本茂 2002「第Ⅲ章　第２節高鍋町内の遺跡　47 野首第２遺跡」『平成 13 年度東九州自動車道 (都農～西都間) 関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅱ』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 64 集　宮崎県埋蔵文化財センター

文献 25：齊藤基生 1992「石錐　－岐阜県中津市内の遺跡を例として－」『愛知女子短期大学研究紀要人文編』第 25 号　愛知女子短期大学

文献 26：板倉有大 2007「打製石斧と横刃型石器の器種認定　－桑飼下遺跡出土資料の再検討－」『考古学研究』第 53 巻第４号　考古学研究会

文献 27：後藤信祐 1986「縄文後晩期の石剣形石製品の研究 (上)」『考古学研究』第 33 巻第３号　考古学研究会

文献 28：遠部慎 2001「九州石刀・石剣小考」『唐澤考古』第 20 号　唐澤考古会

文献 29：隈昭志 1962「九州の縄文時代石刀・石剣 (四) 牛深市天附出土の石刀様石器」『九州考古学』第 16 号　九州考古学会

文献 30：坪根伸也・遠部慎 2001「(3) 九州地域（大分県）の概要と集成」小林青樹（編）『縄文・弥生移行期の石製呪術具２』考古学資料集 17平　成 12 年度文部科学省科学研究費補助金特定研究Ａ（2）『日本人および日本文化の起源に関する学際的研究』公募研究成果報告書　研究課題番号 10115209

文献 31：三宅宋悦 1936「肥後出土の二石器」『考古学』第７巻第３号

文献 32：稲富裕和 1980「石器」『黒丸遺跡　長崎県大村市黒丸町所在黒丸遺跡の調査報告』大村市黒丸遺跡調査会

文献 33：渡辺徹也 1998「南部九州の軽石製加工品にみる祭祀の変遷」『人類史研究』第 10 号　人類史研究会

文献 34：藤木聡 2003「宮崎県域の錘具の変遷と分布　付.『宮崎県内水面漁具図譜』にみる錘具の紹介」『先史学・考古学論究』Ⅳ　考古学研究室創設 30 周年記念論文集　龍田考古会

文献 35：村松佳幸 1999「山梨県内出土の石錘について」『山梨考古学論集』Ⅳ－山梨県考古学協会 20 周年記念論文集－　山梨県考古学協会

文献 36：本橋恵美子 1989「縄文時代の有溝砥石の研究　－軽石素材を中心として－」『東国史論』第４号　群馬考古学研究会

文献 37：東和幸 1998「特集　地域ごとの石器使用の終焉　九州」『考古学ジャーナル』№ 433 ニュー・サイエンス社

文献 38：藏富士寛 2006『博多 108　－博多遺跡群第 150 次調査報告－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 894 集　福岡市教育委員会

文献 39：矢部喜多夫・横山哲英 1993『久玉遺跡第５次発掘調査　油田遺跡　正坂原遺跡』都城市文化財調査報告書第 25 集　都城市教育委員会

文献 40：吉村靖徳 1995「権衡に関する一考察　－福岡県内出土権状製品の検討と課題－」『九州歴史資料館研究論集』20　九州歴史資料館

文献 41：森本嘉訓 1992「大田井の火打石採掘遺跡とその用具および伝承」『徳島民具研究』第四号　徳島民具研究会

文献 42：眞野修 1998「土佐・阿波の火打道具調査メモ」『民具集積』４号　四国民具研究会・事務局

文献 43：安芸毬子 2005「江戸遺跡出土のキセル　－東大構内遺跡における時期別様相－」『東京大学　本郷構内の遺跡　医学部附属病院外来診療棟地点』東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書５　東京大学埋蔵文化財調査室

文献 44：本田道輝 1978「西之表市納曽遺跡―出土土器」『鹿児島考古』第 12 号　鹿児島考古学会

文献 45：前迫亮一 1992「異系統土器文化の一接点」『南九州縄文通信』№ 6　南九州縄文研究会

文献 46：富田紘一 1994「三万田式土器」『縄文文化の研究』４　雄山閣

文献 47：宮内克乙 1981「三万田式土器の研究」『古文化談叢』８　古文化研究会

文献 48：水ノ江和同 1997「北部九州の縄紋後・晩期土器　－三万田式から刻目突帯文土器の直前まで―」『縄文時代』第８号　縄文時代文化研究会

文献 49：泉　拓良・山崎純男 1989「凸帯文系土器様式」『縄文土器大観 4　後期　晩期　続縄文』小学館
文献 50：清田純一 1998「縄文後・晩期土器考　－中九州の縄文後・晩期土器とその並行型式について－」『肥後考古』第 11 号肥後考古学会
文献 51：堂込秀人　1997「南九州縄文晩期土器の再検討―入佐式と黒川式の細分―」『鹿児島考古』第 30 号　鹿児島考古学会
文献 52：坪井清足 1965「御領貝塚の発掘調査」『城南町史』城南町
文献 53:久山高史編 200『蔵上遺跡Ⅲ　縄文時代遺構・遺物編　蔵上土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書（4）』鳥栖市文化財調査報告書第 61 集　鳥栖市教育委員会
文献 54：坂田和弘編 19『鶴羽田遺跡　（仮称）梶尾ニュータウン造成工事に伴う埋蔵文化財調査』熊本県文化財調査報告第 168 集　　熊本県教育委員会
文献 55：竹田宏司編 1999『太郎迫遺跡・妙見遺跡寺迫地区農村活性化住環境整備事業に伴う埋蔵文化財の調査』熊本県文化財調査報告第 186 集　熊本県文化財保護協会
文献 56：森田浩史・金丸武司編 2004『本野原遺跡一宮崎における縄文時代大規模集落の調査』田野町文化財調査報告書第 48 集　宮崎県宮崎郡田野町教育委員会
文献 57：森田浩史・金丸武司編 2006『本野原遺跡二』田野町文化財調査報告書第 52 集　宮崎県宮崎郡田野町教育委員会
文献 58.　森田浩史・金丸武司編 2006『本野原遺跡三』宮崎市文化財調査報告書（田野町文化財調査報告書第 53 集）　宮崎市教育委員会
文献 59：金丸武司 2006「第Ⅷ章　集落の変遷」『本野原遺跡三』宮崎市文化財調査報告書（田野町文化財調査報告書）第 53 集　宮崎市教育委員会
文献 60：金丸武司編 2000『高野原遺跡（Ｅ～Ｇ区）平成７年度県営農地保全整備事業元野地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』田野町文化財調査報告書第 36 集　宮崎県宮崎郡田野町教育委員会
文献 61：長津宗重・菅付和樹編 1990『丸野第２遺跡県営農地保全整備事業七野地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』田野町文化財調査報告書第 11 集　宮崎県宮崎郡田野町教育委員会
文献 62：上村俊雄・中園聡編 2005『屋久島横峯遺跡』鹿児島国際大学考古学ミュージアム調査研究報告第２集　鹿児島国際大学国際文化学部博物館実習施設考古学ミュージアム
文献 63：中園聡 2005「第２節　考察」『屋久島横峯遺跡』鹿児島国際大学考古学ミュージアム調査研究報告第２集　鹿児島国際大学国際文化学部博物館実習施設考古学ミュージアム
文献 64 太川裕晴編 2007『仲野原遺跡　町営住宅仲野原団地建設にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書』日向市文化財調査報告書　日向市教育委員会
文献 65：日高広人・久木田浩子編 2000 『右葛ヶ迫遺跡　一般国道 220 号青島バイパス建設工事に伴う発掘調査報告書』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 21 集　宮崎県埋蔵文化財センター
文献 66：大賀克彦 2004「弥生・古墳時代のヒスイ玉文化研究の現状と課題」『玉文化』創刊号　日本玉文化研究会
文献 67:栗島義明 2004「硬玉製大珠の交易･流通」『季刊　考古学』第 89 号　特集　縄文時代の玉文化　雄山閣
文献 68：福島日出海編 2005『アミダ遺跡　嘉穂地区遺跡群Ⅷ』嘉穂町文化財調査報告書 10 集　嘉穂町教育委員会
文献 69：野田恒親・濱田彰久 1999『古閑北遺跡産業展示場建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 熊本県文化財調査報告書第 184 集　熊本県教育委員会
文献 70：二宮忠司・渡辺和子編 1983『四箇周辺遺跡調査報告書（5)』福岡市文化財調査報告書　福岡市教育委員会
文献 71　古森政次編 1994『ワクド石遺跡　熊本県菊池台地における縄文時代後期集落の調査　県営畑地帯総合土地改良事業に伴う文化財調査』 熊本県文化財調査報告書第 144 集　熊本県教育委員会
文献 72　吉田正一編 1994『大久保遺跡　七城町林原所在の縄文遺跡』熊本県文化財調査報告第 143 集　熊本県教育委員会
文献 73：九州縄文研究会 2005『九州の縄文時代装身具　発表要旨・資料集』第 15 回　九州縄文研究会沖縄大会　九州縄文研究会・沖縄大会実行委員会
文献 74：島田哲男構成　2004「長野県一津遺跡」『季

刊　考古学』第 89 号特集　縄文時代の玉文化　雄山閣
文献 75：末永雅雄ほか 1961『橿原』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 17 冊　奈良県教育委員会
文献 76：金丸武司 2005「九州における縄文の大土木工事」『南九州縄文通信』№16　南九州縄文研究会
文献 77：金丸武司 2006「南九州縄文後期遺跡における斜面堆積の再検討」『大河』第８号　大河同人
文献 78：阿部芳郎 2002『縄文のくらしを掘る』岩波ジュニア新書 419　岩波書店
文献 79：松永幸寿 2001「宮崎平野における弥生時代後期中葉～古墳時代中期の土器」『宮崎考古』第 17 号　宮崎考古学会
文献 80：今塩屋毅行・松永幸寿 2002「日向における古墳時代中～後期の土師器―宮崎平野部を中心にして―」『古墳時代中・後期の土師器―その編年と地域性―』第５回九州前方後方墳研究会実行委員会

＜参考文献＞

小林久雄 1931「阿高貝塚及び御領貝塚の土器について」『地歴研究』７－３～８　熊本地歴研究会
後藤晃一 2004「縄文時代後期の東北部九州―縄文時代後期後半の土器編年―」『考古論集』河瀬正利先生退官記念事業会
竹田宏司編 1999『太郎迫遺跡・妙見遺跡』熊本県教育委員会
富田紘一編 1981『上南部遺跡発掘調査報告書」熊本市教育委員会
富田紘一 1983「太郎迫遺跡の縄文土器（１）」『肥後考古』４号　肥後考古学会
富田紘一 1987「太郎迫遺跡の縄文土器（２）」『肥後考古』６号　肥後考古学会
富田紘一 1996「北久根山」　肥後上代文化研究会
前迫亮一 2002「南の磨消縄文土器」『四国とその周辺の考古学』犬飼徹夫先生古稀記念論文集刊行会
前迫亮一 2004「南の北久根山式土器―干迫遺跡出土資料の位置づけー」『鹿児島考古』第 38 号　鹿児島考古学会
吉本正典 1995「宮崎平野出土の土師器に関する編年的考察」『宮崎考古』第 14 号　宮崎考古学会

付章　自然科学分析の成果（承前）

第１節　放射性炭素年代測定とその結果

当該期に関わる自然科学分析は旧石器時代の礫群、縄文時代早期の集石遺構・炉穴などから採取した炭化物を対象に実施した放射性炭素年代測定分析がある。その結果の一部と評価については、すでに第一分冊に触れるところがあった。本書では、火山灰分析の結果も合わせて、古環境研究所による詳細な結果を表にして提示しておく。

第２節　火山灰分析とその結果

火山灰分析の結果については、Ｃ区における縄文時代後期後葉の集落の形成過程の解明に向けても、貴重な情報となるため、以下に古環境研究所の調査報告書の記載を収録する。

（１）野首第２遺跡の土層とテフラ

１．はじめに

宮崎県中南部に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、姶良、鬼界、阿蘇などのカルデラ火山や、桜島や霧島などの成層火山に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が数多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで野首第２遺跡においても、土層や遺物などの層位や年代を明らかにするために、テフラ組成分析と屈折率測定を行い、指標テフラの検出同

付章第１表　放射性炭素年代測定（第１回）の試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No.1	SP-53	炭化物	酸-ｱﾙｶﾘ-酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析（AMS）法
No.2	PSI-27	炭化物	酸-ｱﾙｶﾘ-酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析（AMS）法
No.3	SP-19-②C1	炭化物	酸-ｱﾙｶﾘ-酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析（AMS）法
No.4	SP-19-②P1C3	炭化物	酸-ｱﾙｶﾘ-酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析（AMS）法
No.5	SP-19-②P1C2	炭化物	酸-ｱﾙｶﾘ-酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析（AMS）法
No.6	SP-97(Ⅲ層)	炭化物	酸-ｱﾙｶﾘ-酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析（AMS）法
No.7	PSI-28-③C2	炭化物	酸-ｱﾙｶﾘ-酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析（AMS）法
No.8	PSI-37C1	炭化物	酸-ｱﾙｶﾘ-酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析（AMS）法
No.9	SI配石間埋土	炭化物	酸-ｱﾙｶﾘ-酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析（AMS）法
No.10	SI-93C1	炭化物	酸-ｱﾙｶﾘ-酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析（AMS）法
No.11	SI-70・93	炭化物	酸-ｱﾙｶﾘ-酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析（AMS）法
No.12	SI-5C1	炭化物	酸-ｱﾙｶﾘ-酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析（AMS）法
No.13	SI-79C4	炭化物	酸-ｱﾙｶﾘ-酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析（AMS）法
No.14	SI-80	炭化物	酸-ｱﾙｶﾘ-酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析（AMS）法
No.15	SI-3	炭化物	酸-ｱﾙｶﾘ-酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析（AMS）法
No.16	SP-87C3	炭化物	酸-ｱﾙｶﾘ-酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析（AMS）法
No.17	SP-67-③C1	炭化物	酸-ｱﾙｶﾘ-酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析（AMS）法
No.18	SI-25C1	炭化物	酸-ｱﾙｶﾘ-酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析（AMS）法

付章第２表　放射性炭素年代測定（第１回）の結果

試料名	^{14}C年代 （年BP）	δ^{13}C （‰）	補正^{14}C年代 （年BP）	暦年代（西暦）	測定№. （Beta-）
№.１	8380±40	-25.5	8370±40	交点：cal BC 7480 １σ：cal BC 7510～7450, 7390～7370 ２σ：cal BC 7540～7340	171637
№.２	22380±120	-25.4	22370±120	－	171638
№.３	8150±40	-27.3	8110±40	交点：cal BC 7070 １σ：cal BC 7090～7060 ２σ：cal BC 7170～7050	171639
№.４	8420±40	-28.5	8360±40	交点：cal BC 7470 １σ：cal BC 7500～7450, 7400～7360 ２σ：cal BC 7530～7330	171640
№.５	8360±40	-27.0	8330±40	交点：cal BC 7450, 7390, 7370 １σ：cal BC 7480～7340 ２σ：cal BC 7510～7310	171641
№.６	8250±40	-25.0	8250±40	交点：cal BC 7310 １σ：cal BC 7340～7190 ２σ：cal BC 7450～7390, 7370～7140	171934
№.７	8250±40	-26.3	8230±40	交点：cal BC 7290 １σ：cal BC 7320～7170 ２σ：cal BC 7430～7420, 7350～7090	171935
№.８	28010±220	-25.1	28010±220	－	171644
№.９	8340±40	-25.8	8330±40	交点：cal BC 7450, 7390, 7370 １σ：cal BC 7480～7340 ２σ：cal BC 7510～7310	171645
№.10	8300±40	-25.8	8290±40	交点：cal BC 7340 １σ：cal BC 7450～7390, 7370～7310 ２σ：cal BC 7480～7190	171646
№.11	8250±50	-25.6	8240±50	交点：cal BC 7300 １σ：cal BC 7340～7170 ２σ：cal BC 7460～7080	171647
№.12	8340±50	-26.0	8320±50	交点：cal BC 7450, 7400, 7360 １σ：cal BC 7480～7320 ２σ：cal BC 7520～7280, 7230～7190	171648
№.13	8340±50	-26.1	8320±50	交点：cal BC 7450, 7400, 7360 １σ：cal BC 7480～7320 ２σ：cal BC 7520～7280, 7230～7190	171649
№.14	8400±60	-26.2	8380±60	交点：cal BC 7490 １σ：cal BC 7530～7450, 7400～7360 ２σ：cal BC 7560～7320	171650
№.15	8350±40	-25.2	8350±40	交点：cal BC 7470 １σ：cal BC 7500～7430, 7420～7350 ２σ：cal BC 7530～7320	171651

付章第３表　放射性炭素年代測定（第１回）の結果（２）

試料名	^{14}C年代（年BP）	δ^{13}C（‰）	補正^{14}C年代（年BP）	暦年代（西暦）	測定№.（Beta-）
№.16	8370±40	-23.8	8390±40	交点：cal BC 7500 １σ：cal BC 7530～7470 ２σ：cal BC 7550～7430, 7420～7350	171936
№.17	8300±40	-26.0	8280±40	交点：cal BC 7330 １σ：cal BC 7450～7400, 7360～7300 ２σ：cal BC 7470～7180	171937
№.18	8130±40	-25.7	8120±40	交点：cal BC 7080 １σ：cal BC 7100～7060 ２σ：cal BC 7180～7050	171938

付章第４表　放射性炭素年代測定（第２回）の試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
№.１	SC-55	炭化物	酸-ｱﾙｶﾘ-酸洗浄，石墨調整	AMS
№.２	SI-143	炭化物	酸-ｱﾙｶﾘ-酸洗浄，石墨調整	AMS
№.３	SI-146，配石	炭化物	酸-ｱﾙｶﾘ-酸洗浄，石墨調整	AMS
№.４	SI-149，５層	炭化物	酸-ｱﾙｶﾘ-酸洗浄，石墨調整	AMS
№.５	SI-149，５層下部	炭化物	酸-ｱﾙｶﾘ-酸洗浄，石墨調整	AMS
№.６	SI-153，Ｃ２	炭化物	酸-ｱﾙｶﾘ-酸洗浄，石墨調整	AMS
№.７	SI-153，Ｃ４	炭化物	酸-ｱﾙｶﾘ-酸洗浄，石墨調整	AMS
№.８	SI-155，５層	炭化物	酸-ｱﾙｶﾘ-酸洗浄，石墨調整	AMS
№.９	SI-155，配石	炭化物	酸-ｱﾙｶﾘ-酸洗浄，石墨調整	AMS
№.10	SI-156，Ｒ９	炭化物	酸-ｱﾙｶﾘ-酸洗浄，石墨調整	AMS

定を試みることになった。調査分析の対象となった地点は、Ｃ区東壁とＣ区西壁の２地点である。

２．土層の層序

（１）Ｃ区東壁

Ｃ区東壁では、本遺跡の基本的な土層をよく観察することができた（図１）。ここでは、下位より黄灰色土（層厚７cm以上、Ｘ層）、黄色軽石混じり橙褐色軽石層（層厚10cm、軽石の最大径12mm、石質岩片の最大径11mm、Ⅸ層）、橙褐色軽石混じり黄褐色土（層厚12cm、軽石の最大径９mm、Ⅷ層）、灰褐色土（層厚10cm）、暗灰褐色土（層厚25cm、以上Ⅶ下層）、灰色粗粒火山灰混じり灰褐色土（層厚14cm）、灰色粗粒火山灰を多く含む暗灰褐色土（層厚12cm）、灰褐色土（層厚９cm、以上Ⅶ上層）、黄色軽石混じり黄色粗粒火山灰層（層厚13cm、軽石の最大径５mm）、黄色粗粒火山灰混じり灰褐色土（層厚10cm、以上Ⅵ層）、若干灰色がかった褐色土（層厚19cm、Ⅴ層）、橙色軽石混じり暗灰褐色土ブロック混じり褐色土（層厚13cm、軽石の最大径２mm、Ⅳｂ層）、灰褐色土（層厚12cm、Ⅳａ層）、暗灰褐色土（層厚７cm）、暗灰褐色土（層厚７

付章第５表　放射性炭素年代測定（第２回）の結果

試料名	測定№ (Beta-)	^{14}C年代 (年BP)	δ^{13}C (‰)	補正^{14}C年代 (年BP)	暦年代（西暦）
№１	187167	1850±40	-25.6	1840±40	交点：cal AD 150 １σ：cal AD 120～230 ２σ：cal AD 80～250
№２	187168	9170±50	-25.8	9160±50	交点：cal BC 8300 １σ：cal BC 8430～8360, 8340～8280 ２σ：cal BC 8480～8270
№３	187169	8280±40	-25.3	8280±40	交点：cal BC 7330 １σ：cal BC 7450～7400, 7360～7300 ２σ：cal BC 7470～7180
№４	187170	8430±50	-25.0	8430±50	交点：cal BC 7530 １σ：cal BC 7550～7490 ２σ：cal BC 7580～7450, 7390～7370
№５	187171	8350±40	-25.4	8340±40	交点：cal BC 7460 １σ：cal BC 7490～7340 ２σ：cal BC 7520～7320
№６	187172	8360±40	-26.3	8340±40	交点：cal BC 7460 １σ：cal BC 7490～7340 ２σ：cal BC 7520～7320
№７	187173	8350±40	-26.2	8330±40	交点：cal BC 7450,7390,7370 １σ：cal BC 7480～7340 ２σ：cal BC 7510～7310
№８	187174	8230±40	-25.9	8220±40	交点：cal BC 7280,7230,7190 １σ：cal BC 7320～7160 ２σ：cal BC 7340～7080
№９	187175	8230±50	-26.2	8210±50	交点：cal BC 7190 １σ：cal BC 7320～7100 ２σ：cal BC 7430～7420, 7350～7070
№10	187176	8340±50	-27.6	8300±50	交点：cal BC 7340 １σ：cal BC 7470～7310 ２σ：cal BC 7500～7180

cm)、黒灰褐色土（層厚７cm、以上Ⅲ層）、黒色土（層厚 11cm、Ⅱ層）、わずかに灰色がかった黒色土（層厚 10cm、Ⅰ層）、暗灰褐色土（層厚 15cm）が認められる。

発掘調査では、これらのうちⅥ層上部、Ⅴ層上部～Ⅳｂ層、Ⅳａ層～Ⅲ層下部から旧石器時代、Ⅲ層中部下部～Ⅱ層から縄文時代早期の遺物が検出されている。

（２）Ｃ区西壁

Ｃ区西壁では、砂質黄灰色土（層厚３cm 以上）の上位に、下位より灰褐色土（層厚 33cm）、色調がとくに暗い暗灰褐色土（層厚 21cm）、若干色調が暗い灰褐色土（層厚 17cm）、若干色調が暗い灰褐色土（層厚 21cm）が認められる。これらのうち、色調がとくに暗い暗灰褐色土からは、古墳時代の遺物が検出されている。

３．テフラ組成分析

（１）分析試料と分析方法

Ｃ区東壁およびＣ区西壁において基本的に土層ごとに採取された試料のうち、16 点について、火山ガラス比分析と重鉱物組成分析を合わせたテフラ組成分析を行った。分析の手順は次の通りである。

１）試料 15g を秤量。

２）超音波洗浄により泥分を除去。

３）80°Ｃで恒温乾燥。

４）分析篩により、1/4 ～ 1/8mm の粒子を篩別。
５）偏光顕微鏡下で 250 粒子を観察し、火山ガラスの色調形態別比率を求める（火山ガラス比分析）。
６）偏光顕微鏡下で重鉱物 250 粒子を観察し、重鉱物組成を求める（重鉱物組成分析）。

（２）分析結果

C 区東壁および C 区西壁におけるテフラ組成分析の結果を、ダイヤグラムにして図３と図４に示す。また火山ガラス比分析と重鉱物組成分析の結果の内訳を表１と表２に示す。C 区東壁では、試料 13 で中間型などの火山ガラスが出現しはじめ、試料 10 および試料９に無色透明のバブル型ガラスの出現ピークが認められる。また試料２や試料１にも多くの火山ガラスが含まれている。これらの試料には、無色透明のバブル型ガラスのほか、淡褐色や褐色など有色のバブル型ガラスも認められる。

一方、重鉱物組成では、試料 17 のテフラ層に斜方輝石や単斜輝石が多く含まれている。また試料 13 にも、斜方輝石や単斜輝石の出現ピークが認められる。試料 10 や試料９には、角閃石が若干ながらより多く含まれる傾向にある。

以上のことから、試料 17 や試料 10 のテフラ層、さらに試料７に含まれる橙色軽石のほか、試料 13 付近に中間型型ガラスや、斜方輝石および単斜輝石で特徴づけられるテフラ、試料２付近に有色のバブル型ガラスで特徴づけられるテフラの降灰層準のある可能性が指摘される。

４．屈折率測定

（１）測定試料と測定方法

テフラ組成分析の対象となった 16 試料について、位相差法（新井、1972 など）をもとに開発された温度変化型屈折率装置（RIMS86）により、テフラ粒子の屈折率測定を試みた。

（２）測定結果

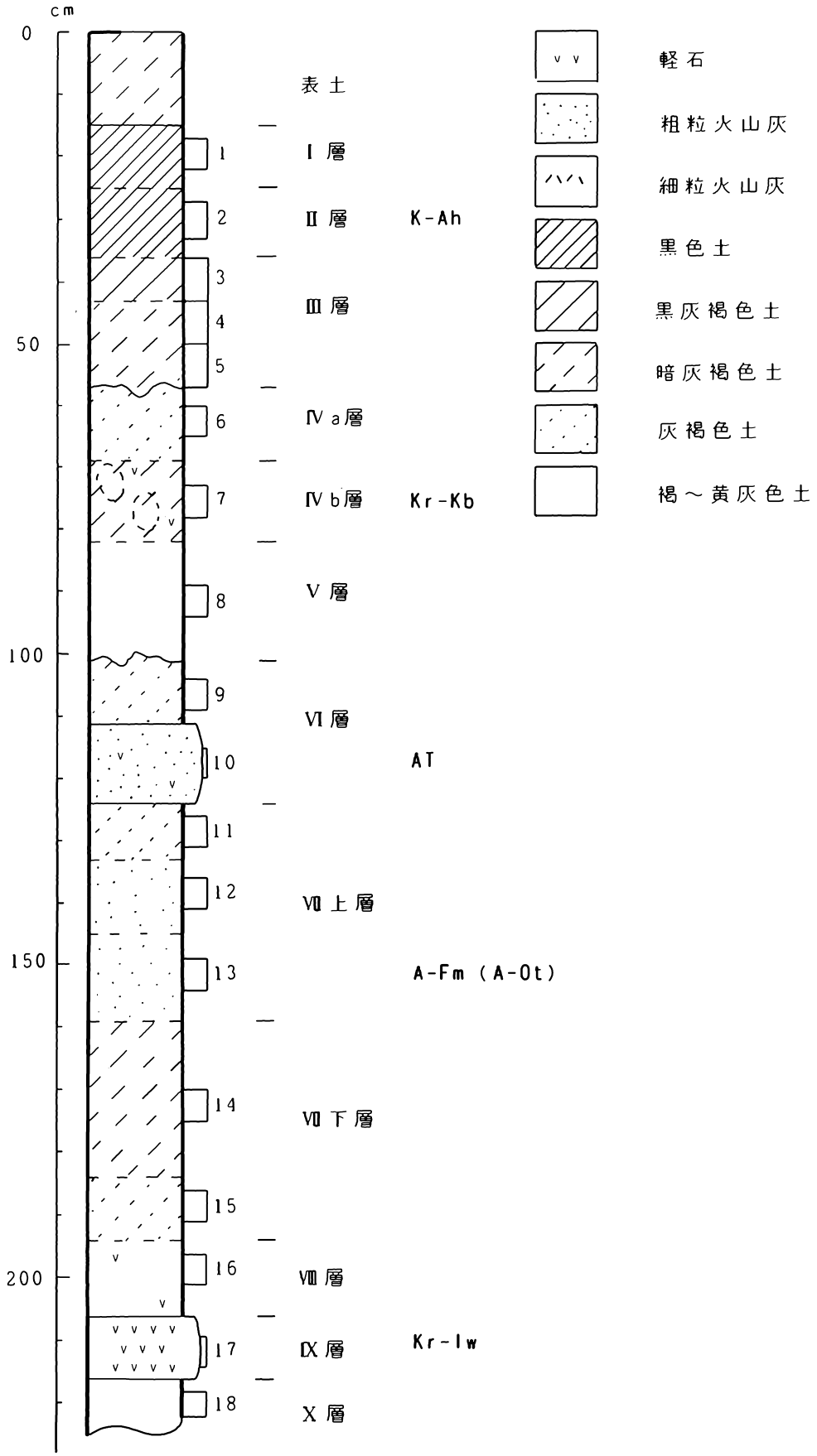
屈折率の測定結果を表３に示す。C 区東壁の試料 18 については、測定対象となる粒子が非常に少なく測定が困難であった。C 区東壁の試料 17 に含まれる斜方輝石の屈折率（γ）は、1.704-1.707 である。試料 16 および試料 14 に含まれる斜方輝石の屈折率（γ）は、1.705-1.707 である。試料 13 および試料 12 に含まれる火山ガラスの屈折率（n）は、1.498-1.501 である。試料 10 に含まれる火山ガラスの屈折率（n）は、1.499-1.500 である。試料９および試料８に含まれる火山ガラスの屈折率（n）は、1.499-1.501 である。試料７に含まれる火山ガラスの屈折率（n）は、1.500-1.501 である。試料６に含まれる火山ガラスの屈折率（n）は、1.498-1.501 である。試料４に含まれる火山ガラスの屈折率(n)は、1.497-1.499 と 1.506-1.509 である。試料２に含まれる火山ガラスの屈折率（n）は、1.497-1.499 と 1.506-1.512 である。試料１に含まれる火山ガラスの屈折率(n)は、1.496-1.501 と 1.505-1.512 である。

C 区西壁の試料３に含まれる火山ガラスの屈折率（n）は、1.496-1.500 と 1.508-1.509 である。また試料２に含まれる火山ガラスの屈折率は、1.496-1.501 と 1.507-1.508 である。

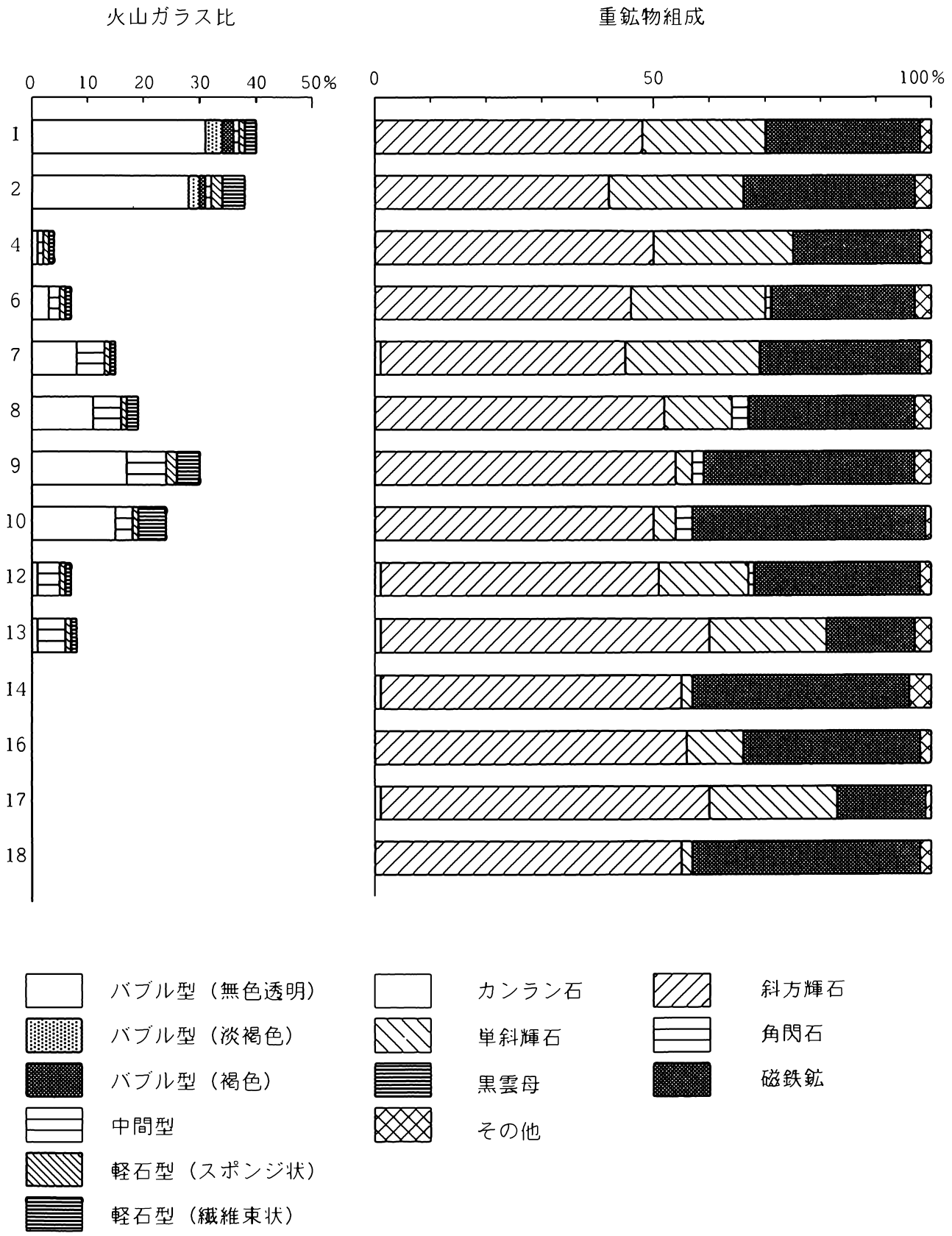
５．考察

試料 17（Ⅸ層）のテフラ層は、層相や重鉱物の組み合わせ、さらに斜方輝石の屈折率などから、約４～ 4.5 万年前に霧島火山から噴出したと推定されている霧島イワオコシテフラ（Kr-Iw、遠藤ほか、1962、町田・新井、1992、2003）に同定される。試料 13（Ⅶ上層下部）付近に降灰層準があると思われるテフラについては、火山ガラスの形態や屈折率などから、約３万年前 *1 の姶良大塚テフラ（A-Ot、長岡、1984、町田・新井、1992、奥野ほか、2000、長岡ほか、2001）あるいは約 2.65 万年前 *1 の姶良深港テフラ（A-Fm、Nagaoka、1988、町田・新井、1992、奥野ほか、2000、長岡ほか、2001）と考えられる。本遺跡とその周辺では後者の方がより厚く分布していることから、後者に由来する可能性がより高いように思われる。

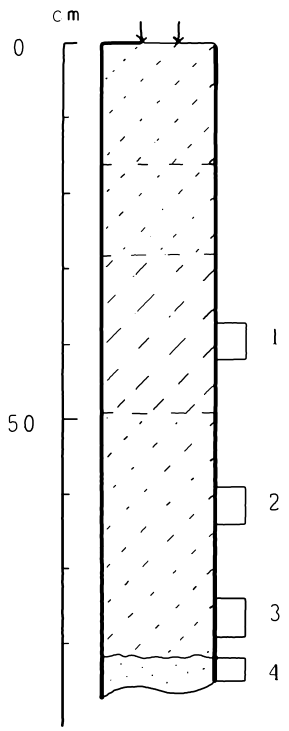
試料 10（Ⅵ層下部）のテフラ層は、層相や火山ガラスの特徴などから、約 2.4 ～ 2.5 万年前 *1 に姶良カルデラから噴出した姶良 Tn 火山灰（AT、町田・新井、1976、1992、松本ほか、1987、村山ほか、1993、池田ほか、1995）に



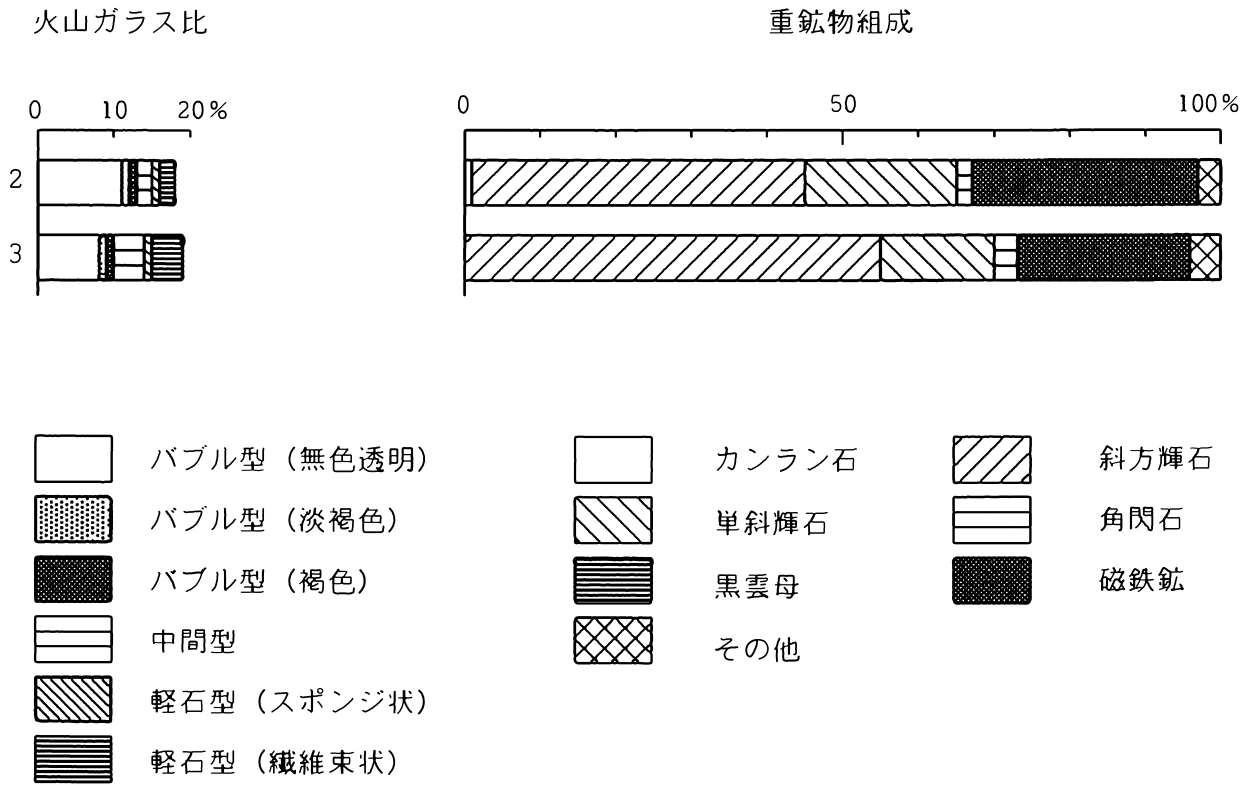
付章第１図　Ｃ区東壁の土層柱状図（数字はテフラ分析の試料番号）



付章第２図　Ｃ区東壁のテフラ組成ダイヤグラム



付章第３図　Ｃ区西壁の土層柱状図（数字はテフラ分析の試料番号）



付章第２図　Ｃ区西壁のテフラ組成ダイヤグラム

同定される。また試料７（Ⅳｂ層）に含まれる橙色軽石については、層位や岩相などから、約1.4 ～ 1.6 万年前 *1 に霧島火山から噴出した霧島小林軽石（Kr-Kb、伊田ほか、1956、町田・新井、1992、早田、1997）に由来すると考えられる。試料２（Ⅱ層）に多く含まれるテフラは、火山ガラスの形態や色調さらに屈折率などから、約 6,300 年前＊１に南九州の鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah、町田・新井、1978）に由来する火山ガラスが混在していると考えられる。なお試料４（Ⅲ層中部）にも、K-Ah 起源の火山ガラスが混在している可能性もあるが、K-Ah より下位の桜島起源の完新世テフラも混在しているかも知れない。

Ｃ区西壁の試料３および試料２には、火山ガラスの形態や色調さらに屈折率などから、AT のほかに K-Ah に由来する火山ガラスが含まれていると考えられる。またこれらの試料に含まれる角閃石については、その層位から約 4,200 年前に霧島火山から噴出した霧島御池軽石（Kr-M、町田・新井、1992）に由来するのかも知れない。

以上のことから、Ⅵ層上部から検出されている石器は AT のすぐ上位、Ⅴ層上部からⅣｂ層の石器は Kr-Kb 層準付近、Ⅳａ層からⅢ層下部の石器は Kr-Kb より上位で K-Ah の下位、Ⅲ層中部からⅡ層にかけて検出されている石器は、K-Ah の上下に層位があると考えられる。

６．小結

野首第２遺跡において採取した試料を対象に、テフラ組成分析と屈折率測定を行った。その結果、本遺跡には少なくとも下位より霧島イワオコシテフラ（Kr-Iw、約４～ 4.5 万年前）、姶良深港テフラ（A-Fm、約 2.65 万年前 *1）、姶良 Tn 火山灰（AT、約 2.4 ～ 2.5 万年前 *1）、霧島小林軽石（Kr-Kb、約 1.4 ～ 1.6 万年前 *1）、鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah、約 6,300 年前＊１）やそれらに由来するテフラを検出することができた。

*1　放射性炭素（１４C）年代 . おもな旧石器時代の指標テフラの暦年較正年代は次のように考えられている（長岡ほか、2001、町田・新井、2003）.

姶良 Tn 火山灰（AT）：約 2.6 ～ 2.9 万年前
姶良深港軽石（A-Fm）：約 3.1 万年前
姶良大塚軽石（A-Ot）：約 3.25 万年前

文献

新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石によるテフラの同定－テフロクロノロジーの基礎的研究．第四紀研究、11、p.254-269.

遠藤　尚・杉田　剛・法元紘一・児玉三郎（1962）日向海岸を構成する段丘について．宮崎大学学芸紀要、14、p.9-28.

伊田一善・本島公司・安国　昇（1956）宮崎県小林市付近の天然ガス調査報告．地調報告、no.168、p.1-44.

池田晃子・奥野　充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫（1995）南九州、姶良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による１４C 年代．第四紀研究、34、p.377-379.

町田　洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰－姶良 Tn 火山灰の発見とその意義．科学、46、p.339-347.

町田　洋・新井房夫（1978）南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ－アカホヤ火山灰．第四紀研究、17、p.143-163.

町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス．東京大学出版会、276p.

松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗（1987）姶良 Tn 火山灰（AT）の１４C 年代．第四紀研究、26、p.79-　83.

村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村　真・安田尚登・平　朝彦（1993）四国沖ピストンコア試料を用いた AT 火山灰噴出年代の再検討－タンデトロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の１４C 年代．地質雑、99、 p.787-798.

長岡信治（1984）大隅半島北部から宮崎平野に分布する後期更新世テフラ．地学雑、93、p.347-370.

Nagaoka、S.(1988) The late Quaternary tephra layers from the caldera volcanoes in and around Kagoshima Bay, southern Kyushu, Japan. Geogr.Rept. Tokyo Metropol.Univ., 23, p.49-122.

長岡信治・奥野　充・新井房夫（2001）10 万～３万年前の姶良カルデラ火山のテフラ層序と噴火史．地質雑、 107、p.432-450.

付章第６表　火山ガラス比分析結果（上）・重鉱物組成分析結果（下）

地点	試料	bw(cl)	bw(pb)	bw(br)	md	pm(sp)	pm(fb)	その他	合計
C区東壁	1	77	8	4	2	1	4	154	250
	2	71	5	3	2	6	9	154	250
	4	3	0	0	1	2	3	241	250
	6	8	0	0	6	1	3	232	250
	7	19	0	0	13	1	3	214	250
	8	27	0	0	14	1	4	204	250
	9	44	0	0	17	4	9	176	250
	10	39	0	0	7	1	12	191	250
	12	1	0	0	11	2	2	234	250
	13	1	0	0	13	1	3	232	250
	14	0	0	0	0	0	0	250	250
	16	0	0	0	0	0	0	250	250
	17	0	0	0	0	0	0	250	250
	18	0	0	0	0	0	0	250	250
C区西壁	2	28	1	1	4	1	5	210	250
	3	8	1	1	11	1	11	205	250

数字は粒子数．bw：バブル型，md：中間型，pm：軽石型．cl：無色透明，pb：淡褐色，br：褐色．sp：スポンジ状，fb：繊維束状．

地点	試料	ol	opx	cpx	ho	bi	mt	その他	合計
C区東壁	1	0	121	54	0	0	70	5	250
	2	0	106	60	0	0	77	7	250
	4	0	123	63	0	0	60	4	250
	6	0	116	59	2	0	67	6	250
	7	3	110	61	0	0	73	3	250
	8	0	131	29	9	0	75	6	250
	9	0	136	8	5	0	95	6	250
	10	0	125	11	9	0	103	2	250
	12	2	124	41	1	0	76	6	250
	13	3	147	52	0	0	41	7	250
	14	2	137	4	0	0	98	9	250
	16	0	141	26	0	0	79	4	250
	17	1	149	58	0	0	40	2	250
	18	0	139	5	0	0	101	5	250
C区西壁	2	2	111	50	4	0	77	6	250
	3	0	138	36	8	0	58	10	250

数字は粒子数．ol：カンラン石，opx：斜方輝石，cpx：単斜輝石．ho：角閃石，bi：黒雲母，mt：磁鉄鉱．

付章第７表　屈折率測定結果

地点	試料	火山ガラス（ｎ）	斜方輝石（γ）
C区東壁	1	1.496-1.501, 1.505-1.512	-
C区東壁	2	1.497-1.499, 1.506-1.512	-
C区東壁	4	1.497-1.499, 1.506-1.509	-
C区東壁	6	1.498-1.501	-
C区東壁	7	1.500-1.501	-
C区東壁	8	1.499-1.501	-
C区東壁	9	1.499-1.501	-
C区東壁	10	1.499-1.500	-
C区東壁	12	1.498-1.501	-
C区東壁	13	1.498-1.501	-
C区東壁	14	-	1.705-1.709
C区東壁	16	-	1.705-1.709
C区東壁	17	-	1.704-1.707
C区東壁	18	-	-
C区西壁	2	1.496-1.501, 1.507-1.508	-
C区西壁	3	1.496-1.500, 1.508-1.509	-

屈折率の測定は，温度変化型屈折率測定装置（RIMS86）による.

奥野　充・福島大輔・小林哲夫（2000）南九州のテフロクロノロジー－最近 10 万年間のテフラ．人類史研究、12、p.9-23.

第３節　炭化種実同定とその結果

本遺跡では、古墳時代の竪穴住居跡（SA03・05・09）および縄文時代早期の集石遺構（SI75）の配石間から採取した土壌について、ウォーターフローテーションを実施し、一定の炭化物を得た。

これらの一部について炭化種実の可能性を検証するため、センターにおける選別作業を経た 21 ケースのサンプルについて、古環境研究所に炭化種実同定業務を委託した。

結果から述べると、ほとんどのサンプルが種実ではない炭化物片であったが、栽培植物であるアワ、二次林要素のカラスザンショウなどの同定結果も得られた。ここでは、表のみを次頁に示し報告とする。

付章第８表　炭化種実同定結果

No.	遺構種別	分類群		部位	個数	備考
		学名	和名			
1	SA3-B7	*Zanthoxylum ailanthoides* Sieb. et Zucc.	カラスザンショウ	種子片	1	
2	SA3-E6		炭化物片		4	種実ではない。
3	SA3-G5		炭化物片		2	種実ではない。
4	SA5-NE区中央	*Setaria italica* Beauv.	アワ	果実	1	
		Hypoxis aurea Lour.	コキンバイザサ	種子	1	
			炭化物片		6	種実ではない。
5	SA5-NE区中央下層		炭化物片		4	種実ではない。
6	SA5-NE区中央上層	Unknown	不明		1	種実かどうか不明
7	SA9-B9		炭化物片		1	種実ではない。
8	SA9-C8		炭化物片		1	種実ではない。
9	SA9-D2		炭化物片		3	種実ではない。
10	SA9-E2	*Setaria italica* Beauv.？	アワ？	果実	1	
		Unknown	不明		1	種実かどうか不明
11	SA9-E4	Unknown	不明		1	種実かどうか不明
			炭化材片		1	
12	SA9-E7		炭化物片		2	種実ではない。
13	SA9-F7	*Zanthoxylum ailanthoides* Sieb. et Zucc.	カラスザンショウ	種子	1	
			炭化物片		4	種実ではない。
14	SA9-F8	Unknown	不明		1	種実かどうか不明
15	SA9-G4		炭化物片		3	種実ではない。
16	SA9-G5		炭化物片		1	種実ではない。
17	SA9-H5	Unknown	不明種実		1	
			炭化物片		1	種実ではない。
18	SA9NW区中央焼土		炭化物片		4	種実ではない。
19	SA9中央炉		炭化物片		2	
			虫瘤		1	種実ではない。
20	SC2下層		炭化物片		1	種実ではない。
21	SI75配石下土坑		炭化材片		1	

1．縄文後期中葉の竪穴住居跡（1）SX01 床面

2．縄文後期中葉の竪穴住居跡（2）SX01 遺物

3．縄文後期後葉の竪穴住居跡（1）SA20 遺物

4．縄文後期後葉の竪穴住居跡（2）SA20 完掘

5．縄文後期後葉の竪穴住居跡（3）SA21 床面

6．縄文後期後葉の竪穴住居跡（4）SA22 完掘

7．縄文後期後葉の竪穴住居跡（5）SA26 床面

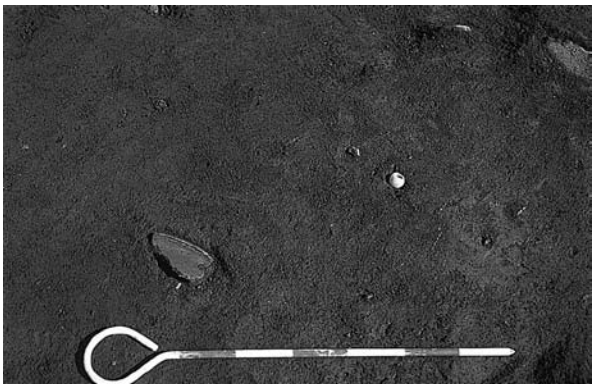
8．縄文後期後葉の竪穴住居跡（6）SA26 遺物

巻末図版２

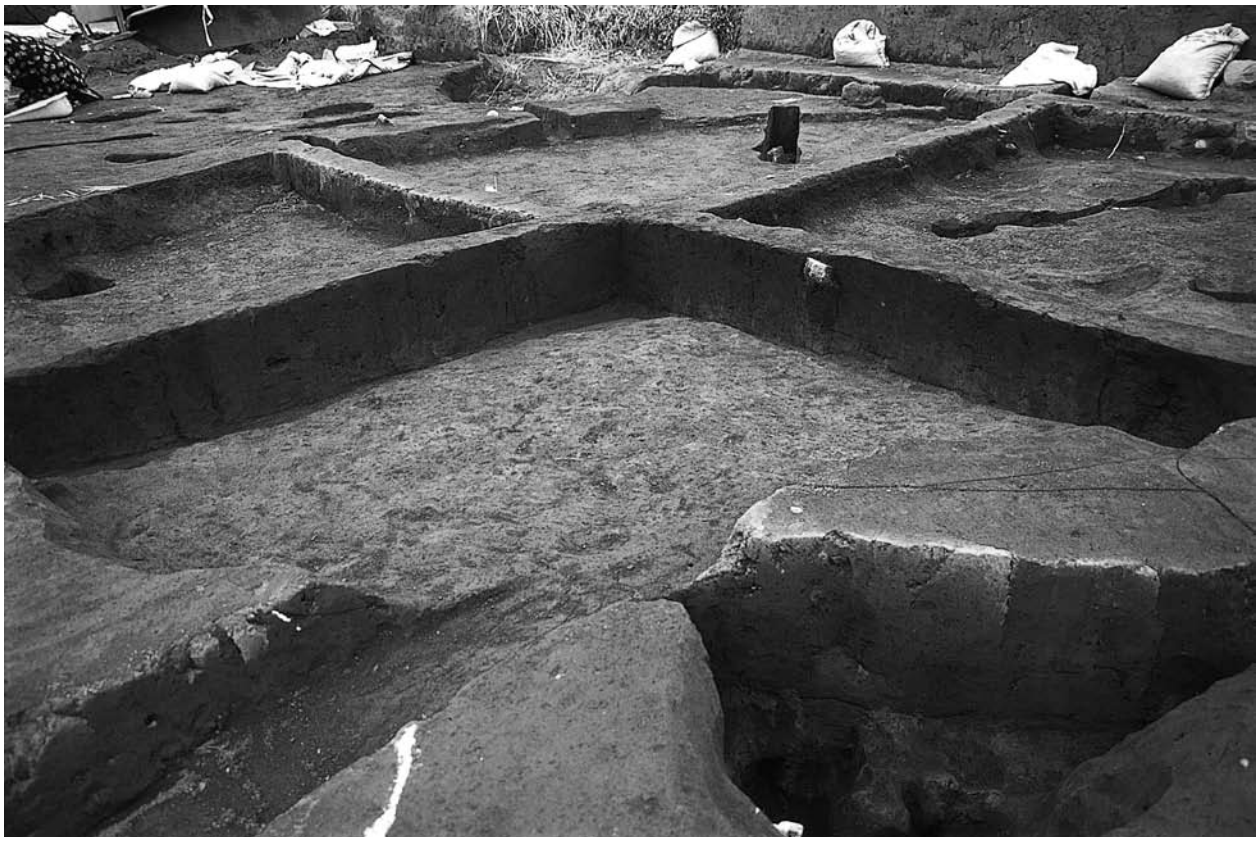
9. 縄文後期後葉の竪穴住居跡（７）SA26 礫

10. 縄文後期後葉の竪穴住居跡（８）SA30 床面

11. 縄文後期後葉の竪穴住居跡（９）SA33 床面



12. 縄文後期後葉の竪穴住居跡（10）SA33 遺物



13. 縄文後期後葉の竪穴住居跡（11）SA35 床面